大館市文化財調査報告書　第１集

男神遺跡発掘調査報告書

２００８・３

秋田県大館市教育委員会

男神遺跡発掘調査報告書

２００８・３

秋田県大館市教育委員会

序

本報告書は、「ふるさと林道花矢線」敷設事業に伴い、秋田県北秋田地域振興局農林部の委託事業として、平成１７年４月２６日から同年９月２日に発掘調査を、発掘調査後の平成１７から１９年度に整理作業を実施した男神遺跡の調査報告書です。

現在、大館市には２７３ヶ所の遺跡が確認されています。時代が重なって存在している遺跡もありますので、各時代別に見ますと３３２遺跡という数値になります。旧石器時代遺跡が１、縄文時代遺跡が１８５、弥生時代遺跡が９、古代遺跡が８０、中世遺跡が５０、近世遺跡が７という内訳になっています。

男神遺跡は平成１６年度の詳細分布調査によって、新たに存在が確認された遺跡です。

今回の調査では、Ⅰ区から縄文時代前期中葉と後期の捨て場、中期末から後期にかけての土坑群が発見され、Ⅱ区からは縄文時代中期末から後期初頭の竪穴住居跡と土坑群、弥生時代前期の竪穴住居跡が発見され、大きな成果を得ることができました。

この調査報告書が文化財の保護・保存のために多くの方に活用され、埋蔵文化財の保護に対する関心と理解をいただく資料となれば幸いです。

このたびの報告書発刊にあたり、ご指導・ご協力をいただきました秋田県北秋田地域振興局農林部、秋田県教育庁文化財保護室、秋田県埋蔵文化財センター、大館市清水川・岩本町内会、そして発掘調査・整理作業に携わった作業員の方々に感謝申し上げます。

平成２０年３月

大館市教育委員会

教育長　仲　澤　鋭　蔵

例　言

1　本報告書は、平成１７年度に大館市教育委員会が秋田県北秋田地域振興局農林部の委託を受けて、「ふるさと林道花矢線」敷設工事に先立ち実施した、秋田県大館市粕田字男神地内に所在する男神遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は、平成１６年１１月２６日から同年１２月１７日までの期間に実施した、国庫補助「埋蔵文化財調査事業、緊急目的試掘・確認調査」（５ヶ年事業、調査報告は大館市文化財調査報告書第２集）によって発見されたもので、字名から男神Ⅰ・Ⅱ遺跡と名付けた遺跡の林道敷設予定路線内を実施したものである。なお、調査の結果、男神Ⅰ・Ⅱ遺跡は一連の遺跡であることが判明したため、「男神遺跡」として一括した。

3　本発掘調査は、平成１７年４月２６日から同年９月２日までの期間に実施し、整理作業は平成１７年９月８日から平成２０年３月３１日まで、３ヶ年にわたり実施した。

4　本発掘調査は大館市教育委員会大館郷土博物館職員が担当した。

5　整理作業、報告書作成作業は、大館郷土博物館職員とともに整理作業員が行った。

6　本報告書の執筆は分担して行い、滝内亨、嶋影壮憲執筆分は文末に名前を記載し、その他の執筆および編集は板橋範芳が行った。

7　本報告書に使用した地形図は、大館市役所発行の「大館市管内図　１／５０，０００」ならびに「都市計画図　１／２，５００」である。

8　出土遺物ならびに作成した記録類は大館市教育委員会大館郷土博物館で保管している。

9　調査および報告書作成にあたっては、下記の方々からご指導、ご協力をいただいた。ここに深く感謝の意を表する次第である。（敬省略、順不同）

文化庁記念物課、秋田県北秋田地域振興局農林部、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室、秋田県埋蔵文化財センター、大館市産業部農林課、白川建設株式会社、
宇田川浩一、遠藤正夫、大野淳也、加藤竜、合地信生、児玉大成、小林克、斉藤岳、菅野美香子、根岸洋、谷地薫、佐々木敏矩（岩本町内会長）、鳥潟政几（清水川町内会長）、鷹嘴勇二（秋田県文化財保護管理指導員）

10　これまで大館市教育委員会が刊行した文化財調査報告書には、刊行順の通し番号を付すことなく現在に至っている。また、２００５年6月２０日に大館市は比内町・田代町と合併し新大館市が誕生した。そこで当文化財調査報告書を第１集とすることとして、旧大館市、旧比内町、旧田代町の既刊分を以下に紹介する。

【旧大館市が刊行した文化財調査報告書】

1	１９７２年	３月	大館市餅田根下戸道下　芋掘沢遺跡発掘調査報告書
2	１９７４年	３月	大館市　粕田遺跡発掘調査報告書
3	１９８６年	１月	大館市　玉林寺跡発掘調査報告書
4	１９８７年	３月	大館市　矢立廃寺発掘調査報告書
5	１９９０年	３月	国指定天然記念物　ザリガニ生息地分布調査報告書
6	１９９０年	３月	秋田県大館市　遺跡詳細分布調査報告書
7	１９９０年	３月	大館市　山王台遺跡発掘調査報告書
8	１９９１年	３月	国指定天然記念物　芝谷地湿原植物群落調査報告書
9	１９９３年	３月	国指定天然記念物　長走風穴高山植物群落調査報告書
１０	１９９６年	２月	大館市　餌釣館発掘調査報告書
１１	２０００年	３月	北鹿ハリストス正教会聖堂保存修理工事報告書
１２	２００４年	３月	郷土芸能映像等保存事業　芸能解説書
１３	２００４年	３月	ザリガニ生息地緊急調査報告書

【旧比内町が刊行した文化財調査報告書】

1	１９７０年	３月	比内町文化財目録
2	１９７０年	９月	比内町文化財目録　美術展覧会特集
3	１９７０年	１２月	比内町文化財目録
4	１９７１年	９月	比内町文化財目録　美術展覧会特集
5	１９７３年	２月	真館緊急発掘調査報告書
6	１９７３年	５月	比内町文化財目録　街道特集
7	１９７４年	３月	比内町文化財目録　武具類特集
8	１９７６年	３月	細越遺跡緊急発掘調査報告書
9	１９７６年	８月	第一報　比内町の植物調査報告
１０	１９７７年	３月	第二報　比内町の植物調査報告
１１	１９７８年	３月	谷地中「館」遺跡発掘調査報告書
１２	１９８２年	３月	大日堂前遺跡発掘調査報告書
１３	１９８６年	３月	本道端遺跡発掘調査報告書
１４	１９８８年	３月	比内町文化財目録　比内の絵馬
１５	１９８９年	３月	比内町文化財目録　比内の信仰碑
１６	１９９１年	３月	比内町文化財目録　方言とことわざ
１７	１９９１年	３月	比内町文化財目録　大葛金山墓地調査報告書

【旧田代町が刊行した文化財調査報告書】

1	１９７４年	１２月	田代岳県立自然公園学術調査報告書

凡　例

1　遺構図中の方位は真北を表す。

2　本報告書で各遺構に付している略記号は以下のとおりである。

ＳＩ……竪穴住居跡

ＳＫ……土坑

ＳＫＦ……フラスコ状ピット

3　本報告書に掲載した挿図には各々スケールを付し、図版写真は任意の縮尺とした。

4　本報告書中、遺構図に表記した土層図の土層区分は次記の要項で行った。

土層大別、土色・土質細別表

土層大別		土色細別		土質細別	
Ⅰ	表土	A	赤色系	a	粘質
Ⅱ	黒色土系	B	明色系	b	砂質
Ⅲ	褐色土系	C	黄色系	c	サラサラしている
Ⅳ	黄色土系	D	暗色系	d	ボサボサしている
Ⅴ	白色土系	E	黒色系	e	ロームブロック(３㎝以上)混入
Ⅵ	灰色土系	F	灰色系	f	ロームブロック(１～３㎝)混入
Ⅶ	砂	G	白色系	g	ロームブロック(１㎝以下)混入
Ⅷ	粘土	H	青灰色系	j	軽石粒(５㎜以下)混入
Ⅸ	焼土	J	暗灰色系	k	軽石粒(５㎜以上)混入
Ⅹ	軽石火山礫	K	褐色系	l	砂礫(５㎜以下)混入
Ⅺ	撹乱層	L	茶色系	m	火熱を受けている
		M	黄白色系	n	炭化材混入
		N	橙色系	o	炭化粒混入
				p	焼土混入
				q	礫状土
				r	地山壁崩落土
				s	石
				t	灰
				u	突き固め土(三和土)
				v	ブロック状

目　　次

序
例言
凡例
目次
Ⅰ　はじめに……　1
　１．調査に至る経緯……　1
　２．調査組織と構成……　2
Ⅱ　遺跡の立地と環境……　3
　１．遺跡の位置と立地環境……　3
　２．歴史的環境……　6
Ⅲ　調査の概要……　１０
　１．調査の方法……　１０
　２．調査の経過……　１０
Ⅳ　調査の記録……　１７
　１．基本層序……　１７
　２．検出遺構と遺物……　１７
　　１、Ⅰ区の遺構と出土遺物……　１７
　　（１）土坑と出土遺物……　１７
　　（２）捨て場の状況と出土土器……　２８
　　（３）捨て場・遺構外出土石器……　４５
　　（４）捨て場出土石製品・有孔石……　４５
　　２、沢部の状況と出土遺物……　５３
　　３、Ⅱ区の遺構と出土遺物……　５６
　　（１）竪穴住居跡と出土遺物……　５６
　　①ＳＩ０１……　５６
　　②ＳＩ０２と出土遺物……　５６
　　③ＳＩ０３と出土遺物……　６３
　　（２）土坑と出土遺物……　６６
　　（３）遺構外出土遺物……　９４
Ⅴ　考察……１０１
Ⅵ　まとめ……１０４

挿図目次

第　１図　男神遺跡の位置……　4
第　２図　男神遺跡と大館市北部の地形概観……　5
第　３図　男神遺跡付近の地形……　5
第　４図　男神遺跡周辺の遺跡分布状況……　8
第　５図　男神遺跡確認調査試掘坑配置略図……　１１
第　６図　調査区範囲およびグリッド設定図……　１２
第　７図　Ⅰ区遺構配置図……　１８
第　８図　基本層序……　１９
第　９図　ＳＫ００１・００３と出土遺物……　２２
第１０図　ＳＫ００２・００４・００４’
　・ＳＫＦ００４……　２３
第１１図　ＳＫ００４エレベーション……　２４
第１２図　ＳＫ００２出土遺物……　２４
第１３図　ＳＫ００５と出土遺物……　２６
第１４図　ＳＫＦ００１……　２７
第１５図　ＳＫＦ００２と出土遺物……　２９

第１６図　ＳＫＦ００３…… ３０
第１７図　捨て場Ⅰ出土土器…… ３１
第１８図　捨て場Ⅰ出土土器…… ３２
第１９図　捨て場Ⅱ出土土器…… ３３
第２０図　捨て場Ⅱ出土土器…… ３４
第２１図　捨て場Ⅱ出土土器…… ３５
第２２図　捨て場Ⅱ出土土器…… ３６
第２３図　捨て場Ⅱ出土土器…… ３７
第２４図　捨て場Ⅲ出土土器…… ３８
第２５図　捨て場Ⅱ出土土器…… ３９
第２６図　捨て場Ⅱ出土土器…… ３９
第２７図　捨て場Ⅲ出土土器…… ４１
第２８図　捨て場Ⅲ出土土器…… ４２
第２９図　捨て場Ⅲ出土土器…… ４３
第３０図　捨て場Ⅲ出土土器…… ４３
第３１図　Ⅰ区遺構外・捨て場外出土土器…… ４４
第３２図　捨て場・遺構外出土石器…… ４６
第３３図　捨て場・遺構外出土石器…… ４７
第３４図　捨て場・遺構外出土石器…… ４８
第３５図　捨て場・遺構外出土石器…… ４９
第３６図　捨て場・遺構外出土石器…… ５０
第３７図　捨て場・遺構外出土石器…… ５１
第３８図　捨て場出土石製品・有孔石…… ５１
第３９図　沢部の状況…… ５４
第４０図　沢部出土土器…… ５５
第４１図　沢部出土石器…… ５５
第４２図　Ⅱ区遺構配置図…… ５７
第４３図　ＳＩ０１…… ５９
第４４図　ＳＩ０２…… ６０
第４５図　ＳＩ０２石囲炉…… ６１
第４６図　ＳＩ０２出土土器…… ６２
第４７図　ＳＩ０２出土石器…… ６２
第４８図　ＳＩ０３…… ６４
第４９図　ＳＩ０３出土土器…… ６５
第５０図　ＳＩ０３埋積土掘り込み坑出土石板…… ６６
第５１図　ＳＫ００１・００２…… ６８
第５２図　ＳＫ００３・００４・００５…… ６９
第５３図　ＳＫ００６・００８と出土遺物…… ７０
第５４図　ＳＫ００７・００７’
　・ＳＫＦ０１３と出土遺物…… ７１
第５５図　ＳＫ００９・０１０…… ７２
第５６図　ＳＫ０１０出土石器…… ７３
第５７図　ＳＫ０１０出土石器…… ７４
第５８図　ＳＫ０１１・０１１’・０１４
　と出土遺物…… ７５
第５９図　ＳＫ０１３と出土遺物…… ７６
第６０図　ＳＫ０１６・０１６’
　と出土遺物…… ７７
第６１図　ＳＫ０１７…… ７８
第６２図　ＳＫ０１８…… ７９
第６３図　ＳＫＦ００１・００２
　と出土遺物…… ８０
第６４図　ＳＫＦ００３…… ８１
第６５図　ＳＫＦ００４・００５
　と出土遺物…… ８２
第６６図　ＳＫＦ００６と出土遺物…… ８３
第６７図　ＳＫＦ００７…… ８４
第６８図　ＳＫＦ００８と出土遺物…… ８８
第６９図　ＳＫＦ００９…… ８９
第７０図　ＳＫＦ０１０…… ９０
第７１図　ＳＫＦ０１１と出土遺物…… ９１
第７２図　ＳＫＦ０１２と出土遺物…… ９２
第７３図　ＳＫＦ０１４…… ９３
第７４図　ＬＴ４７区出土土器…… ９４
第７５図　ＬＱ５２・ＬＲ５０区出土土器…… ９５
第７６図　ＬＲ５５・ＬＱ５５区出土土器…… ９６
第７７図　ＬＱ５６区出土土器…… ９７
第７８図　ＬＰ５２・ＬＰ５６
　ＬＰ５７・ＬＳ５１・ＬＲ５３・
　ＬＳ５４・ＬＴ５１区出土土器…… ９８
第７９図　Ⅱ区遺構外出土石器……１００

表目次

第　１表　周辺遺跡一覧…… ９
第　２表　掲載石器一覧（Ⅰ区ＳＫ００２）…… ２４
第　３表　掲載石器・石製品・有孔石一覧
　（Ⅰ区捨て場・遺構外）…… ５２
第　４表　掲載石器一覧（Ⅱ区ＳＫ０１０）…… ７４
第　５表　掲載石器一覧（Ⅱ区遺構外）……１００

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯

大館の地は古くから交通の要衝、米代川中流域の政治、経済、文化の中心として栄えてきた。大館市は東北地方北部三県の県庁所在地である青森市・盛岡市・秋田市からそれぞれ１００㎞内外の中心点に位置し、現在も交通の要衝地、秋田県北部の中心都市として発展している。

大館市は国道７号、同１０３号の基幹国道が旧市街地を通り、１９６０年代からの高度経済成長に伴う車社会の到来と同時に、その道路網の整備が急務となった。大館市では都市計画により有浦バイパス、産業道路、大規模農道などの新設や、主要地方道比内・前田線、同大館・十和田湖線および市内道路の拡充を図ったが、年々車両交通量は増大し続け、ことに国道７号のバイパス的意味をもつ有浦バイパスや産業道路が、拡大する市街地の内に組み込まれ、もはやバイパスとしての機能を果たし得なくなった。

国・県・市ではこのような交通混雑の緩和と高速度化に対応するため、大館市街地外周に３本のいわゆる環状バイパス建設を計画した。その１本が市街地西端の国道７号と南端の国道１０３号を結ぶ（仮）南バイパスであり、もう１本が市街地西端の国道７号と北端の国道７号を結ぶ（仮）西バイパスであり、いま１本が市街地南端の国道１０３号と東端の地方主要道大館十和田湖線を結ぶ（仮）東バイパスである。

これらのバイパス建設事業は１９８０年代に入り計画・事業化が進められ、それに伴って計画・事業路線内に埋蔵文化財の包蔵地が確認され、発掘調査が実施された。南バイパス路線では１９８７年に山館上ノ山Ⅰ遺跡、山館上ノ山Ⅱ遺跡、山王岱遺跡が、１９８９年には山館上ノ山Ⅱ遺跡（第２次調査）、山王岱遺跡（第２次調査）が、１９９０年には山館上ノ山Ⅰ遺跡（第２次調査）、餌釣遺跡が、１９９１年には山王岱遺跡（第３次調査）、上野遺跡が、１９９２年には萩ノ台Ⅱ遺跡が、１９９２～１９９５年には池内遺跡の発掘調査が、秋田県埋蔵文化財センターによって実施された。また、東バイパス路線では１９８８年に山王台遺跡で、１９９４年には餌釣館跡で大館市が発掘調査を実施した。

これら市街地主要道路の整備とともに、市街地と市域内集落を結ぶ連絡道や農道、林道の整備も実施されてきた。「ふるさと林道花矢線」もそのような整備事業の一環で、大館市白沢と旧田代町（２００５年６月２０日大館市と合併）越山を結ぶ地方主要道白沢田代線と、大館市白沢の松原地内を通る国道７号を結ぶ路線である。地域の効率的な林業経営、森林の適正な維持管理、森林の有する多様な公益的機能の発揮、森林の総合的な利用促進などの重要な役割とともに、国道、県道、市道、農道、作業道を結ぶ地域内の距離短絡路網の形成、そして災害時における迂回路としての多様な活用を図ることを目的として１９９６年（平成８年）に計画された。

「ふるさと林道花矢線」は、大館市花岡町二井山集落北側から標高２００ｍほどの山間をぬい花岡町土目内・繋沢入口、十瀬野公園北側に出、花岡川を越えて再び標高２００ｍほどの山間に入り岩本・清水川両集落の中間に出る路線は既に完成を見ている。２００４年度からの事業は、岩本・清水川地区から東にルートをとり、男神山（標高３４０．７ｍ）の西麓から北麓を巻いて

標高２００ｍの山間に入り、松原地内に至る計画である。

「ふるさと林道花矢線」建設担当である秋田県北秋田地域振興局農林部森づくり推進課は、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室に埋蔵文化財の存在の有無確認を依頼し、文化財保護室が２００４年１０月６日に予定路線内の実踏調査を実施した（秋田県文化財調査報告書第４０１集『遺跡詳細分布調査報告書』２００５年3月　秋田県教育委員会)。その結果、遺跡として確認できる箇所は無かったが、要確認調査地として２ヶ所について、用地買収終了後、試掘調査を行い対応を協議することとした。

秋田県文化財保護室は、当該事業が県事業であるものの、事業完成後は大館市の受益が大なるものであることから、当事業にかかる埋蔵文化財調査を大館市で担当するよう大館市教育委員会と協議し、以後、大館市教育委員会が担当することとなった。よって平成１６年１１月２５日付で、秋田県北秋田地域振興局長　石井　護より大館市教育長　仲澤　鋭蔵へ、埋蔵文化財確認調査についての依頼書が提出された（北農―５１１４)。

このことによって、大館市教育委員会では２００４年１１月２６日から同年１２月１７日まで遺跡の分布・確認調査に入った。その結果、粕田字男神地内で２ヶ所の縄文時代遺跡（男神Ⅰ遺跡、男神Ⅱ遺跡）を確認、その旨を報告した（平成１６年１２月２２日付、１６郷博発第９－２号)。北秋田振興局と大館市教育委員会は本調査にかかる協議を行い、発掘調査費用は北秋田地域振興局が負担し、２００５年４月から大館市教育委員会（担当　大館郷土博物館）が担当して実施することとなった。

２００５年４月１日より男神Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査の諸準備に入り、大館市教育長　仲澤　鋭蔵より秋田県教育長　小野寺　清（当時）宛に「埋蔵文化財発掘調査の通知」を提出し（１７郷博第４号)、４月２６日より調査に入った。

２．調査組織と構成

遺跡名称	男神遺跡
遺跡所在地	大館市粕田字男神
調査期間	２００５年４月２６日～同年９月２日
調査面積	１，４００㎡
調査主体者	大館市教育長　仲澤　鋭蔵
調査担当者	大館市教育委員会　大館郷土博物館　館長　板橋　範芳
調査事務局	大館市教育委員会　大館郷土博物館
調査協力	秋田県北秋田地域振興局農林部、大館市役所産業部農林課
調査員	大館市教育委員会　大館郷土博物館　文化財保護係　主任主事　滝内　亨 大館市文化財調査員　高橋　昭悦
調査作業員	斉藤徳重　岩澤トシ子　岩谷豊明　佐々木綱之　佐々木貢　高田修　高橋次男 田村隆　桧垣隆弘　日景鉦久　山内福之助　岩谷聖子　岩谷美恵子　貝森チヤ 佐々木ヒメ子　佐々木美恵子　福士ユキ子　山内真理子　山下松子

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１．遺跡の位置と立地環境（第１図・第２図）

遺跡の所在する大館市は、秋田県の北東部に位置し、東縁は鹿角郡小坂町と鹿角市、西縁は山本郡藤里町と北秋田市、南縁は北秋田市と接し、北縁は青森県との県境となっている。ちなみに極東は１４０度４４分５２秒、極西は１４０度２０分１０秒、極南は４０度０２分４４秒、極北は４０度２９分０３秒である。

地形的にみると、市域は奥羽脊梁山脈の西縁に形成された、断層運動による陥没で生じた大館盆地と、それをとりまく２００～１，０００ｍの山地からなる。最高峰は市域北西部にそびえる田代岳(1177.8m)で、田代岳の西に雷岳(1128.0m)、烏帽子岳(1133.0m)、茶臼岳(1085.9m)などが、青森県境には西から尻高山(976.9m)、堂九郎坊森(857.0m)、長慶森(942.8m)、三ツ森(949.4m)、孫左衛門山(890.7m)、大日影山(820.0m)、甚吉森(800.3m)の山々が連なり、これらは白神山地の東端を形成している。

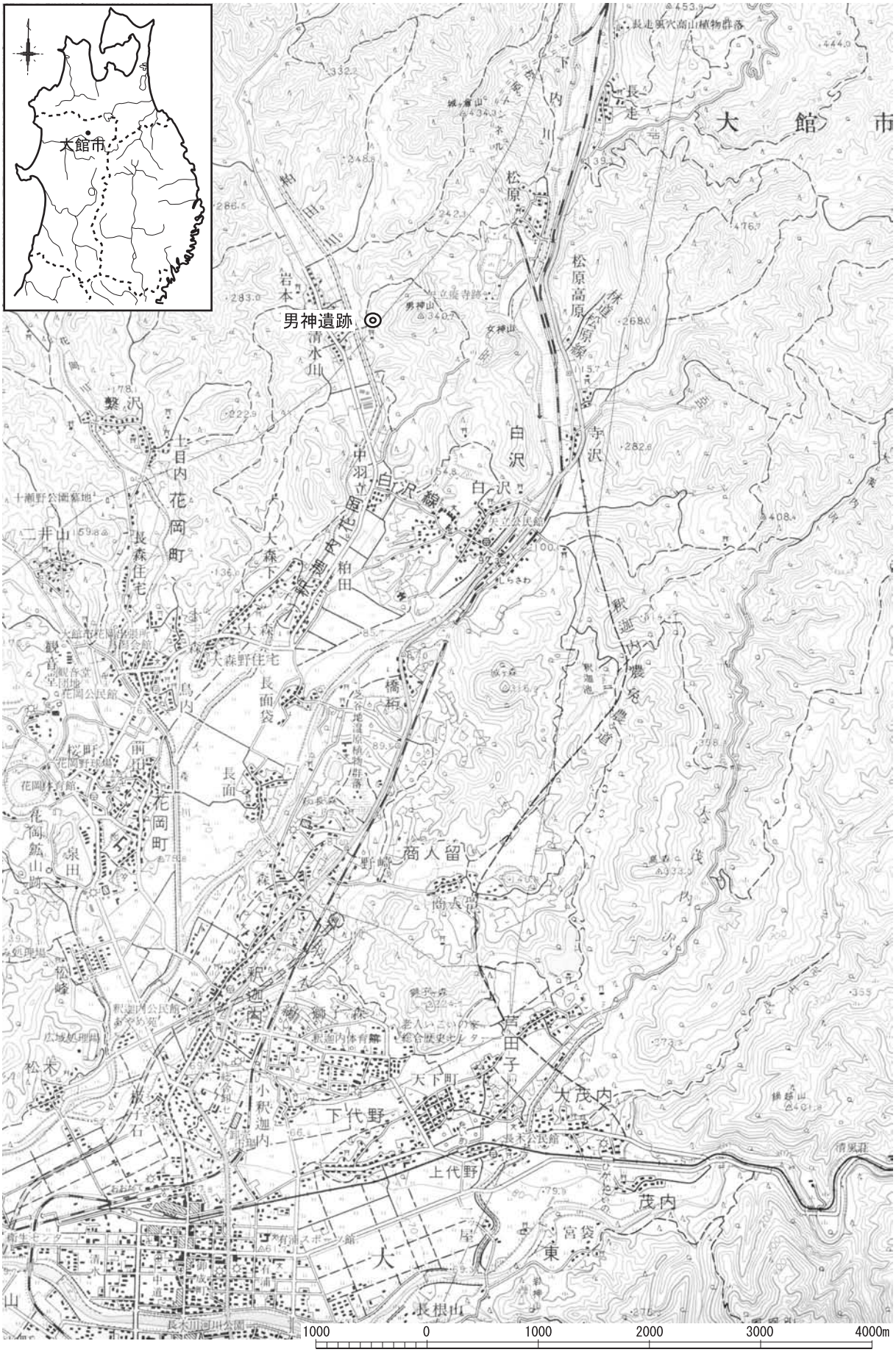
西縁には２００～８００ｍの山が南北に連なり藤里町・北秋田市の境となり、南縁には竜ケ森(1049.8m)を最高峰に３００～８００ｍの山々が東西に連なり北秋田市とを隔て、東縁は南東部の早稲山(811.2m)を最高峰に３００～６００ｍの山々が南北に連なり小坂町・鹿角市とを隔てている。

盆地中央を東から西へ米代川が流れ市域を南北に二分している。市域北部には西から早口川、岩瀬川、山田川、花岡川、粕田川、下内川、長木川の諸川が青森県境の山々に源を発し、南流して米代川に合流する。これら河川にはその流域で幾多の沢川が合流している。市域南部には引欠川、犀川、別所川が市域南縁の山麓から北流して米代川に合流し、これらもその流域で幾多の沢川を集めている。

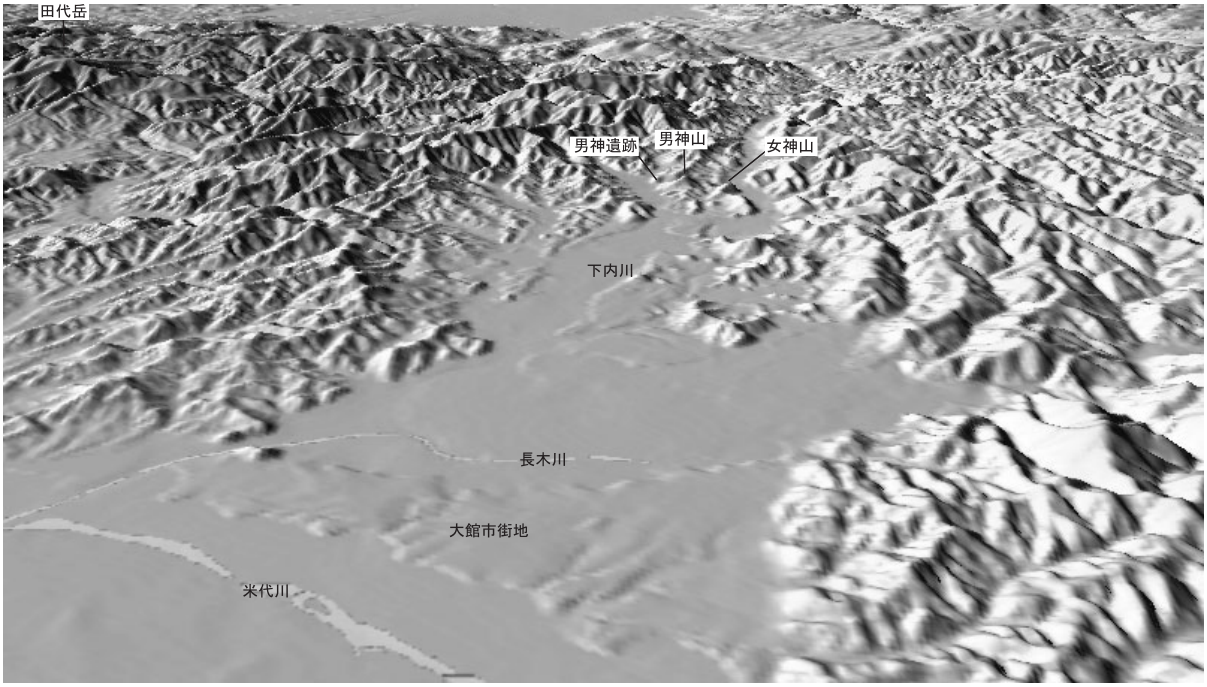
男神遺跡は、市域北部の粕田川東岸(左岸)に位置している。東に新第三紀の貫入岩である石英安山岩を山体とする男神山(３４０．７m)がそびえ、遺跡は男神山の西麓、軽石・礫・砂で構成される第四紀の段丘堆積物(シラス台地)上に営まれ、シラス台地の最上部に堆積した薄いローム層を地山としている。男神遺跡Ⅱ区の北側は外男神沢によって開析され、男神遺跡Ⅱ区と男神遺跡Ⅰ区の間に湧水を源とする小沢が、男神遺跡Ⅰ区南側にも小沢が台地に切り込んでいる。

男神遺跡Ⅰ区は、東西１５～２５m、南北約２８m、面積約６２０㎡の北側を上辺とする平面台形状の台地上を居住区とし、台地西側の斜面を捨て場として営まれた集落跡である。台地上の標高は１１９m、台地下捨て場最下層で１１２m、比高差７mを測る。

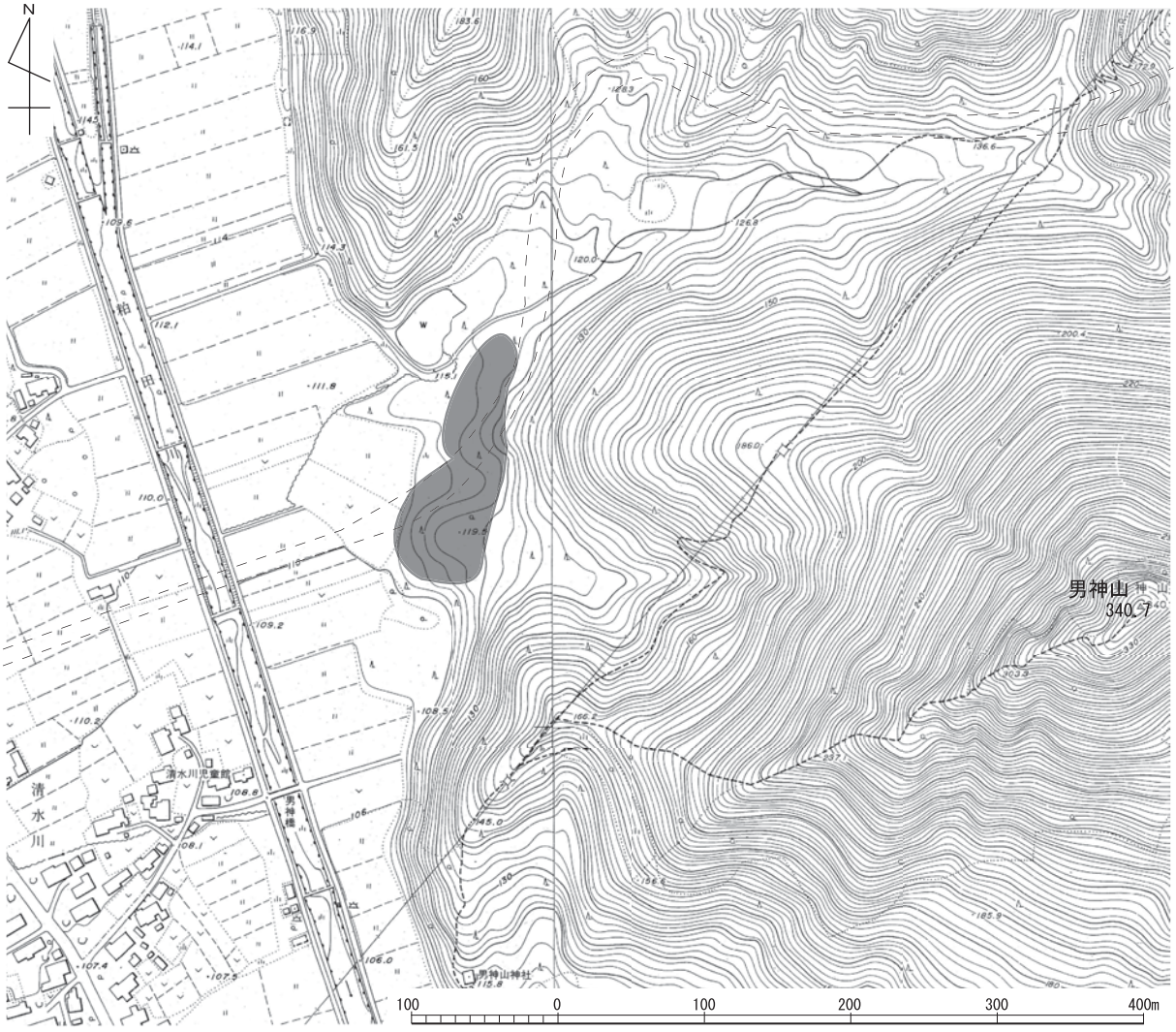
男神遺跡Ⅱ区は、東西２０～３０m、南北約４６m、面積約１，１５０㎡の台地上に営まれた集落跡で、台地上の標高は１１７～１２４m、遺跡の西、粕田川沖積地の標高は１１０mで、沖積面からの比高は７～１４mほどである。ちなみに粕田川が形成した南に谷口を開く沢内からは、遠く森吉山(1,454m)を望むことができる。



第１図　男神遺跡の位置(1:50,000)



第２図　男神遺跡と大館市北部の地形概観　　この図はカシミール３Dを用いて作成した。



第３図　男神遺跡付近の地形(1:5,000)

２．歴史的環境（第４図・第１表）

大館市域には２７３ヶ所の遺跡が確認されている。内、旧石器時代遺跡が１ヶ所、縄文時代遺跡が１８５ヶ所、弥生時代遺跡が９ヶ所、平安時代遺跡が８０ヶ所、中世城館遺跡が５０ヶ所（以上、重複遺跡を含める）である。ここでは男神遺跡の存在する大館市北部花矢地区とその周辺の遺跡を見ながら、歴史的環境を概観してみよう。

大館市北部には花岡川、粕田川（大森川）、下内川が南流している。

花岡川は戦時中の河川改修によって、現在は花岡本郷と神山台地の間を東流して大森川に合流しているが、もとは花岡本郷地内西側の信正寺後から神山台地の西側を南流して、大森山(神山台地南端にあったが採石によって山体は西麓の一部を残して消失した)南西側で大森川に合流していた。

粕田川・大森川は、上流を粕田川、下流を大森川と呼んでいる一筋の川である。この川も戦時中から昭和40年代にかけて河川改修が行われ、以前とはまったく姿を変えてしまった川である。過去の流れを復原すると、上流域の岩本・清水川地内においては蛇行しながら中羽立地内に至り、そこから大森台地の東縁下を台地に沿って南流し、粕田・大森集落の南の沖積低地に出、それから大森山の東麓までの沖積低地を蛇行しながら南流し、大森山に突き当たってその南麓を巻くように西流し、現在の松峰集落あたりで花岡川と合流し、松木高館の東麓(高館下)で下内川に合流していた。

下内川の流路は、中流域の長面から高館下までの沖積低地と、乱川合流地点のそれぞれの河川改修を除くと、比較的古い姿をとどめている。

（１）花岡川流域の遺跡

縄文時代遺跡が５ヶ所、平安時代遺跡が５ヶ所、中世城館が１ヶ所確認されているが、これまで発掘調査例はない。中で長森遺跡(１２)からは宅地造成の際、１２世紀後葉から１３世紀初頭の珠洲製壷１個と四耳壷２個が出土し、大館市指定文化財に指定されている。花岡城(１８)は西側を花岡川、東側を大森川に挟まれた東西５００m、南北１，０００mの広大な独立残丘に築かれている。

（２）粕田川流域の遺跡

上流の粕田川流域には遺跡が点在するが、下流の大森川流域では現在までのところ遺跡の確認はない。中で粕田遺跡(９)は土砂採取工事に伴い大館市教育委員会が緊急発掘調査を実施し、弥生時代砂沢～二枚橋期の土坑墓１基と、砂底土師器期の集落を検出した。大館野遺跡(８)は西側を粕田川、東側を下内川に挟まれた東西５００m、南北１，５００mの広大な台地で、縄文時代早期から中世まで連綿と先人が生活を営んだところで、大館市立矢立小・中学校改築に先立ち発掘調査が行われ、７，７９０㎡の調査範囲内に、竪穴住居跡５８棟、掘立柱建物跡４棟、掘立柱倉庫跡１１棟、井戸跡２基、製鉄炉跡３基、屋敷を区画する溝・垣根跡、ムラ中を通る道路跡と側溝跡などが検出された。

（３）下内川流域の遺跡

下内川は上流域が矢立地区、中・下流域が釈迦内地区にあたり、矢立地区白沢付近で大

館盆地平野部に出る。また、釈迦内地区東方の商人留地内に源を発する乱川を支流とする。

上流部では男神山と女神山(282m)の北側、両山に抱かれるように矢立廃寺跡(４)がある。これまで７次にわたり調査が行われ、１２世紀第３四半期に比定されるカワラケや白磁四耳壺、珠洲系甕が出土している。中流部では前述した大館野遺跡のほか、福館橋桁野遺跡(３２)で、縄文時代前期中葉期の深郷田式～円筒下層ａ式土器期と、茂屋下岱式土器の編年にかかわる包含層を福館地区で、縄文時代中期末葉の大型住居跡を橋桁野地区で検出している。

２１世紀に入り釈迦内地区乱川流域で、日本海沿岸東北自動車道建設に伴う発掘調査が秋田県教育委員会によって、実施あるいは調査継続中で多大な成果をあげている〔田ノ沢山遺跡（２８)、谷地中遺跡（３６)、野崎遺跡（３７)、狼穴遺跡（３８)、狼穴Ⅱ遺跡（３９)、狼穴Ⅳ遺跡（４０)、狼穴Ⅲ遺跡（４１)、釈迦内中台Ⅰ遺跡（４２)、釈迦内中台Ⅱ遺跡（４３)、坂下Ⅰ遺跡（４４)、坂下Ⅱ遺跡（４５)〕。

野崎遺跡では縄文時代前期・中期に墓域を併設した集落が営まれ、そこで石器製作も行われていた。また、平安時代の集落遺跡でもあり、中で１軒の焼失竪穴住居跡は十和田ａ火山灰降下前のものであることが判明した。

狼穴Ⅲ遺跡では縄文時代のフラスコ状土坑などが１６基、平安時代の竪穴住居跡５軒、掘立柱建物跡３棟、柱列２条が検出された。

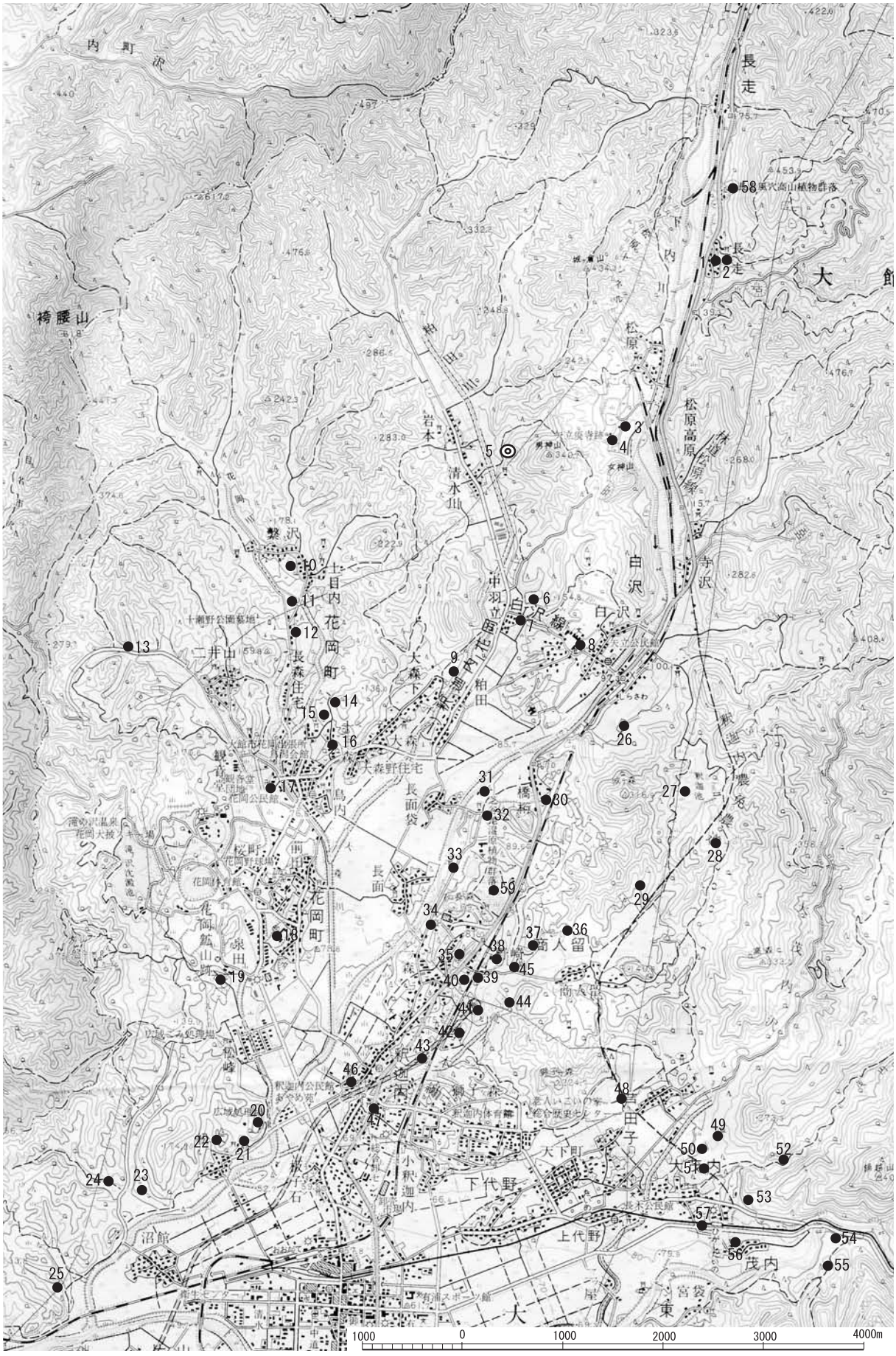
釈迦内中台Ⅰ遺跡は、主体が平安時代の１０世紀以降の集落跡で、１４０軒以上の竪穴住居跡と掘立柱建物跡、柱穴列、溝跡が台地上に、台地南側斜面からは１２基の製鉄遺構や粘土採掘坑とともに、製鉄作業にかかわった工人の竪穴住居跡が検出され、斜面下位には製鉄にかかる廃滓場があって、鉄滓・炉壁・羽口などが多量に出土した。

下流部では松木高館平遺跡(２１)から、地主が人力で整地中に大型石刃４個とナイフ形石器１個、彫刻刀形石器１個を検出、これらは大館市指定文化財に指定されている。

（４）長木川流域

下内川が合流する長木川流域においても、大館盆地に長木川が貫入する茂内地区は遺跡密度が高い。諏訪台遺跡(５１)の諏訪台Ｃ地区では、弥生時代前期の砂沢～二枚橋期の大型竪穴住居跡６棟が検出され、遺構外からではあるが遠賀川系土器１片が出土している。また、玉林寺跡(５５)では縄文時代中期末葉の竪穴住居跡１棟と、中世の半磁半陶の碗１個、素焼き黒色処理の地蔵菩薩像１体が出土している。

塚ノ下遺跡(５７)では、縄文時代後期十腰内Ⅰ式土器期の竪穴住居跡１棟と、集石遺構および大量の土器、石器、土製品、石製品、大館市指定文化財である目にアスファルトを充填した土偶が出土し、日常生活の場というよりは呪術の場という色彩の強い遺跡と考えられる。また、同遺跡からは１１～１２世紀頃と考えられる９棟の竪穴住居跡が検出され、中の１棟からは鉄製小刀１振、鉄鏃５点、火打ち金、砥石が出土、１１世紀後半の東北北半地域の騒乱期に相当するものではないかと考えられる。



第４図　男神遺跡周辺の遺跡分布状況

番号	遺　跡　名	時代・時期	秋田県 分布図番号	報告書名
1	長走関所跡	江戸	4－2	
2	長走	縄文中期、平安	4－1	
3	松原小立	縄文	4－3	
4	矢立廃寺跡	平安、中世	4－4	大館市・1973、1987、2002
5	男神	縄文前期～後期	4－155	
6	両堤	平安	4－7	
7	中羽立	縄文前期～晩期、弥生	4－6	
8	大館野	縄文、弥生、平安、中世、近世	4－5	
9	粕田	弥生、平安	4－8	大館市・1974
10	繋沢	縄文	4－14	
11	繋沢Ⅱ	縄文晩期	4－159	
12	長森	平安、中世	4－15	
13	大吉沢	縄文後期	4－16	
14	豆岱	縄文前期	4－17	
15	根井下	縄文前期	4－18	
16	十三森	縄文前・晩期、平安、中世	4－19	
17	七ツ館	縄文晩期、平安、中世	4－20	
18	花岡城・神山	平安、織豊	4－21	
19	松峰	平安、中世	4－27	
20	高館	織豊	4－29	
21	松木高館平	旧石器	4－30	
22	松木	縄文前期	4－31	
23	鍛冶屋敷	縄文後期、平安	4－32	
24	下堤沢	平安	4－33	
25	沼館	平安、中世	4－34	
26	白沢古館	平安、中世	4－9	
27	釈迦池	縄文前期～晩期、弥生	4－10	
28	田ノ沢山	縄文前・後・晩期、中世	4－152	秋田県404・2005
29	田ノ沢	縄文前期	4－154	秋田県401・2005
30	橋桁	縄文後・晩期	4－11	
31	福館	中世	4－12	
32	福館橋桁野	縄文前・中・晩期、平安	4－13	大館市・1973
33	福館Ⅱ	平安	4－139	
34	二ツ森	縄文、平安	4－138	
35	二ツ森Ⅱ	縄文前期、弥生	4－134	秋田県342・2002
36	谷地中	縄文早・前・後・晩期、平安	4－151	秋田県404・2005
37	野崎	縄文前・中期、平安	4－153	秋田県401・2005
38	狼穴	縄文前・中・後期、平安	4－22	
39	狼穴Ⅱ	縄文、平安	4－135	秋田県342・2002
40	狼穴Ⅳ	縄文早期～中期、弥生、平安	4－136	秋田県391・2005
41	狼穴Ⅲ	縄文、平安	4－137	秋田県342・2002
42	釈迦内中台Ⅰ	平安	4－23	秋田県342・2002
43	釈迦内中台Ⅱ	平安	4－24	
44	坂下Ⅰ		4－156	秋田県342・2002
45	坂下Ⅱ	縄文早期、平安	4－157	秋田県413・2006
46	釈迦内古館	中世	4－25	
47	釈迦内館	中世、織豊	4－26	
48	芦田子上岱	縄文前期、平安	4－49	
49	大茂内	縄文前・中期	4－50	
50	諏訪台D	縄文早期～後期	4－143	
51	諏訪台	縄文前期～晩期、弥生、平安、中世	4－51	秋田県196・1990
52	小茂内沢	縄文	4－52	
53	蛇沢口	縄文、平安	4－142	
54	鬼ケ城	中世	4－55	
55	玉林寺跡	縄文中期、織豊	4－56	大館市・1986
56	茂内	縄文中期	4－54	
57	塚ノ下	縄文後期、平安、中世	4－53	秋田県61・1979
58	長走風穴高山植物群落		4－127	大館市・1993
59	芝谷地湿原植物群落		4－129	大館市・1991

第１表　周辺遺跡一覧

Ⅲ　調 査 の 概 要

１．調査の方法

平成１６年１１月２６日から同年１２月１７日までの１２日間、「ふるさと林道花矢線」の清水川～松原間予定地内において、遺跡確認のための詳細分布調査を実施した（第５図）。その結果、大館市粕田字男神地内に設定したＮｏ.７～１７のトレンチから縄文土器片や土坑を確認、特にＮｏ.９トレンチは捨て場であることがわかった。

Ｎｏ.７～１０トレンチ設定場所とＮｏ.１１～１７トレンチ設定場所との間には、湧水を源とする小沢があって両方を区画している。そのため遺跡全体を「男神遺跡」としたが、Ｎｏ.７～１０トレンチ設定場所を「男神遺跡Ⅰ」、Ｎｏ.１１～１７トレンチ設定場所を「男神遺跡Ⅱ」と呼ぶこととした。

調査対象区には「ふるさと林道花矢線」の路線基準杭が設定されていたが、弧を描く路線なりに設定された基準杭で発掘調査には不向きであることから、新たに任意の１点を選定してこれをグリッドの原点ＭＡ５０とし、この点を通る南北ラインをＭＡライン、東西ラインを５０ラインとした。

このラインを基準に４ｍグリッドを設定し、ＭＡラインの西にＭＢ・ＭＣ・ＭＤ……ＭＳ・ＭＴ・ＮＡ・ＮＢと２１本のラインを、東にＬＴ・ＬＳ……ＬＭ・ＬＬと９本の計３１本の南北ラインを設定した。また、５０ラインの北に５１・５２……６１・６２まで１２本のラインを、南に４９・４８・４７……３３・３２・３１まで１９本の計３２本のラインを設定して東西ラインとした（第６図）。そして、各グリッド番号は南北・東西ライン交点の北東隅のグリッド杭番号で呼ぶこととし、遺物の取り上げ、実測図の作成等すべてそれに統一した。

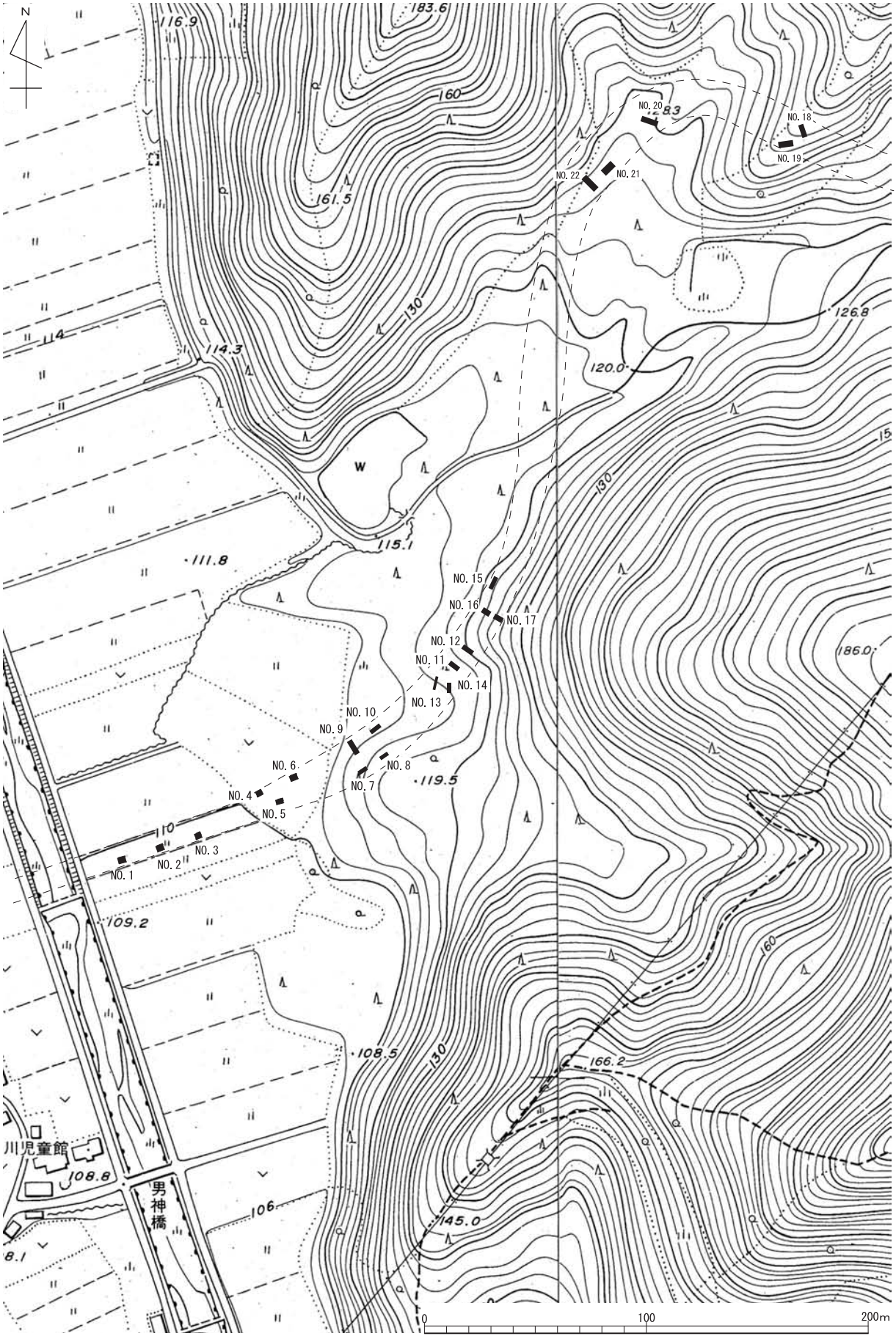
調査の記録は、平面図・断面図と写真によって記録化した。平面図・断面図は１／２０縮尺を原則とし、遺構細部にあって必要な部分は１／１０縮尺で作図した。遺構の写真撮影は３５㎜のカラーフイルムとリバーサルを使用した。

遺物の取り上げは、グリッド平面図に表記し、レベルを測量記入し、遺構内のものは遺構名を、遺構外のものはグリッド番号を記入した。ただし、捨て場にあっては、石器は個々にレベルを測量し記入したが、土器については見かけ上のグループの最上位と最下位のレベルを測量し、中心部を出土ポイントとして記入し取り上げたものもある。

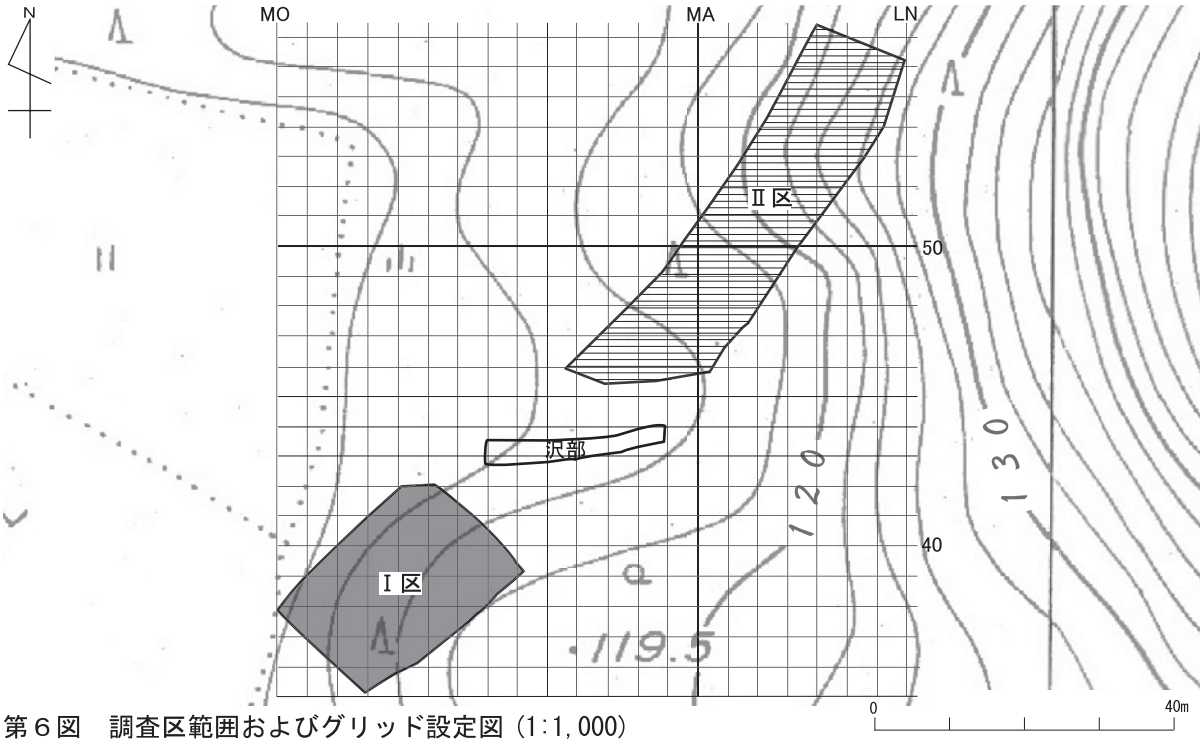
２．調査の経過

《発掘調査》

平成１７年４月１１日より発掘調査のための準備作業に入った。調査区の幅が１６ｍ～２０ｍ、距離が１３０ｍ内外、面積がおよそ２，２００㎡で、調査区近辺に排土の捨て場を確保することが困難な地形と現状で、まず調査の段取りを組む事から検討を始め、現場



第５図　男神遺跡確認調査試掘坑配置略図(1:2,500)



第６図　調査区範囲およびグリッド設定図（1:1,000）

事務所の設置位置の選定、そして現場事務所設置箇所の整備と現場の残木処理を行った後でないと調査に入れないと判断し、事前にそれらの処理を済ませておくこととした。

また、調査作業員を地元から募集、発掘機材の購入、グリッド設定のための業者入札など、調査前に必要なことを４月２４日までに終えて調査開始日を迎えた。

発掘調査は大館郷土博物館の勤務体制との関係で、調査曜日を火曜日から土曜日とし、日・月曜日を休日とした。以下、各週ごとに調査経過を記述する。

○第１週（４／２６～４／３０、５日）

現場の杉枝葉かたづけ作業。基地プレハブ３棟・便所・発電機運搬設置。標高杭（ＢＭ）設置作業。リースのトラックが来て博物館より諸道具運搬、格納。

Ⅰ・Ⅱ区間の沢内を最初に調査し、調査後、杉枝葉を敷いて暗渠としその上に排土することを、林道建設を請け負っている白川建設と合意。Ⅱ区の道路杭Ｎｏ.２２に幅１ｍの土層観察ベルトを設定し、北側へ表土剥ぎ（荒掘り）開始。

★４／３０北鹿新聞取材来跡。

○第２週（５／６、１日）

Ⅱ区の荒掘り作業。土器・石器片出土し始める。十和田ａ降下火山灰第２次堆積層を確認。★５／１・２休日、５／３・４・５作業休止。

○第３週（５／１０～５／１３、４日）

調査区をⅡ区北側（Ｎｏ.２２道路杭土層観察ベルト北側）、Ⅱ区南側（Ｎｏ.２２道路杭土層観察ベルト南側）、沢部、Ⅰ区の４区画に分けて呼ぶこととする。

【Ⅱ区北側】荒掘り作業を北側の道路杭Ｎｏ.２３・２４方向へ継続。東側山裾に岩礫

を多量に検出、崩落岩か配石か現段階では不明、十和田ａ降下火山灰との新旧も確認できず。

【Ⅱ区南側】Ⅱ区土層観察ベルト以南の排土地として、東側小沢斜面に土留めを設置して排土することとする。土留め設置作業開始。荒掘り開始し４基の土坑確認。

【沢部】小沢の作業段取りを沢水流路確保、下流予定地外区に杉枝葉敷いて暗渠とし、その上に沢内の土砂を排土する。沢上流部に砂層基底部検出、埋積土層中より縄文前期土器片と剥片石器が若干出土。

★５／７雨で作業休止、５／８・９休日。この間、グリッド杭設置作業が始まる。

★５／１３、県振興局小林氏来跡。

○第４週（５／１７～５／２１、４日）

【Ⅱ区北側】荒掘り終了。高橋調査員４９ラインから精査作業に入る。

【Ⅱ区南側】Ⅱ区南斜面の荒掘り継続、斜面に落ち込んだ（捨てられた）若干の土器片・石器片・岩礫は散在するものの、土坑・階段・道等の人工遺構は見受けられない。ＭＢ４８グリッドに貼床遺構と地床炉を確認。

【沢部】沢部掘り下げ作業継続、流路確保のため下流より上流へ作業を進める。

★５／１９風雨激しく作業休止。★５／２０Ⅱ区グリッド杭打ち終了。

○第５週（５／２４～５／２８、５日）

【Ⅱ区北側】ＬＳ・ＬＴ５２・５３に竪穴住居跡確認（ＳＩ０２）。ＬＲ４９・５０グリッドに土器片が散在し、下位に竪穴状遺構（ＳＩ０３）を確認。ＬＯ５３杭からＬＲ５４杭を通る土層観察ベルトを設置。

【Ⅱ区南側】ＭＢ４８グリッド検出の貼床遺構と地床炉を竪穴住居跡（ＳＩ０１）と確認、地床炉の四方に主柱穴４本、北側にわずかな竪穴壁の立ち上がりを検出。

ＭＡ４９グリッドに切り合う土坑２基（旧ＳＫＦ００１、新ＳＫＦ００２）を確認、掘り下げ作業開始。

ＭＣ４８グリッドに土坑１基確認（ＳＫ００１）、掘り下げ作業開始。ＭＢ・ＭＣ４７グリッドに土坑１基確認（ＳＫ００２）、半截掘り下げ開始。ＭＣ・ＭＤ４７グリッドに３基の切り合う土坑（古い順にＳＫ００３、ＳＫ００４、ＳＫ００５）確認、半截掘り下げ開始。

【沢部】掘り下げ作業継続、落ち込み岩礫を除去しながら基底分まで掘り下げ。

★５／２７県文化財保護室五十嵐氏来跡。

○第６週（５／３１～６／４、５日）

【Ⅱ区北側】４８ラインから５２ライン間の精査掘り下げ作業継続。ＳＩ０２を四分割法で精査し、竪穴南部に石組複式炉を検出。竪穴西部床面に土器一個体分。

【沢部】基底部精査、上流部ＭＢ４４，ＭＣ４４に沢筋に直行する木材３本を検出、真中の木材先端部に斧で打ち削った痕跡あり。木材の実測と写真撮影。

○第７週（６／７～６／１１、５日）

【Ⅱ区北側】５５ラインまで精査掘り下げ作業。ＳＩ０２北半部精査作業開始、竪穴内に埋積しているローム土の排除作業。ＭＡ５０グリッドの土坑（ＳＫＦ００３）、ＬＴ５０グリッドの土坑２基（ＳＫＦ００４・００５）半截掘り下げ。ＬＴ５１グリッドの土坑（ＳＫ００６）半截掘り下げ開始。これまでに確認した土坑と所在するグリッドは、次の通りである。

〔袋状土坑〕【Ⅱ区北側】ＳＫ００１（ＭＣ４８）、ＳＫ００２（ＭＢ・ＭＣ４７）、ＳＫ００３・００４・００５（ＭＣ・ＭＤ４７）

【Ⅱ区南側】ＳＫ００６（ＬＴ５１）、ＳＫ００７（ＬＳ５０・５１）、ＳＫ００８（ＬＲ５３）、ＳＫ００９（ＬＲ・ＬＳ５４）、ＳＫ０１０（ＬＲ５４）、ＳＫ０１１（ＬＲ５２・５３）、ＳＫ０１２（非土坑で除外）、ＳＫ０１３（ＬＴ４９）、ＳＫ０１４（ＬＳ５１）、ＳＫ０１５（ＬＱ５３）

〔フラスコ状土坑〕【Ⅱ区北側】ＳＫＦ００１（ＭＡ４９）、ＳＫＦ００２（ＭＡ４９）

【Ⅱ区南側】ＳＫＦ００３（ＭＡ５０）、ＳＫＦ００４（ＬＴ５０）、ＳＫＦ００５（ＬＴ５０）、ＳＫＦ００６（ＬＴ４９）、ＳＫＦ００７（ＬＳ５０・５１）、ＳＫＦ００８（ＭＡ５０）、ＳＫＦ００９（ＬＲ５３）、ＳＫＦ０１０（ＬＲ５４）、ＳＫＦ０１１（ＬＱ５３）、ＳＫＦ０１２（ＬＴ５１）

○第８週（６／１４～６／１８、５日）

【Ⅱ区北側】５７ラインまで精査掘り下げ作業。ＳＩ０２北半部精査作業継続。ＳＩ０３精査掘り下げ作業。ＳＫ００８・ＳＫ００９・ＳＫＦ００９半截掘り下げ。

【Ⅱ区南側】ＭＡ４７を中心とする南斜面を精査したところ、ＭＡ４７グリッドに土器一個体を検出、平面・レベル測量をして写真撮影。

○第９週（６／２１～６／２５、５日）

【Ⅱ区北側】ＳＩ０２内に埋積していたロームは、ＳＫＦ００９の掘り上げ土でＳＩ０２廃屋後の排土であることが判明。北壁を検出、竪穴内のロームを排土。

ＳＫ０１０・ＳＫ０１３・ＳＫＦ００６・ＳＫＦ００８半截掘り下げ。５７ラインまで地山面の精査によりＳＫ０１６（ＬＱ５５）、ＳＫ０１７（ＬＰ５５・５６）、ＳＫ０１８（ＬＰ５６）の３基の土坑を確認。

○第１０週（６／２８～７／２、５日）

【Ⅱ区北側】ＳＩ０２北西部精査。ＳＩ０３精査掘り下げ作業継続。ＳＫ０１１・ＳＫ０１５・ＳＫＦ０１１半截掘り下げ。

【Ⅰ区】調査準備作業、作業小屋造作、沢下流部に杉枝葉で暗渠設置、荒掘り開始。

○第１１週（７／８～７／９、２日）

【Ⅰ区】荒掘り作業継続、円筒下層ａ式土器といわゆる茂屋下岱系土器、石小刀・半円状扁平打製石器など縄文前期の遺物が出土し始める。

ＭＪ３８杭からMM３９杭ラインに幅１ｍの土層観察ベルトを設置。

★７／３・４休日、７／５・６雨で休止、７／７現場を乾かすため作業休止。

○第１２週（７／１２～７／１６、５日）

【Ⅰ区】荒掘り作業継続、台地斜面を浅く下刻した沢Ⅰ・沢Ⅱ・沢Ⅲの三つの浸蝕沢（埋没沢）を確認、そこに台地上場の生活面から土器・石器等の廃棄がみられる。台地縁に確認された土坑は次の通り。

〔袋状土坑〕ＳＫ００１（ＭＩ３７）、ＳＫ００２（ＭＨ３９）、ＳＫ００３（ＭＧ３９）、ＳＫ００４（ＭＪ３８）、ＳＫ００５（ＭＧ３９）、ＳＫ００６（ＭＩ３８）、ＳＫ００７（ＭＧ３９）

〔フラスコ状土坑〕ＳＫＦ００１（ＭＨ３８）、ＳＫＦ００２（ＭＦ４０）

ＳＫ００１・ＳＫ００２・ＳＫ００４・ＳＫＦ００１半截掘り下げ作業。

沢Ⅱの上層遺物の平面図・レベル測量記録作成、取り上げ作業。

【Ⅱ区】実測作業。

★７／１２県埋蔵文化財センター南調査課児玉・新海両氏来跡。

○第１３週（７／２０～７／２３、４日）

【Ⅰ区】沢Ⅱの上層遺物の平面図・レベル測量記録作成、取り上げ作業継続。沢Ⅰ・沢Ⅲの掘り下げ作業開始。

【Ⅱ区】実測作業継続。

★７／１９雨で休止。

○第１４週（７／２６～７／３０、４日）

【Ⅰ区】沢Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとも遺物を平面図・レベル測量しながら取り上げ作業継続。

【Ⅱ区】実測作業継続。

★７／２６仲澤教育長現場視察。

★７／２８に沢Ⅱ（ＭＫ３９）で出土した凝灰岩製有孔円盤状石製品が、７／３０早朝に盗難にあう。大館警察署に盗難被害届を提出。

★７／２７台風７号の風雨により作業休止。

○第１５週（８／２～８／６、５日）

【Ⅰ区】沢Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとも遺物を平面図・レベル測量しながら取り上げ作業継続。

【Ⅱ区】実測作業継続。

★お盆をはさんだ８／９～８／２０まで２週間、作業員は休みとし、この間に実測作業をすすめる。

○第１６週（８／９～８／１２、４日）

【Ⅱ区南側】ＳＩ０１炉跡、ＳＫ００１・００２・００３～００５、ＳＫＦ００１・００２の土層図実測。

【Ⅱ区北側】ＳＩ０２、ＳＫ００６・００８・００９・０１０・０１１・０１６、ＳＫＦ００４・００５・００７・００８・０１０・０１２の土層図実測。

★８／１３～１５盆休み。

○第１７週（８／１６～８／２０、５日）

【Ⅱ区北側】ＳＩ０３，ＳＫＦ００６・０１１の土層図実測。調査区の等高線測量図作成。

【Ⅰ区】土坑平面実測開始。調査区の等高線測量図作成。

【沢部】土層観察。

○第１８週（８／２３～８／２７、５日）

【Ⅱ区北側】ＳＫ００７掘り下げ作業、実測終了。ＳＫ０１２掘り下げ作業、土坑でないことが判明。ＳＫ０１３・０１４・０１５掘り下げ作業、実測終了。ＳＫＦ００３掘り下げ作業。ＳＫＦ００９危険防止のため入口部拡張掘り下げ、実測終了。

【Ⅰ区】ＳＫ００１・００２・００３・００４・００５・００６・００７実測終了。ＳＫＦ００１・００２実測終了。沢Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとも最下層の遺物取り上げ作業終了。ＳＫＦ００７を当初袋状土坑としていたが、精査したところフラスコ状になることが判明、半截調査を断念し内部の掘り下げを急ぐ。

★８／２７地元住民の遺跡見学会。

○第１９週（８／３０～９／２、４日）

【Ⅱ区北側】ＳＩ０２床面の遺物取り上げ。Ⅱ区全体の遺物取り上げ。

【Ⅰ区】沢Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ最下層遺物取り上げ。

★８／３０現場かたづけ、機材を博物館へ運搬。作業員は本日で終了。

同日、県文化財保護室五十嵐・吉川両氏来跡。

★９／２作図作業、本日終了。これをもって男神遺跡発掘調査現場作業終了。

《整理作業》

整理作業は大館郷土博物館において、平成１７年９月から斉藤徳重・岩澤トシ子の２名で、遺物の洗浄・注記作業を行い、平成１８年１月から高橋昭悦が加わって接合復原作業を注記作業と併行して行った。その間、板橋と滝内も本業務の傍ら、遺物の実測・採拓等にあたった。

平成１８年度に新規職員採用者として嶋影壮憲が大館郷土博物館に配置となった。板橋・滝内・嶋影と高橋昭悦・岩澤トシ子が復原・採拓整理作業を継続するも、遺物が多く整理作業が年度内に終了することが出来ない見通しとなったため、発掘調査報告書の刊行を平成１９年度とすることで、秋田県北秋田地域振興局農林部森づくり推進課と協議、合意を得た。

平成１９年度に入り、板橋・滝内・嶋影は本務の傍ら遺構・出土土器のトレース、出土石器の実測、挿図作成、報文執筆作業を行った。

Ⅳ 調 査 の 記 録

１．基本層序（第８図）

Ⅰ区の地形は、南東から北西に下る傾斜角２０度～３２度の斜面である。土層を確認したのは調査区のやや南側に設定したベルト（Ⅰ区ＳＢ）で、東側の上端地山面で標高１１９．６m、西側調査区下端地山面で１１２．５２m、比高差約７mである。

基本土層は次の通りである。

Ⅰ層……表土、草根が這っている。小礫を含みややしまりがある黒褐色土。

Ⅱ層……黒色土。軽石粒や小礫を含む黒ボク土。

間層……黄色～黄褐色の火山起源の軽石（十和田ａ火山灰）の二次堆積層。

Ⅲ層……褐色土層。ロームブロック・ローム粒や黒色土を含む、黄色系・暗色系・黒色系の褐色土。

Ⅳ’層……地山ローム の崩落堆積土で黒色土を含む。

Ⅳ層……地山

Ⅱ区の地形は、東から西にゆるやかに傾斜する傾斜角８度～１５度の傾斜面と、その西側の平坦面から成り、土層を確認したのは調査区北側に設定したベルト（Ⅱ区ＳＢ）で、東側の調査区上端地山面で標高１２３．９３７m、中央の傾斜変換点で１２２．２２６m、西側調査区端で１２１．８３６mを測る。

基本土層は次の通りである。

Ⅰ層……表土、草根が這っている。小礫を含みややしまりがある黒褐色土。

Ⅱ層……黒色土。軽石粒や小礫を含む黒ボク土。

間層……黄色～黄褐色の火山起源の軽石（十和田ａ火山灰）の二次堆積層。

Ⅲ層……褐色土層。ロームブロック・ローム粒や黒色土を含む、明色系・黄色系・暗色系・黒色系の褐色土。

Ⅳ層……地山

２．検出遺構と遺物

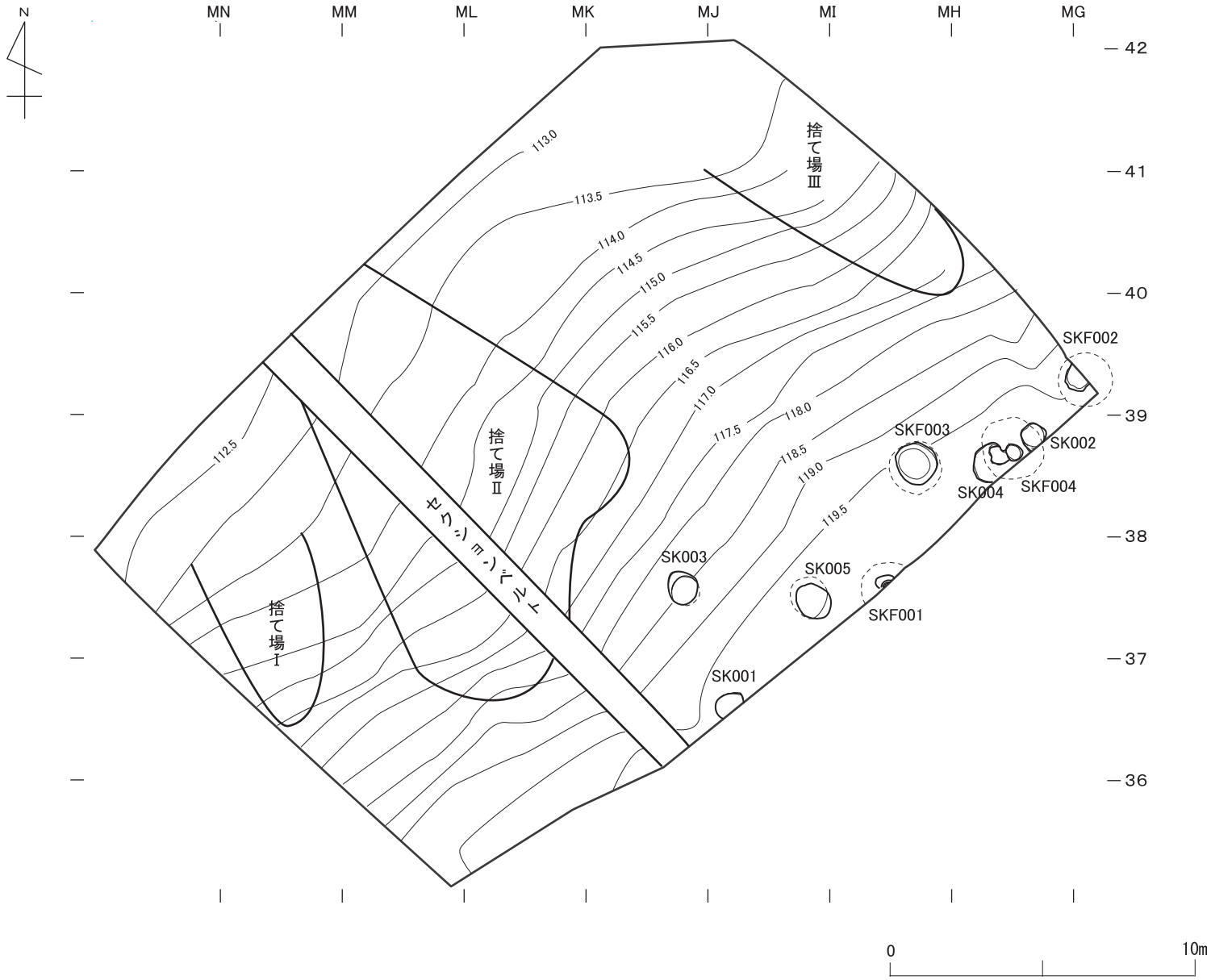
１、Ⅰ区の遺構と出土遺物

（１）土坑と出土遺物

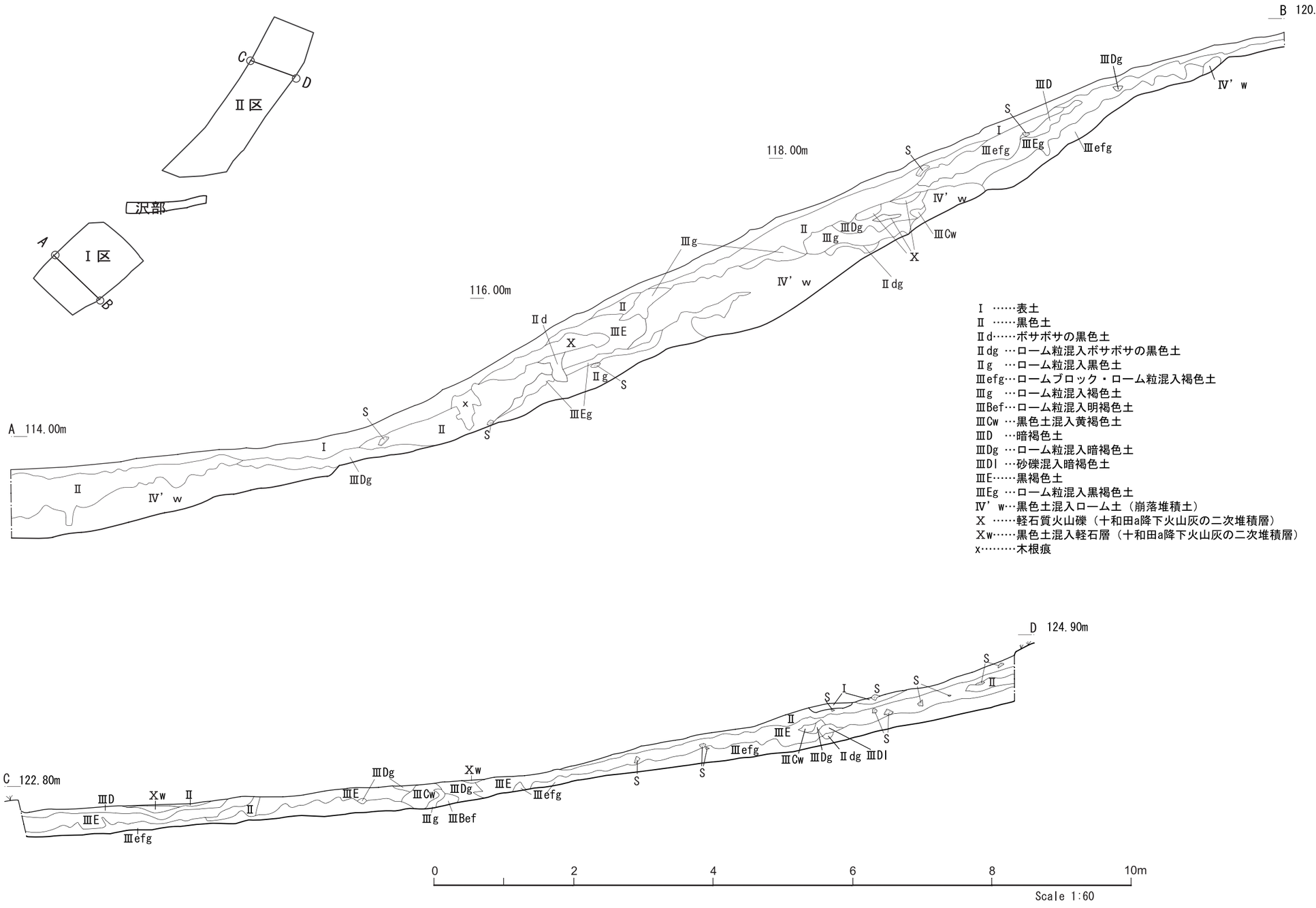
①ＳＫ００１（第９図）

ＭＩ３７区の調査区・区外の境に検出した。開口部径約０．９５m、底径もほぼ同数値であるが、底面レベルが北東面で標高１１９．０４m、中央部で１１９．３４m、南西面で１１９．３１mと、北東から南西に太鼓腹状に膨らんでいる。そのため壁高は北東部で０．５８m、南西部で０．２mを測る。

壁面は、南西から北側にかけて直線的であるが、北側から北東にかけては凹凸が著しい。底面の状態や壁高の不均整から、一見、構築途中で作業を中止した観があり、土坑内



第７図　Ⅰ区遺構配置図(1:200)


A 114.00m
B 120.00m
C 122.80m
D 124.90m
116.00m
118.00m
Ⅰ区
Ⅱ区
沢部
Ⅰ ……表土
Ⅱ ……黒色土
Ⅱd……ボサボサの黒色土
Ⅱdg …ローム粒混入ボサボサの黒色土
Ⅱg …ローム粒混入黒色土
Ⅲefg…ロームブロック・ローム粒混入褐色土
Ⅲg …ローム粒混入褐色土
ⅢBef…ローム粒混入明褐色土
ⅢCw …黒色土混入黄褐色土
ⅢD …暗褐色土
ⅢDg …ローム粒混入暗褐色土
ⅢDl …砂礫混入暗褐色土
ⅢE……黒褐色土
ⅢEg …ローム粒混入黒褐色土
Ⅳ’w…黒色土混入ローム土（崩落堆積土）
X ……軽石質火山礫（十和田a降下火山灰の二次堆積層）
Xw……黒色土混入軽石層（十和田a降下火山灰の二次堆積層）
x……木根痕
0
2
4
6
8
10m
Scale 1:60

第８図　基本層序

埋積土は人為的埋め戻し状況を呈する。

北東壁は現況では底面からの立ち上りによって判断したが、図に見られるように、０．３ｍほど北東外まで壁を広げる予定を止めたか、本土坑埋め戻し直後にこの部分に新たな掘削が為されたのか判断がつかない。

遺物は出土しなかった。

②ＳＫ００３（第９図）

ＭＪ３８区に検出、斜面に築かれていて開口部縁が南東部で標高１１８．７６ｍ、北西部で１１８．３０ｍを測る。開口部北東側ほぼ中央に長さ３０㎝、幅１５㎝、厚さ１０㎝の大振りな自然石が水平に置かれている。

開口部は卵形、底部は略円形で、その中心は南東―北西軸上でずれている。比高の高い南東側の壁は袋状に膨らんでいるものの、その他は内傾していて、北西側では幅２０㎝ほどの略平坦面が壁高中位に設けられている。置石直下の深さは０．４５ｍ前後を測り、床面は南東から北西に向かってやや傾斜している。

遺物は、第９図中の深鉢体部破片が埋積土中（１１８．５５５ｍ）から出土した。拓影図では体央部に一条の横位沈線があるように見えるが、これは調査時の道具による削り痕である。

③ＳＫ００２（第１０・１２図）

ＭＧ３９区の調査区・区外に検出した。本土坑の南西にＳＫＦ００４、その南西にＳＫ００４がある。

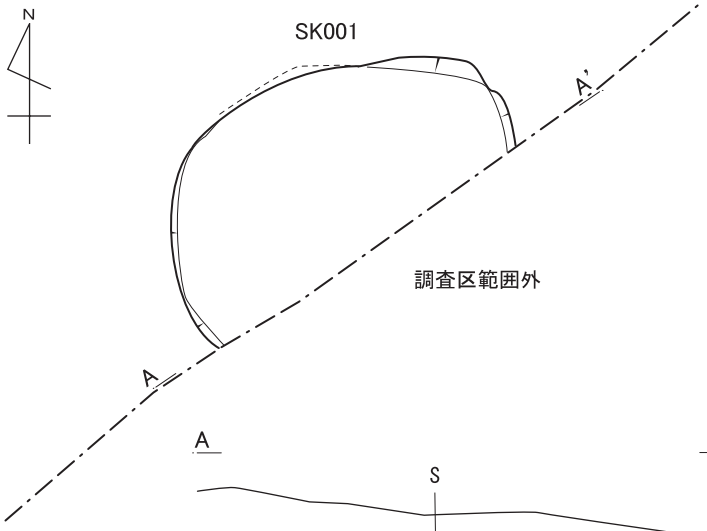
開口部は略円形で底形も同様である。径は約０．７５ｍを測り、上端は崩落のためか不規則な波形を呈す。南東部の断面で見ると底縁は口縁の奥にあって、本来は袋状土坑であった可能性が高い。底面はゆるやかな凹凸があって平坦ではないし、南東部断面では北東から南西に傾斜しているのを知ることができる。土坑構築は丁寧に行われたとはいい難い。

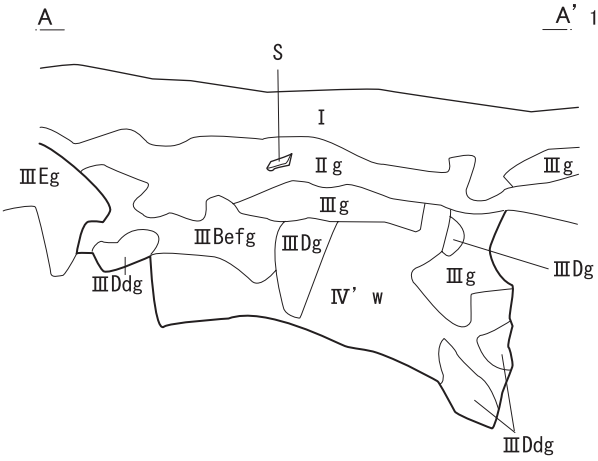
遺物は、第１２図中の深鉢口縁部破片３片と、スクレイパー２点が埋積土中から出土した。１は１１８．４２５ｍ、２は１１８．５７７ｍ、３は破片３片の接合体でそれぞれ１１８．３６３ｍ・１１８．３９３ｍ・１１８．４０９ｍ地点からの出土である。

④ＳＫＦ００４（第１０図）

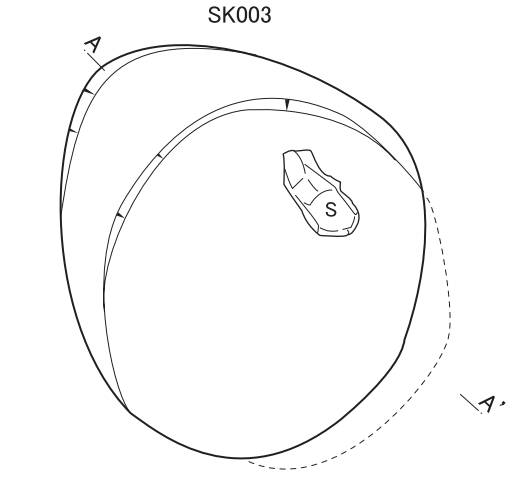
ＭＧ３９区に検出。当初、浅い土坑と判断して掘り下げを後回しにしていて、調査終了間近かになって掘り下げたところフラスコ状土坑であることが判明。半截調査する時間的な余裕もなく、土坑内の調査を行い、断面図を作成。

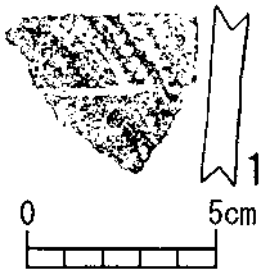
開口部は楕円形で長軸（北西―南東）約０．５７ｍ、短軸（北東―南西）約０．４２ｍ、底形は略円形で平坦、開口部中心点から北側半分が広く、北へ約１．２ｍ、南へ約０．８ｍ、東へ約１ｍ、西へ約１ｍほどである。深さは２．０５ｍ。

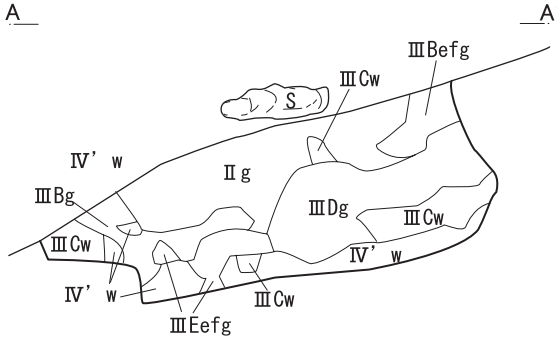




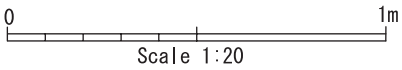
Ⅰ　……表土
Ⅱg ……ローム粒混入黒色土
Ⅲg ……ローム粒混入褐色土
ⅢBefg…ロームブロック
　・ローム粒混入明褐色土
ⅢDg……ローム粒混入暗褐色土
ⅢDdg …ローム粒混入のボサボサした暗褐色土
ⅢEg……ローム粒混入黒褐色土
Ⅳ' w…黒色土混入のローム土



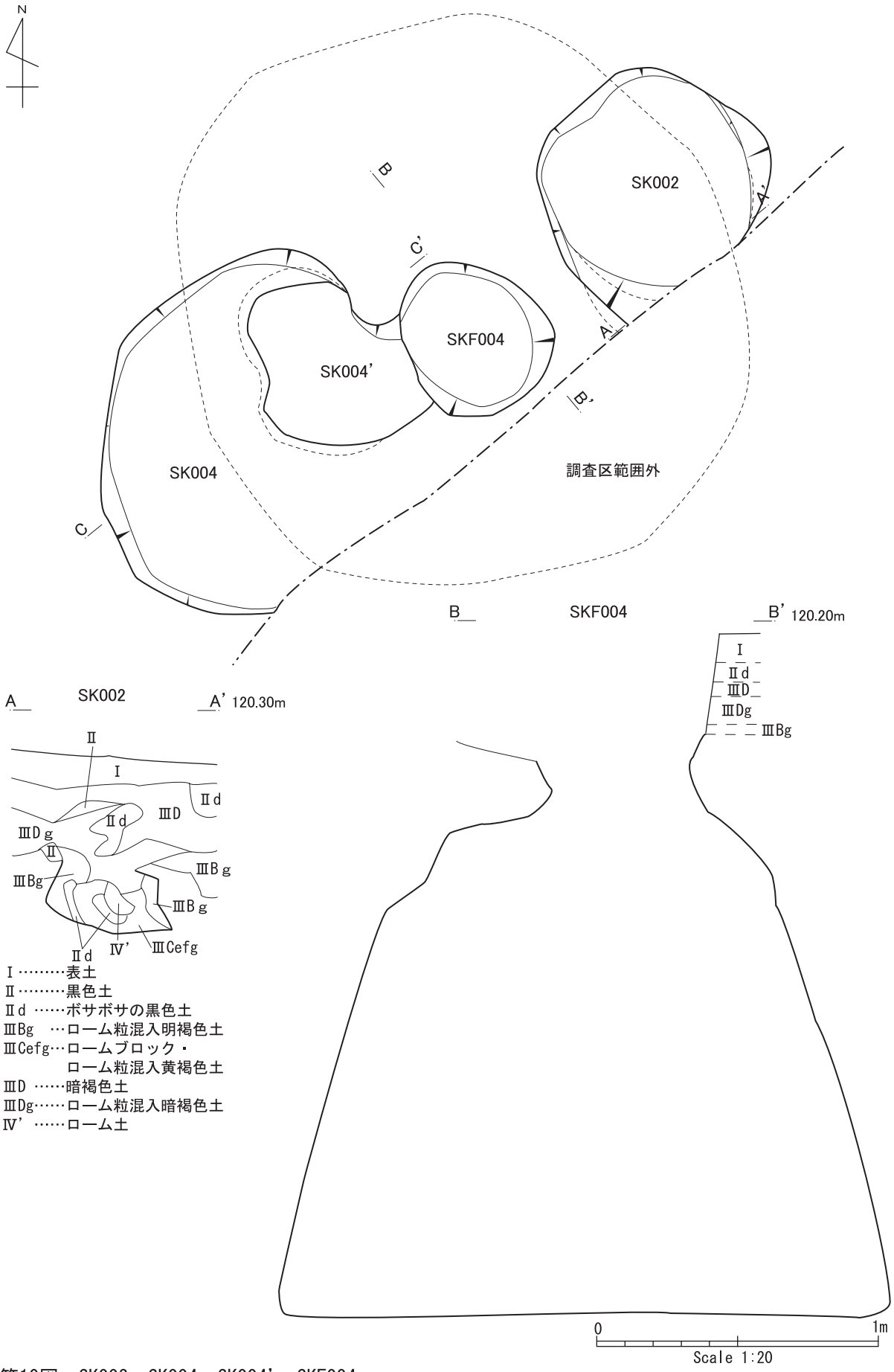




Ⅱg ……ローム粒混入黒色土
ⅢBg　…ローム粒混入明褐色土
ⅢBefg…ロームブロック
　・ローム粒混入明褐色土
ⅢCw……黒色土混入黄褐色土
ⅢDg　…ローム粒混入暗褐色土
ⅢEefg…ロームブロック
　・ローム粒混入黒褐色土
Ⅳ' w…黒色土混入のローム土

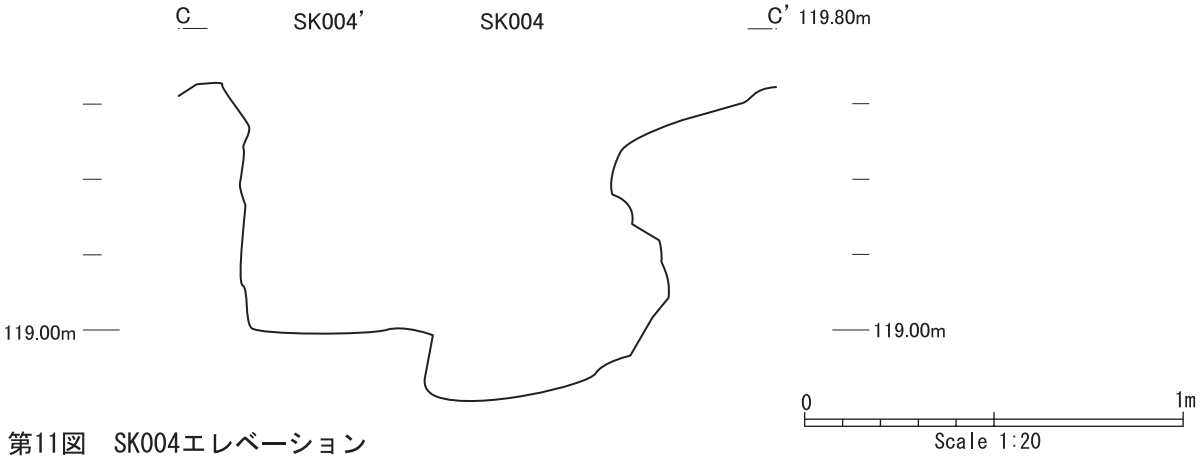


第９図　SK001・SK003と出土遺物

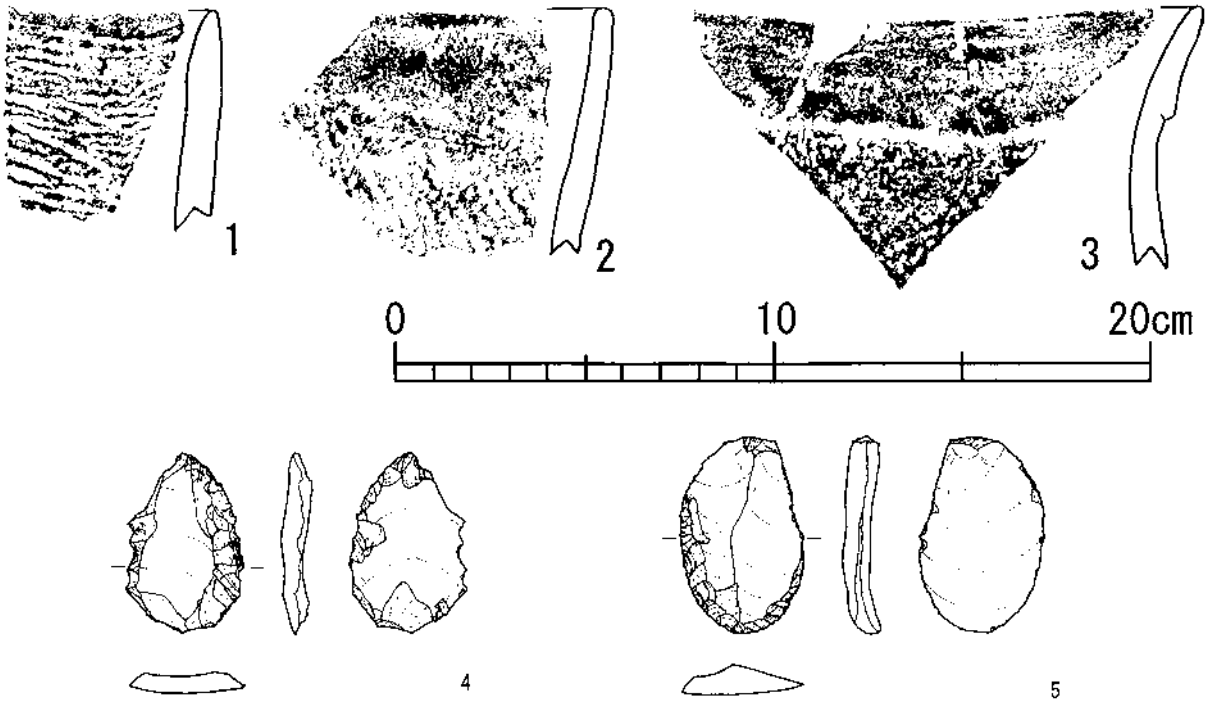


Ⅰ……表土
Ⅱ……黒色土
Ⅱd ……ボサボサの黒色土
ⅢBg …ローム粒混入明褐色土
ⅢCefg…ロームブロック・
ローム粒混入黄褐色土
ⅢD ……暗褐色土
ⅢDg……ローム粒混入暗褐色土
Ⅳ'……ローム土

第10図　SK002・SK004・SK004'・SKF004



第11図　SK004エレベーション



第12図　SK002出土遺物

挿図番号	写真番号	出土位置	取り上げ番号	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	層位	標高(m)	備考
12－4	16	SK002	1	サイドスクレイパー	47.4	30.5	6.5	10.3	頁岩	埋積土	118.454	
5	16	SK002	2	エンドスクレイパー	52.2	32.4	8.9	14.3	頁岩	埋積土	118.351	

第２表　掲載石器一覧（Ⅰ区SK002）

遺物は出土しなかった。

⑤ＳＫ００４・ＳＫ００４’（第１０・１１図）

ＭＧ３９区に検出。杉根が全体に入り込んでいて土層断面を明らかにすることができなかった。杉根を取り去りながら埋積土を掘りあげたところ、２基の土坑の切り合いであることがわかった。ＳＫ００４は不整円形の土坑で、開口部径が１．２ｍ、底径もほぼ同様で、深さは地山面から約０．６５ｍを測る。ＳＫ００４’はＳＫ００４の北東部に確認され、その形状は一部で袋状を呈しているが全容は不明であり、ＳＫ００４との前後関係も不明である。

遺物は出土しなかった。

⑥ＳＫ００５（第１３図）

ＭＨ３８、ＭＩ３８区に検出。開口部は楕円形で長軸（北西―南東）約１．２５ｍ、短軸（北東―南西）約１．０５ｍ、底形は卵形で長軸（北―南）約１．３５ｍ、短軸（東―西）約１．１５ｍで、開口部と底面の長軸方向は３０度ほどズレる。

壁は南から西、北、北東部までは袋状に膨らむが、北東から東、南までは内傾する。しかし、内傾してはいるものの壁中位面では少し膨らみをもっている個所も見られる。深さは約０．８ｍで底面は比較的平坦である。埋積土の大部分は黒色土を散包する掘り上げ土のロームで、床面上に薄くローム粒を混入する黒色土が見られる。

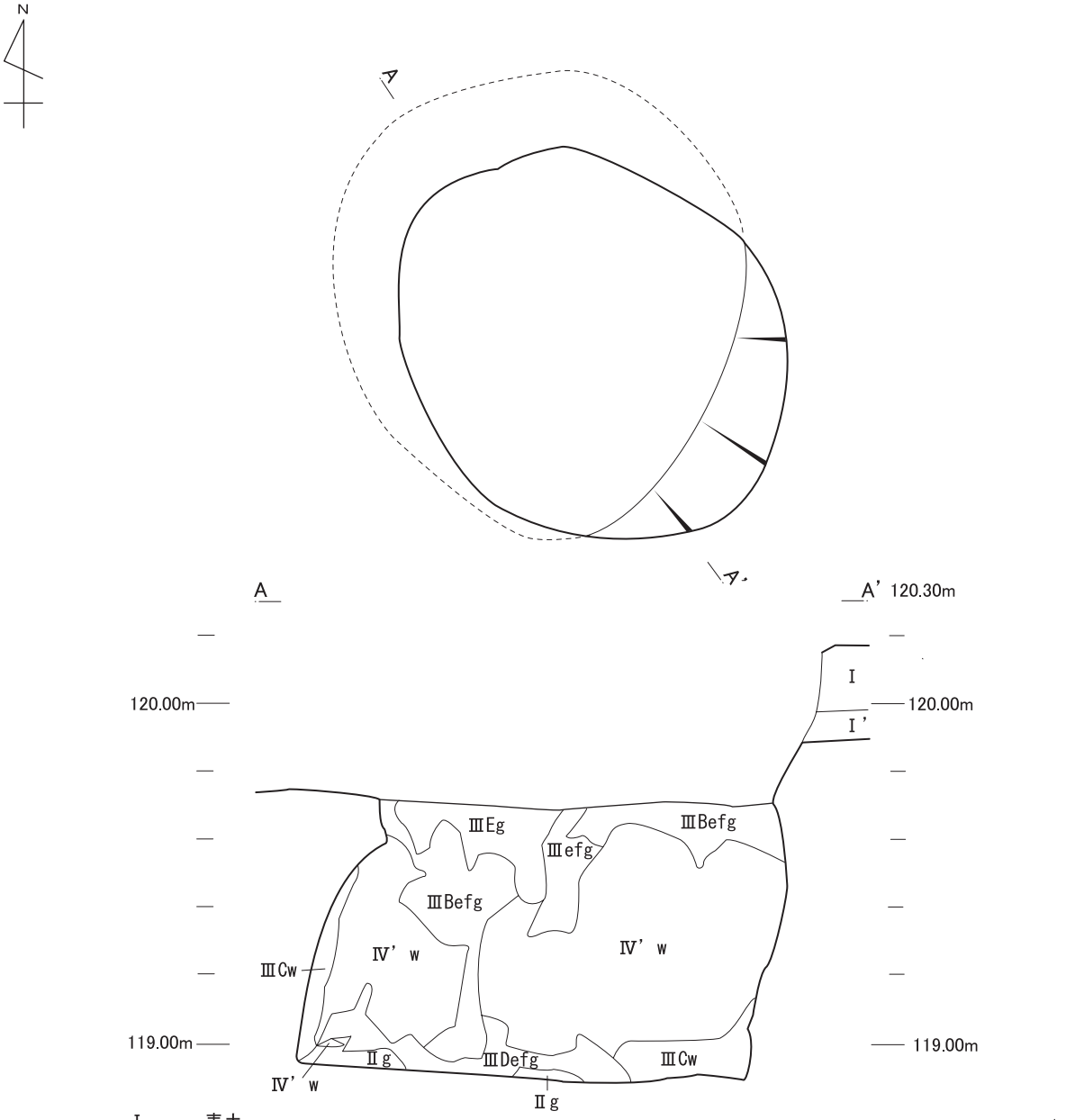
遺物は、第１３図中の深鉢体部破片３片が埋積土中から出土した。

⑦ＳＫＦ００１（第１４図）

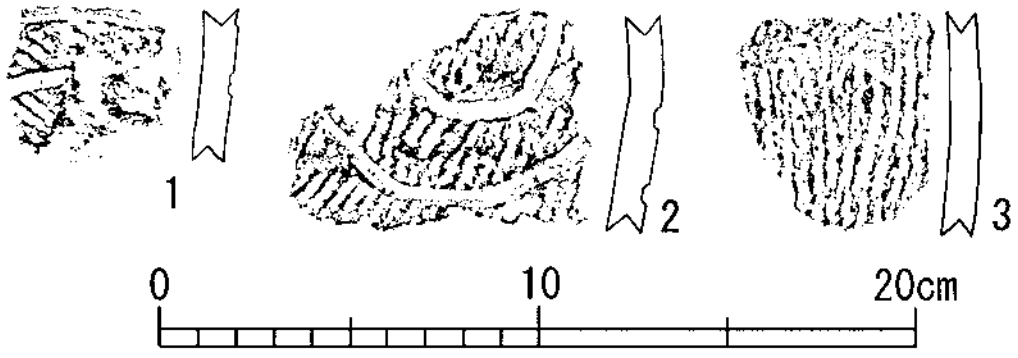
ＭＨ３８区の調査区・区外に検出。地山上のローム粒混入黄褐色土層から掘り込まれていて、開口部径は１．２ｍ前後の円形と思われる。南西頸部が崩落していて正確な数値は不明であるが、地山面での頸部径は０．６ｍ前後と推測される。底形は略円形と推察され、底径は１．８ｍ前後と推測される。深さは開口面に堆積しているローム粒混入黒色土面から約１．５５ｍを測る。開口部やや南西寄りに長さ２５㎝前後、幅１８㎝前後、厚さ８㎝ほどの川原石が斜立位にみられる。

底面ほぼ中央に深さ１８㎝ほどの円孔が穿たれているが、その形状は、土坑底面を径４５㎝の円形に掘り込み、深さ８㎝ほど下げたところに幅５㎝の明瞭な中段面をつくり、さらに径２５㎝の円孔を穿ち、深さ１０㎝下げて径１５㎝ほどの底面に至る。この円孔には中段面下にロームブロック混入黒色土を、その上に黒色土混入ロームを充填し、さらにその上に土坑底面を覆うように径８０㎝、厚さ２～５㎝に黒色土を堅く叩き締めている。円孔から遺物は出土しなかった。

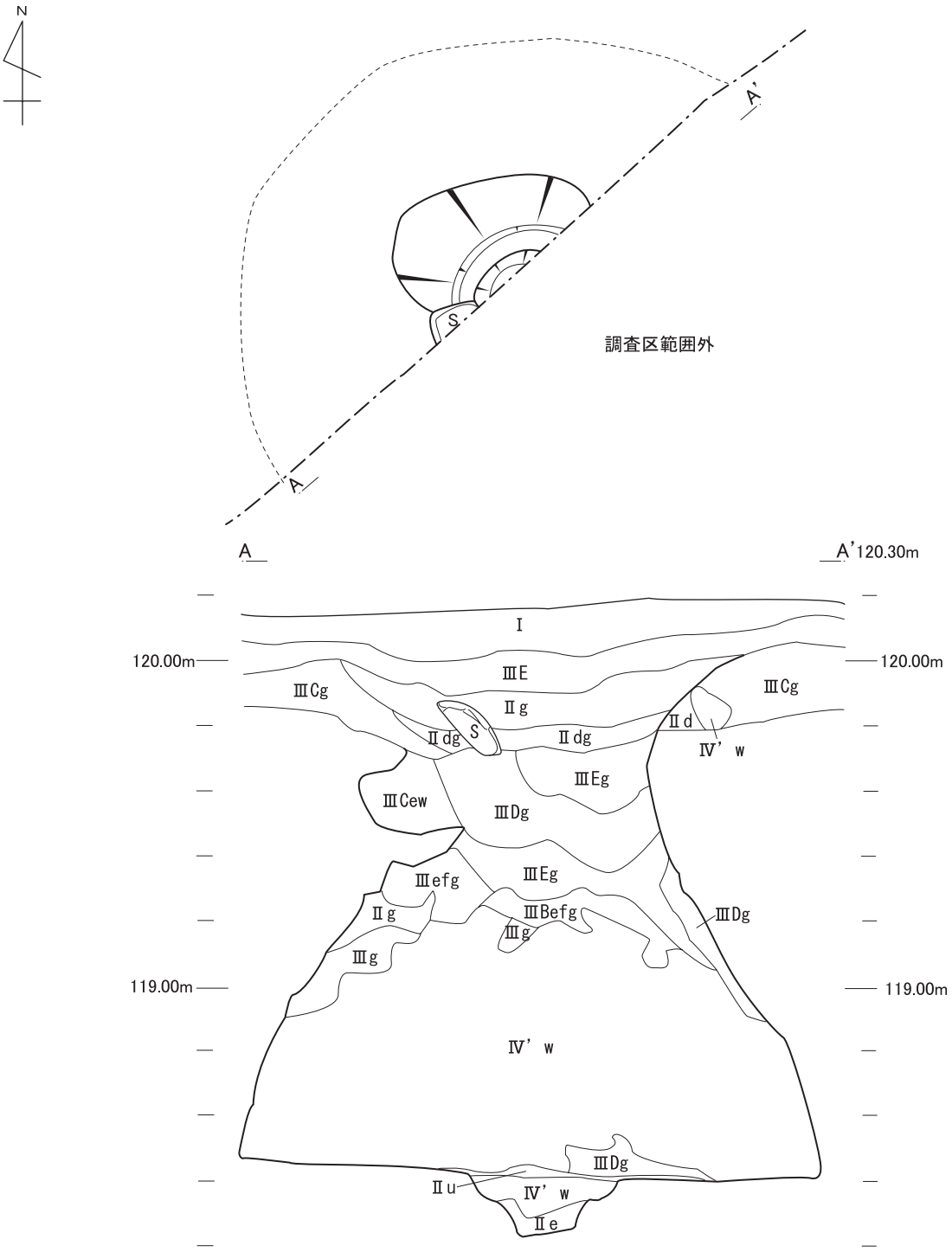
円孔を覆う叩き締めの黒色土上位に一部ローム粒混入暗褐色土が見られるが、その上位には黒色土を散包するロームを厚さ５０～７０㎝ほどに埋め戻している。



Ⅰ　……表土
Ⅰ'……漸移層
Ⅱg ……ローム粒混入黒色土
Ⅲefg …ロームブロック・ローム粒混入褐色土
ⅢBefg…ロームブロック・ローム粒混入明褐色土
ⅢCw　…黒色土混入黄褐色土
ⅢDefg…ロームブロック・ローム粒混入暗褐色土
ⅢEg……ローム粒混入黒褐色土
Ⅳ' w …黒色土混入ローム土



第13図　SK005と出土遺物



Ⅰ……表土
Ⅱg ……ローム粒混入黒色土
Ⅱd ……ボサボサの黒色土
Ⅱdg……ローム粒混入ボサボサの黒色土
Ⅱe ……ロームブロック混入黒色土
Ⅱg ……ローム粒混入褐色土
Ⅱu ……固くしまった黒色土
Ⅲefg …ロームブロック・ローム粒混入褐色土
Ⅲg ……ローム粒混入褐色土
ⅢBefg…ロームブロック・ローム粒混入明褐色土
ⅢCew …ロームブロック・黒色土混入黄褐色土
ⅢCg……ローム粒混入黄褐色土
ⅢDg……ローム粒混入暗褐色土
ⅢDdg …ローム粒混入ボサボサの暗褐色土
ⅢE ……黒褐色土
ⅢEg……ローム粒混入黒褐色土
Ⅳ' w …黒色土混入ローム土

0 1m
Scale 1:20

第14図　SKF001

遺物は出土しなかった。

⑧ＳＫＦ００２（第１５図）

ＭＦ４０、ＭＧ４０区に検出した。東側は調査区外、北東半分は調査ベルトを残したため、半截作業、断面図作成作業終了後、内部調査を実施した。

開口部は不整円形で径０．９m内外、頸部径は０．８m内外、底部は開口部中心点から北東に偏って広がっていて径約１．８mの円形、深さは北東側（山側）で１．３m、南西側（谷側）で１．１５mを測る。

遺物は、第１５図中の深鉢体部破片２片が埋積土中から出土した。２は細砂粒を含む精選された胎土で、内面の磨きはきわめて丁寧で、焼成は堅緻（２次焼成ヵ）、体下半全体に煤付着。

⑨ＳＫＦ００３（第１６図）

ＭＨ３９区に検出した。開口部は略円形で径１．３～１．３５m、頸部は楕円形で長軸（北西―南東）１．０５m、短軸（北東―南西）０．９３m。底部は開口部中心点から南側に偏って広がり、径１．７m前後の略円形で、縁辺はゆるやかな波状に曲折している。深さは地山面から１．３５mを測る。

頸部に拳大から人頭大の川原石が見られたが、敷き詰め、配石等の意識的な所作は認められない。

遺物は出土しなかった。

（２）捨て場の状況（第７図）と出土土器（第１７図～第３１図）

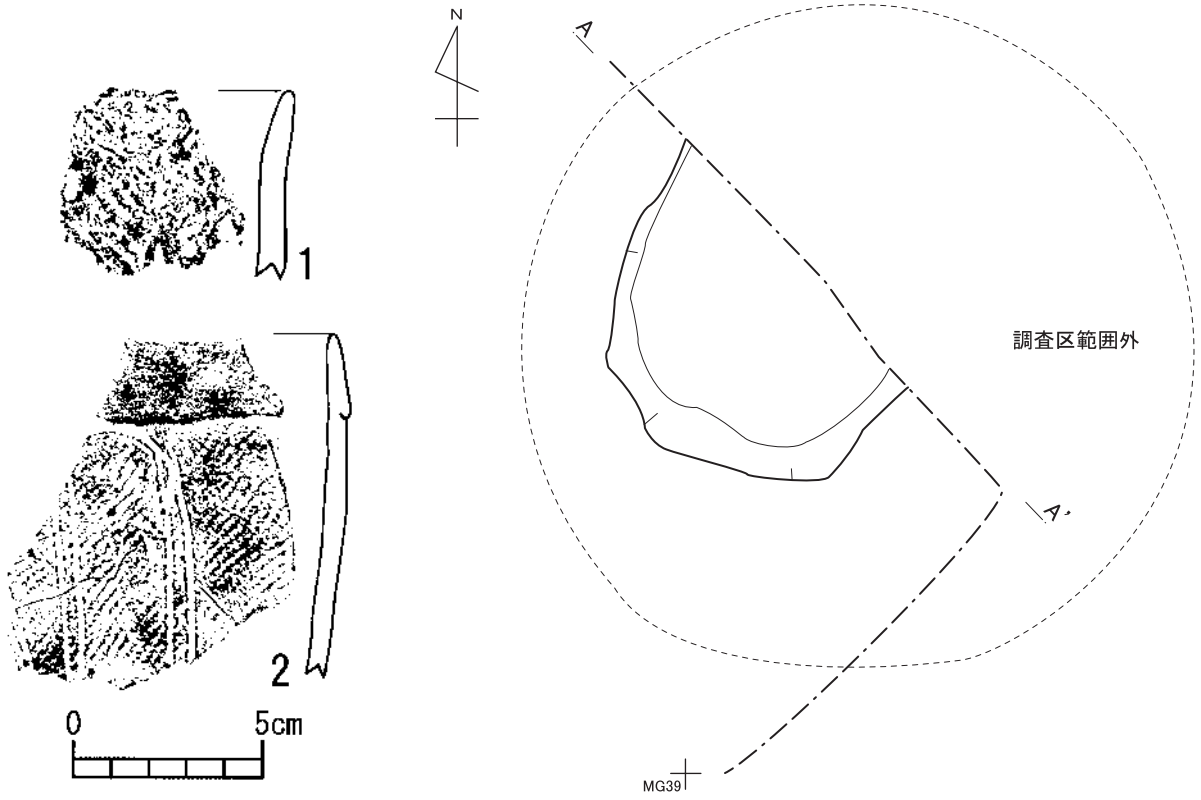
台地斜面に三筋の小沢が刻まれていて、そこに土器、石器等を廃棄した捨て場が見られる。三筋の沢は堆積物が厚く、現地表からはその存在を確認できない隠れ谷となっている。西側から捨て場Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと呼ぶ。

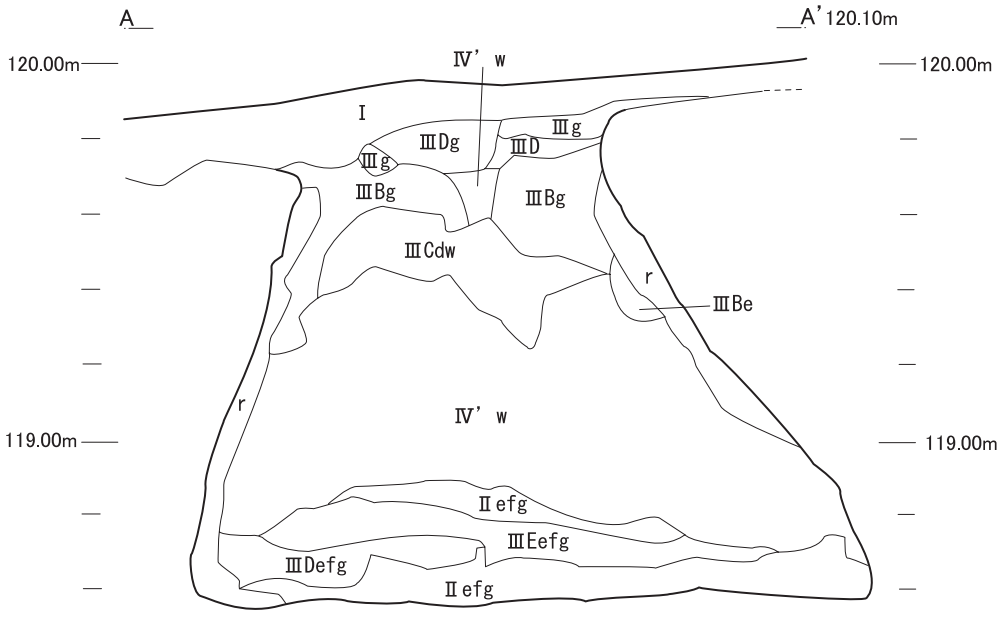
捨て場ⅠはMM３７・３８・３９、ＭＮ３８区に検出されたもっとも小さい沢であり、もっとも小規模で遺物量の少ない捨て場である。

捨て場ⅡはＭＪ３９・４０、ＭＫ３７・３８・３９・４０、ＭＬ３７・３８・３９・４０・４１、MM３９・４０区に検出されたもっとも大きい沢であり、もっとも大規模で遺物量の多い捨て場である。

捨て場ⅢはＭＧ４１、ＭＨ４０・４１・４２、ＭＩ４１・４２区に検出された捨て場で、遺物量は捨て場Ⅱに匹敵する。

出土した土器の総破片数は勘定していないが、総体の９７％は縄文時代前期中葉の円筒下層ａ式土器と、いわゆる茂屋下岱式系の土器である。残り２％が縄文時代中期末葉の大木９・１０式系土器で、残り１％が縄文時代後期の土器である。口縁部及び体上部の施文状況、および底部の形態と施文状況から、捨て場Ⅰ・Ⅱ・Ⅲからの出土土器をまとめて、

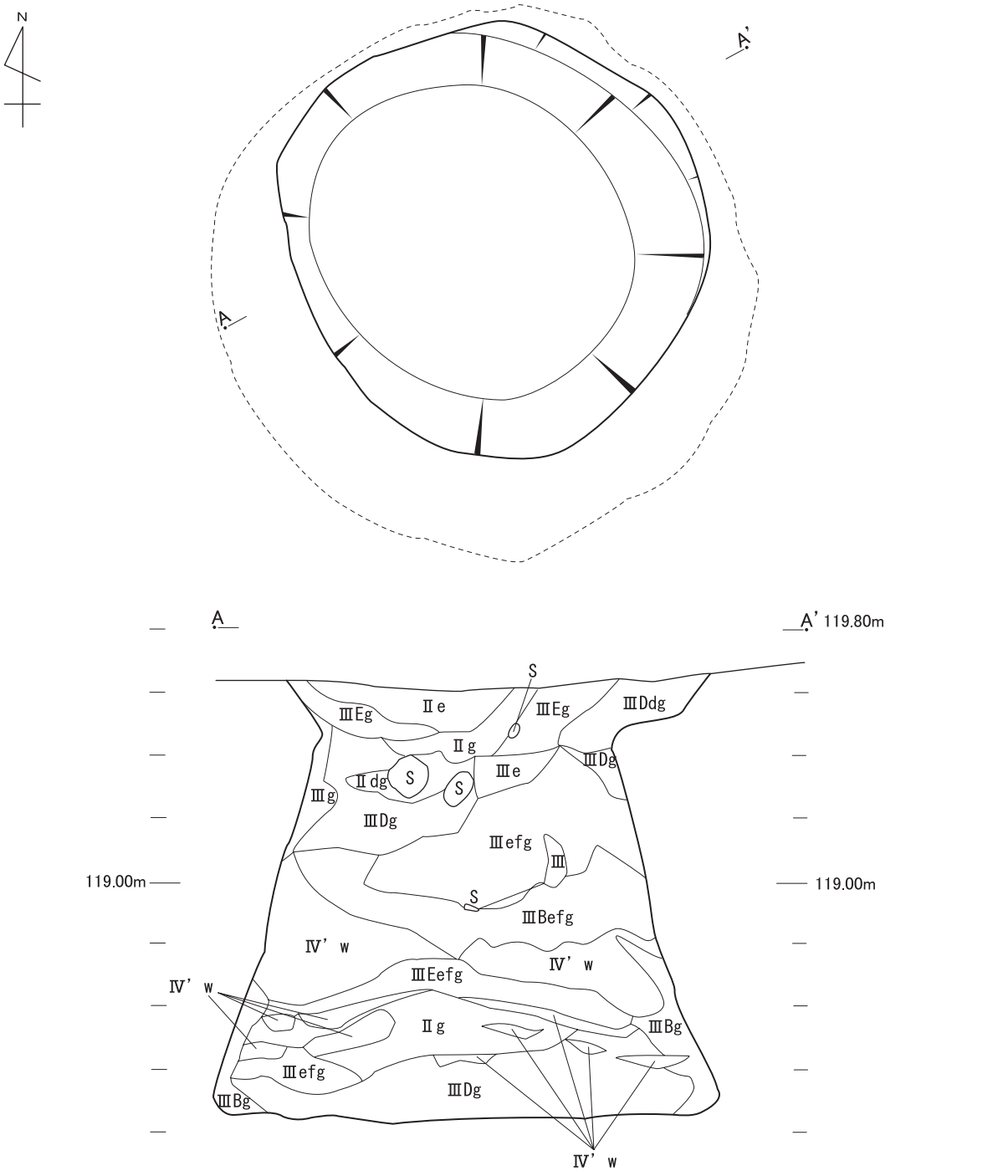




Ⅰ……表土
Ⅱefg …ロームブロック・ローム粒混入黒色土
Ⅲg ……ローム粒混入褐色土
ⅢBe……ロームブロック混入明褐色土
ⅢBg……ローム粒混入明褐色土
ⅢCdw …黒色土混入ボサボサの黄褐色土
ⅢD ……暗褐色土
ⅢDefg…ロームブロック・ローム粒混入暗褐色土
ⅢDg……ローム粒混入暗褐色土
ⅢEefg…ロームブロック・ローム粒混入黒褐色土
Ⅳ' w …黒色土混入ローム土
r ……地山壁崩落土

0 1m
Scale 1:20

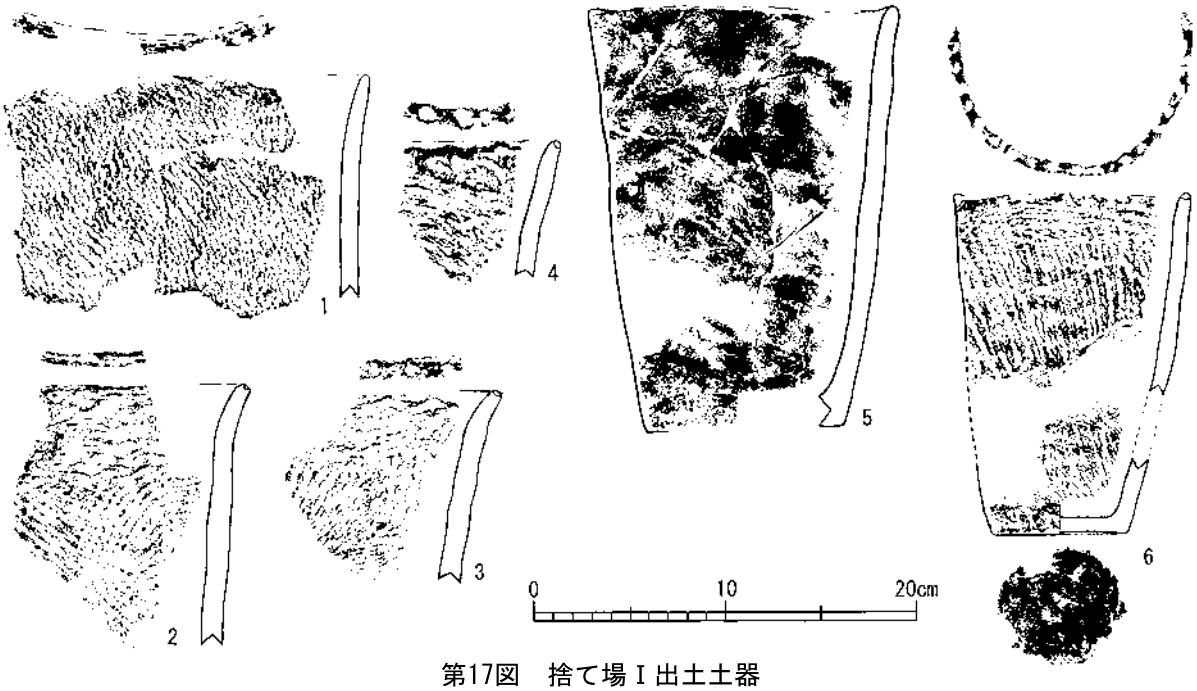
第15図　SKF002と出土遺物



Ⅱdg……ローム粒混入ボサボサの黒色土
Ⅱe ……ロームブロック混入黒色土
Ⅱg ……ローム粒混入黒色土
Ⅲ……褐色土
Ⅲe ……ロームブロック混入褐色土
Ⅲefg …ロームブロック・ローム粒混入褐色土
Ⅲg ……ローム粒混入褐色土
ⅢBg……ローム粒混入明褐色土
ⅢBefg…ロームブロック・ローム粒混入明褐色土
ⅢDdg …ローム粒混入ボサボサの暗褐色土
ⅢDg……ローム粒混入暗褐色土
ⅢEefg…ロームブロック・ローム粒混入黒褐色土
ⅢEg……ローム粒混入黒褐色土
Ⅳ' w …黒色土混入ローム土

0 1m
Scale 1:20

第16図　SKF003



第17図　捨て場Ⅰ出土土器

次のように分類する。

○第Ⅰ類土器……土器表裏面に撚糸文が施文してある。１９は波状口縁で表裏面とも斜位の撚糸。

○第Ⅱ類土器……器表全体に同一の撚糸文が施文してある。次のように小分類できる。

Ⅱ－ａ類土器……器表に同一の撚糸文を施文してある。５・２０・２１・２２・２３・２４・２５・２６・１０３で、すべての胎土に繊維を混ぜてある。５は口径１６．４㎝、底径１０．３㎝、器高２１．５㎝、器厚１．０㎝で、器表全体に単絡Ⅰ類(Ｌｒ)を施文後ナデ消している。底部は意識的に打ち欠いてある。２４は確認調査時にＮｏ．９トレンチから出土した土器で、口縁上端の一部に角度を変えた施文がみえ、２３も同様である。

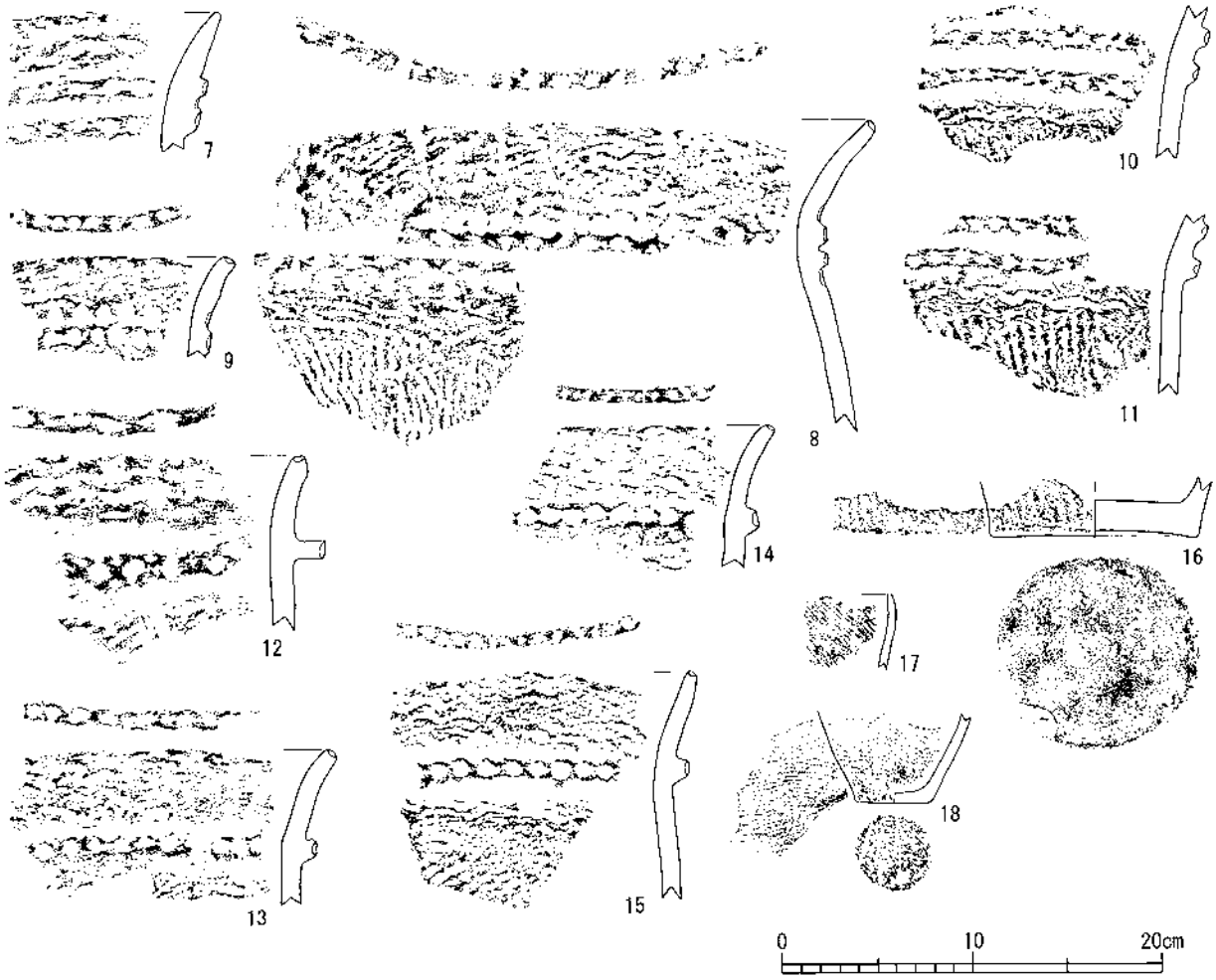
Ⅱ－ｂ類土器……Ⅱ－ａ類土器の口唇に撚糸の圧痕文を施文してある。１・５０・１１５で、個体数は少ないものの捨て場全体から出土している。口唇部の撚糸圧痕は体部施文撚糸原体と同一のもの。

Ⅱ－ｃ類土器……Ⅱ－ａ類土器の口唇に指頭状の押圧文を施文してある。４でこの類も個体数は少ない。

Ⅱ－ｄ類土器……器表に縄文を密に施文。１７・１８がそれで同一個体。底面同様。

○第Ⅲ類土器……口縁部に撚糸文の文様帯を施文し、体部の撚糸文と画してある。これは次のように小分類できる。

Ⅲ－ａ類土器……口縁部文様帯と体部文様を施文してある。２７・２８・２９・３０・３１・３２・３３・３４・３５・３６・３７・３８・３９・４０・４１・４２・４３・４４・４５・４６・４７・１０４・１０５・１０６・１０７・１０８・１０９・１１０・１１１・１１２で、捨て場Ⅱ・



第18図　捨て場Ⅰ出土土器

Ⅲ区の主体をなす土器である。口縁部文様帯には意識的に、横位の大振りな絡条体を施し、同様に体央部や底縁部にも配している例も多い。

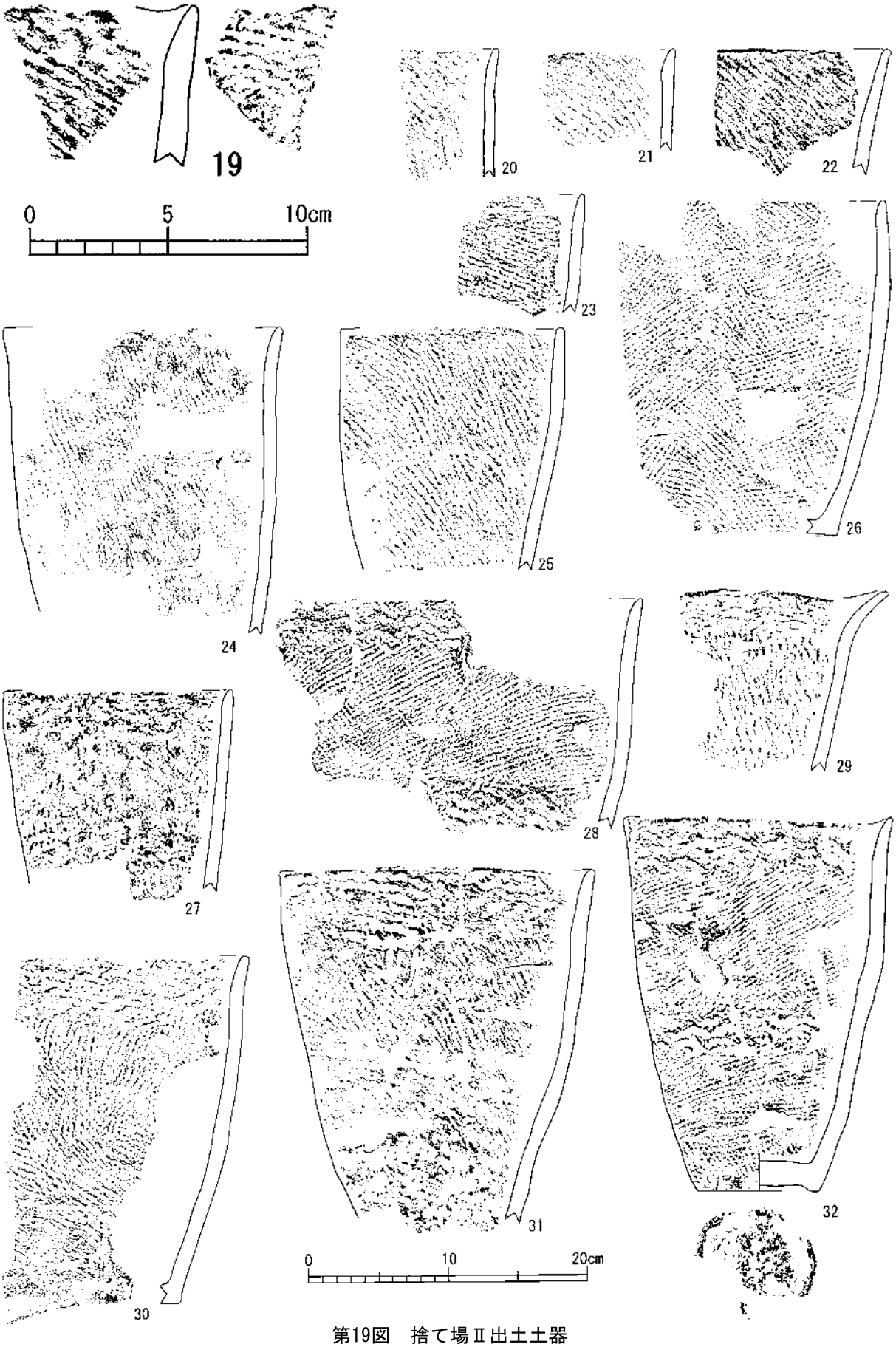
Ⅲ－ｂ類土器……Ⅲ－ａ類土器の口唇に撚糸の圧痕文を施文してある。２・３・５１・５２・５３・５４・１１６・１１７・１１８・１１９で、口唇部の撚糸圧痕は体部施文撚糸原体である例が大多数である。

Ⅲ－ｃ類土器……Ⅲ－ａ類土器の口唇に指頭状の押圧文を施文してある。６・５５・５６・５７・５８・５９・６０・６１・６２・６３・６４で、口唇部の窪みは、指頭と棒状工具によるものが半々である。指頭によるものの中には爪形がみられるものもある。

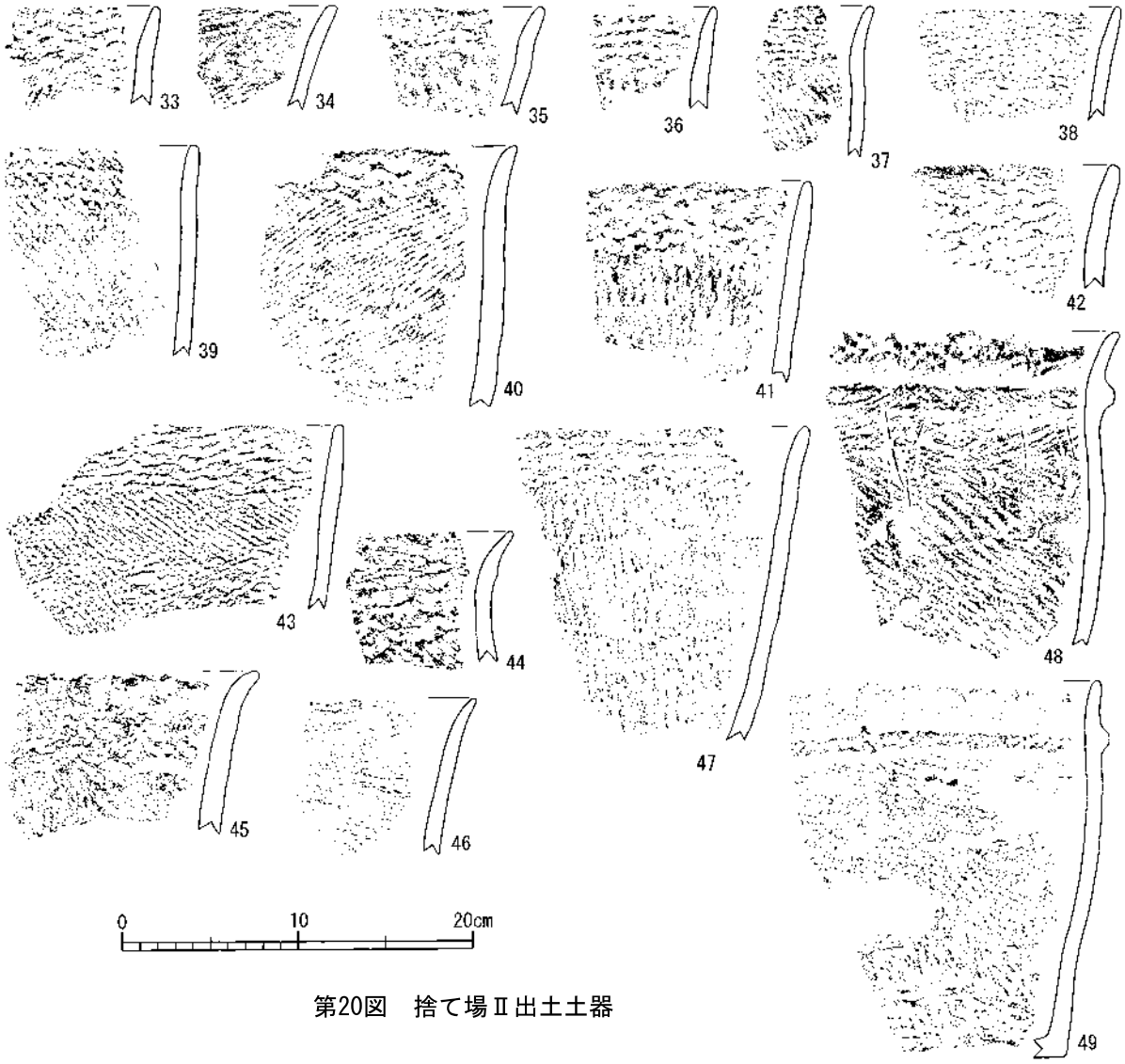
○第Ⅳ類土器……頸部に一条の隆帯または突隆帯を廻らしている。これは次のように小分類できる。

Ⅳ－ａ類土器……隆帯の上に撚糸の圧痕文を施文してある。４８・４９・１１４で、隆帯上に密に施文してある。１２０は口唇にもみられる。

Ⅳ－ｂ類土器……隆帯の上に指頭状の押圧文を施文してある。６５・６６・１２５で、



第19図　捨て場Ⅱ出土土器



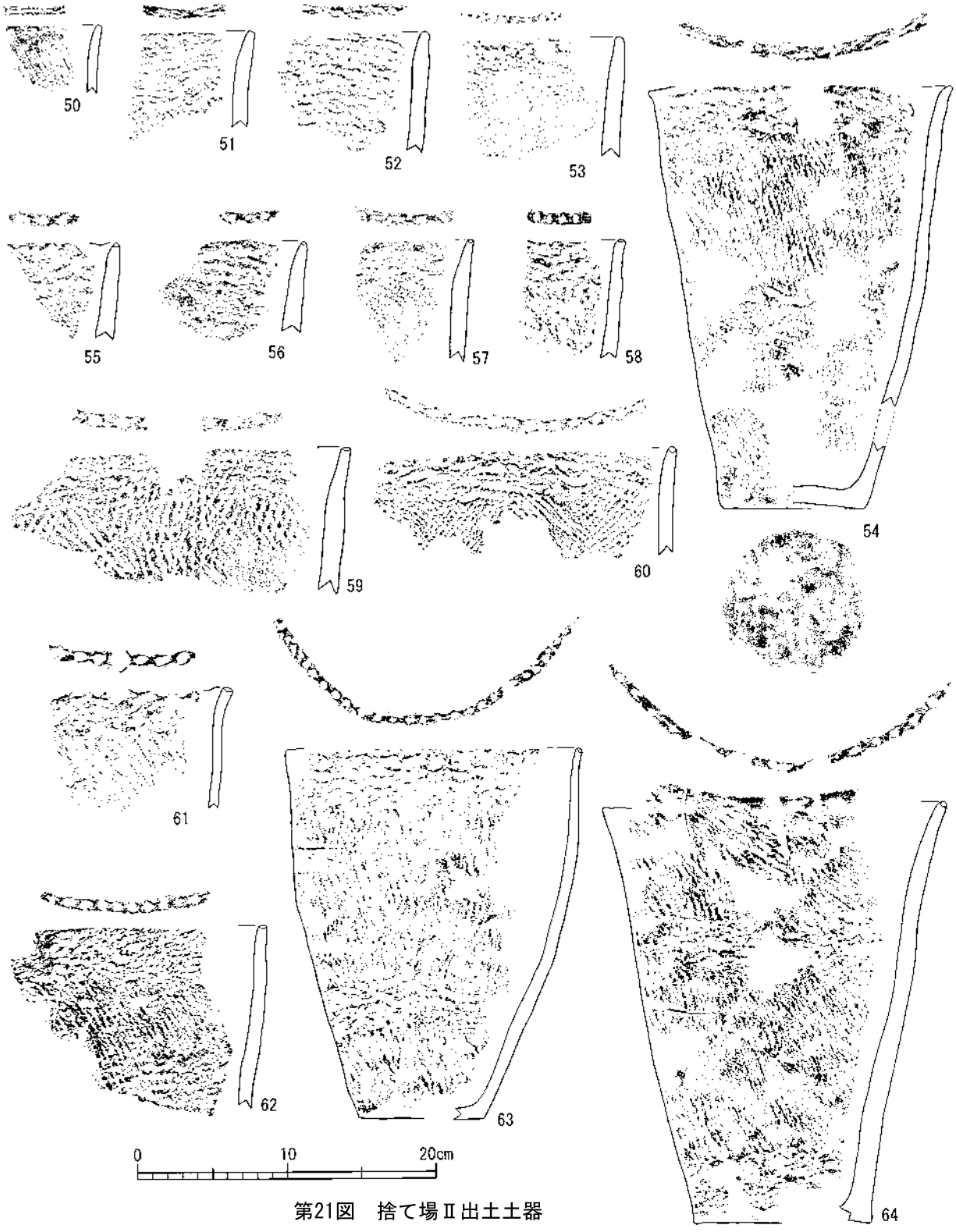
第20図　捨て場Ⅱ出土土器

隆帯によって口縁部と体部の文様帯を画す。１２５は口径１６．３㎝、底径８．５～９㎝、器高２８㎝、器厚１㎝で、隆帯は大振りな指頭押圧によって押し潰しの状態にある。

Ⅳ－ｃ類土器……Ⅳ－ｂ類土器の口唇に指頭状の押圧・撚系の押圧文を施文してある。１２・１３・１４・１５・６７・６８・６９・７０・７１で、隆帯によって口縁部と体部の文様帯を画くし、６９は口縁部文様帯の地文の上から、棒状工具による左から右への押引きによる４条の列点文を施してある。７１は異常に突出した隆帯（突隆帯）で口縁部が欠け口唇部は不明であるがこの類に属させておく。

Ⅳ－ｄ類土器……隆帯上と隆帯の上・下位に指頭状の押圧文を施文してある。指頭押圧文奥に爪形を意識的に施文してある例もある。７２・７３・７４・７６で、隆帯下位まで口縁部文様帯が広がる。

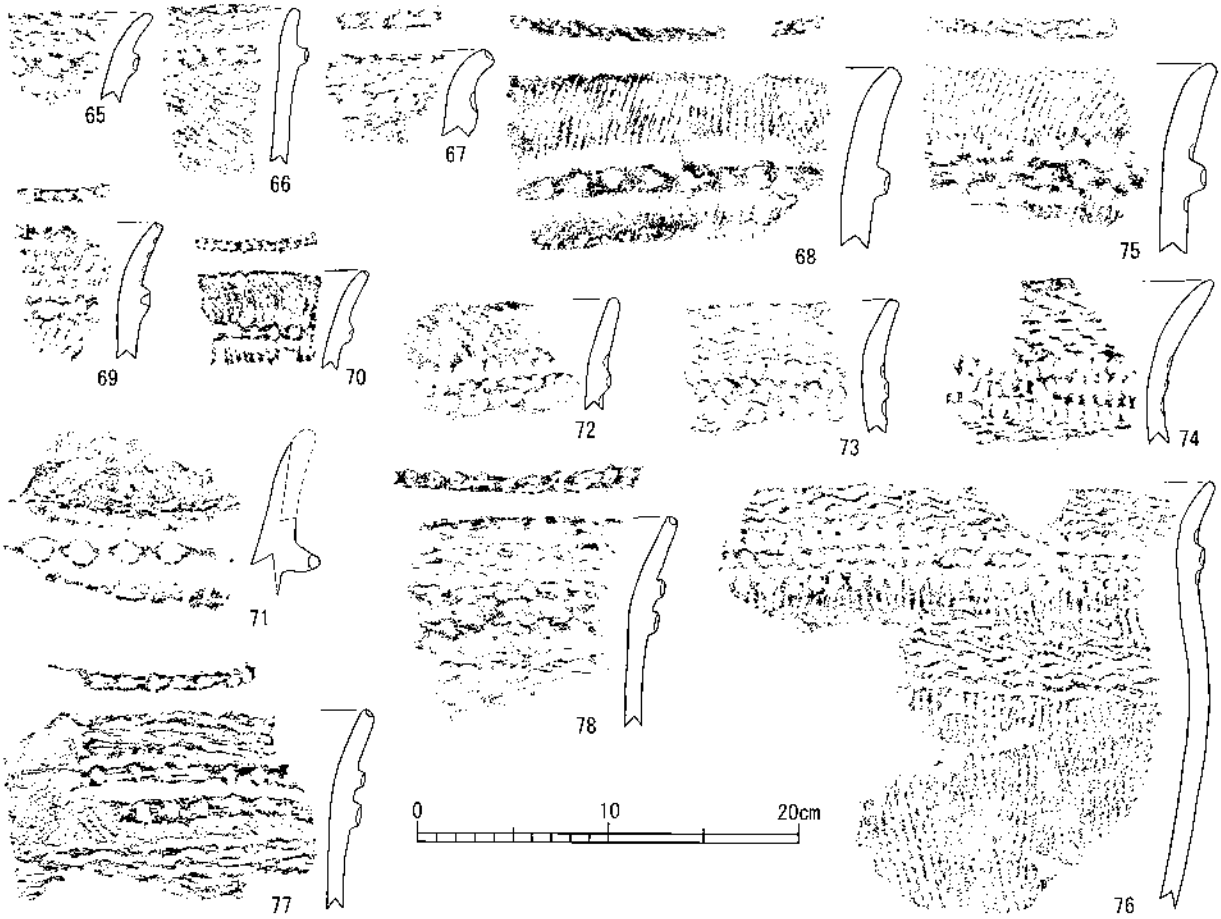
Ⅳ－ｅ類土器……Ⅳ－ｄ類土器の口唇に撚糸の圧痕文を施文してある。７５・７９・



第21図　捨て場Ⅱ出土土器

８０で、口縁部の文様が体央部まで下がる。７９は隆帯下位の指頭押圧文のさらに下位に、１条の指頭押圧文を配してある。

Ⅳ－ｆ類土器……Ⅳ－ｄ類土器の口唇に隆帯と同様の指頭状の押圧文を施文してある。１２１・１２２で、隆帯下位の指頭押圧文下位まで口縁部文様帯を



第22図　捨て場Ⅱ出土土器

施す。１２２は隆帯下位指頭押圧文までの破片で、その下位は不明であるがこの類に属させておく。

○第Ⅴ類土器……頸部に二条の隆帯を廻らしている。これは次のように小分類できる。

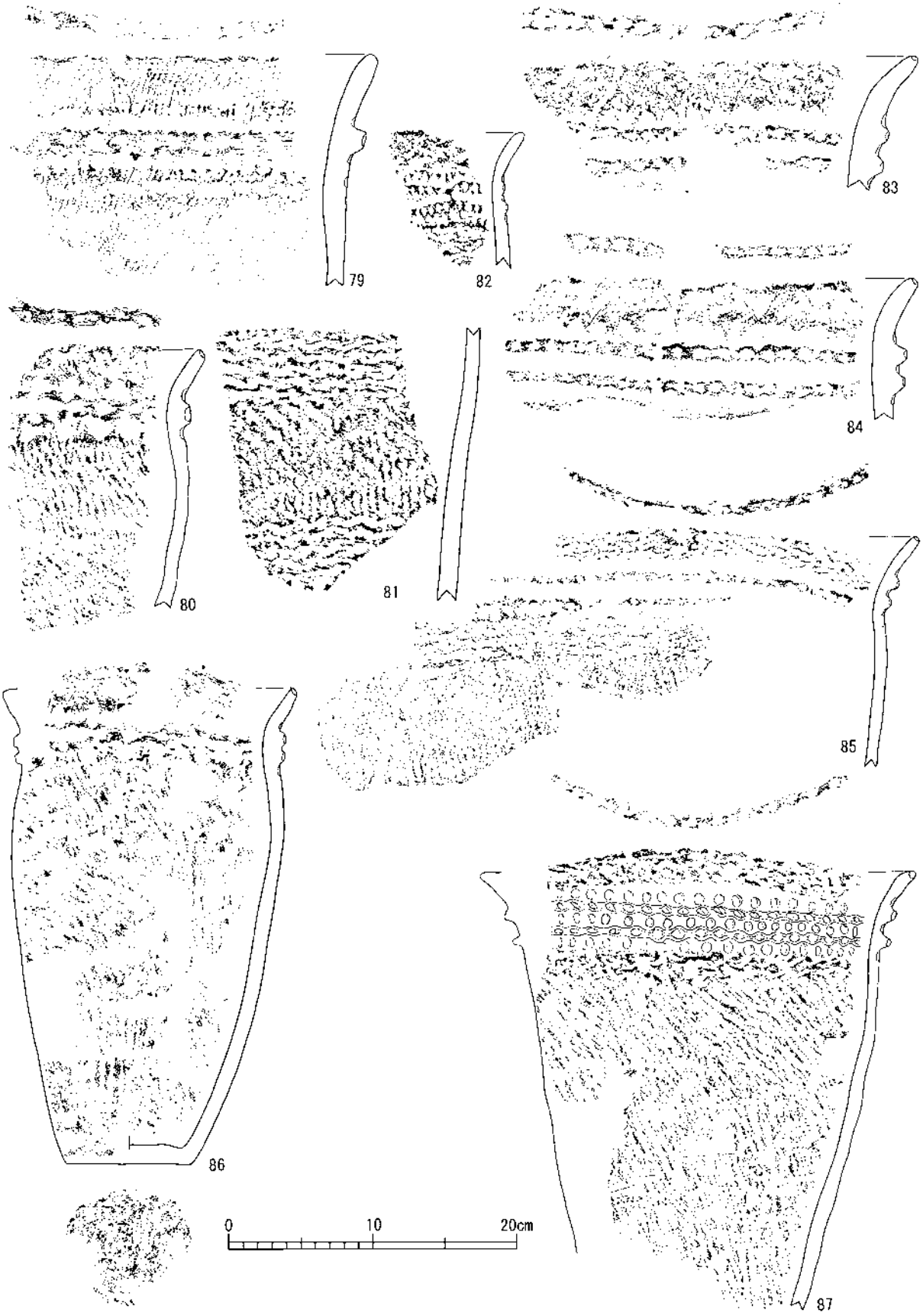
Ⅴ－ａ類土器……隆帯上に撚糸の圧痕文を施文してある。１２３で個体数はきわめて少ない。

Ⅴ－ｂ類土器……隆帯上に指頭状の押圧文を施文してある。７・１０・１１としたが、１０・１１はいずれも口縁部が欠けているため不明で、あるいは口唇部に指頭押圧文を有する類かも知れない。

Ⅴ－ｃ類土器……Ⅴ－ｂ類土器の口唇に竹管状の押圧文を施文してある。７８で口縁部文様帯が隆帯下位まで及ぶ。口唇部の竹管文は、口縁部に指頭押圧文を配する類の亜類かも知れない。

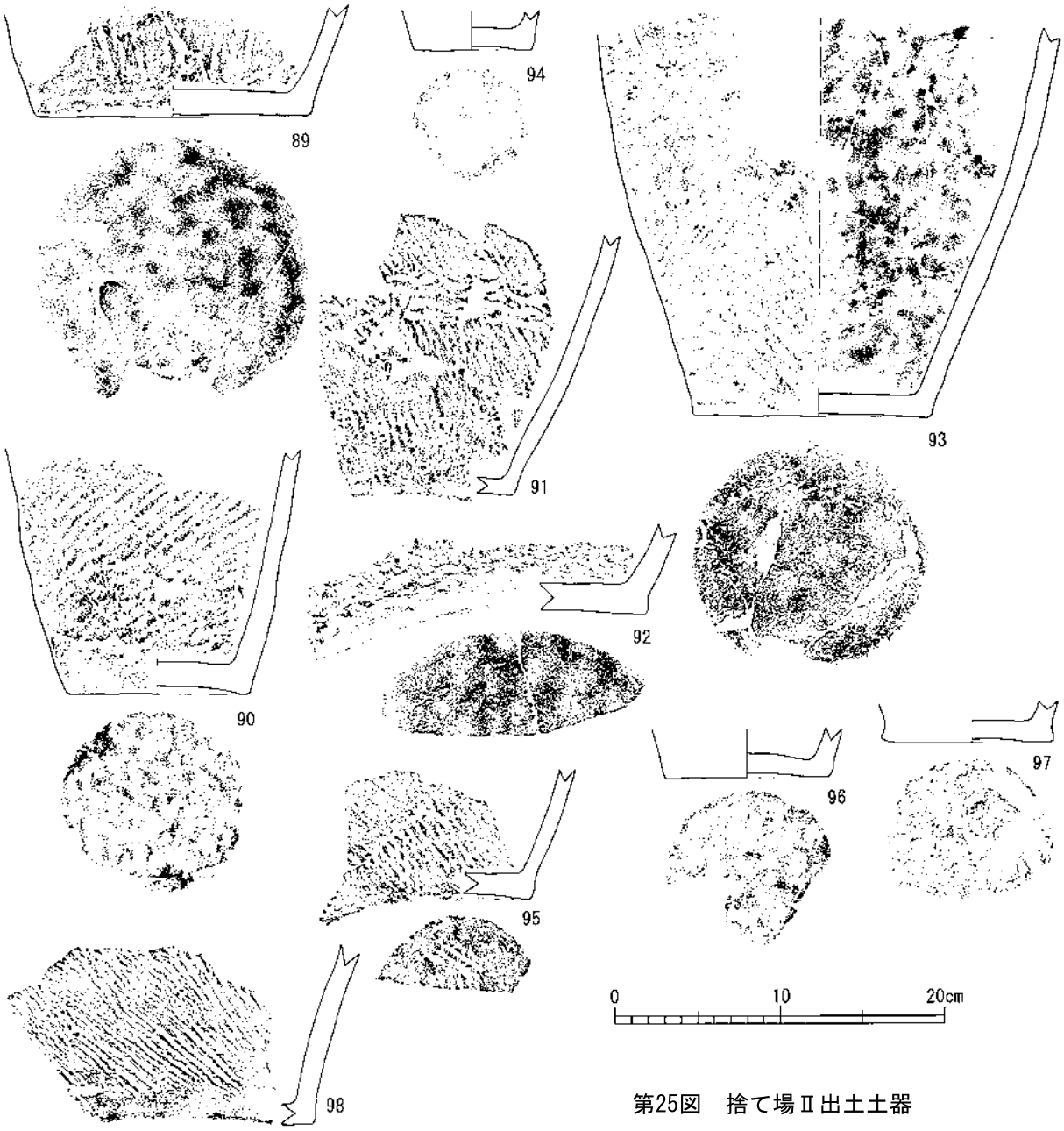
Ⅴ－ｄ類土器……隆帯上と隆帯の上・中・下位に指頭状の押圧文を施文してある。８２で他類に比較して薄手である。口縁部文様帯が隆帯下位まで及ぶ。

Ⅴ－ｅ類土器……Ⅴ－ｂ類土器の口唇に隆帯と同様の指頭状の押圧文を施文してある。８・９・８３・８４・８５・８６・８７・８８で、大型の土器に施される施文形態である。８８は口径５８．５㎝、推定底径１５㎝内外、

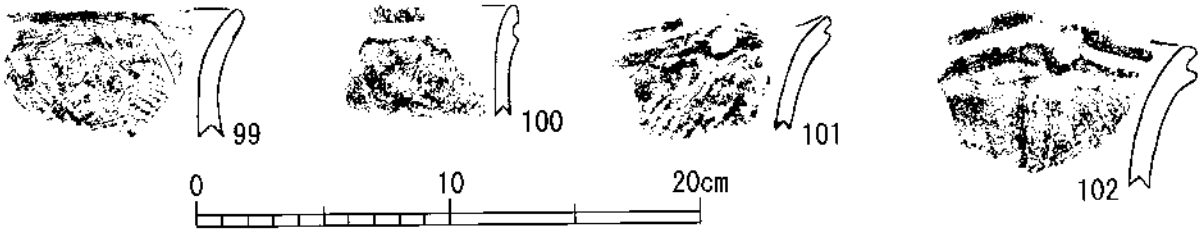


第23図　捨て場Ⅱ出土土器

第24図　捨て場Ⅲ出土土器



第25図　捨て場Ⅱ出土土器



第26図　捨て場Ⅱ出土土器

推定器高８５㎝内外、器厚１．２～１．５㎝を測る。２条の隆帯間には２条の指頭押圧文が互い違いに鋸歯状に配されているのが特徴で、その例は他には無い。２条目の隆帯のわずか下位まで口縁部文様帯を施すのは共通で、体央部、底縁部にも同様の絡条帯を施す例もある。８８は体上部、体央部、体下部に３条を施す。

○第Ⅵ類土器……１２４で、口唇部に指頭押圧文を施文し、口縁部に２条の撚糸圧痕を深めに廻らす。口縁上端部は擦消している。個体数は極めて少ない。

○第Ⅶ類土器……口縁部を擦消してある一連の土器。

Ⅶ－ａ類土器……大振りな縄文を地文としてある。９９・１４３で、大振りな縄文を施し、口縁上端を擦消してある。

Ⅶ－ｂ類土器……口縁に１条の沈線を廻らす。１００・１０１・１０２。

Ⅶ－ｃ類土器……つまみあげ状の隆帯を１条廻らす。１３９・１４０。

Ⅶ－ｄ類土器……口唇端を擦消し、斜位の撚糸を施文。１４１。

○第Ⅷ類土器……口縁部を磨き無文帯とし、体部は地文の上から細く浅い沈線を施文。

Ⅷ－ａ類土器……沈線による曲線文を施してある。１３０・１３１・１３６・１３７。

Ⅷ－ｂ類土器……沈線間を擦消してある。１３４・１３５。

Ⅷ－ｃ類土器……口縁から体上部まで擦消し、下部文様との境に押引き列点文を施す。１３２・１３３・１４２。

Ⅷ－ｄ類土器……体部に平行沈線を施し、間に凸部を作り出し擦消す。１３８。

○第Ⅸ類土器……１４４。器体全体を丁寧に磨き、平行沈線と沈線渦巻き文、Ｓ字状文を配す。口径１１．５㎝、体部最大径２７．５㎝、底径１２．５㎝、器高３６．０㎝、器厚０．７～１．１㎝、底部内面立ち上りに、体部と底部の貼り付けの際の指頭によるナデ付け痕が明瞭である。

○底部……第Ⅰ～Ⅸ類土器の底部であるとも考えられるし、小分類外の土器の底部かもしれないが、判断ができない。

底部Ⅹ類土器……底部外面が平滑に磨かれている。次のように小分類できる。

Ⅹ－ａ類土器……平底で体部の立ち上りが磨かれていて無文である。９０・９２・９８。

Ⅹ－ｂ類土器……揚底で、体部施文が立ち上り部まで施文してある。１６・８９・９１。

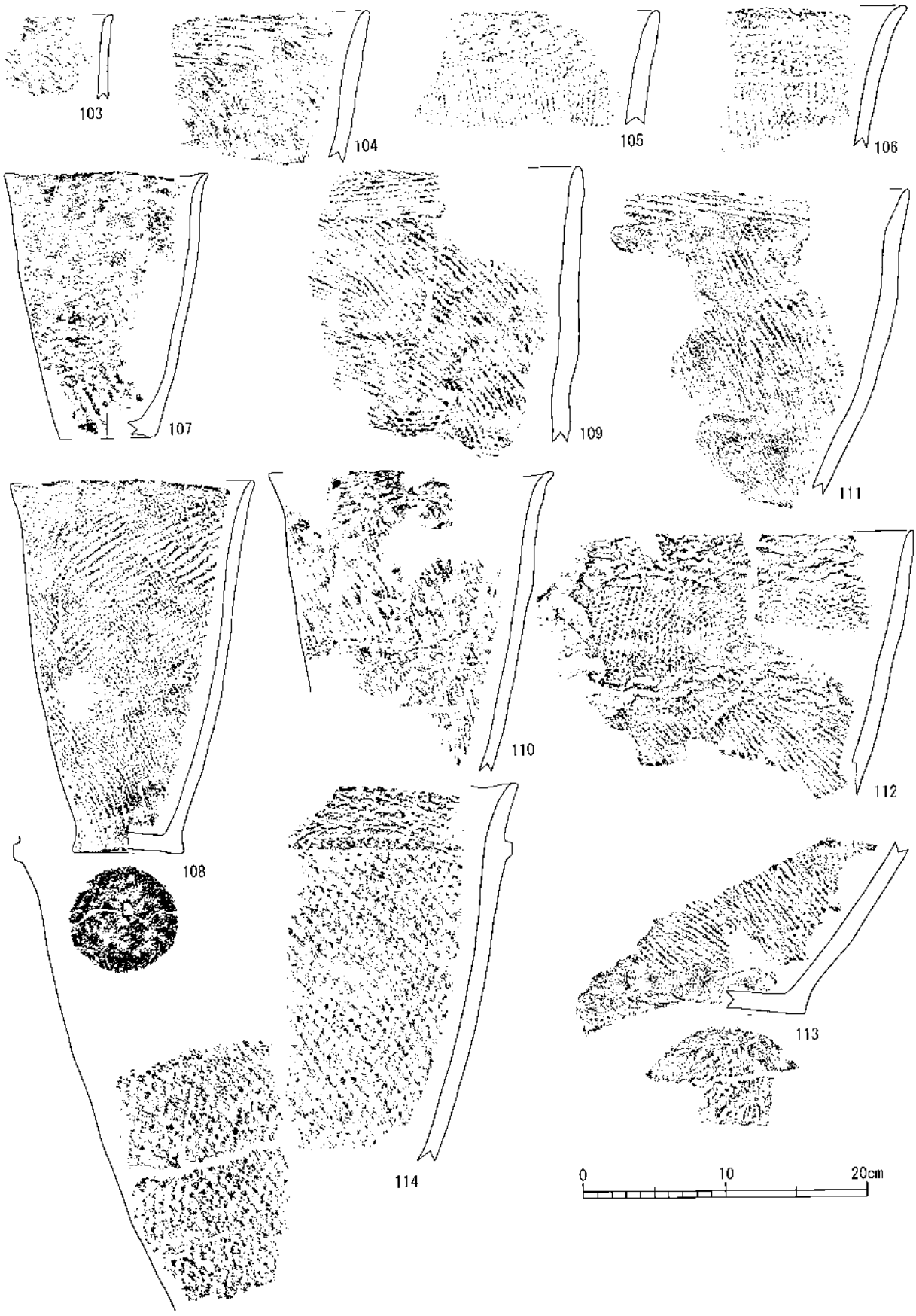
底部Ⅺ類土器……底部外面に文様が施文してある。次のように小分類できる。

Ⅺ－ａ類土器……平底で全面に施文してある。１２８。

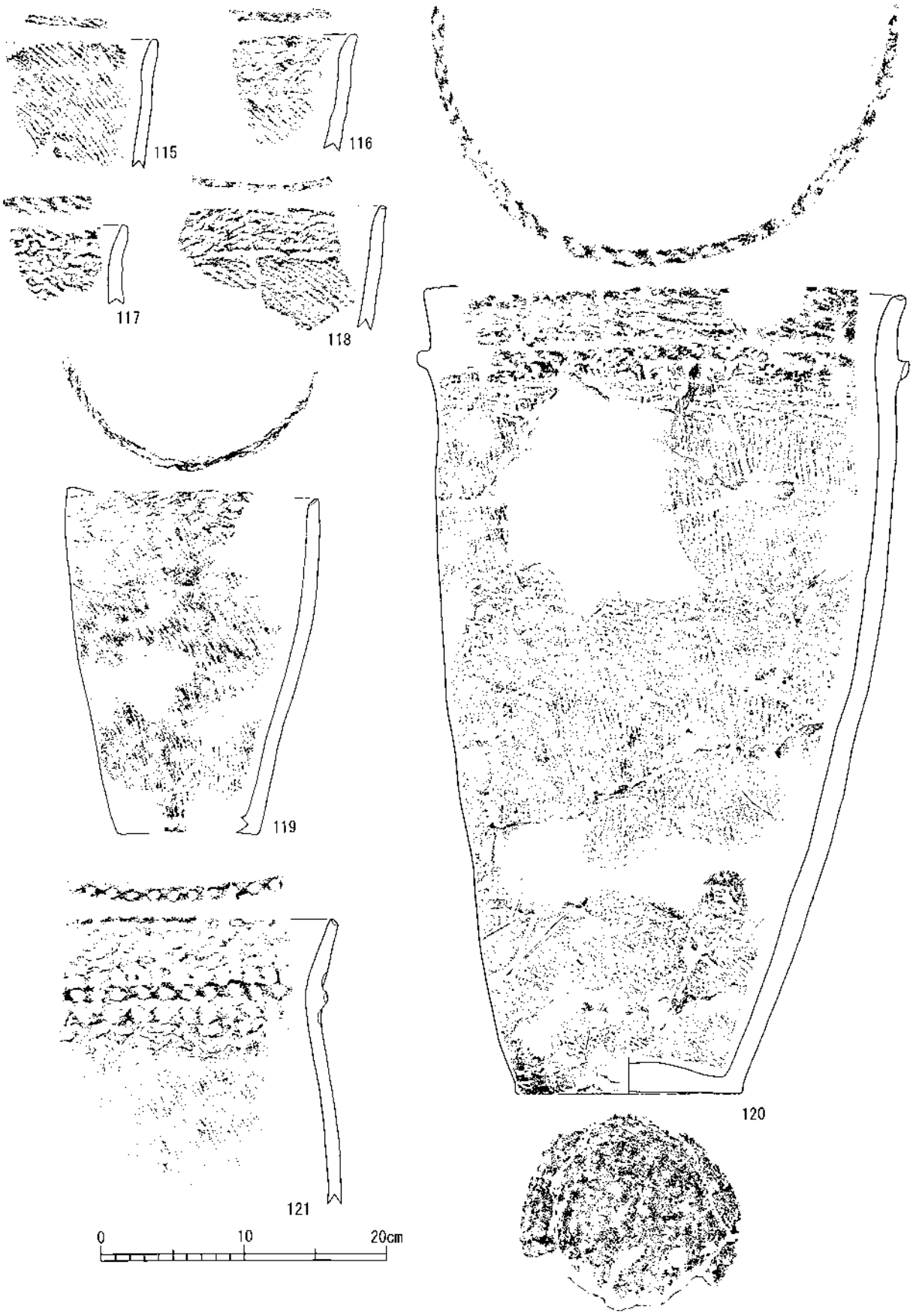
Ⅺ－ｂ類土器……揚底で全面に施文してある。９７・１２６・１２９。

Ⅺ－ｃ類土器……揚底で磨きをしているが、文様が残っている。９３・９４・９５・９６・１１３・１２５・１２７。

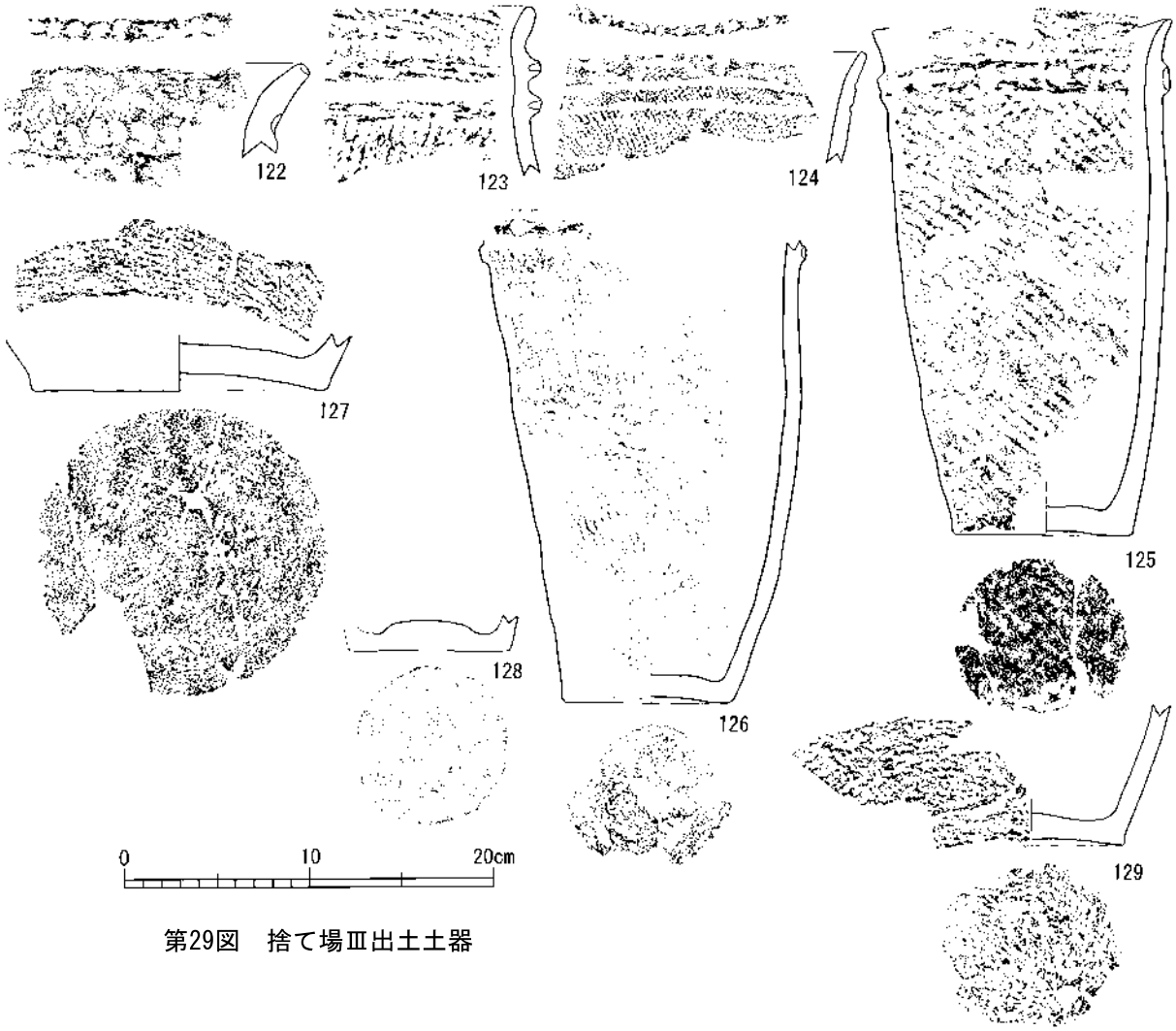
Ⅺ－ｄ類土器……揚底であるが、底縁に高台が廻っているように見える。３２。



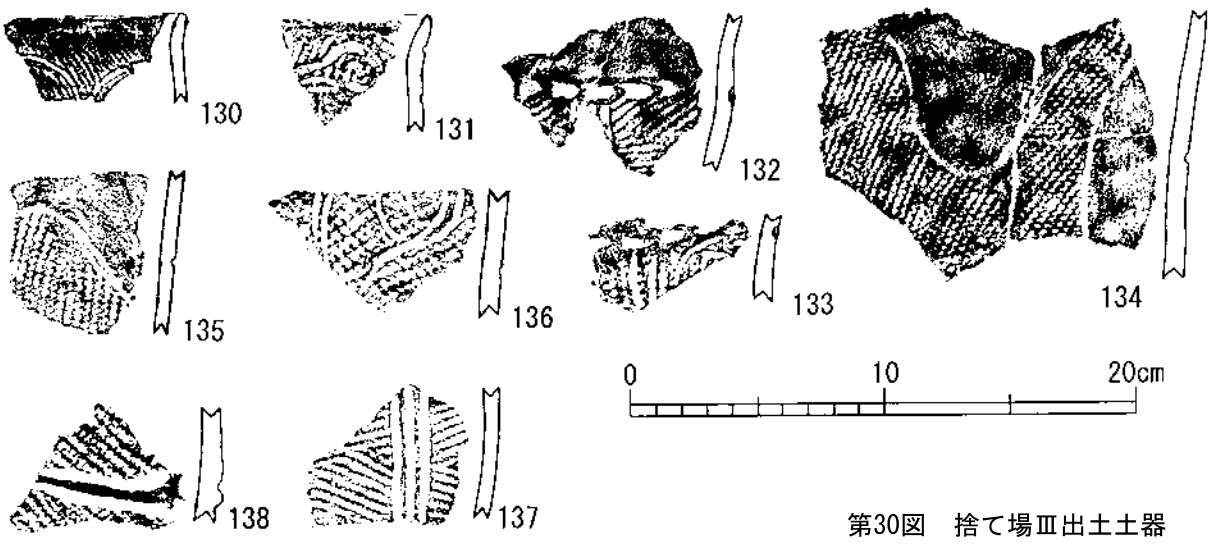
第27図　捨て場Ⅲ出土土器



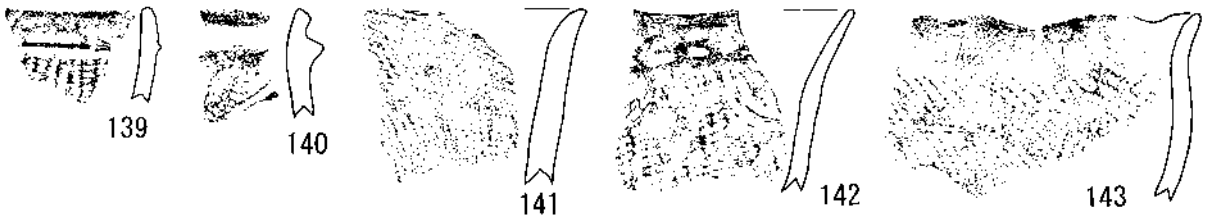
第28図　捨て場Ⅲ出土土器

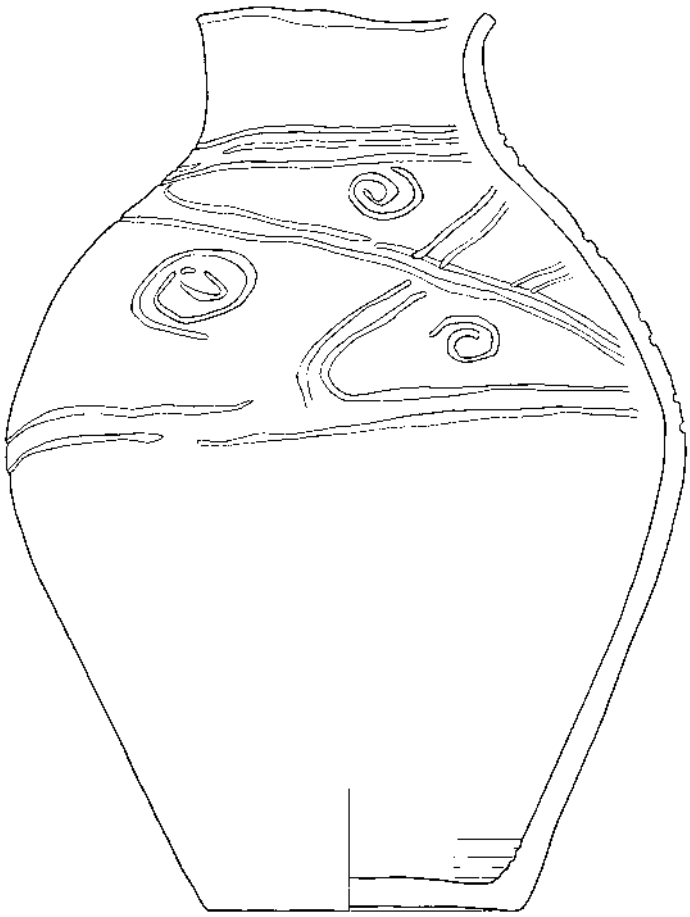


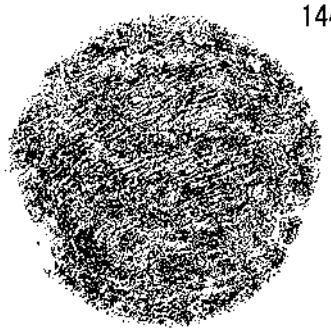
第29図　捨て場Ⅲ出土土器

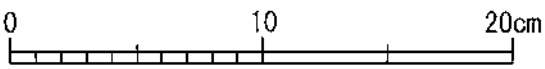


第30図　捨て場Ⅲ出土土器









第31図　Ⅰ区遺構外・捨て場外出土土器

（3）捨て場・遺構外出土石器（第３２～３７図、第3表、写真６７～８２）

本調査区より得られた石器類は、整理用コンテナ（５４×３４×１９ｃｍ）に換算して合計４箱である。出土位置毎の内訳は次のとおりである。

捨て場Ⅰ　石小刀３点、スクレイパー３点、半円状扁平打製石器１点、磨石・敲石１点

捨て場Ⅱ　石鏃６点、石槍２点、石錐１点、石小刀２４点、石篦３点、スクレイパー１７点、石核３点、石斧２点、半円状扁平打製石器７点、磨石・敲石５点、石皿１点

捨て場Ⅲ　石鏃３点、石槍１点、石小刀７点、石篦２点、スクレイパー１２点、石核６点、半円状扁平打製石器４点

捨て場外　石鏃１点、石槍１点、石小刀７点、石篦３点、スクレイパー６点、半円状扁平打製石器１点、敲石１点

代表的なものを第３２～３７図に掲げ、器種毎に若干の説明を加える。計測値などは表にまとめた（第3表）。

石鏃（１～１０）　石鏃は１０点ある。すべて頁岩製の無茎石鏃である。基辺の形状から、平基（1～3）、凹基（4～8）、円基（9・１０）に分けられる。8は未成品。

石槍（１１～１４）　４点ある。すべて頁岩製である。１４はめのう質の欠損品。

石錐（１５）　図示したもの１点のみである。頁岩製の破損したスクレイパーの転用かあるいは併用したものであり、先端部に回転による光沢がみられる。

石小刀（石匙）（１６～３１）　石小刀は４１点ある。大半が珪質頁岩製である。縦型（１６～２８）と横型（２９～３１）に分けられ、前者には片面加工と両面加工（１６・１９）のものがある。比較的扁平な刃部のものが多いが、掻器状に厚くなるもの（３１・３３）もある。２４は赤色の珪質頁岩製で、比較的大型であり、丁寧な二次加工が施されている。

石篦（３２～３７）　石篦は8点ある。すべて頁岩製である。片面加工（３２・３３）と両面加工（３４～３７）に分けられる。３７は篦状とは言い難いが石篦に含めた。

スクレイパー（３８～４４）　スクレイパーは３８点ある。大半が珪質頁岩製である。剥片の側縁に簡単な二次加工を施したものが多い。４４は、側縁が一部欠損している。

石核（４５）　石核は9点ある。頁岩を母岩とし、剥離が進んだ残核である。

石斧（４６・４７）　図示したもの２点のみである。４６は碧玉製の打製石斧で、入念な剥離調整が施され撥形を呈している。４７は黒色片岩製の磨製石斧。全面を研磨した撥形を呈する両刃のものである。頭部に敲打痕がある。

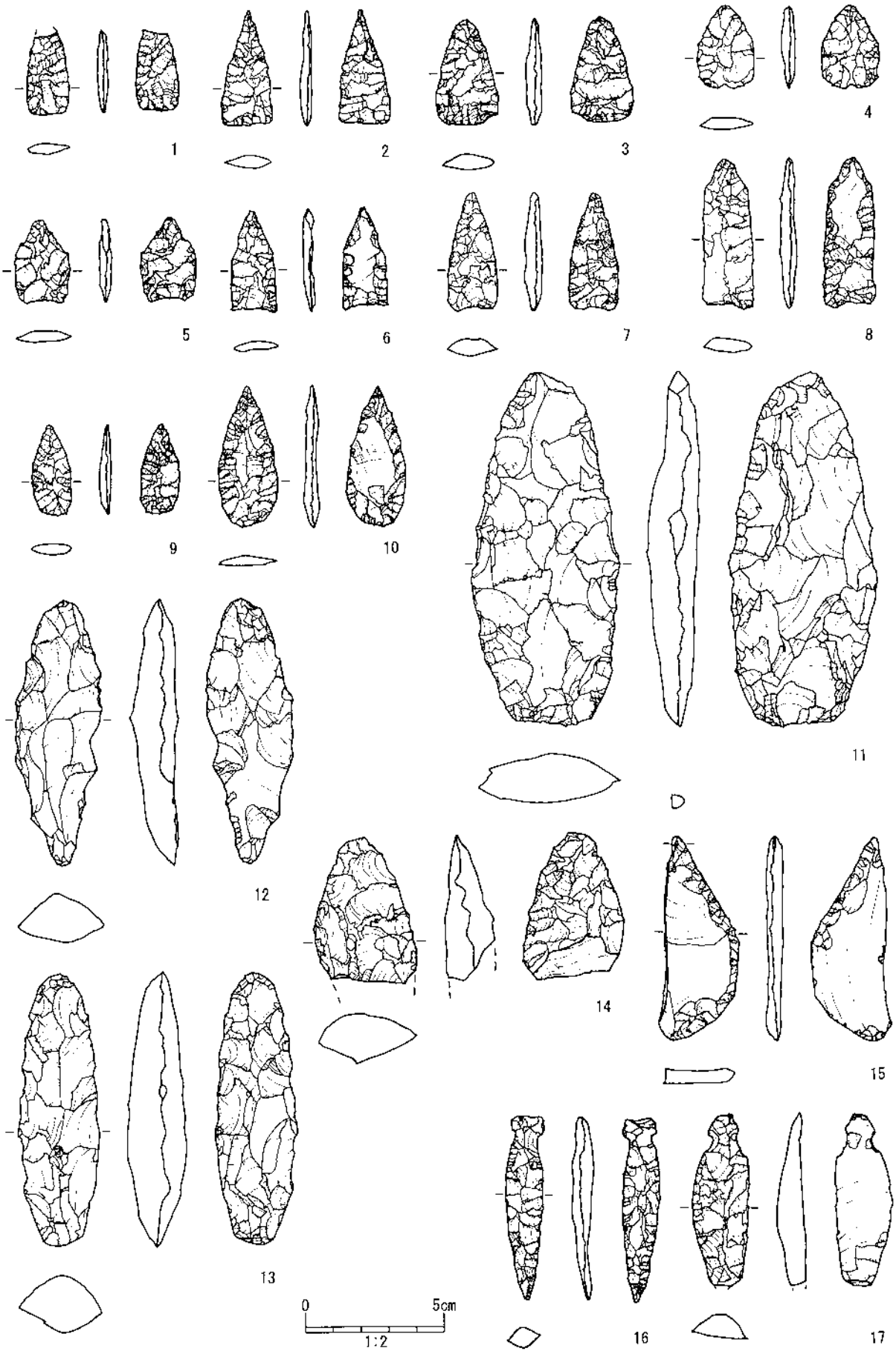
半円状扁平打製石器（４８～５５）　半円状扁平打製石器は１３点ある。大半は安山岩の扁平な礫を素材とし、周辺を打ち欠いてつくられている。

磨石・敲石（５６～５９）　磨石ないし敲石は7点ある。石材は安山岩と砂岩である。

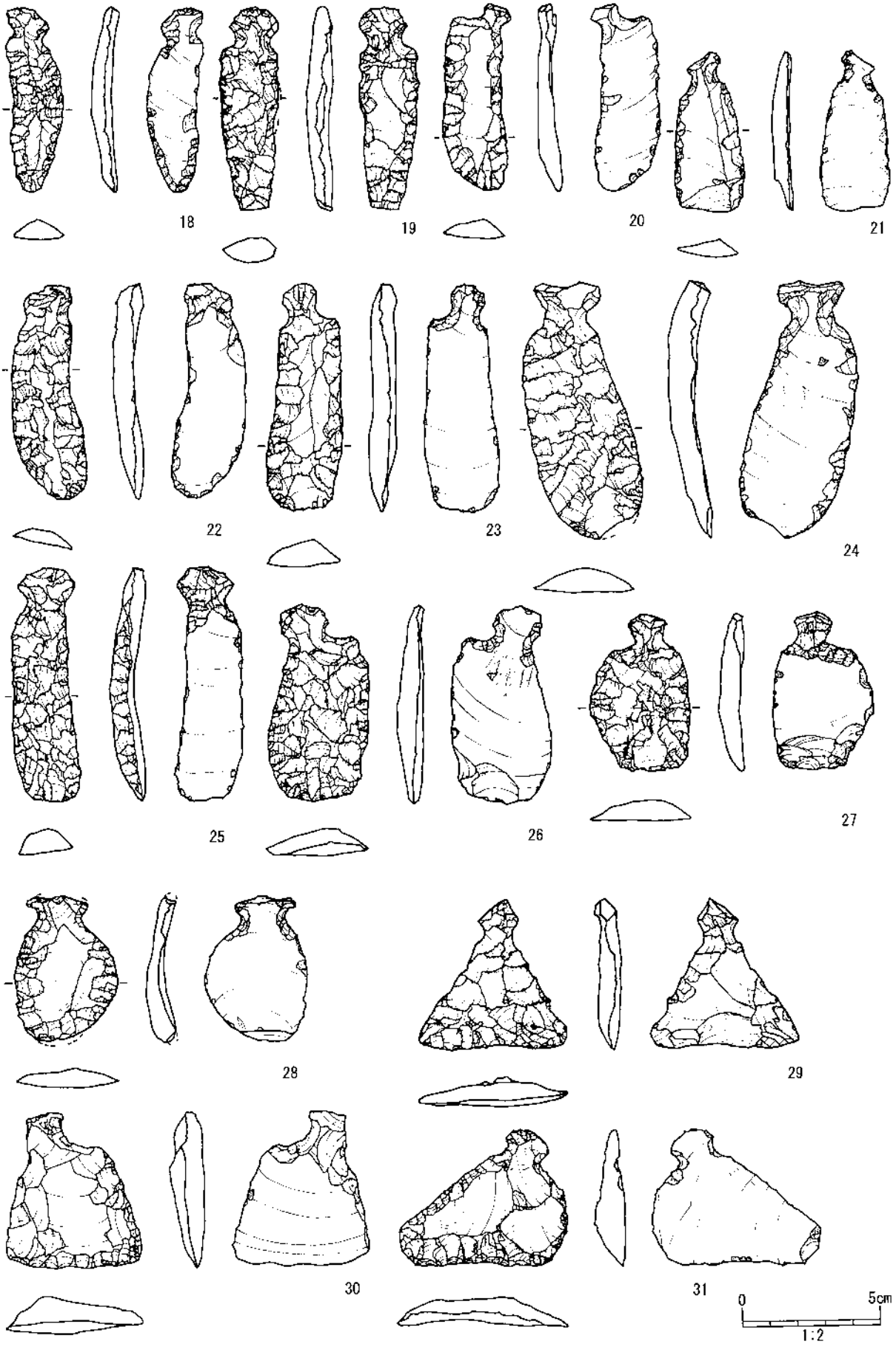
石皿（６０）　図示した１点のみである。凝灰岩製で中央に磨りによる凹みがみられる。

（4）捨て場出土石製品・有孔石（第３８図、第3表、写真８３）

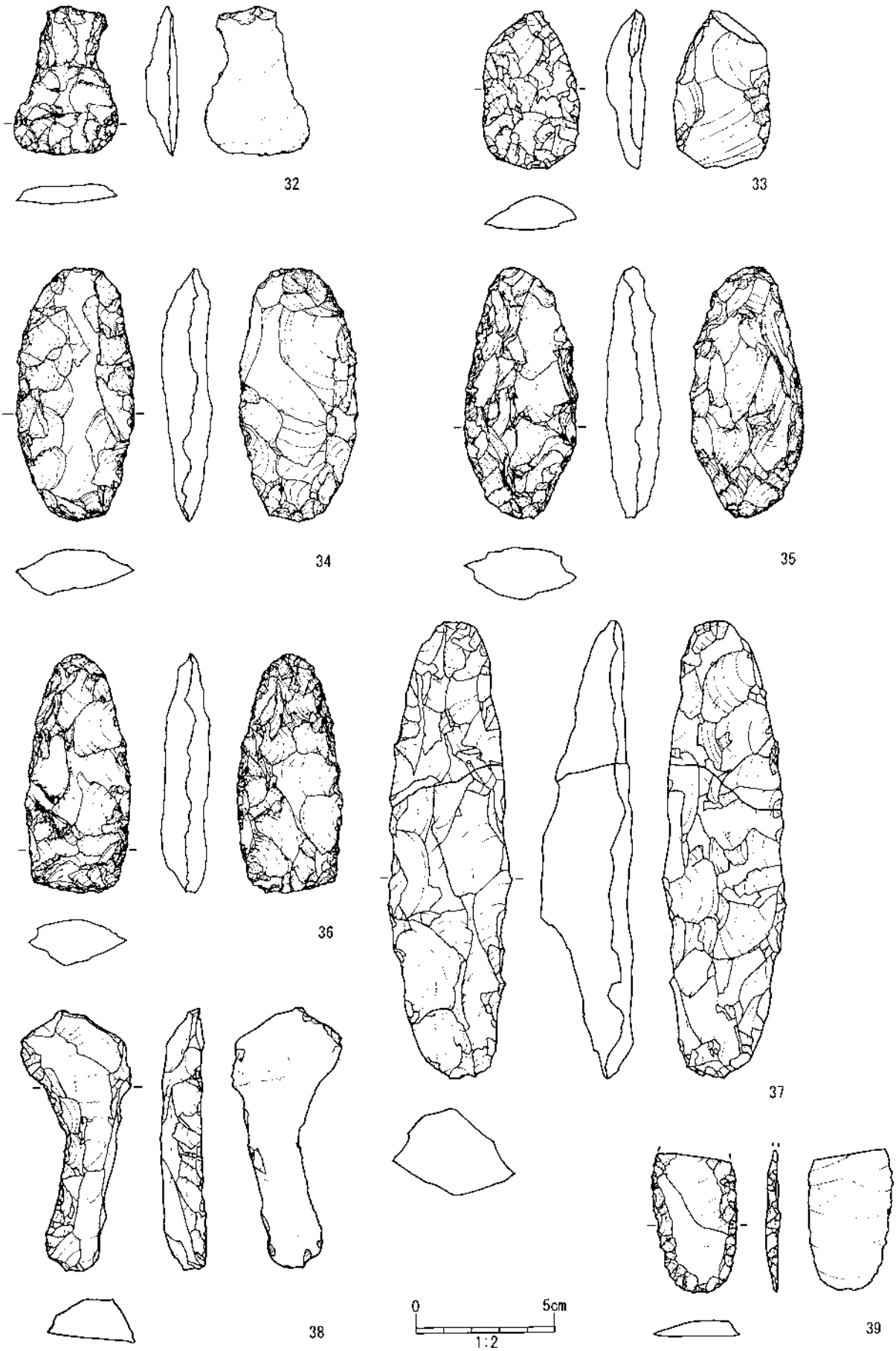
１・２は有孔石製品で、上下２方向から穿孔されている。3は有孔の自然石。（嶋影）



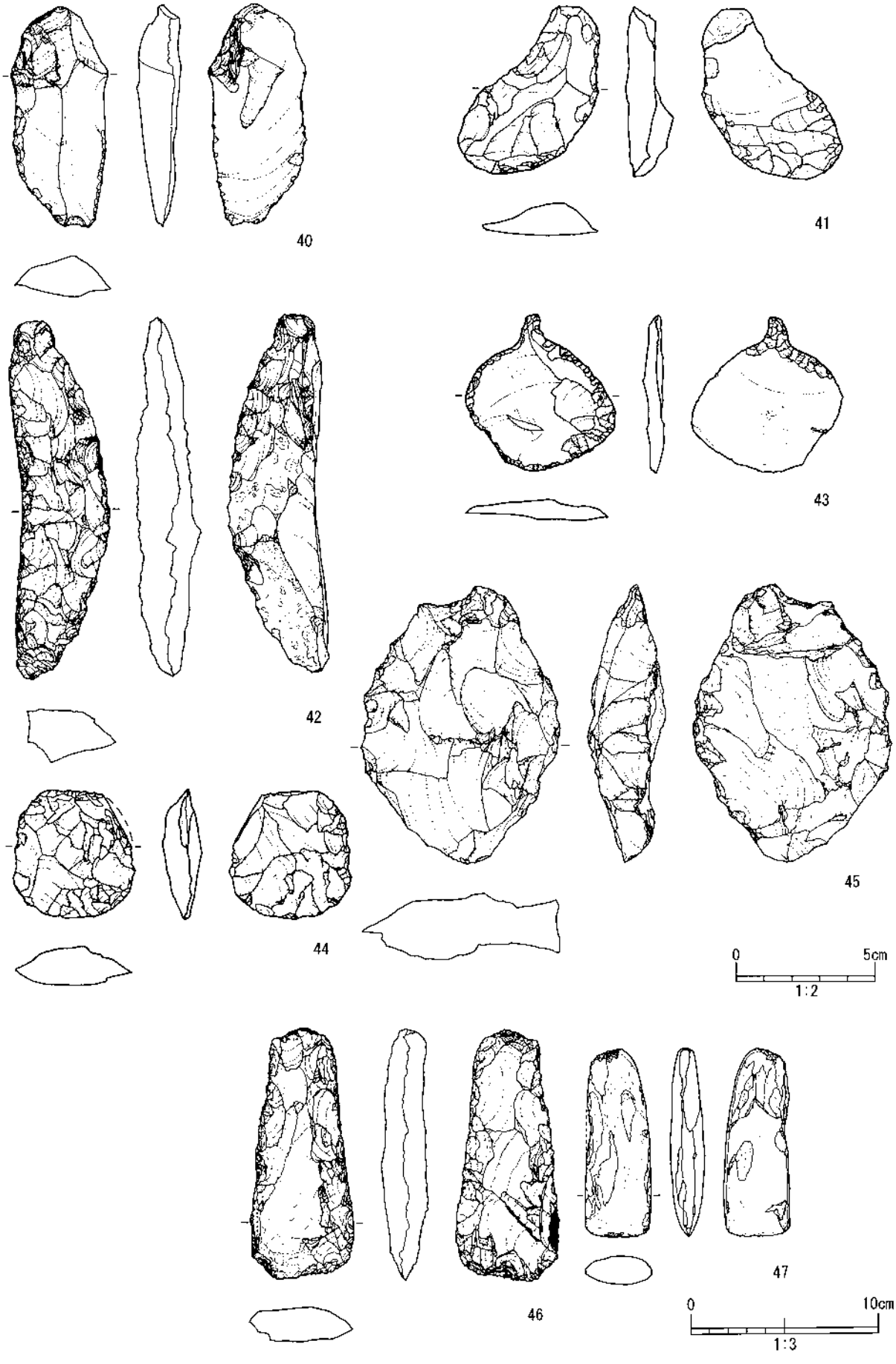
第32図　捨て場・遺構外出土石器



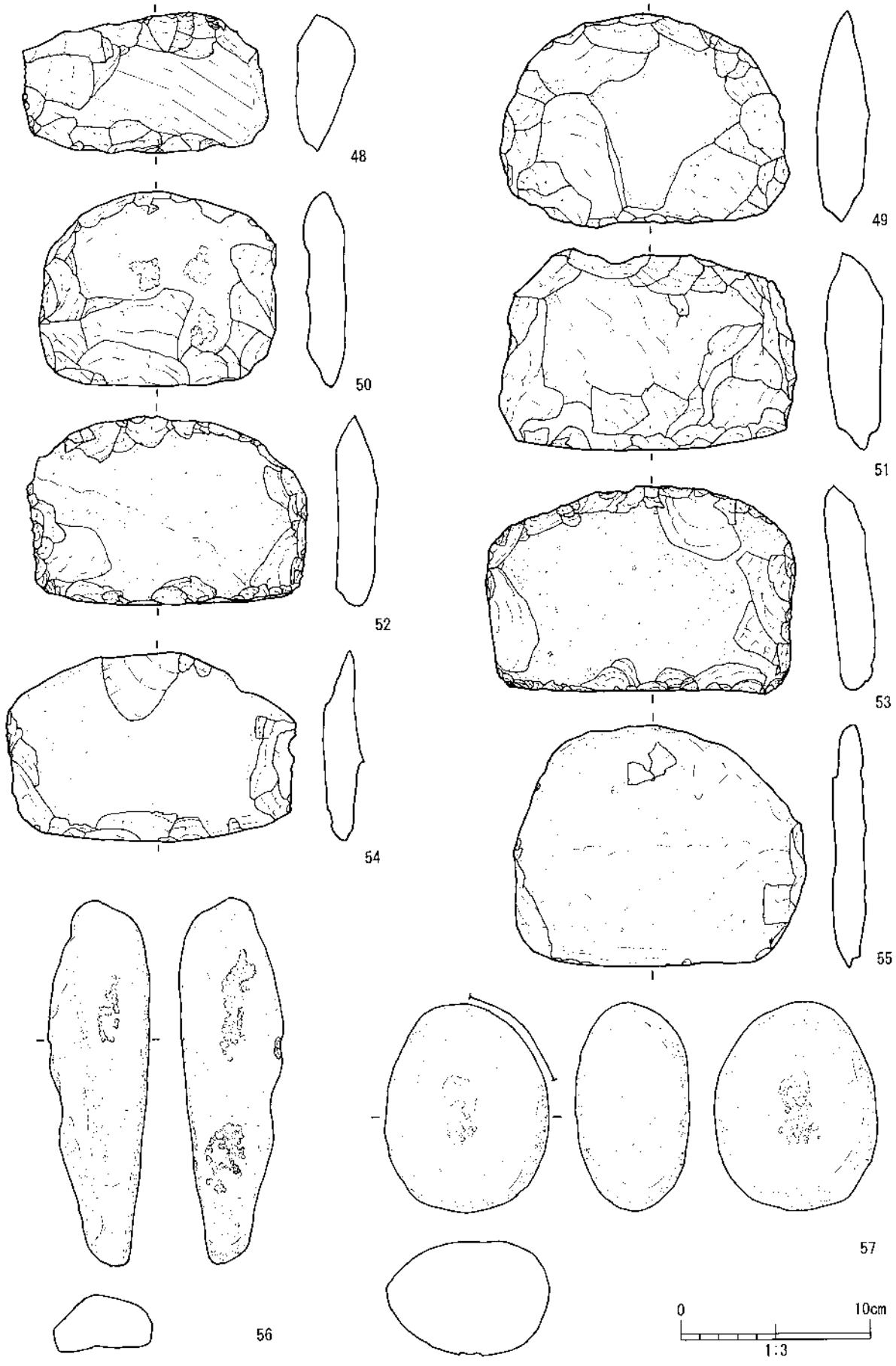
第33図　捨て場・遺構外出土石器



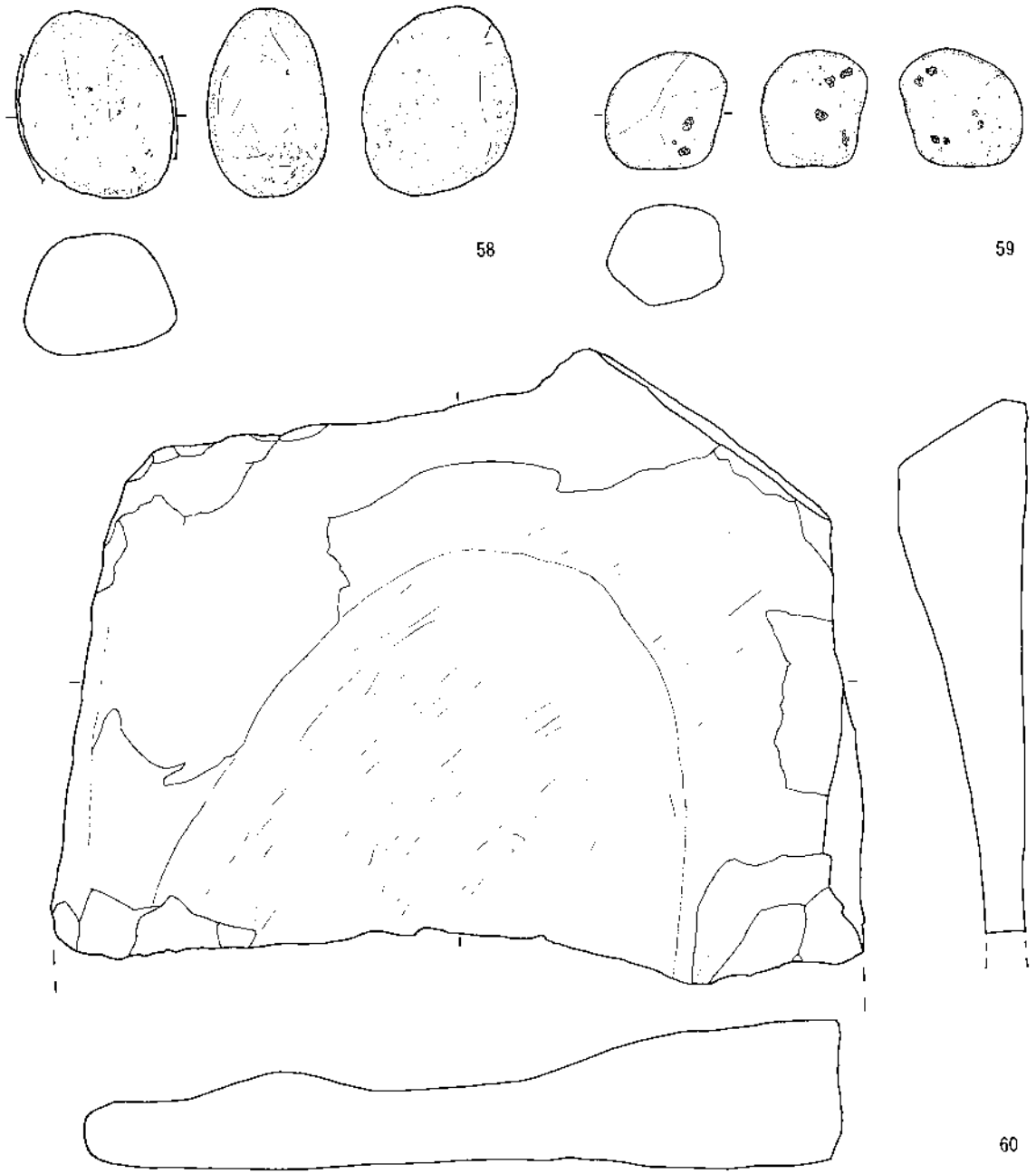
第34図　捨て場・遺構外出土石器



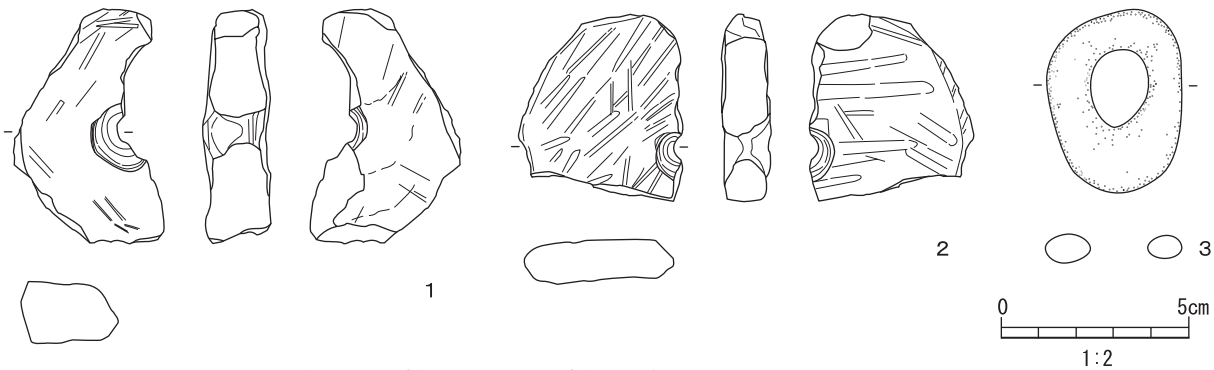
第35図　捨て場・遺構外出土石器



第36図　捨て場・遺構外出土石器



第37図　捨て場・遺構外出土石器



第38図　捨て場出土石製品・有孔石

挿図番号	写真番号	グリッド	捨て場	取り上げ番号	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	層位	標高(m)	備考
32－1	67	MK39	Ⅱ		石鏃	(28.8)	15.2	4.0	1.9	頁岩	包含層		先端部欠損
2	67	MK39	Ⅱ		石鏃	40.5	18.2	4.4	2.7	頁岩	包含層		基部一部欠損
3	67	MI41	Ⅲ		石鏃	37.3	22.4	5.4	4.1	頁岩	包含層		基部一部欠損
4	67	MJ37･38	外		石鏃	29.1	20.6	4.7	2.9	頁岩	Ⅰ		
5	67	MH40･41	Ⅲ	土35石2	石鏃	29.3	19.9	5.0	3.0	頁岩	包含層		
6	67	MK39	Ⅱ	土15	石鏃	35.6	16.2	3.8	2.4	頁岩	包含層	115.705	
7	67	MI41	Ⅲ		石鏃	41.2	17.9	6.2	4.2	頁岩	包含層		
8	67	MK39	Ⅱ		石鏃	54.0	18.5	5.8	6.0	頁岩	包含層		未成品
9	67	MK39	Ⅱ		石鏃	31.9	13.9	3.9	1.6	頁岩	包含層		
10	67	ML40	Ⅱ		石鏃	50.4	21.0	5.3	4.7	頁岩	包含層		
11	68	MH41	Ⅲ	石16	石槍	125.6	53.9	18.2	113.7	頁岩	包含層		
12	67	ML39	Ⅱ		石槍	93.7	30.2	16.6	39.0	頁岩	包含層		未成品､スクレイパーの可能性あり
13	67	MH40	Ⅲ	石15	石槍	97.1	29.3	19.8	53.0	頁岩	包含層	117.713	
14	67	MK39	Ⅱ		石槍	(52.6)	35.0	16.2	25.3	頁岩	包含層		
15	72	MJ39	外		石錐	72.8	28.0	6.0	12.6	頁岩	包含層		
16	68	MJ39	外		石小刀（石匙）	65.4	13.1	6.2	6.0	頁岩	包含層		石錐の可能性あり
17	70	MK37	Ⅱ		石小刀（石匙）	(61.8)	21.5	9.7	11.3	頁岩	包含層		下端部欠損
33－18	70	MK39	Ⅱ		石小刀（石匙）	66.0	19.5	6.9	9.9	頁岩	包含層		
19	70	MK39	Ⅱ		石小刀（石匙）	(72.8)	21.0	8.4	14.9	頁岩	包含層		下端部欠損
20	70	MK39	Ⅱ		石小刀（石匙）	66.9	22.5	7.1	12.2	頁岩	包含層		下端部一部欠損
21	69	MH40	外		石小刀（石匙）	57.4	25.2	7.3	9.7	頁岩	包含層		
22	70	MK37	Ⅱ	石5	石小刀（石匙）	76.7	24.8	9.0	16.2	頁岩	包含層	117.895	
23	70	MK37	Ⅱ		石小刀（石匙）	81.4	26.7	9.4	20.2	頁岩	包含層		
24	70	MJ39	Ⅱ		石小刀（石匙）	92.8	36.0	10.2	43.6	頁岩	包含層	117.273	下端部一部欠損
25	69	MH40･41	Ⅲ	土46	石小刀（石匙）	83.2	23.7	10.0	24.0	頁岩	包含層	116.422	
26	70	MK39	Ⅱ		石小刀（石匙）	69.9	36.3	9.7	25.7	頁岩	包含層		
27	70	MK37	Ⅱ		石小刀（石匙）	56.1	36.0	8.3	17.8	頁岩	包含層		
28	70	ML38	Ⅱ		石小刀（石匙）	(52.3)	37.2	8.8	15.2	頁岩	包含層		下端部欠損
29	71	MK37	Ⅱ	石9	石小刀（石匙）	53.4	52.9	8.2	15.9	頁岩	包含層	118.160	
30	71	MM38	Ⅰ		石小刀（石匙）	56.1	48.2	11.3	27.4	頁岩	包含層	115.822	
31	71	MK39	Ⅱ	土15石1	石小刀（石匙）	49.0	60.2	8.9	19.7	頁岩	包含層		
34－32	72	MI41	Ⅲ		石篦	52.7	36.5	10.4	16.1	頁岩	包含層		
33	75	MK42	外		石篦	55.7	34.9	11.7	23.5	頁岩	包含層		
34	76	MJ39	Ⅱ		石篦	90.2	41.8	15.0	64.3	頁岩	包含層		
35	76	MK39	Ⅱ	石4	石篦	90.0	40.7	19.7	70.1	頁岩	包含層	115.017	
36	67	MH40	Ⅲ		石篦	85.3	36.9	15.8	55.9	頁岩	包含層		
37	67	MK39	Ⅱ		石篦	163	43.6	32.0	194.8	頁岩	包含層		
38	72	MJ39	Ⅱ		サイドスクレイパー	92.5	39.0	14.9	41.7	頁岩	包含層		
39	72	MJ39	Ⅱ		スクレイパー	(50.2)	30.0	4.9	9.3	頁岩	包含層		
35－40	72	MK39	Ⅱ	土8石2	サイドスクレイパー	78.3	34.6	15.1	37.3	頁岩	包含層	116.158	
41	73	MI41	Ⅱ	土24	サイドスクレイパー	62.1	49.9	14.3	34.5	頁岩	包含層		
42	78	MI41	Ⅲ		サイドスクレイパー	18.3	31.8	23.3	83.0	頁岩	包含層		
43	75	MH40･41	Ⅲ	石8	スクレイパー	55.2	54.1	6.0	15.2	頁岩	包含層	116.683	側縁一部欠損
44	73	ML38	Ⅱ		エンドスクレイパー	45.7	43.5	14.0	27.1	頁岩	包含層		側縁一部欠損
45	77	MI41	Ⅲ		石核	99.3	70.8	27.2	165.6	頁岩	包含層		
46	76	MJ39	外	石2	石斧	133.7	56.2	24.3	216.6	碧玉	包含層	118.166	
47	76	MK37	Ⅱ	石1	石斧	100.6	35.3	17.9	105.2	黒色片岩	包含層	117.534	
36－48	76	MK39	Ⅱ	石1	半円状扁平打製石器	72.4	131.0	33.1	318.7	緑色凝灰岩	包含層	115.406	
49	79	ML37	Ⅱ	石1	半円状扁平打製石器	108.8	154.6	26.6	620	安山岩	包含層	116.939	
50	79	MK39	Ⅱ	土29石1	半円状扁平打製石器	101.7	125.7	20.2	374.3	安山岩	包含層	114.396	表面凹みあり
51	79	MK39	Ⅱ	石5	半円状扁平打製石器	103.8	157	31.0	730	安山岩	包含層	114.135	裏面線状痕あり
52	80	ML39	Ⅱ	石2	半円状扁平打製石器	98.9	149.2	22.0	630	安山岩	包含層	114.034	
53	80	MI41	Ⅲ		半円状扁平打製石器	108.0	166	23.8	545	安山岩	包含層	114.666	
54	80	MM39	Ⅰ	石2	半円状扁平打製石器	98.9	154.2	21.8	352.0	安山岩	包含層	113.408	
55	80	MH41	Ⅲ	石1	半円状扁平打製石器	126.1	154.5	18.3	500	頁岩	包含層	115.560	
56	81	MM37	Ⅰ	土7石1	敲石	195	53.8	34.5	386.8	安山岩	包含層	115.882	
57	81	ML39	Ⅱ	石3	磨石・敲石	109.2	86.4	60.9	710	安山岩	包含層	114.439	
37－58	81	ML40	Ⅱ	石1	磨石	85.2	67.9	54.1	318.9	安山岩	包含層	113.276	
59	81	MM39	Ⅰ		磨石	51.4	51.7	45.5	157.4	砂岩	包含層	113.767	
60	82	MK39	Ⅱ		石皿	(284)	372	65.0	5,590	凝灰岩	包含層		
38－1	83	MK39	Ⅱ		有孔石製品	(49.7)	(43.9)	12.2	27.7	泥岩	包含層		
2	83	MJ39	Ⅱ		有孔石製品	62.5	(36.6)	17.1	32.8	泥岩	包含層	117.034	
3	83	MH41	Ⅲ		有孔石	48.4	35.5	10.5	14.9	不明	包含層	116.432	

第３表　掲載石器・石製品・有孔石一覧（Ⅰ区捨て場・遺構外）

２、沢部の状況と出土遺物（第３９～４１図、写真３・８８～９２）

調査区内、ＭＢ４４区～ＭＨ４４・４３区にかけて湧水を源とする小沢が西流している。現在の水源はＭＡ４４区に存在するが、かつてはＬＳ４６付近から湧いていたと地域の古老が記憶していて、草刈り等の手入れをしなくなってから湧水点が下降してきているという。小沢流路に幅２ｍ（上流部）から３ｍ（下流部）のトレンチを設定して調査を実施した。上流部の沢基底標高（ＭＢ４４区）が１１３．６８６ｍ、中流部の沢基底標高（ＭＤ４４区）が１１２．８４７ｍ、下流部の沢基底標高（ＭＧ４３区）が１１２．１１６ｍを測り、１．５７０ｍの落差となっている。

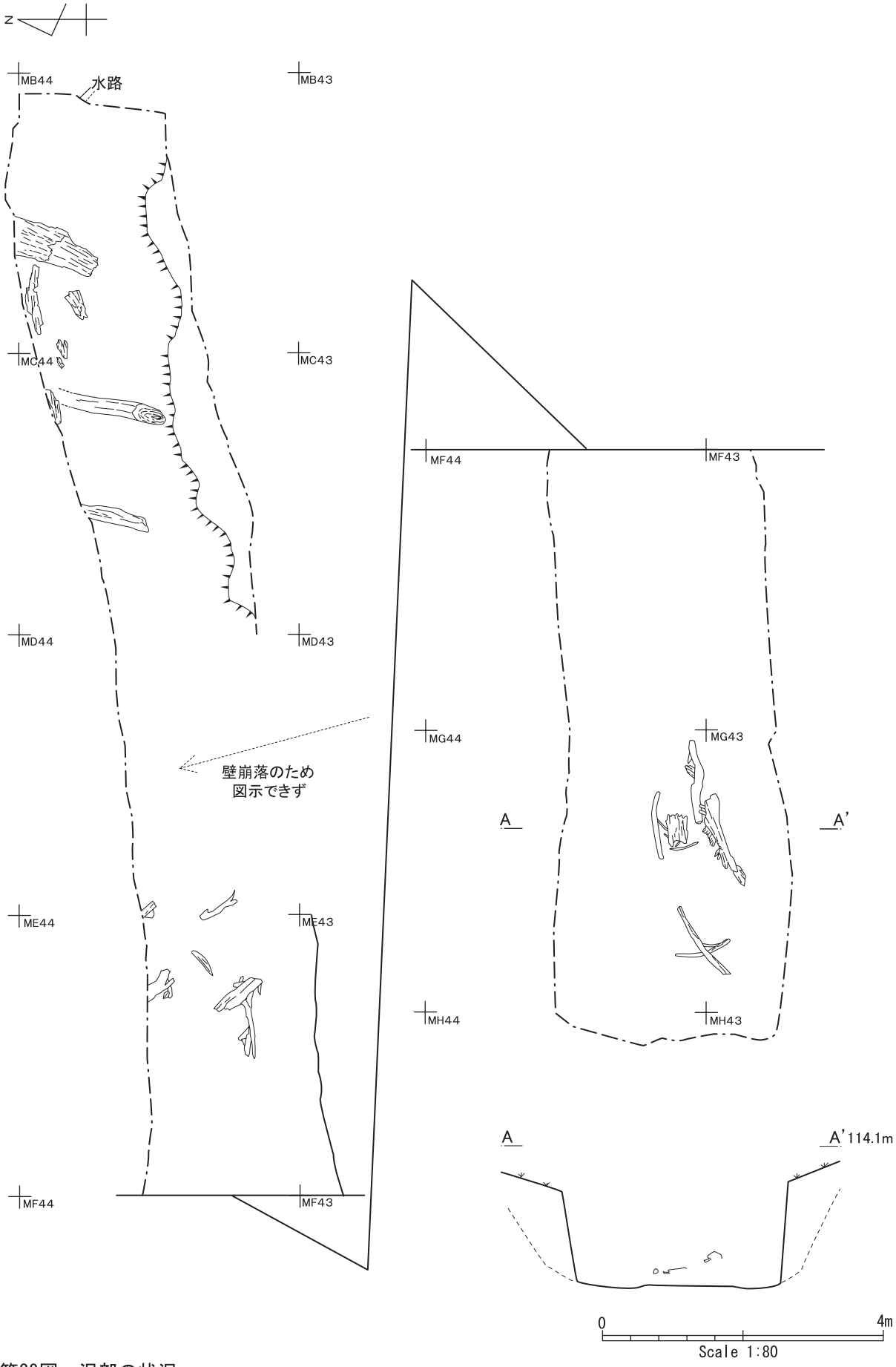
ＭＢ４４区とＭＣ４４区に３本の丸太材が沢に直交して検出され、それらは基底層である砂粒混じりの黄色粘土層に、全体を押し込んで設置してある。真中にある丸太材の一端は削った道具痕が明瞭で、それは石斧による作業と考えられる状況を呈している。水流を浅く堰き止めるための施設であろう。同区の南側に沢斜面の下端が検出されたことから、その北側がもっとも古い時期の流路であり、３本の堰き止め丸太材は沢水を活用したもっとも古い生活時のものとみていいだろう。

調査区の中流部（ＭＥ４４区）と下流部（ＭＧ４３・４４区）にも枝木が寄り集った箇所が見られたが、これらには人工的な工作痕跡は認められなかった。層位は基底層上位の粘質黒色土上位にあって、ＭＧ４３・４４区の南側には大振りな枝材が流路と並行して据えられているように見受けられ、これらは沢水に何らかの手を加えたものと考えられる。

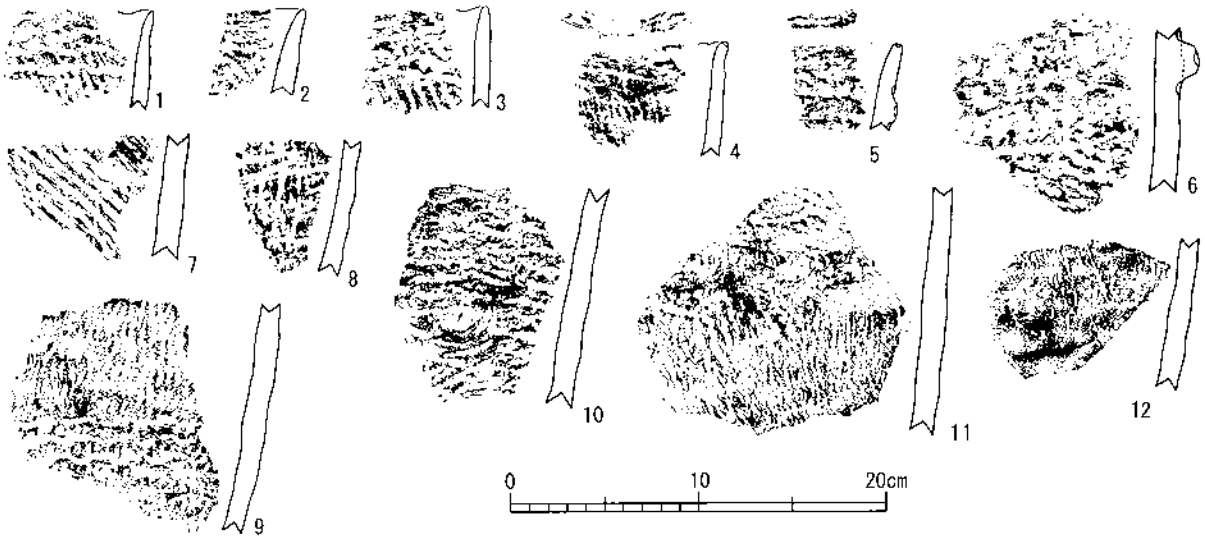
沢部からの出土土器は全部で７６片あるが、基底上の粘質黒色土層からは出土せず、その上位の南側斜面からの流れ込み土である暗褐色土層中からの出土で、斜面に捨てられた土器片と考えられる。第４０図はその内の１２片を図示したもので、４はＭＤ４４区の基底粘土層直上、他はＭＦ４３区南側からの出土で、３は１１２．２３３ｍ、８は１１２．２０８ｍ、１０は１１２．２０９ｍ、１１は１１２．２４６ｍ、１２は１１２．４２５ｍの標高地点から出土した。

捨て場出土土器の小分類に当てはめると、１・２・３はⅢ－ａ類、４はⅢ－ｂ類、５はⅣ－ｅ類、６は隆帯が１条か２条か不明で、隆帯上とその上・下位に指頭押圧文がある。

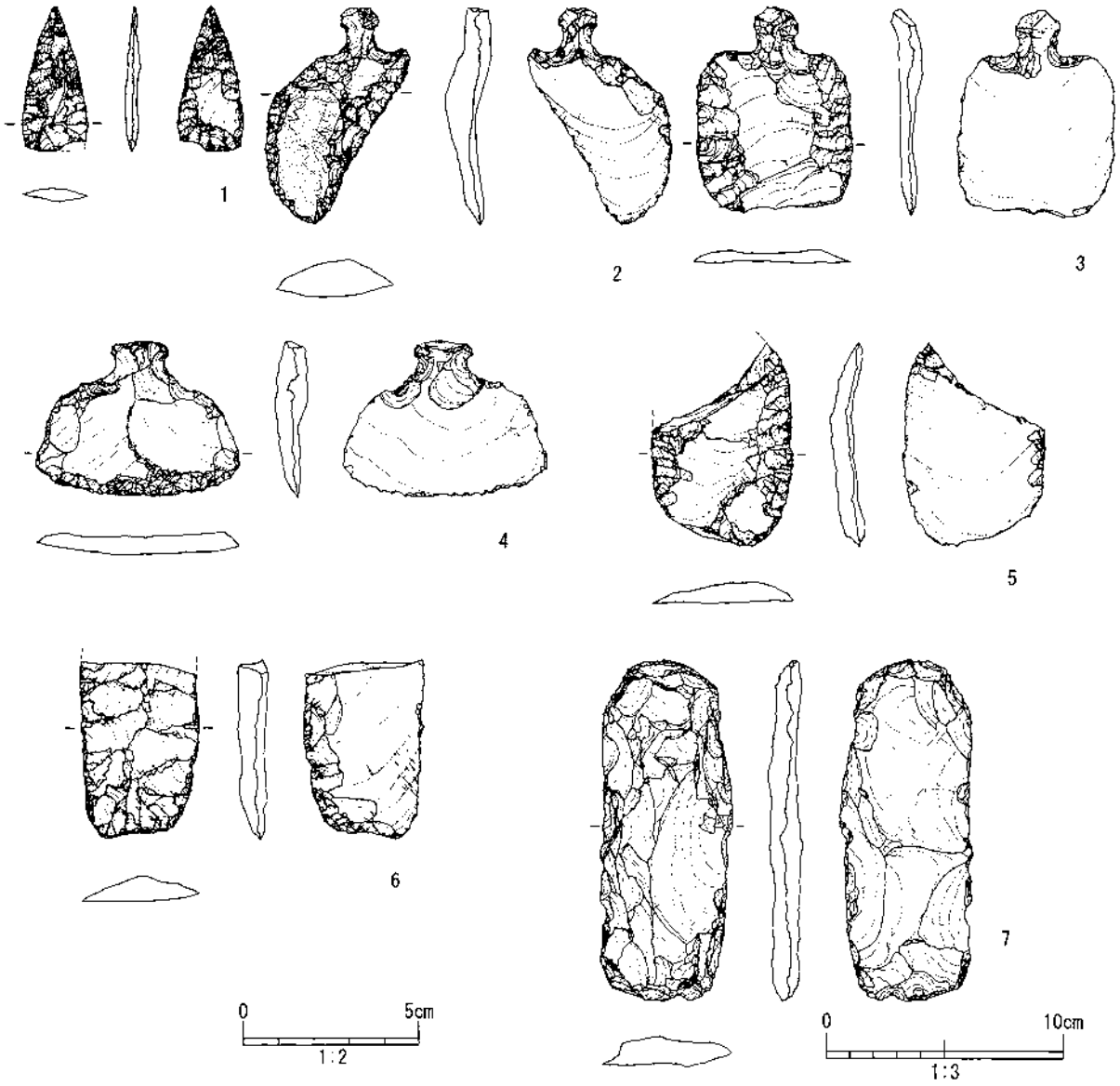
石器は、石鏃１点、石小刀３点、スクレイパー３点、打製石斧１点、石核１点、剥片１２点の総数２１点が出土した。定形石器はすべてＭＦ４３から出土し、第４１図に図示した７点である。図示した石器はすべて頁岩製である。１は、基底粘土層直上から出土した無茎平基石鏃である。基部の一部が欠損している。２は、石小刀である。縦型で表面に自然面が残存している。３は、石小刀である。正方形を呈し両側面に刃部を持つ。４は、石小刀である。横型で石器下側の刃部全体に使用による微細な剥離を確認できる。５は、スクレイパーである。石器上部が裏面から表面にむけて折損しており、縦型の石小刀の可能性もある。６は、スクレイパーである。石器上部が表面から裏面にむけて折損している。７は、基底粘土層直上から出土した打製石斧である。薄手の石斧で、石器ほぼ全体に、沢に埋没していた影響と思われる鉄分による赤錆が付着している。　（滝内）


N
MB44
水路
MB43
MC44
MC43
MD44
MD43
壁崩落のため
図示できず
ME44
ME43
MF44
MF43
MF44
MF43
MG44
MG43
A
A'
MH44
MH43
A
A'114.1m
0
4m
Scale 1:80

第39図　沢部の状況



第40図　沢部出土土器



第41図　沢部出土石器（1～6　縮尺1:2、7　縮尺1:3）

３、Ⅱ区の遺構と出土遺物

（１）竪穴住居跡と出土遺物

①ＳＩ０１（第４３図）

ＭＢ４８・４９、ＭＣ４８・４９区に検出した。北西から西側は調査範囲外である。

北東部に検出した低い竪穴壁、出入り口と想定される竪緻面、および壁面に配された２個の大ぶりな柱穴（Ｐ７・Ｐ８）と竪緻面に配された小ぶりな柱穴（Ｐ９・Ｐ１０）、竪緻面南端から南側１ｍを中心とする炭化物・炭粒を埋積した炉跡と考えられる楕円形掘り込み、楕円形掘り込みを取り囲む４本（Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４）ないし６本の柱穴（Ｐ５・Ｐ６）によって形成される竪穴住居跡であろうと想定した。東側から南側の竪穴壁は検出できず、竪穴範囲を特定することはできなかった。

炉跡は長軸（北西―南東）約１ｍ、短軸（北東―南西）約０．８ｍの楕円形で、床面からの深さ１０～１５㎝を測り、炉内にはローム粒・砂礫・炭粒混入暗褐色土が埋積し、厚さ２～４㎜、長さ５～１５㎝ほどの純炭層が３～４層挟介している。炉底には拳大のロームブロックがあって、現況では把握できなかったが、一旦、炉体を掘り込んだあと、ロームブロックを据え置いて燃焼部、灰寄せ部といった機能区分を造っていた可能性も考えられる。

主柱穴はＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４の４本で、いずれも開口部径２０～３５㎝、底径１３～１８㎝、深さ４５～５５㎝を測る。柱芯線は長軸（北東―南西）が１．９ｍ、短軸（北西―南東）が１．４ｍで、正長方形ではなくほんの少し菱形に構築されている。主柱穴の長軸辺（北西辺と南東辺）の柱芯線の外約５０㎝離れて、北西―南東中軸線よりやや南西寄りに、主柱穴と同規模の掘り方で深さが１０～１５㎝ほどの浅いＰ５・Ｐ６があり、これが棟持柱となる６本柱の構造となる可能性もある。

北東壁内側の竪緻面は三和土構造ではなく、構築面である地山面が堅く締まっている状態で、踏み固めによるものと考えられる。竪穴壁に取り付くＰ７・Ｐ８の大ぶりの柱穴と、竪緻面に見られるＰ９・Ｐ１０の小ぶりな柱穴で構成される出入り口部の上屋構造が想定される。

遺物は出土しなかった。

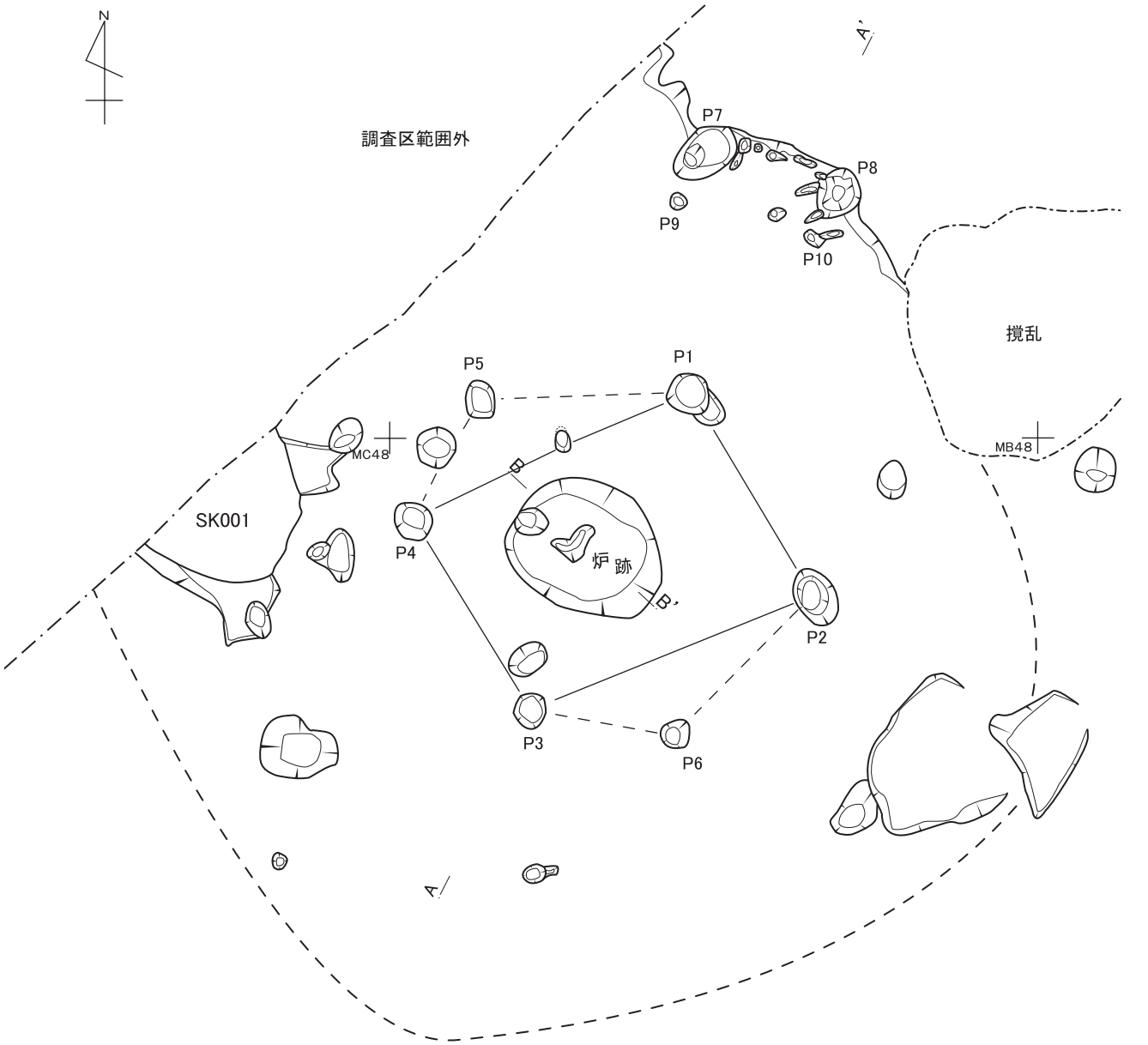
②ＳＩ０２と出土遺物（第４４・４５・４６・４７図）

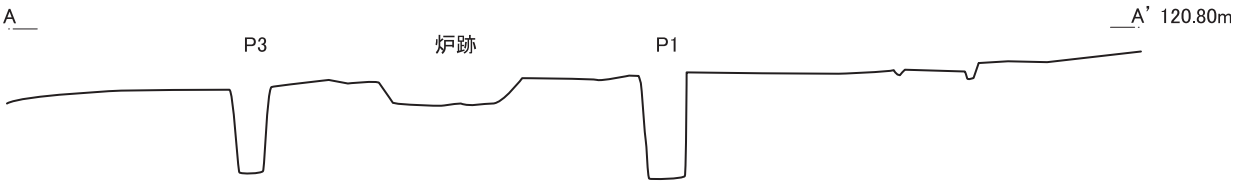
ＬＳ５２・５３、ＬＴ５２・５３区に検出した。北西から西側は調査区外で、かつ林道により削平されている。

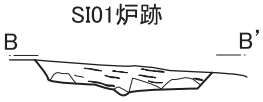
平面プランは、長軸（北東―南西）約５．５ｍ、短軸（北西―南東）約４．５ｍの楕円形で、地山面からの壁高は北側で２５㎝前後、南側で３５㎝前後である。床面は南東部が炉に向かって緩傾斜していて、他の三方は比較的平坦である。

竪穴北側床面、現竪穴壁から約０．５ｍ内側に浅い溝が現壁と同形様に確認された。これが拡張前の旧竪穴の壁溝であるのか、現竪穴に伴う施設であるのかは判然としない。

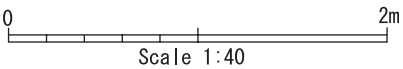
第42図　Ⅱ区遺構配置図(1:200)



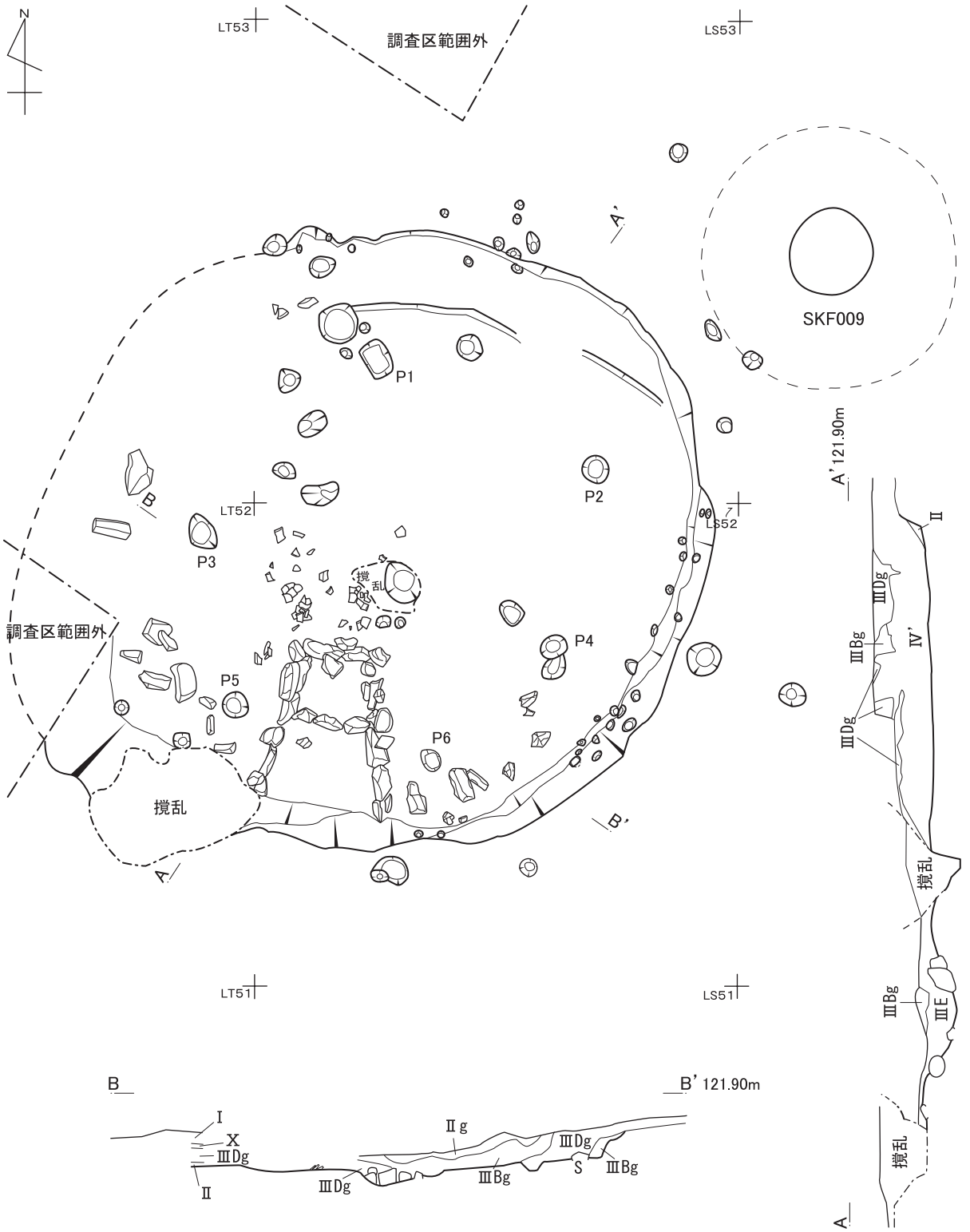




ローム粒・砂礫・炭粒混入暗褐色土



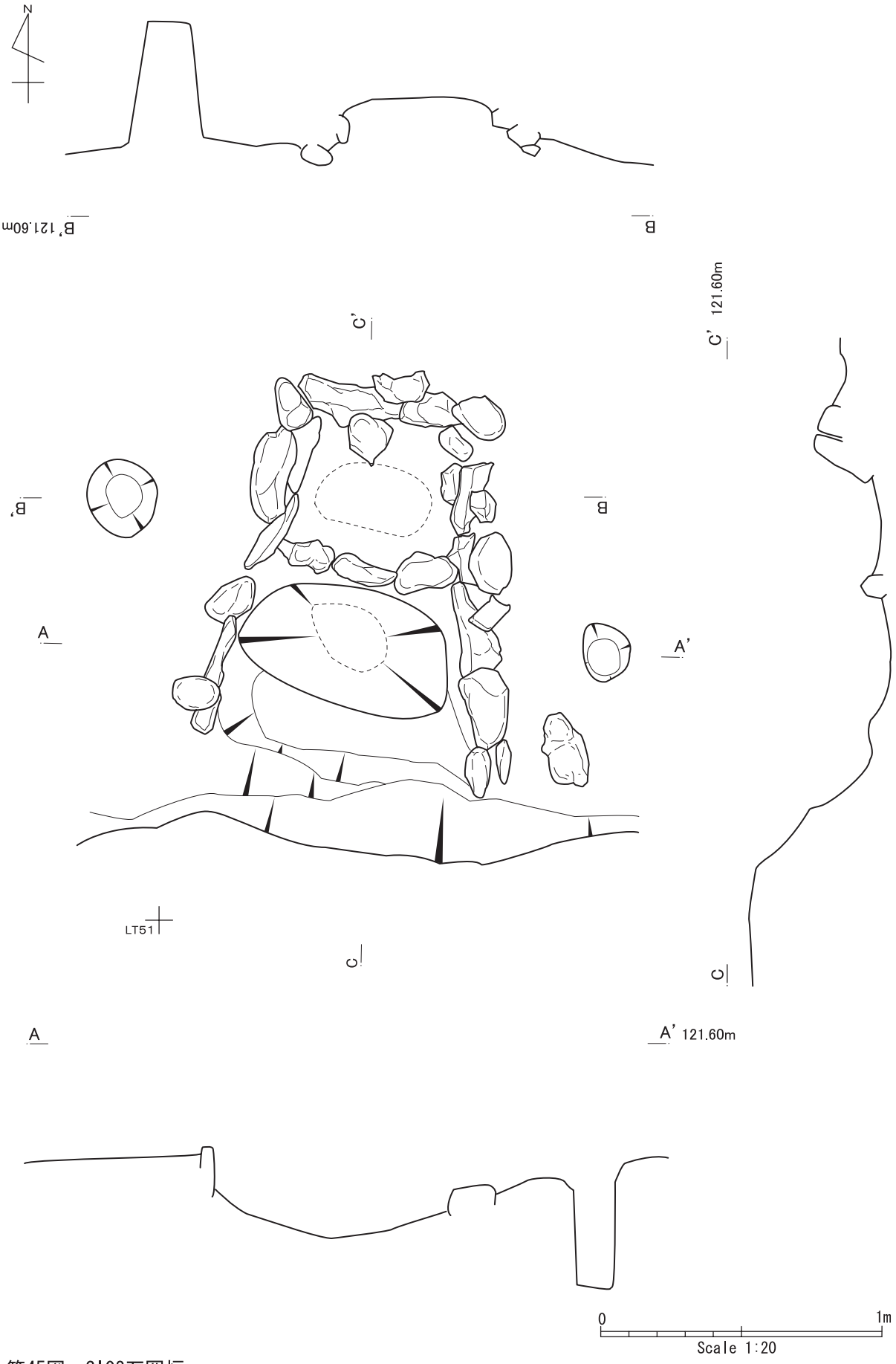
第43図　SI01



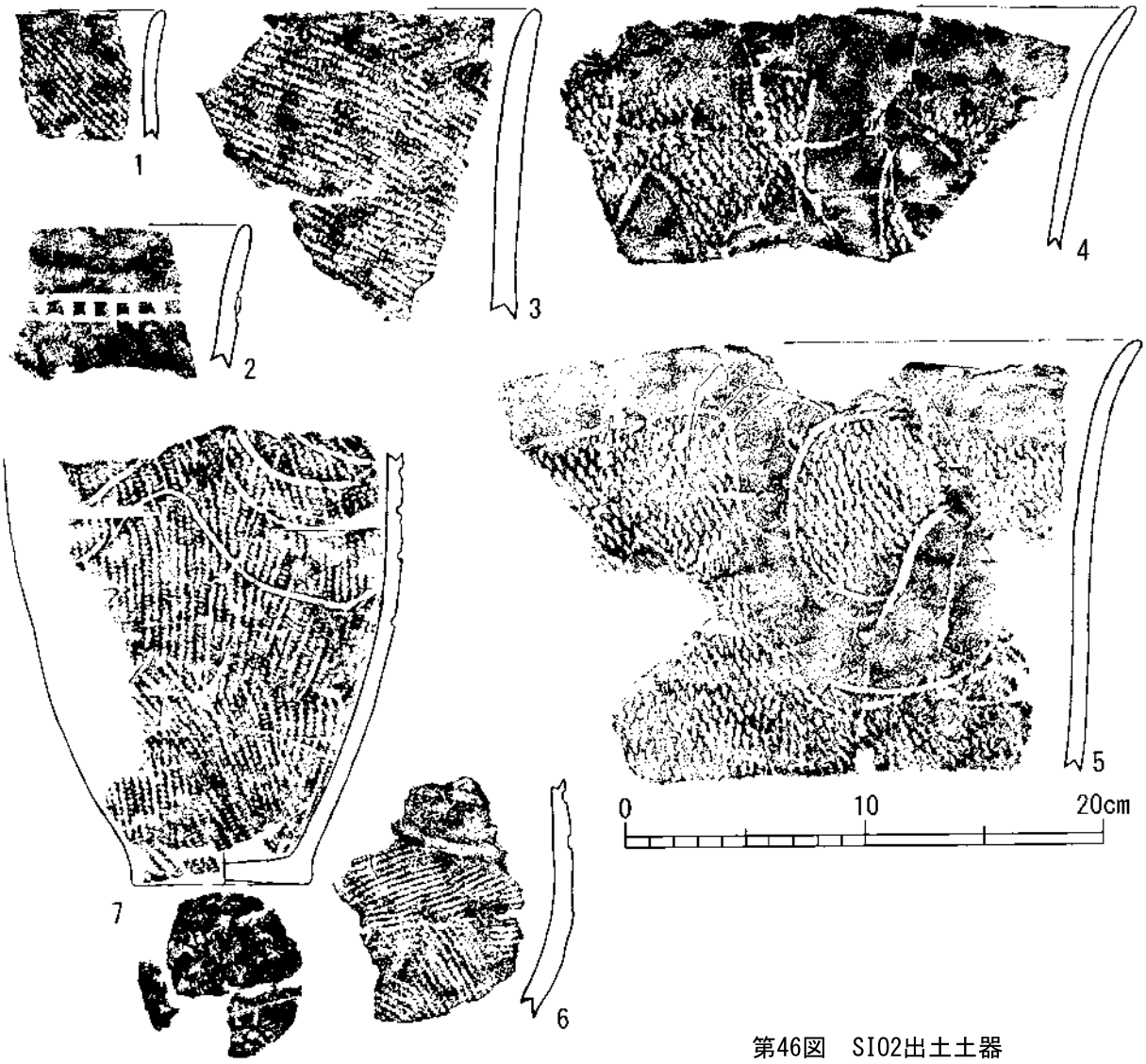
Ⅰ……表土
Ⅱ……黒色土
Ⅱg …ローム粒混入黒色土
ⅢBg…ローム粒混入明褐色土
ⅢDg…ローム粒混入暗褐色土
ⅢE …黒褐色土
Ⅳ' …ローム土
X……軽石質火山礫（十和田a火山灰二次堆積層）

0 2m
Scale 1:40

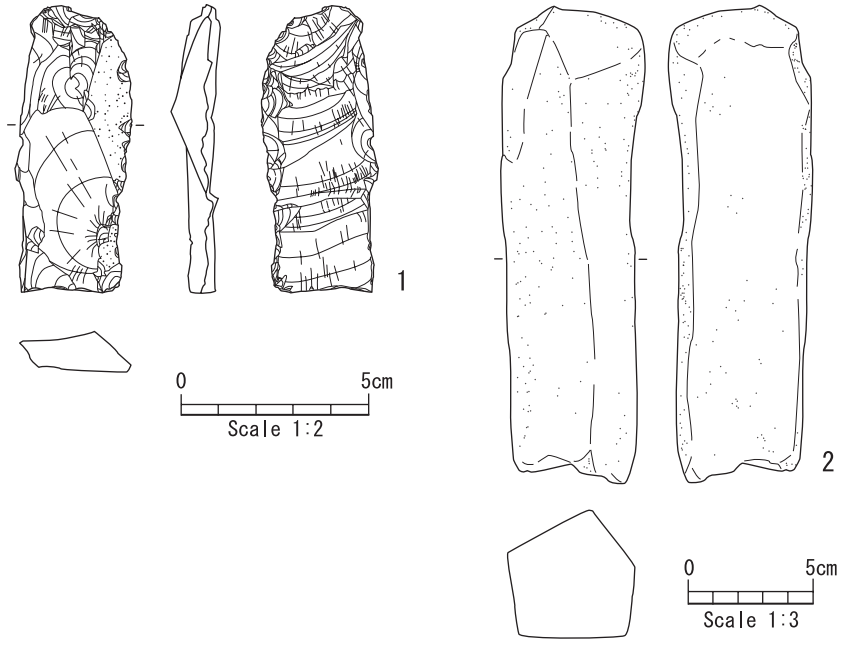
第44図　SI02



第45図　SI02石囲炉



第46図　SI02出土土器



第47図　SI02出土石器

竪穴埋積土は竪穴北側に特徴がある。すなわち竪穴外から竪穴ほぼ中央部まで、掘り上げ土であるロームの二次堆積土が厚く埋積していて、竪穴壁下にわずかに堆積した黒色土（Ⅱ）を覆っている。すなわち竪穴廃棄直後にローム土の人為埋め込みが行われたといえる。この二次堆積ローム土は竪穴北東に隣接して構築されたＳＫＦ００９の掘り上げ土と考えられる。二次堆積ローム土は前述した竪穴北側床にみられる浅い溝をも覆っている。竪穴外の二次堆積ローム土下に腐植土や漸移層が見られないことから、埋め込み作業の際、それらを削って施業したか、それらをも同時に竪穴に埋め戻したものであろう。

主柱穴はＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６の６本で、竪穴長軸に沿って真中の２本がやや胴膨らみの配置となる。

北壁から北東壁、東壁から南東壁に杭状の小ピットが多数検出され、東側のそれは壁直下床面と壁中腹に２列に配され、床面のピット間の真中に壁のピットが穿たれていて、ピットを線で結ぶと鋸歯状を呈す。南西壁下にも床面の小ピットが見られる。

炉は竪穴南側に検出された石囲い複式炉で、炉体長軸線は竪穴長軸線から２０度ほど西に振れている。炉体は長軸約１．３５ｍ、短軸は北側で約０．８ｍ、中央部で約０．９ｍ、南端で約１．２ｍを測る。炉主体部（燃焼部）は北側、つまり竪穴中央部側にあって炉体長軸上約０．７５ｍで、平面形は北側を上辺とする台形を呈する。炉副体部（灰寄せ部）は炉体長軸上０．６ｍでこれまた北側を上辺とする台形を呈する。

炉主体部は北側を５個、東側を６個、西側を４個、南側を３個の計１８個の自然石で構築していて、北側の１個は炉内にズリ落ちている。炉底は楕円形の鍋底状に窪んでいて加熱によって赤褐色に変色している。炉副体部は東側を５個、西側を４個の自然石で構築していて、南端は竪穴壁に直結し、炉体南側には石構築はなく竪穴壁がそれに当たる。炉底はやはり鍋底状を呈し若干加熱を受けている。

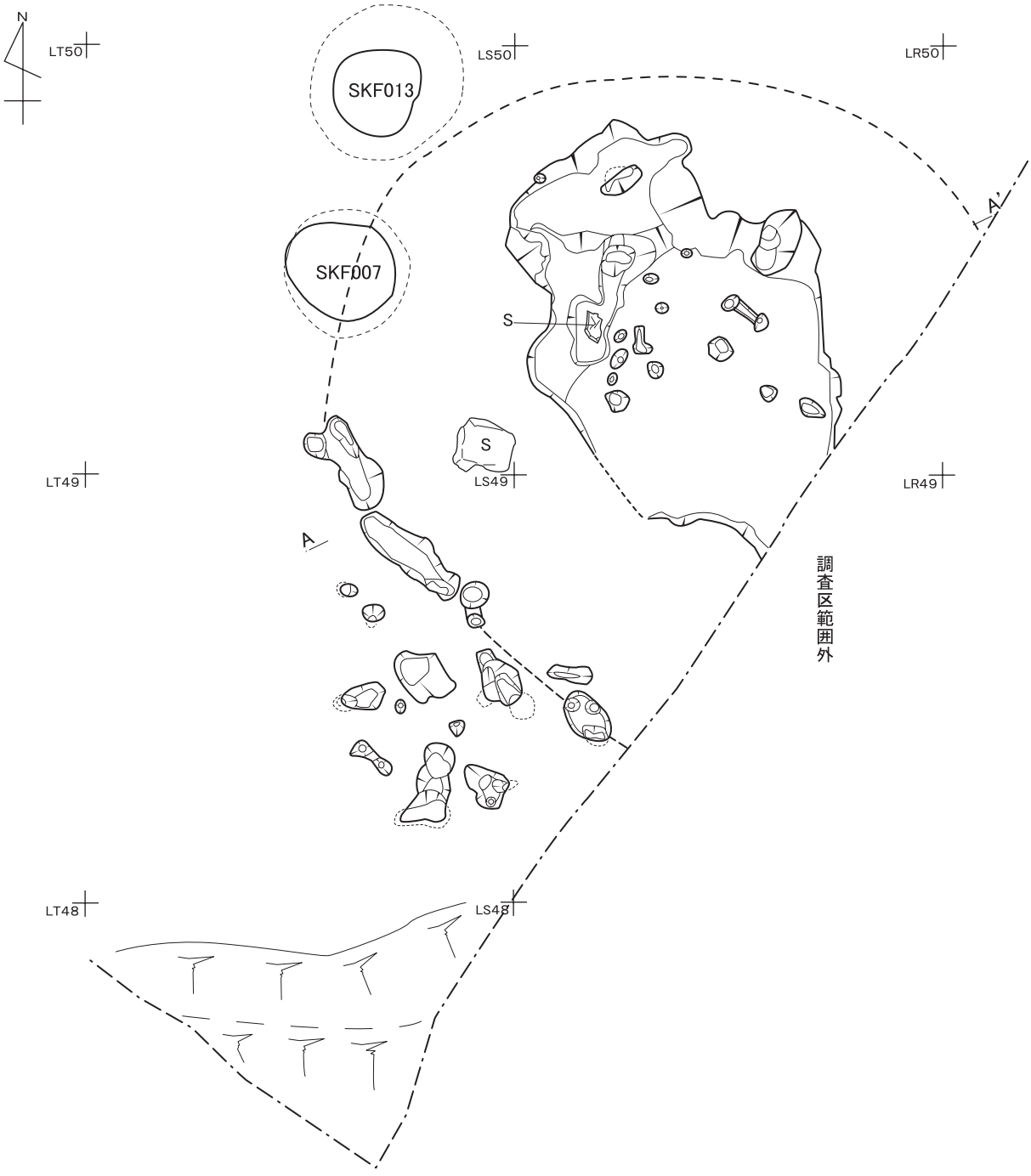
竪穴の南壁際床面に、あるものは床をやや掘り込んで据えた状態で、あるものは床面に密着して、あるものは下部に竪穴埋積土であるローム粒混入暗褐色土（ⅢＤｇ）を介在して検出された自然石がある。据えられた様相を呈するものは炉体東側の大振りな石２個で、これは竪穴使用時そのままの姿と見ていいだろう。炉体西側のそれらは竪穴埋積土を下部に介在していて、竪穴廃棄後に要因があったと考えられる。

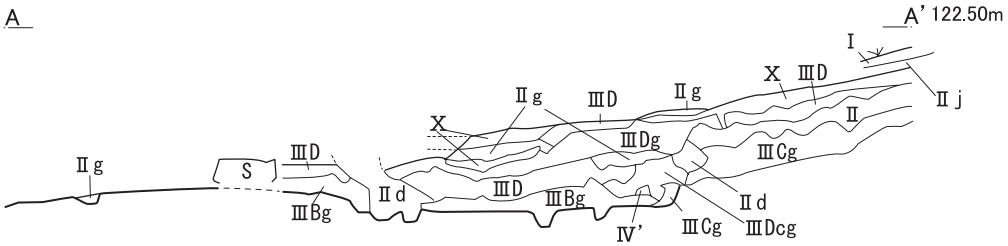
第４６図は竪穴内の出土土器である。図中１は炉主体部内上位面出土で、焼成はきわめて堅緻であるが２次焼成の可能性もある。６は炉内出土の３片の接合体。３，４，５，７は竪穴内出土で、７は炉の北側床面上に散在していた破片が接合できたものである。２は竪穴確認面での出土である。第４７図は竪穴内出土石器である。１は頁岩製のスクレイパー。２は棒状の自然礫である。

③ＳＩ０３と出土遺物（第４８・４９・５０図）

ＬＲ４９・５０、ＬＳ４９・５０区に検出した。南東側は調査区外である。

竪穴北壁から北西壁は非常に出入りの激しい不整形ながらも確認できた。しかし南西か





Ⅰ……表土
Ⅱ……黒色土
Ⅱd …ボサボサの黒色土
Ⅱg …ローム粒混入黒色土
Ⅱj …軽石粒混入黒色土
ⅢBg…ローム粒混入明褐色土
ⅢCg …ローム粒混入黄褐色土
ⅢD……暗褐色土
ⅢDcg…ローム粒混入サラサラの暗褐色土
ⅢDg …ローム粒混入暗褐色土
Ⅳ' …ローム土
X ……軽石質火山礫(十和田a火山灰二次堆積層)

0 2m
Scale 1:60

第48図　SI03

ら南側では竪穴範囲を確認することはできなかった。また、柱穴も明確ではない。

北側の土層断面でみると、竪穴外の土層は、地山ロームの上にローム粒混入黄褐色土（ⅢＣｇ）が厚く堆積していて、その上面は波打っていて起伏が激しい。その上に黒色土（Ⅱ）があってその上面も起伏が激しい。その上に暗褐色土（ⅢＤ）が載りその上面も起伏が激しい。その上に黄白色の十和田起源の軽石火山礫（Ｘ）が厚く堆積していて上面は比較的平坦である。その上に軽石粒混入黒色土（ⅡＪ）があって、その上が表土となる。

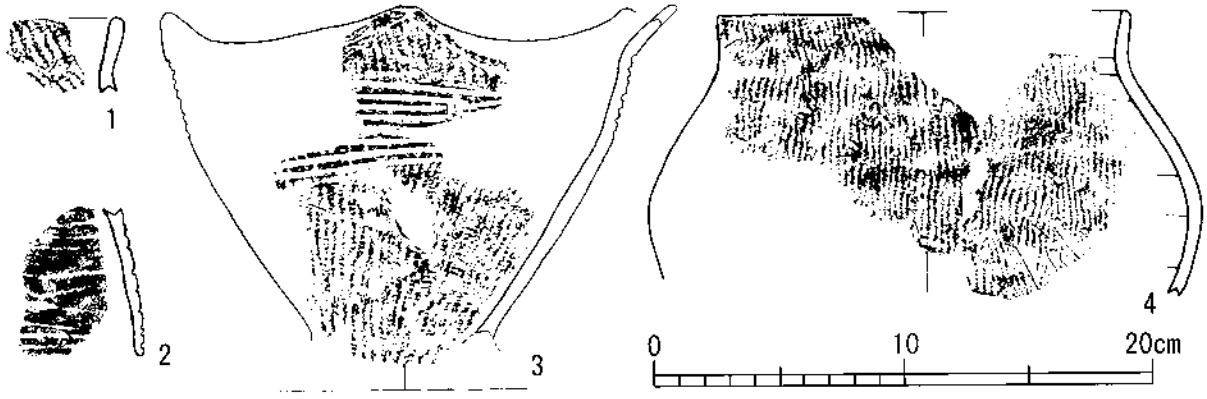
竪穴は見かけ上、黒色土面からの掘り込み構築がなされている。

床面は比較的平坦で、北壁から南へ約２．５ｍのところに壁様の段がみられるが、その南側の上位の堆積土が北側の竪穴埋積土と同様であることから、この段は壁ではなく竪穴内の施設と見てよく、竪穴床面はより南側まで広がると考えられる。北壁から約３．２ｍにみられる、長さ５５㎝、幅４０㎝、厚さ２５㎝の大きな石は、竪穴床面に据えられた台石であろう。調査範囲内では火気の使用跡は検出できなかった。

床面と見做されるやや堅い面は、北壁から南へ約４．５ｍのピットと短い溝状遺構のところまで広がっていて、その範囲が当竪穴の床面と考えられ、その範囲で計測するとおおよそ径４．５ｍの不整円形プラン竪穴と想定される。

竪穴中央やや北側に長さ３６㎝、幅１４㎝、厚さ２㎝の扁平な凝灰岩板（第５０図）が、南側に頭をもたげて斜位に検出されたが、岩板下には暗褐色土が介在していて竪穴に伴うものではなく、竪穴埋積後に掘り込まれた土坑に副えられたものと考えられるが、土坑そのものは明確に把握できなかった。岩板面には彫り込み等の人為的な加工はみられない。

第４９図は出土土器で、図中１、２は竪穴南西溝の確認面（１２１．５３５ｍ）。３は竪穴中央部床面上（１２１．４４６ｍ）出土の脚台部で器表に朱塗りがみられ、竪穴と密接に関連する土器片であろう。４は竪穴北側掘り込み面（１２１．７２０ｍ）からの出土である。



第49図　SI03出土土器

（２）土坑と出土遺物

①ＳＫ００１（第５１図）

ＭＣ４８区に検出。北から西側は調査区外。本土坑の東側にＳＩ０１がある。

開口部は略円形で、径は０．９ｍ～１．０ｍを測り、深さは地山面から０．５ｍ、底径は開口部よりやや大きくて１．２ｍほどで、袋状土坑である。埋積土は明らかな人工による埋め戻しの状況を呈している。

開口部外の東側と南側に「M」字形の浅い掘り込みがあって、見かけ上いずれもM字の左頂部に長軸２５㎝内外、短軸１８㎝内外、深さ２５～３０㎝の楕円形ピットを伴う。開口部北側と西側が未調査のため断定はできないが、これらは柱穴であろうと考えられ、ＳＫ００１を覆う上屋の存在をうかがえる。遺物は出土しなかった。

第50図　SI03埋積土掘り込み坑出土石板

②ＳＫ００２（第５１図）

ＭＢ４７、ＭＣ４７区に検出。開口部は北東部でややいびつではあるが、径約１．２ｍの円形プランを想定して掘り込んだものであろう。深さは地山面から０．７ｍで、底部径はほぼ１．４ｍの円形で、全体は袋状を呈する。埋積土は人工による埋め戻しの状況である。

遺物は出土しなかった。

③ＳＫ００３・ＳＫ００４・ＳＫ００５（第５２図）

ＭＣ４７、ＭＤ４７区に切り合って検出。中央のＳＫ００５が新しく、その北西側のＳＫ００３と南東側のＳＫ００４は古いが、ＳＫ００３とＳＫ００４の新旧関係は不明。

ＳＫ００５を断面で観察すると、深さのない寸詰まりのフラスコ状を呈しているが、ＳＫ００３・００４間に掘り込みを意図したものの、両壁の危弱さから断念したような感をうける。

ＳＫ００３は現況で底径０．９ｍほどの円形、現深０．７５ｍ。

ＳＫ００４は底径０．５ｍ～０．９ｍの中央部がややくびれる分銅形を呈し、埋積土は下位３／４ほどは自然堆積の状況を示すが、上位は窪みに人工的に埋め戻しが行われている。現深０．５ｍ。

ＳＫ００５は人工的な埋め戻しが行われているが、ＳＫ００３側は坑壁の崩落状況を示している。底径は北西―南東軸で１．８ｍ、北東―南西軸で１．４ｍのいびつな楕円形を呈している。中央部での現深５．５ｍ。

３つの土坑とも遺物は出土しなかった。

④ＳＫ００６・ＳＫ００８（第５３図）

ＳＫ００６はＬＴ５１区に検出。開口部は北側から東側にかけて崩落のため不整形である。開口部径１・１ｍ前後、底径１．５ｍ、現深０．４５ｍほどの袋状を呈する。

土坑内から図中の土器片が出土した。地文の上に２条１対の沈線がみられ、沈線間および沈線で囲まれる部分は、地文がそのままである。

ＳＫ００８はＬＲ５３区に検出。西南にＳＫＦ００９が隣接していて、ＳＫ００８の西南部はＳＫＦ００９の造成の際に壊されている。開口部は径１．０ｍのほぼ円形、底径は１．７５ｍ～１．８５ｍのほぼ円形を呈する。

図中の土器底部はＳＫ００８開口部土層観察ベルトのⅡｇ層内出土で、地文がかすかに残り、底台部上位に径３㎜前後の棒状具による刺突列点文が１条廻らされているが、刺突は１回突きと２回突きがみられる。

⑤ＳＫ００７・ＳＫ００７’・ＳＫＦ０１３（第５４図）

ＬＳ５０・５１区に検出。ＳＫ００７は南側に接するＳＫＦ０１３を切り込んでいる。当初はＳＫＦ０１３とＳＫ００７の切り合い遺構ととらえていたが、調査を進めていくうちにＳＫ００７’の存在が明らかとなった。

ＳＫ００７・ＳＫ００７’ともに不整形の浅い土坑で、掘り下げ途中で造成を止めた感がある。

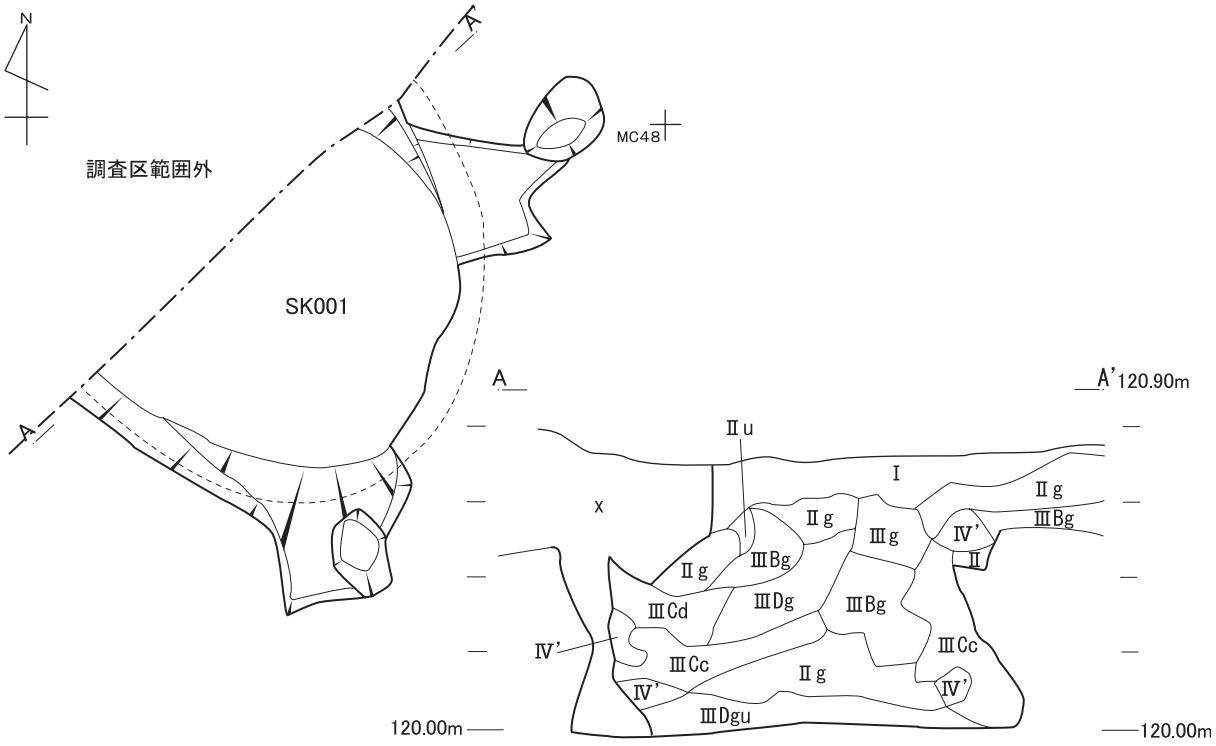
ＳＫ００７’内から４片の深鉢体部破片が出土し、２片を図示した。１は１２０．０８３ｍ、２は１２０．４６５ｍからの出土で、同一個体の破片とみられる。

ＳＫＦ０１３は開口部径０．６５ｍ～０．９ｍ、頸部径０．５５ｍ～０．７５ｍ、底径１．３ｍ～１．５ｍ、現深１．４５ｍを測るフラスコ状土坑で、埋積土は人工的な埋め戻しの状況を呈す。開口部中心から北側に底部中心がずれている。

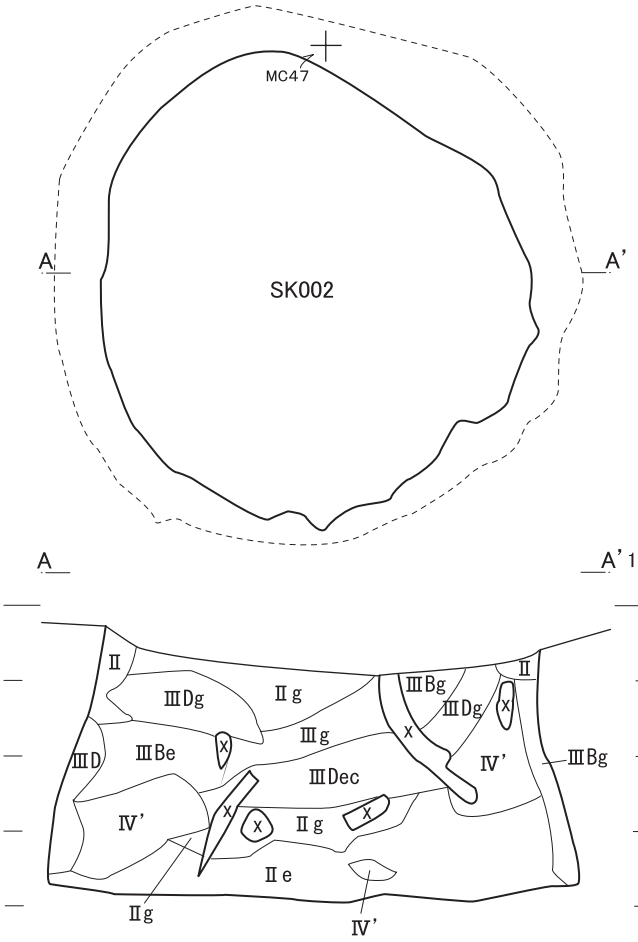
ＳＫ００７、ＳＫＦ０１３からは遺物は出土しなかった。

⑥ＳＫ００９・ＳＫ０１０（第５５図）

ＳＫ００９はＬＲ５４、ＬＳ５４区に検出。開口部径１．０ｍ前後、底径０．９ｍ前後、現深０．４ｍ前後の、壁がほぼ直立する土坑で、埋積土は掘り上げ後すぐに埋め戻し



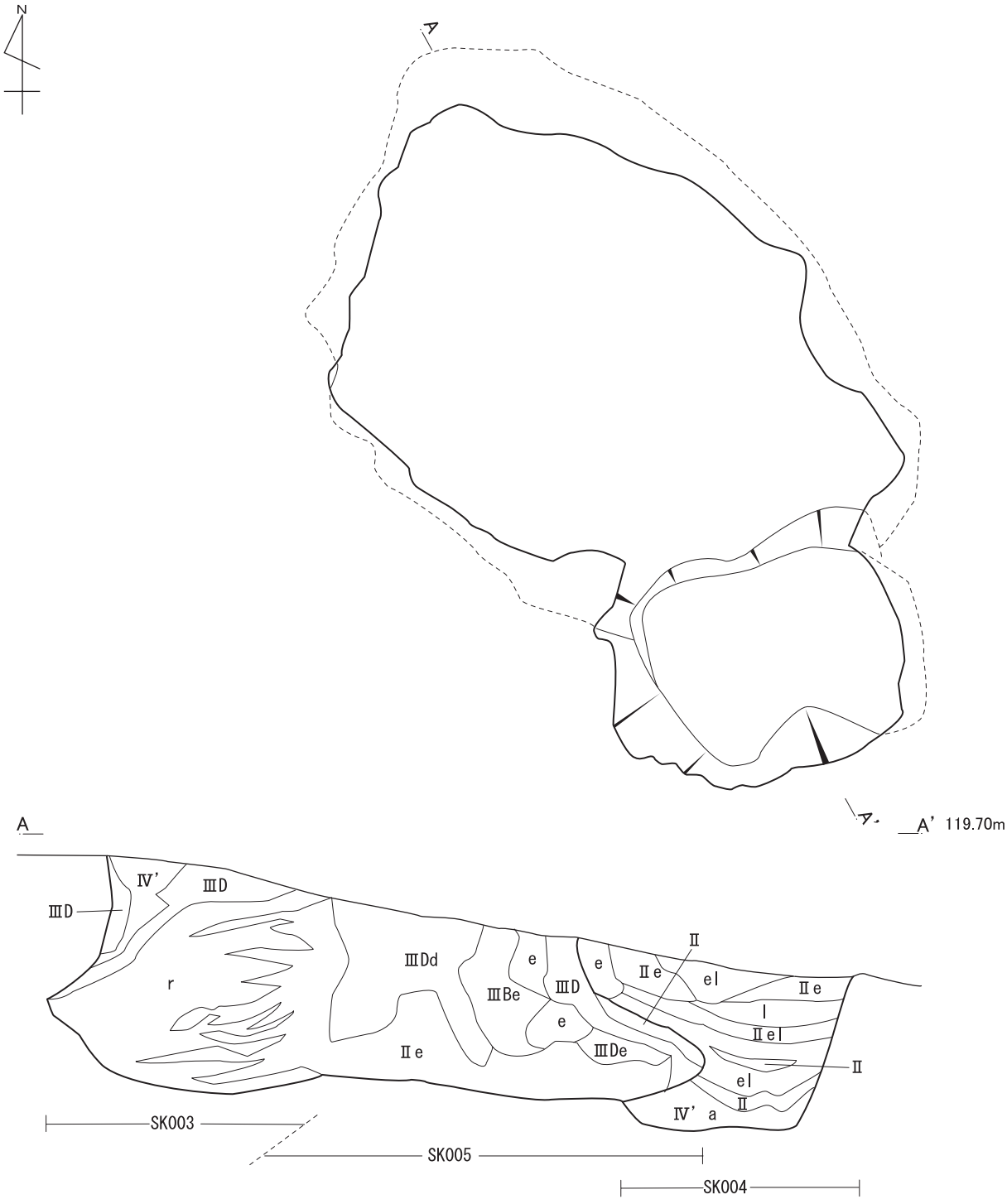
Ⅰ……表土
Ⅱ……黒色土
Ⅱg ……ローム粒混入黒色土
Ⅱu ……固くしまった黒色土
Ⅲg ……ローム粒混入褐色土
ⅢBg……ローム粒混入明褐色土
ⅢCc……サラサラの黄褐色土
ⅢCd……ボサボサの黄褐色土
ⅢDg……ローム粒混入暗褐色土
ⅢDgu …固くしまったローム粒混入暗褐色土
Ⅳ' ……ローム土
x ……木根



Ⅱ ……黒色土
Ⅱe……ロームブロック混入黒色土
Ⅱg……ローム粒混入黒色土
Ⅲg……ローム粒混入褐色土
ⅢBe …ロームブロック混入明褐色土
ⅢBg …ローム粒混入明褐色土
ⅢD……暗褐色土
ⅢDec…ロームブロック混入サラサラの暗褐色土
ⅢDg …ローム粒混入暗褐色土
Ⅳ' …ローム土
x……木根

0 1m
Scale 1:20

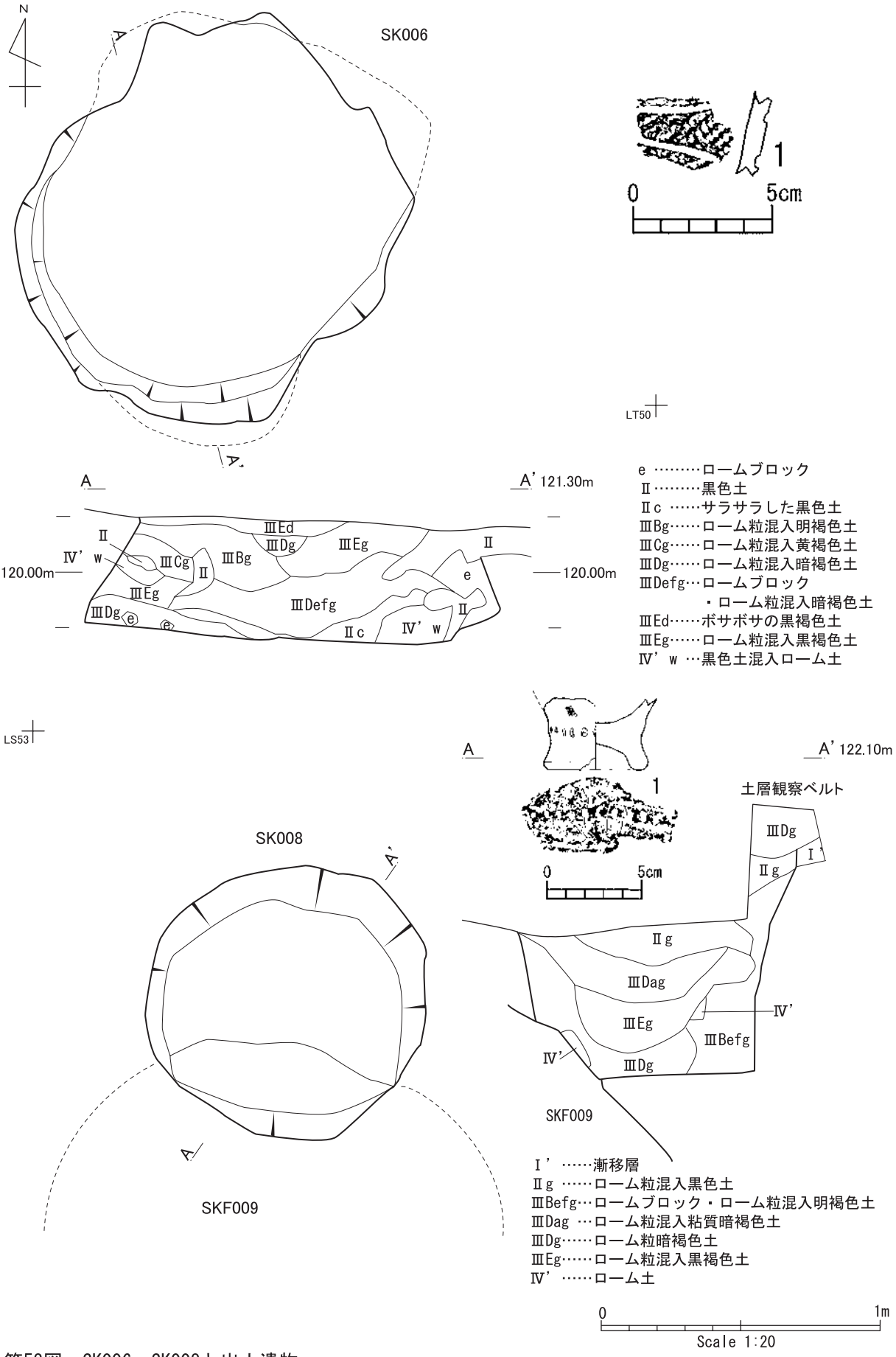
第51図　SK001・SK002



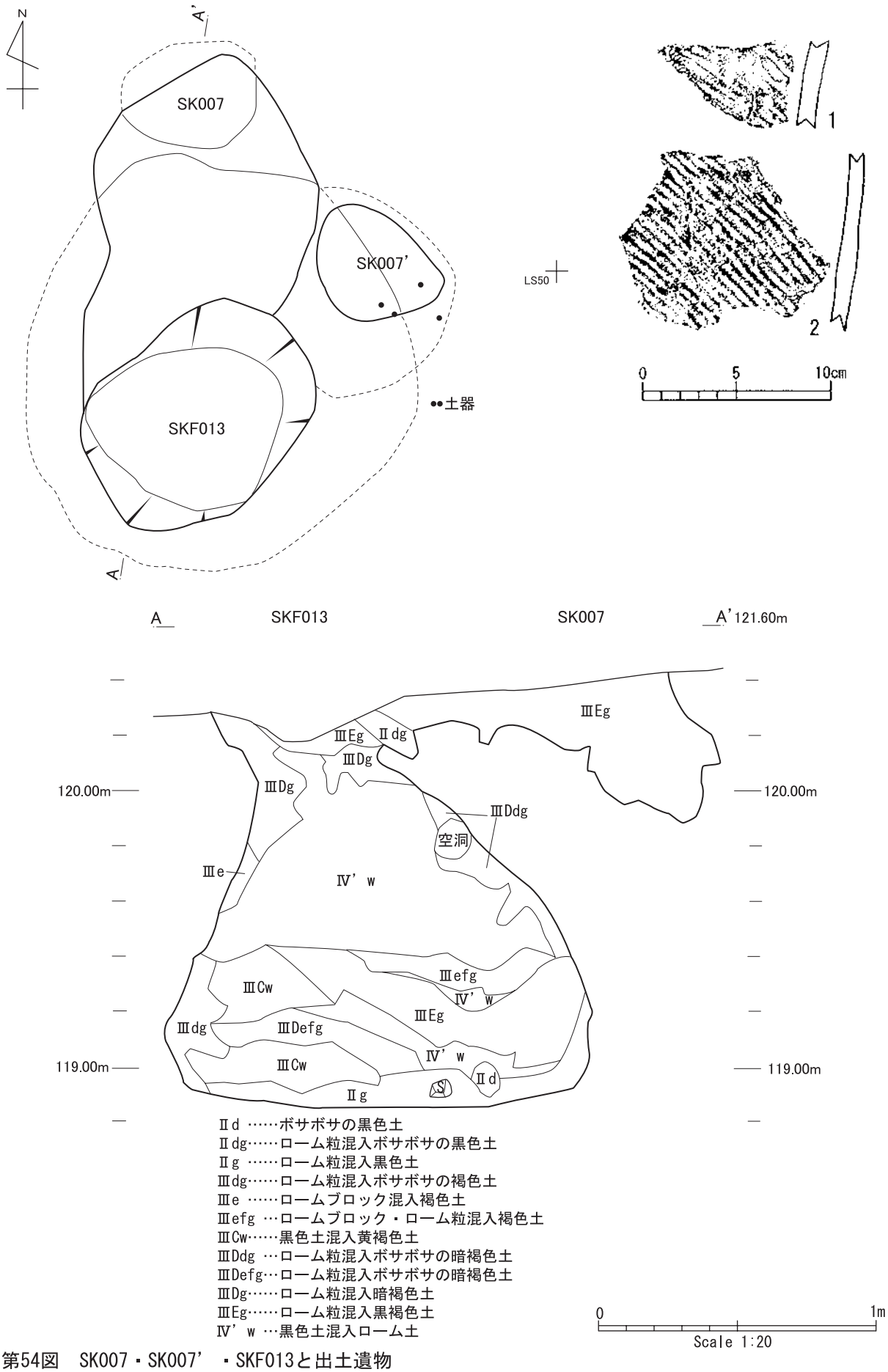
e ……ロームブロック
el……砂礫混入ロームブロック
l ……砂礫
r ……壁崩落土
Ⅱ……黒色土
Ⅱe …ロームブロック混入黒色土
Ⅱel…砂礫・ロームブロック混入黒色土
ⅢBe …ロームブロック混入明褐色土
ⅢD……暗褐色土
ⅢDd …ボサボサの暗褐色土
ⅢDe …ロームブロック混入暗褐色土
Ⅳ' …ローム土
Ⅳ'a…粘質ローム土

0 1m
Scale 1:20

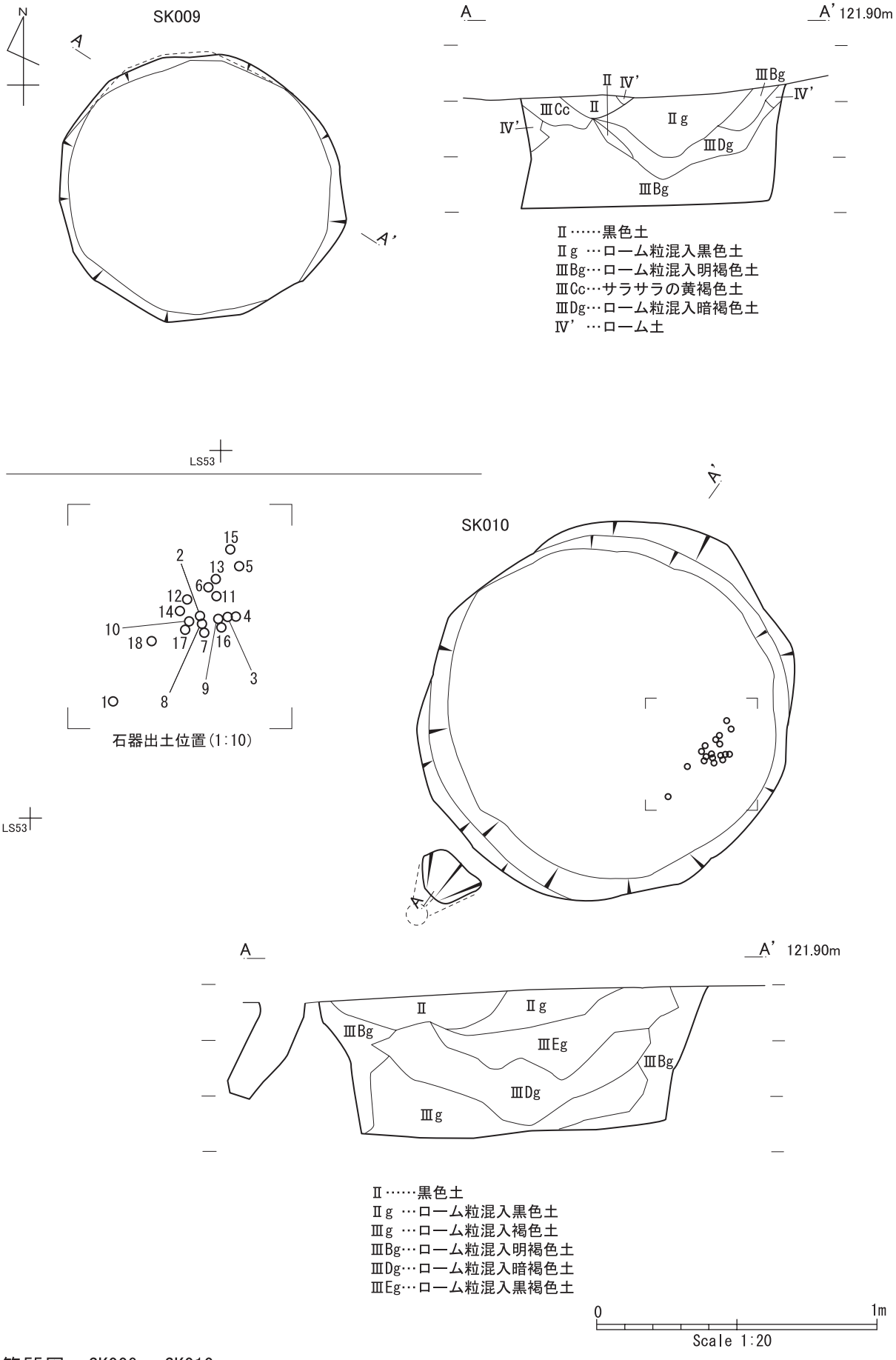
第52図　SK003・SK004・SK005



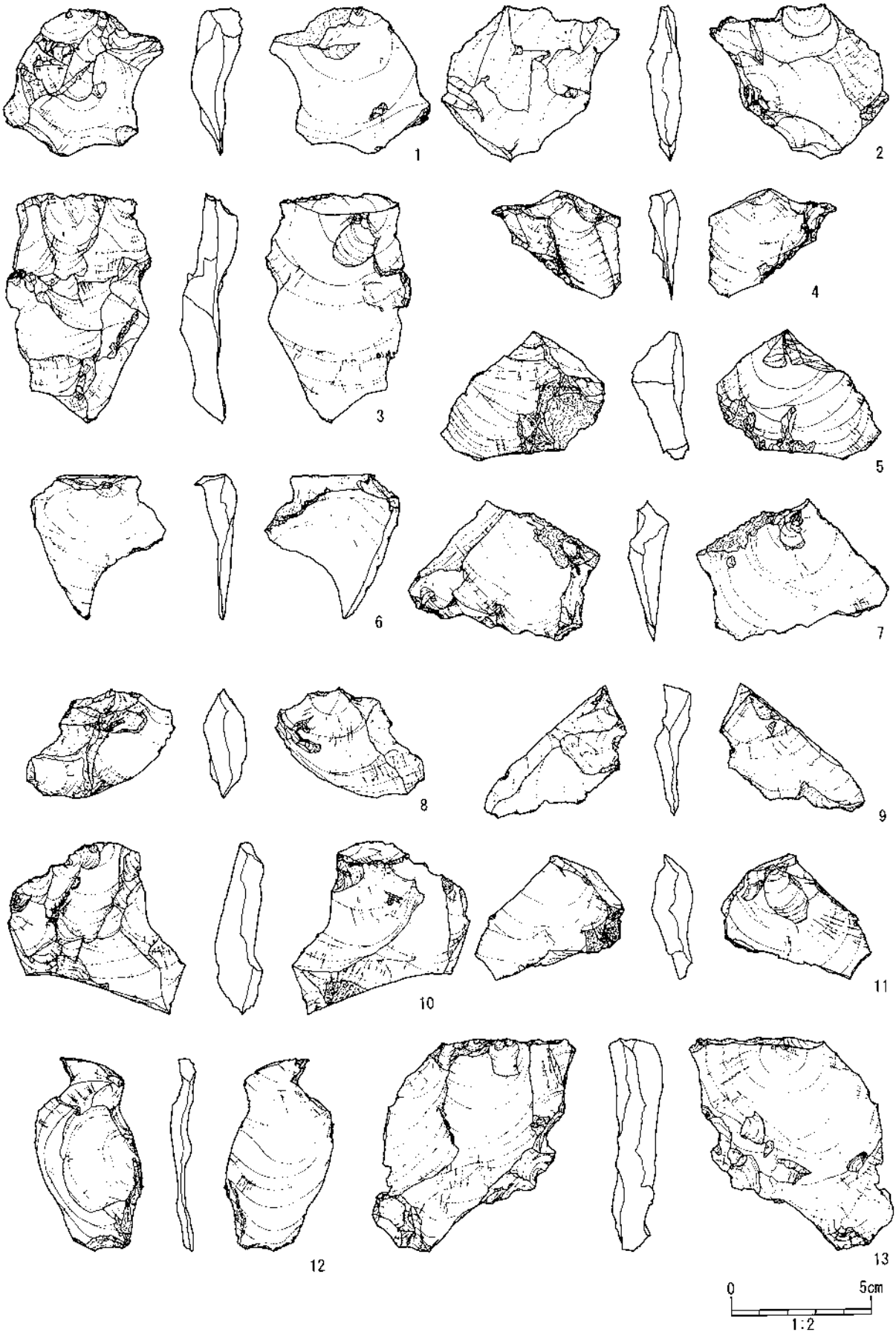
第53図　SK006・SK008と出土遺物



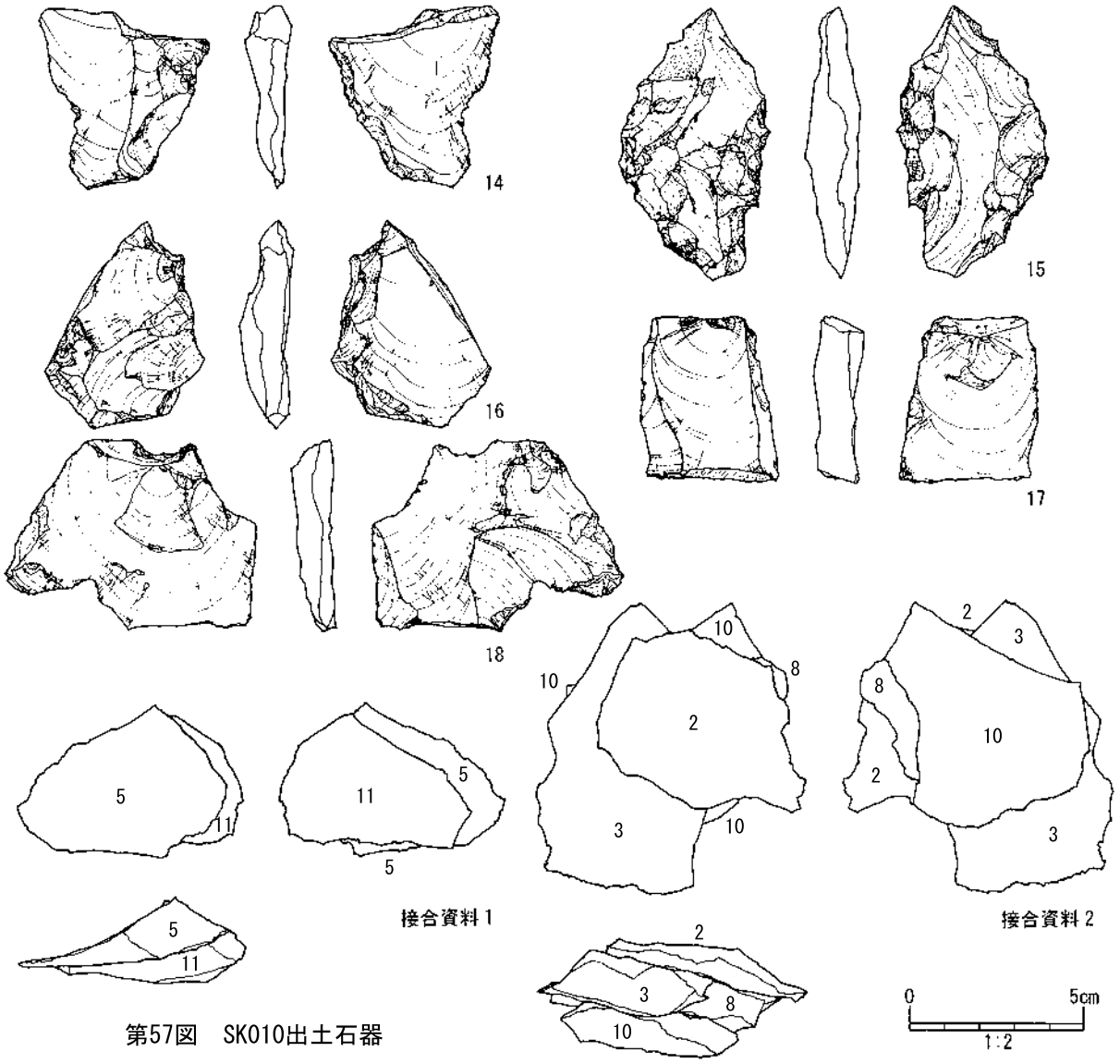
第54図　SK007・SK007'・SKF013と出土遺物



第55図　SK009 ・ SK010



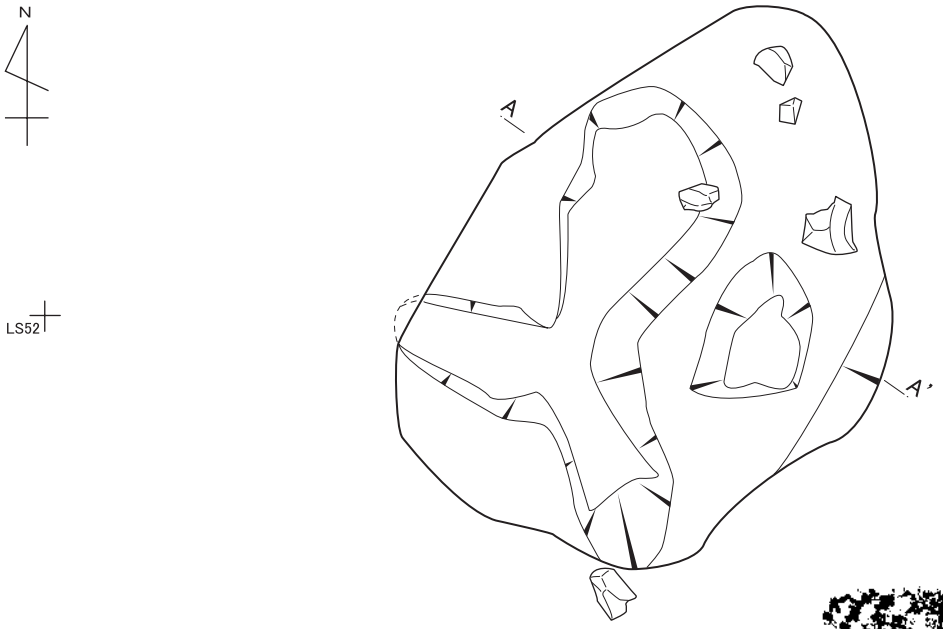
第56図　SK010出土石器

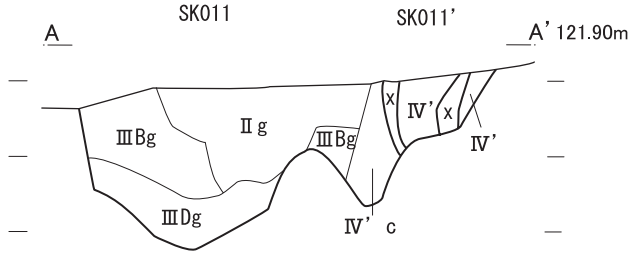


第57図　SK010出土石器

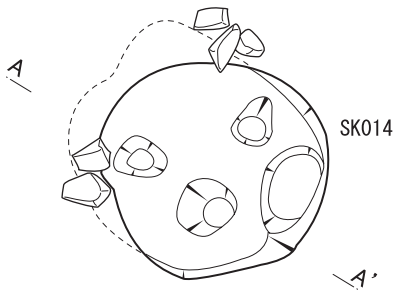
挿図番号	写真番号	取り上げ番号	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	層位	標高(m)	備考
56－1	123	1	剥片	51.9	48.1	14.3	30.6	頁岩	Ⅱg	121.746	
2	123	2	剥片	54.6	52.5	11.7	28.3	頁岩	Ⅱg～ⅢEg	121.667	3・8・10と接合
3	123	3	剥片	81.1	48.7	14.4	59.5	頁岩	Ⅱg～ⅢEg	121.674	2・8・10と接合
4	123	4	剥片	31.8	42.2	10.4	11.2	頁岩	Ⅱg～ⅢEg	121.666	
5	123	5	剥片	42.3	52.4	15.9	27.1	頁岩	Ⅱg～ⅢEg	121.663	11と接合
6	123	6	剥片	51.1	45.6	13.4	15.9	頁岩	Ⅱg～ⅢEg	121.643	
7	123	7	剥片	44.3	62.3	9.1	20.7	頁岩	Ⅱg～ⅢEg	121.647	
8	123	8	剥片	34.6	43.2	13.7	18.6	頁岩	Ⅱg～ⅢEg	121.644	2・3・10と接合
9	123	9	剥片	33.1	40.2	9.0	11.8	頁岩	Ⅱg～ⅢEg	121.646	
10	123	10	剥片	52.8	58.1	14.4	46.5	頁岩	Ⅱg～ⅢEg	121.631	2・3・8と接合
11	123	11	剥片	38.0	47.3	10.4	18.3	頁岩	Ⅱg～ⅢEg	121.632	5と接合
12	123	12	剥片	67.0	35.5	4.9	11.9	頁岩	ⅢEg	121.610	
13	123	13	剥片	69.7	62.2	11.9	69.3	頁岩	ⅢEg	121.619	
57－14	123	14	剥片	50.2	46.4	12.0	19.7	頁岩	ⅢEg	121.600	
15	123	15	サイドスクレイパー	76.5	42.1	14.3	33.9	頁岩	Ⅱg～ⅢEg	121.626	未成品
16	123	16	剥片	56.2	44.2	14.0	30.9	頁岩	ⅢEg	121.611	
17	123	17	剥片	46.6	37.6	12.3	25.0	頁岩	ⅢEg	121.574	
18	123	18	剥片	53.9	70.4	12.0	34.2	頁岩	ⅢEg	121.547	

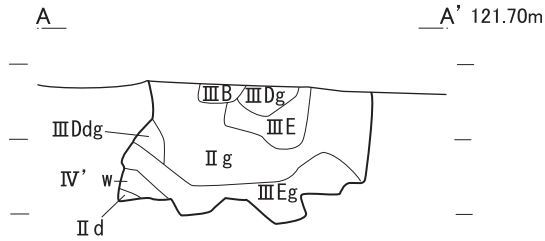
第４表　掲載石器一覧（Ⅱ区SK010）



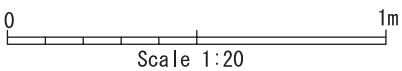


Ⅱg　…ローム粒混入黒色土
ⅢBg …ローム粒混入明褐色土
ⅢDg …ローム粒混入暗褐色土
Ⅳ'　…ローム土
Ⅳ' c…サラサラのローム土
x　……木根

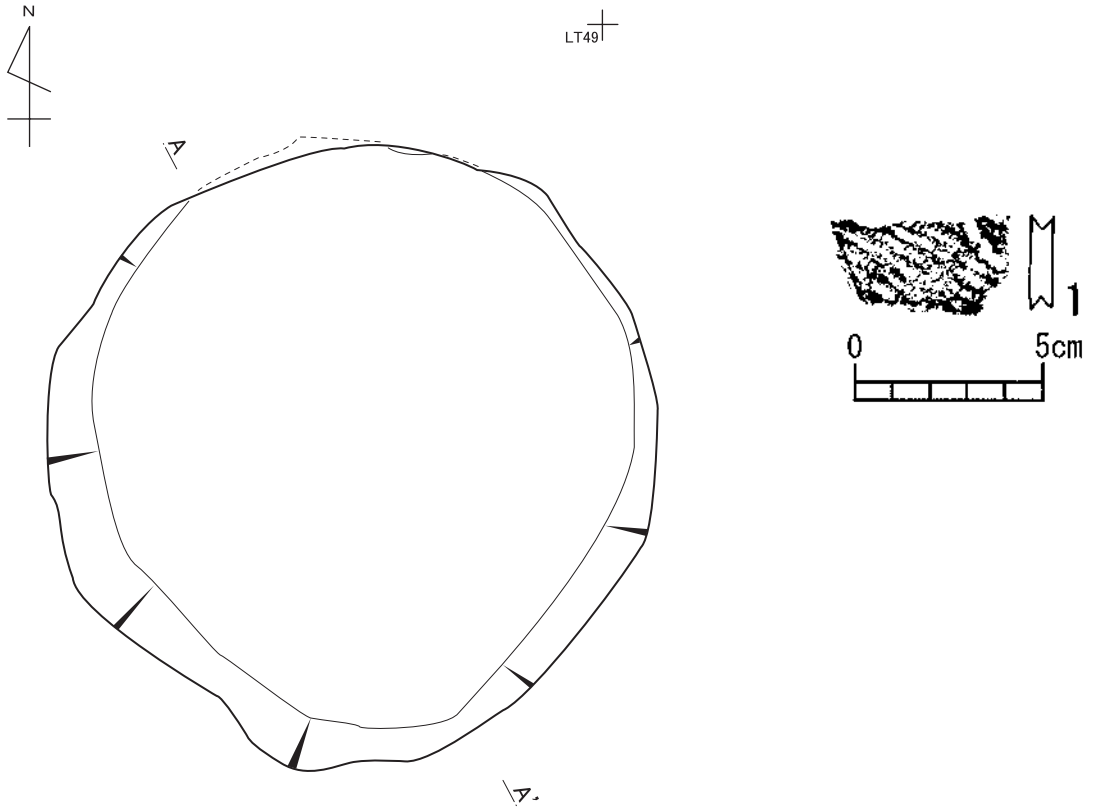


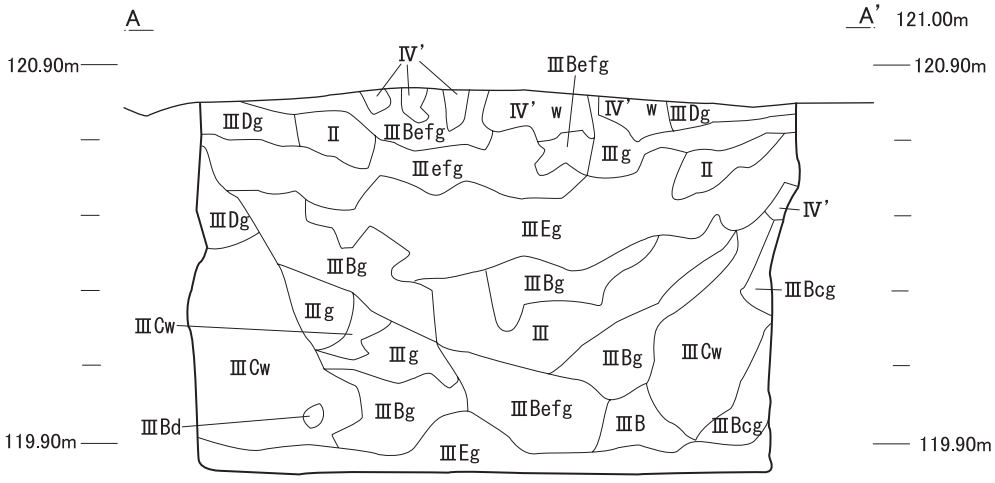


Ⅱd……ボサボサの黒色土
Ⅱg……ローム粒混入黒色土
ⅢB……明褐色土
ⅢDdg…ローム粒混入ボサボサの暗褐色土
ⅢDg …ローム粒混入暗褐色土
ⅢE……黒褐色土
ⅢEg …ローム粒混入黒褐色土
Ⅳ' w…黒色土混入ローム土

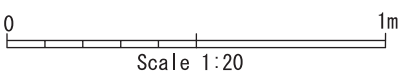


第58図　SK011・SK011'・SK014と出土遺物

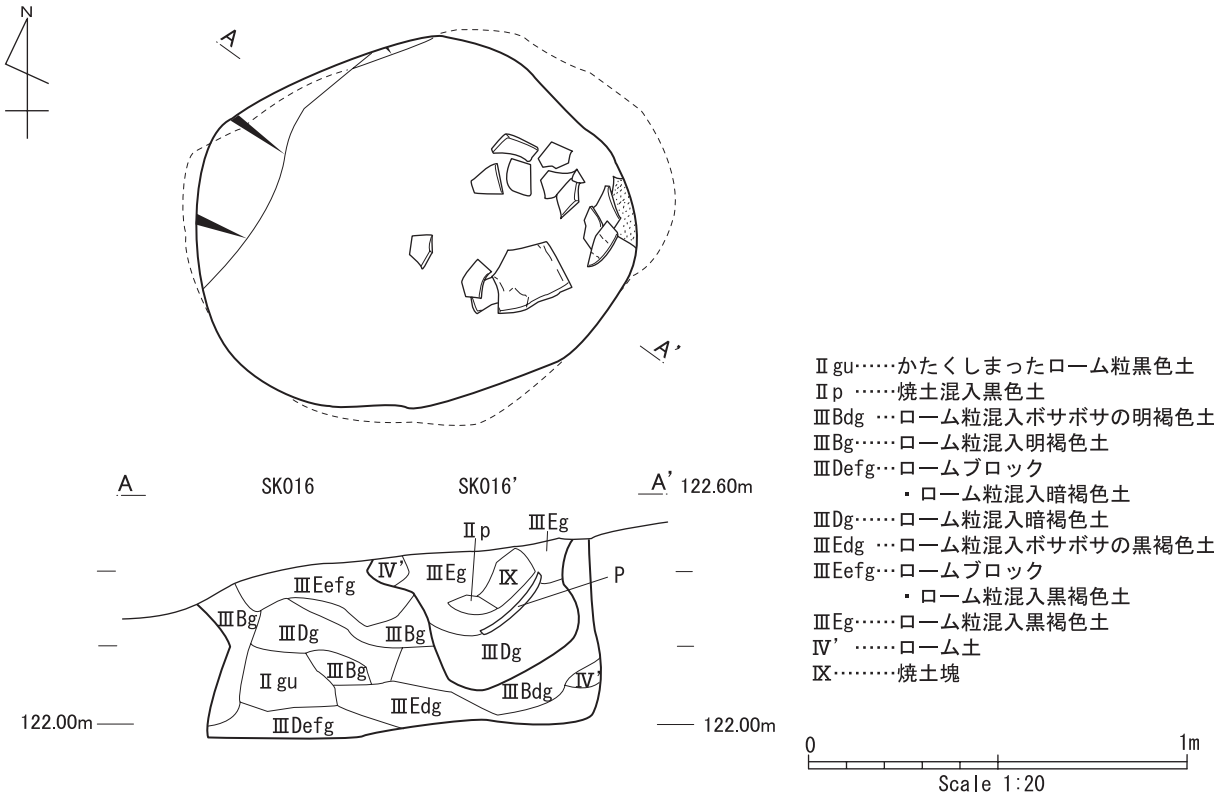


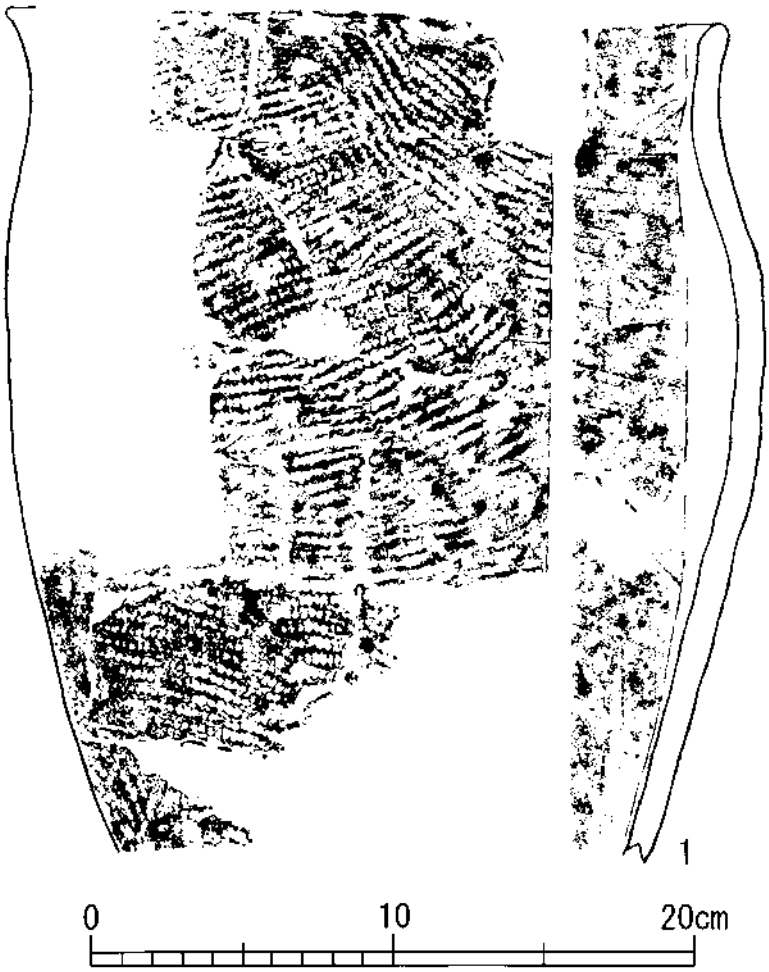


Ⅱ……黒色土
Ⅲ……褐色土
Ⅲefg …ロームブロック・ローム粒混入褐色土
Ⅲg ……ローム粒混入褐色土
ⅢB ……明褐色土
ⅢBcg …ローム粒混入サラサラの明褐色土
ⅢBd……ボサボサの明褐色土
ⅢBefg…ロームブロック・ローム粒混入明褐色土
ⅢBg……ローム粒混入明褐色土
ⅢCw……黒色土混入黄褐色土
ⅢDg……ローム粒混入暗褐色土
ⅢEg……ローム粒混入黒褐色土
Ⅳ'……ローム土
Ⅳ' w…黒色土混入のローム土

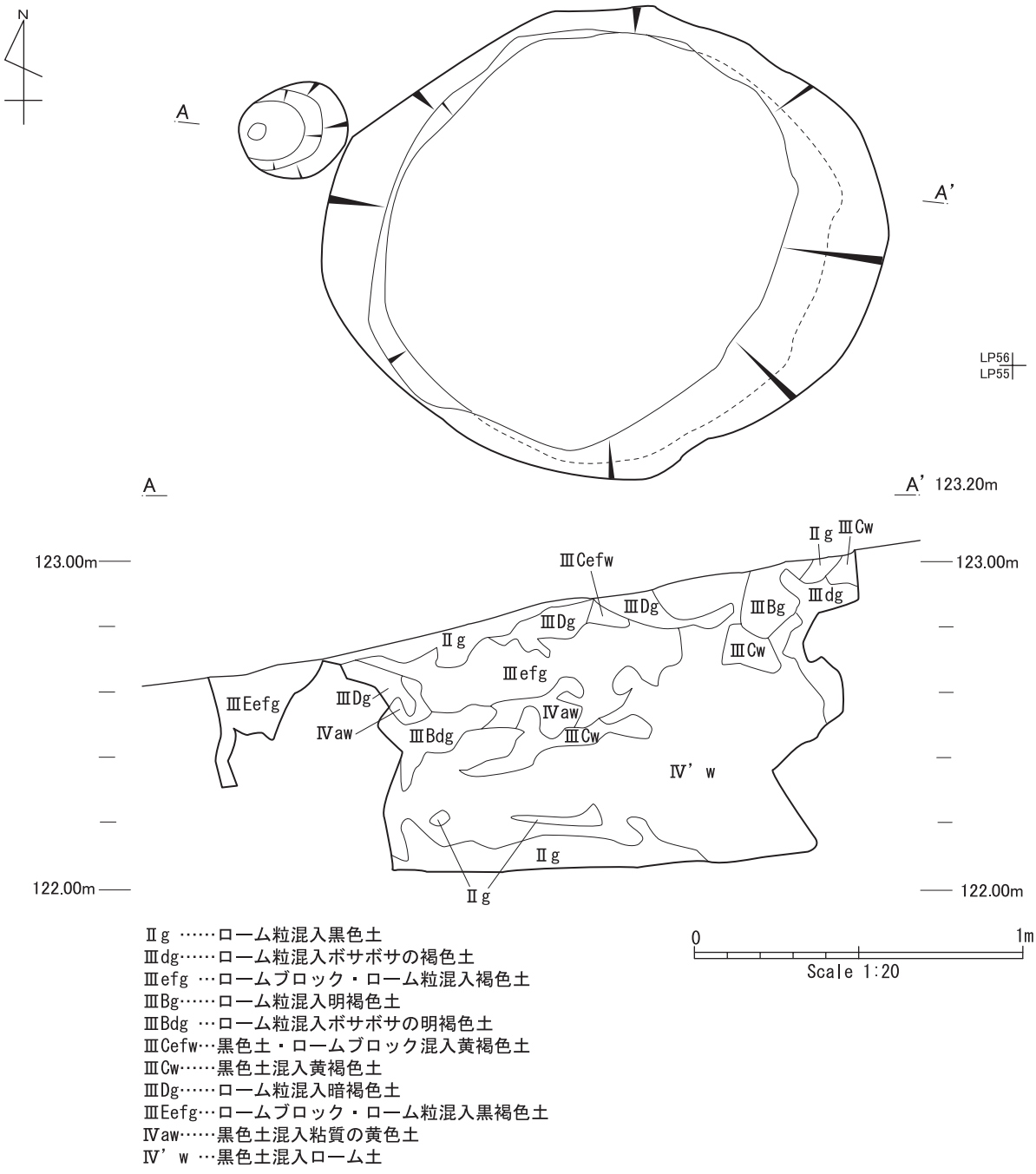


第59図　SK013と出土遺物





第60図　SK016・SK016’と出土遺物



Ⅱg ……ローム粒混入黒色土
Ⅲdg……ローム粒混入ボサボサの褐色土
Ⅲefg …ロームブロック・ローム粒混入褐色土
ⅢBg……ローム粒混入明褐色土
ⅢBdg …ローム粒混入ボサボサの明褐色土
ⅢCefw…黒色土・ロームブロック混入黄褐色土
ⅢCw……黒色土混入黄褐色土
ⅢDg……ローム粒混入暗褐色土
ⅢEefg…ロームブロック・ローム粒混入黒褐色土
Ⅳaw……黒色土混入粘質の黄色土
Ⅳ' w …黒色土混入ローム土

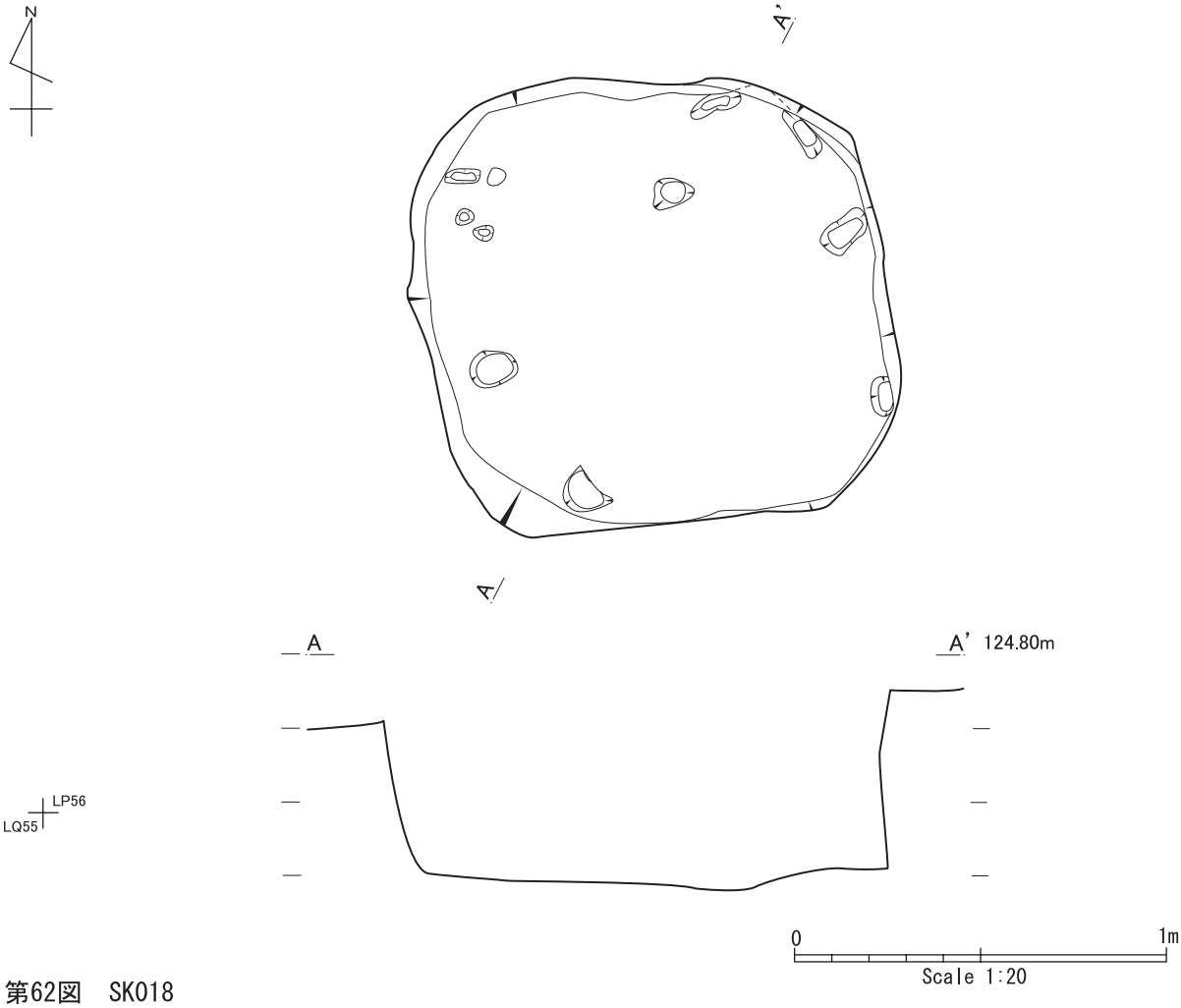
第61図　SK017

た感がある。土坑内から遺物は出土しなかった。

ＳＫ０１０はＬＲ５３・５４区に検出。開口部径１．４ｍ前後、底径１．１ｍ前後、現深０．５ｍ前後。壁は底面から１５㎝～２５㎝位まで直立ぎみに立ち上がり、そこから開口部へはラッパ形に開く。

本土坑は壁際に壁の崩落土であるローム粒混入明褐色土が、崩れ堆積するまでの一定期間開口状態にあったと考えられ、それから人為的に埋め戻されている。

土坑西南側約１０㎝に径１５㎝前後の斜めに構えられた柱穴が見られるが、本土坑との



第62図　SK018

関連は不明である。

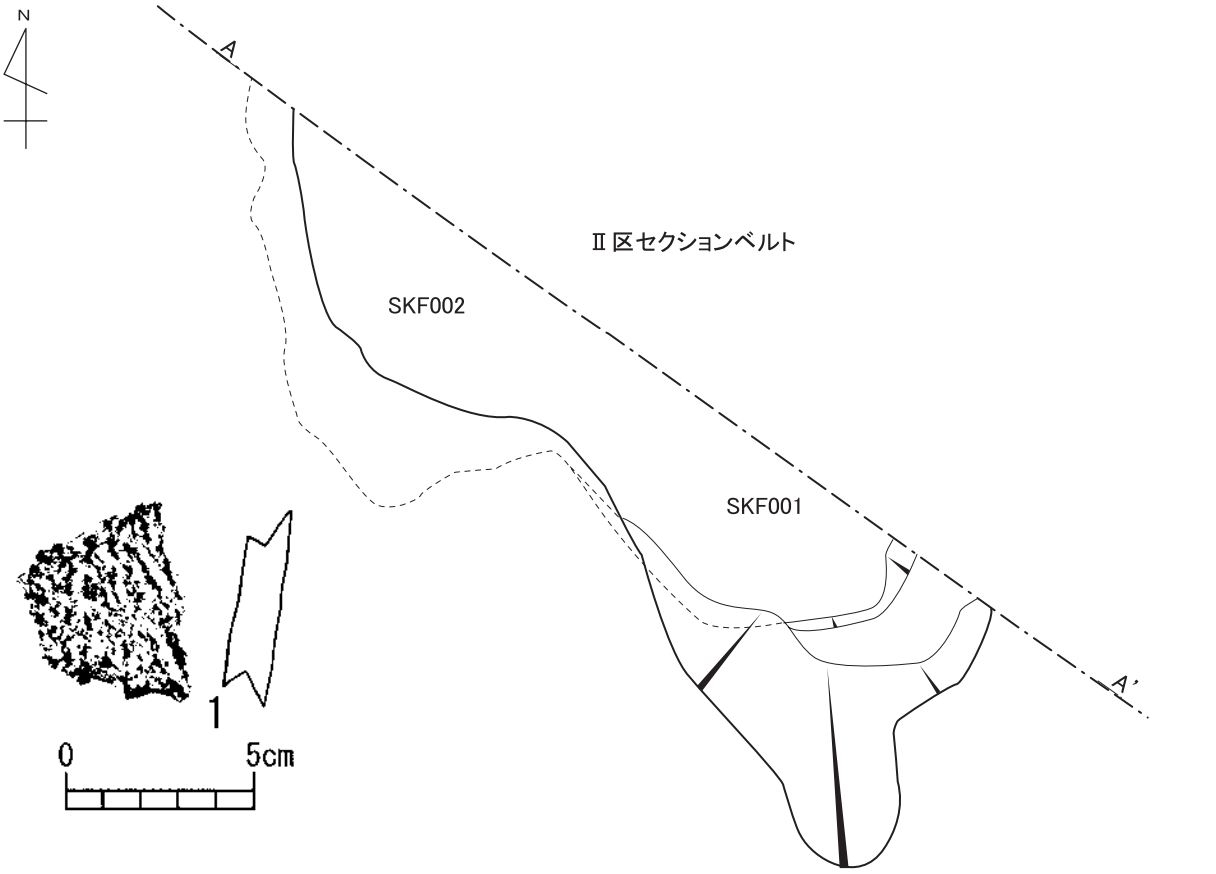
土坑内から第５６・５７図、第４表の石器が一括で１８点出土した。出土状況からそれらは意識的に埋納されたと考えられる。１５と１７を除き同一石材から剥離したもので、何点かは接合する。

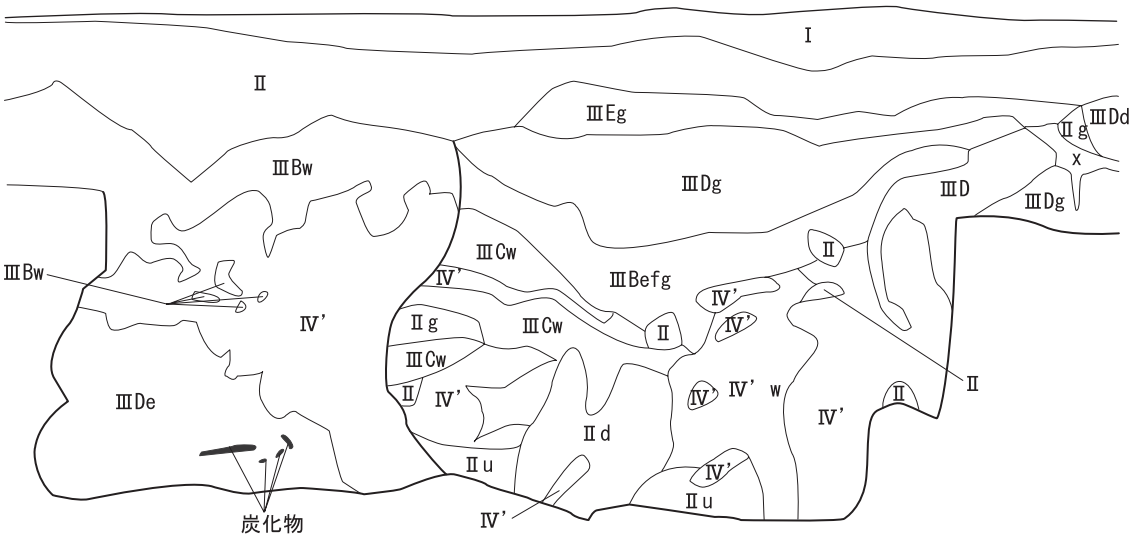
⑦ＳＫ０１１・ＳＫ０１１’・ＳＫ０１４（第５８図）

ＳＫ０１１はＬＲ５２・５３区に検出。木の根が土坑内に入り込んでいて、土層観察は困難であった。土層断面からはＳＫ０１１の東側に、まったく土質の異なる先行する小土坑（ＳＫ０１１’）があったようにも見受けられ、そのためか底面が二つの穴に分かれている。

図中の２つの土器片は同一個体の破片であり、ＳＫ０１１出土として記録し取り上げたが、出土レベルは共に１２２．０６４ｍと土坑上位での出土で、関連性は不明確というべきであろう。

ＳＫ０１４はＬＳ５１区の検出。開口部径０．６ｍ、底径は北西側でいびつで０．５５

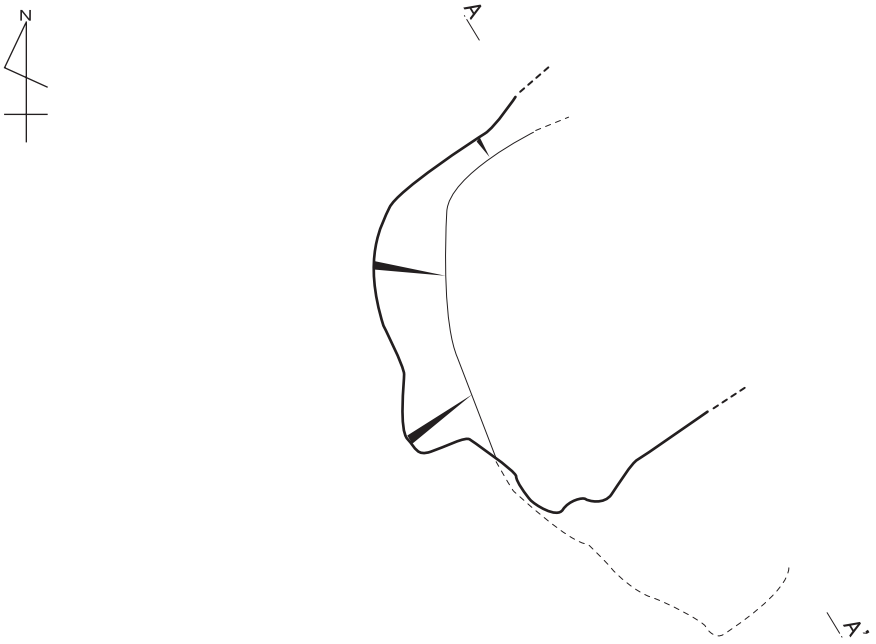


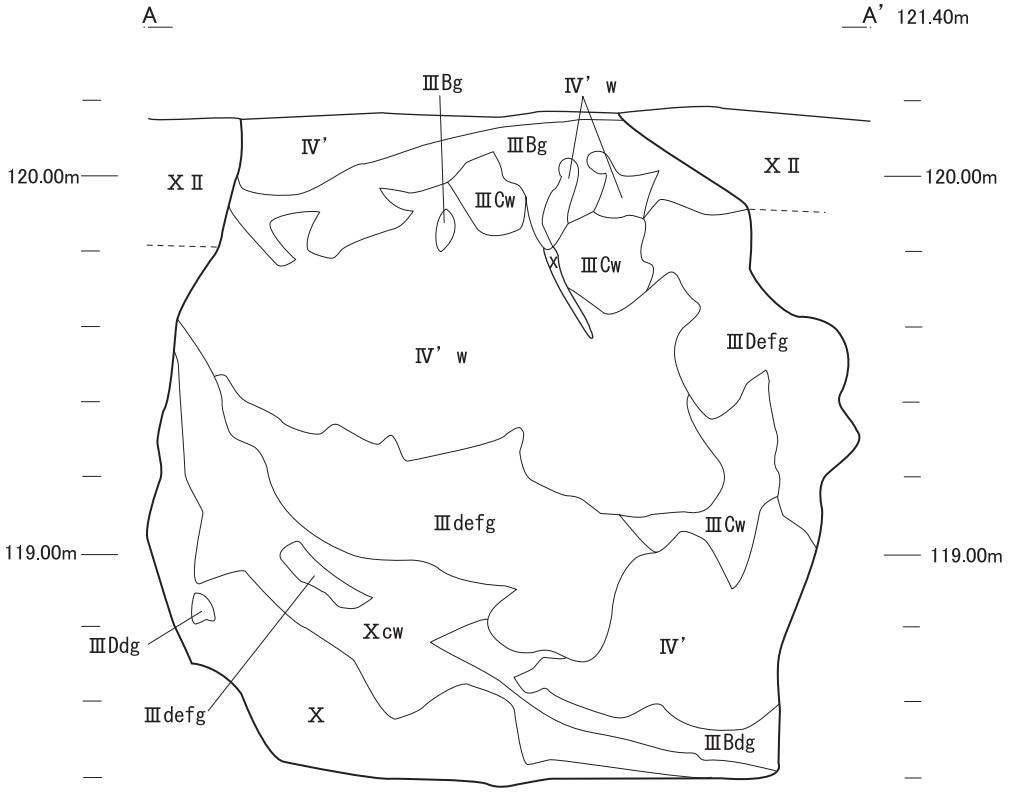


Ⅰ……表土
Ⅱ……黒色土
Ⅱd ……ボサボサの黒色土
Ⅱefg …ロームブロック・ローム粒混入黒色土
Ⅱg ……ローム粒混入黒色土
Ⅱu ……固くしまった黒色土
ⅢBefg…ロームブロック・ローム粒混入明褐色土
ⅢBw……黒色土混入明褐色土
ⅢCw……黒色土混入黄褐色土
ⅢD ……暗褐色土
ⅢDd……ボサボサの暗褐色土
ⅢDe……ロームブロック混入暗褐色土
ⅢDg……ローム粒混入暗褐色土
ⅢEg……ローム粒混入黒褐色土
Ⅳ'……ローム土(崩落土)
Ⅳ' w …黒色土混入ローム土
x ……木根

0 1m
Scale 1:20

第63図　SKF001・SKF002と出土遺物

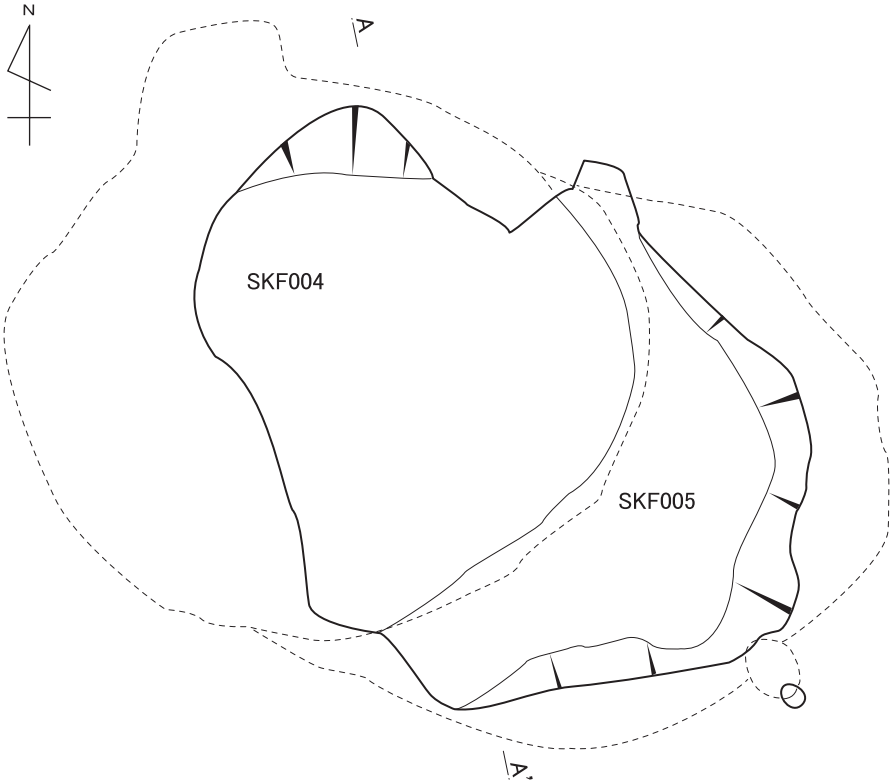


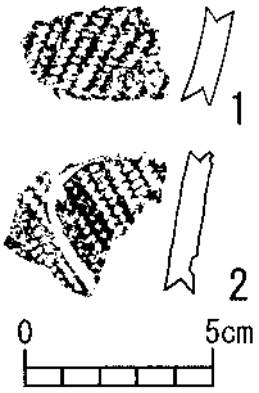


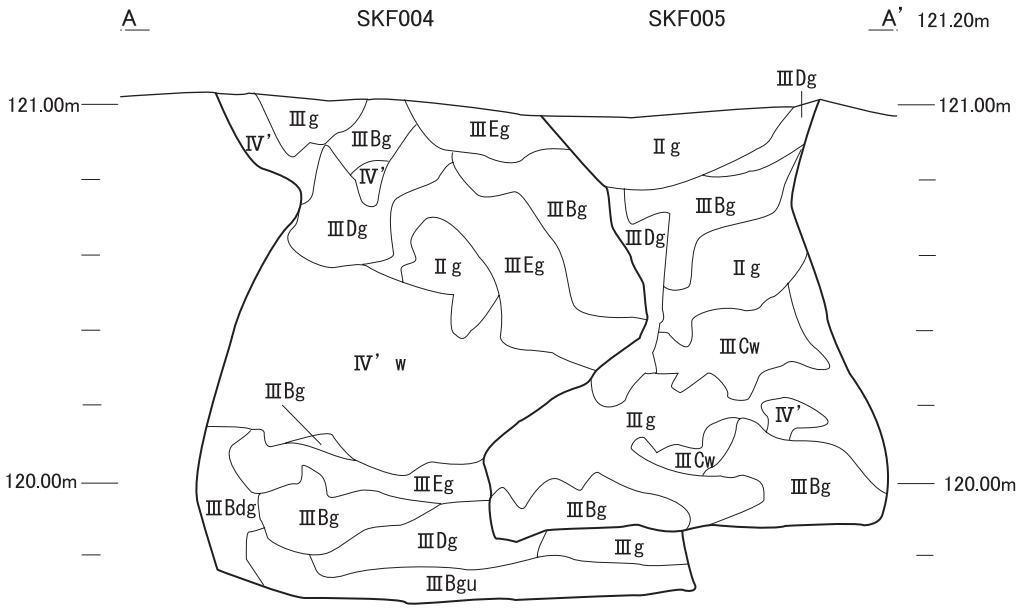
Ⅲdefg …ローム ブロック・ローム粒混入ボサボサの褐色土
ⅢBdg……ローム粒混入ボサボサの明褐色土
ⅢBg ……ローム粒混入明褐色土
ⅢCw ……黒色土混入黄褐色土
ⅢDdefg…ローム ブロック・ローム粒混入ボサボサの暗褐色土
ⅢDdg……ローム粒混入ボサボサの暗褐色土
Ⅳ' ……ローム土(崩落土)
Ⅳ' w …黒色土混入ローム土
Ⅹ ……軽石礫(シラス・崩落土)
ⅩCw ……黒色土混入サラサラの軽石礫(シラス)
ⅩⅡ ……堀上土(ＳＫＦ008)
x ……木根

0 1m
Scale 1:20

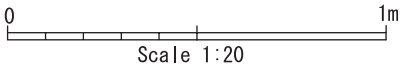
第64図　SKF003



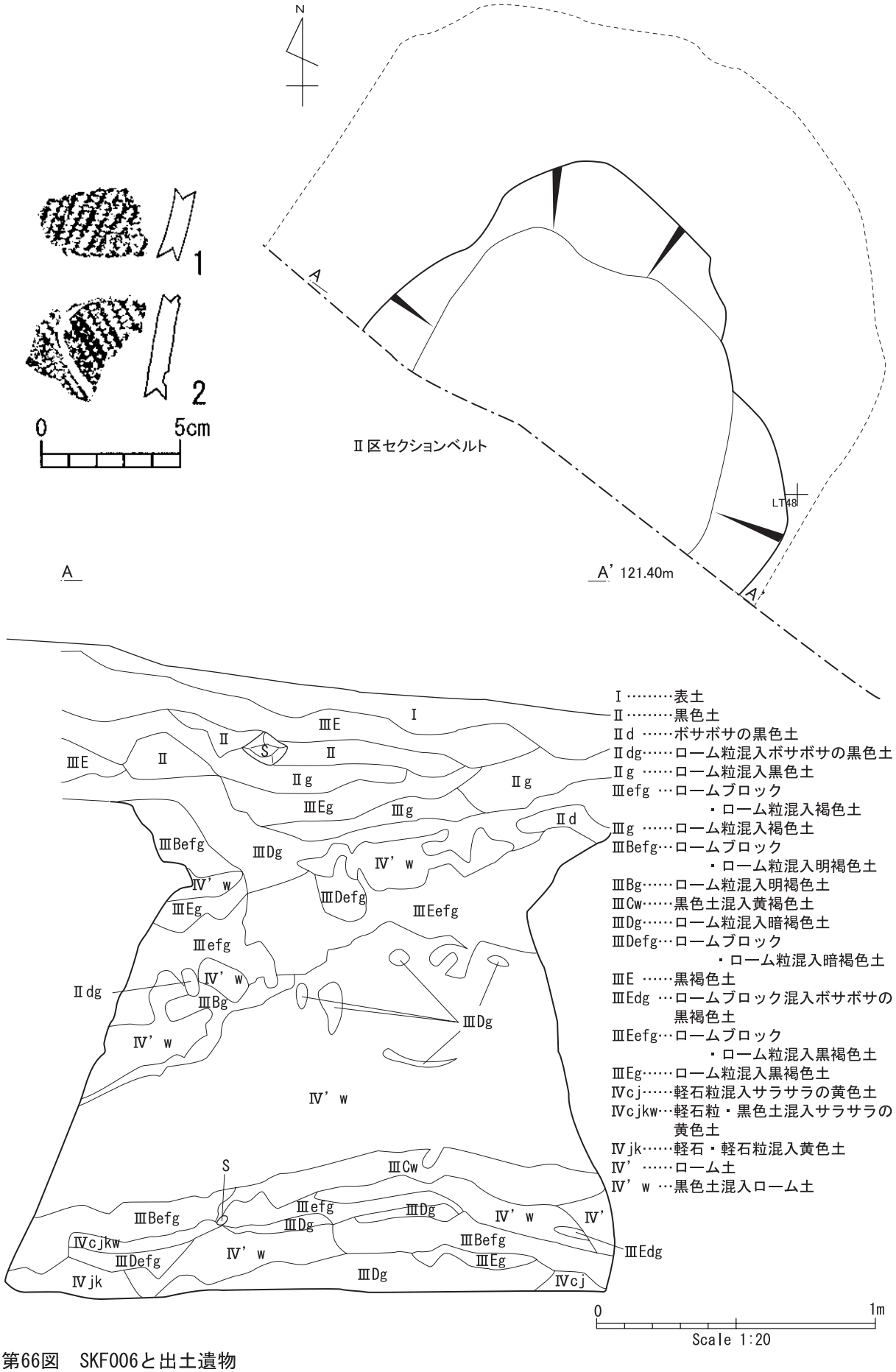




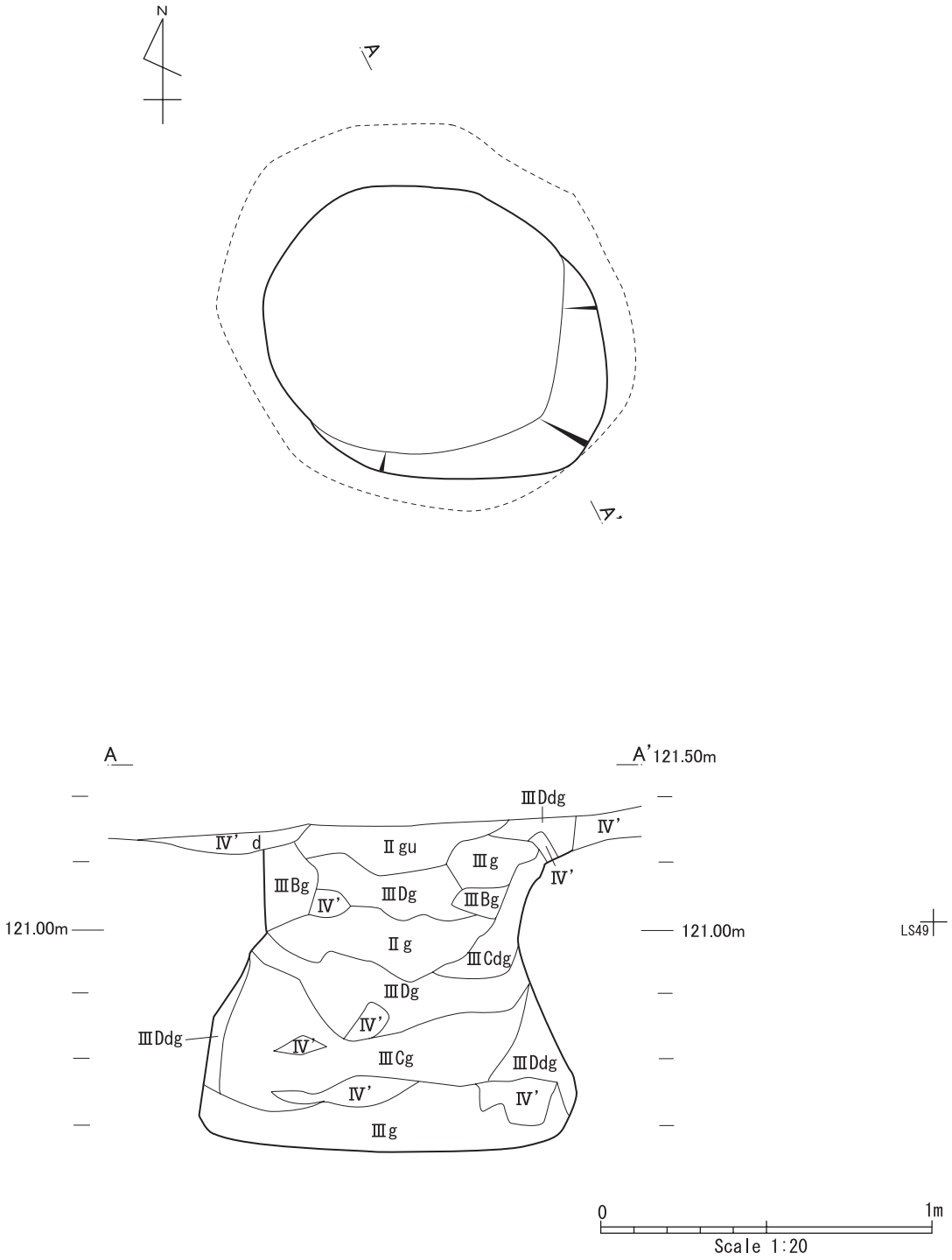
Ⅱg…ローム粒混入黒色土
Ⅲg…ローム粒混入褐色土
ⅢBdg…ローム粒混入ボサボサの明褐色土
ⅢBg…ローム粒混入明褐色土
ⅢBgu…ローム粒混入固くしまった明褐色土
ⅢCw…黒色土混入黄褐色土
ⅢDg…ローム粒混入暗褐色土
ⅢEg…ローム粒混入黒褐色土
Ⅳ'…ローム土
Ⅳ' w…黒色土混入ローム土



第65図　SKF004・SKF005と出土遺物



第66図　SKF006と出土遺物



Ⅱg……ローム粒混入黒色土
Ⅱgu …ローム粒混入かたくしまった黒色土
Ⅲg……ローム粒混入褐色土
ⅢBg …ローム粒混入明褐色土
ⅢCdg…ローム粒混入ボサボサの黄褐色土
ⅢCg …ローム粒混入黄褐色土
ⅢDdg…ローム粒混入ボサボサの暗褐色土
ⅢDg …ローム粒混入暗褐色土
Ⅳ' …ローム土
Ⅳ' d…ボサボサのローム土

第67図　SKF007

ｍ～０．６５ｍで、現深は０．３ｍ～０．３５ｍを測る。底面に見掛け上の４個の小ピットがあるが、土層断面で観察すると、どうも土坑掘り下げ途中で、作業を中断して埋め戻した形跡を読み取ることが出来る。底面のピットも意識的に配されたピットではなく、掘り下げ途中に出来ただけの穴と見るのが妥当かもしれない。土坑上位の北側に３個の川原石が、西側に山石１個と川原石１個の計２個が検出されたが、土坑よりも新しい時期のもので、土坑との直接的な関連性は認められない。

⑧ＳＫ０１３（第５９図）

ＬＴ４９区に検出。開口部径１．６ｍ前後、底径１．４ｍ～１．５ｍ、現深１．０ｍ前後を測り、埋積状況は人工的な埋め戻しの様相を呈す。

図中の土器片は土坑内中位面の１２０．３３６ｍから出土。

⑨ＳＫ０１６・ＳＫ０１６’（第６０図）

ＬＱ５５区に検出。開口部は径１．０ｍから１．１ｍの不整円形、底径は１．０ｍ～１．２ｍの不整円形、現深０．４ｍ～０．５ｍを測る。ＳＫ０１６を人工的に埋め戻した後、土坑内北東に開口部径０．５５ｍ、現深０．３５ｍの小土坑（ＳＫ０１６’）が掘られ、深鉢形土器が東側に口縁部を置いて斜めに埋められ、大振りな土器片の上に焼土塊が置かれている。

ＳＫ０１６とＳＫ０１６’の時間差は不明であるが、埋積土のローム粒の形状や混合割合いから、さほど時間差を置かない作業であったと推察される。

図中の深鉢形土器は口径２３．５㎝、体最大径２５．０㎝、現高２８．０㎝前後で、体下部を欠く。ＳＫ０１６’内および上位から出土したもので、埋め戻し期に故意に打ち欠いて埋納したと考えられる。

⑩ＳＫ０１７（第６１図）

ＬＰ５５・５６区の斜面地形に検出。開口部径１．４ｍ～１．５５ｍの不整円形で、開口部は全体に崩落している。頸部径が１．１５ｍ～１．３ｍで楕円形を呈する。底径は１．３ｍ前後で略円形である。土坑西外に開口部径０．３５ｍ、現深０．３５ｍのピットがあるが、相関関係は不明である。ＳＫ０１０と同様の意味を持つ柱穴であろうか。

土坑内からは遺物は出土しなかった。

⑪ＳＫ０１８（第６２図）

ＬＰ５６区に検出。開口部は１．２ｍ～１．２５ｍの隅丸方形、底面も１．１５ｍ～１．２ｍの隅丸方形で、現深は０．４ｍ～０．５ｍを測る。

調査現場での連絡不調から、土層断面図の作成前に全体を掘り下げてしまった。

土坑内から遺物は出土しなかった。

⑫ＳＫＦ００１・ＳＫＦ００２（第６３図）

ＭＡ４９区の土層観察用土手の南西側に検出。ＳＫＦ００２を切り込んでＳＫＦ００１が構築されている。

ＳＫＦ００１の開口部は大きく崩れていて旧態をとどめていない。南東部の壁下部に三日月状の平坦面が造られている。北西部はＳＫＦ００２との切り合い状況が明瞭で、それによると現表土下の第２層の黒色土下位面から掘り込まれていることが判る。壁は下半部が膨らみをもつ。現開口部径０．７ｍ、下半部の膨らみ径が０．７５ｍ、底径が０．５５ｍを測る。

土坑内から遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ００２は地山面からの深さ０．８ｍで、埋積土上面のローム土（Ⅳ’層）の上面は複雑な凹凸面を形成している。その上位はＳＫＦ００１の掘り上げ土である黒色土混入明褐色土（ⅢＢｗ）に覆われていて、Ⅳ’層上面の複雑な凹凸はＳＫＦ００１掘り上げ時の作業によるものと考えられる。

図中の土器片は土坑内出土で胎土に植物繊維を多量に含む円筒下層式土器片である。

⑬ＳＫＦ００３（第６４図）

ＭＡ５０区に検出。フラスコ状土坑としたが、その形状はフラスコとは言いがたいものである。開口部径１．０ｍ、胴部最大径が１．９ｍ、底径が１．６５ｍ、現深１．８ｍで、不整な胴ふくらみのタル形とでも言うべき形状である。

ＳＫＦ００８の開口部が北側０．５ｍほどにあって、その掘り上げ土と考えられるⅩⅡ層面から掘り下げ構築している。

土坑内から遺物は出土しなかった。

⑭ＳＫＦ００４・ＳＫＦ００５（第６５図）

ＬＴ５０区に検出。ＳＫＦ００４を切り込んでＳＫＦ００５を構築している。ＳＫＦ００４が深いためその底部の形状はしっかり残っている。

ＳＫＦ００４は推定開口部径１．３ｍ、推定頸部径が０．９ｍ、底径が１．３ｍ前後の円形で、北側の開口部から頸部は受口状に内湾している。

図中の２片の土器は同一個体で、ＳＫＦ００４底面上位１１９．９０３ｍから出土した。

ＳＫＦ００５は開口部の崩落が著しく旧状をとどめていない。現開口部径１．２ｍ前後、現底径１．５ｍ前後、現深１．１ｍを測る。西側壁はＳＫＦ００４の埋積土を壁としていて崩落が激しく、フラスコ形状が判る状況部分を図示した。

土坑内から遺物は出土しなかった。

⑮ＳＫＦ００６（第６６図）

ＬＴ４９区の土層観察ベルト下に検出した。開口部をローム粒混入暗褐色土（ⅢＤｇ）が覆っている。開口部径１・７ｍ前後、頸部径が１．２ｍ前後、底径が２．１５ｍ前後、現深１．８ｍを測る。

図中の土器小片が南東開口部付近より出土したが、ＳＫＦ００６との関連は不明。

⑯ＳＫＦ００７（第６７図）

ＬＳ５０区に検出。開口部径０．８ｍ前後、頸部径０．６ｍ前後、底径１．１ｍ～１．３ｍ、現深０．９５ｍを測る。開口部南東側は崩落しているが、残りは旧状をとどめている。

土坑内から遺物は出土しなかった。

⑰ＳＫＦ００８（第６８図）

ＭＡ５０・５１区に検出。北西側は調査区範囲外で、本体の南東側半分を調査した。開口部径１．５ｍ、頸部径０．８ｍ、底径１．５５ｍ、深さ１．４５ｍ前後で、底面に起伏がみられる。

土坑内下部の黒色土混入軽石礫（Ｘｗ）層中、１１９．８８６ｍから図中の土器小片が出土した。

⑱ＳＫＦ００９（第６９図）

ＬＳ５３、ＬＳ５３区に検出。推定開口部径１．２ｍ前後、頸部径０．７ｍ、底径２．２ｍ、深さ１．５５ｍを測る。体中央部が大きく膨らむ。北側に隣接するＳＫ００８の壁を壊して構築している。

土坑内から遺物は出土しなかった。

⑲ＳＫＦ０１０（第７０図）

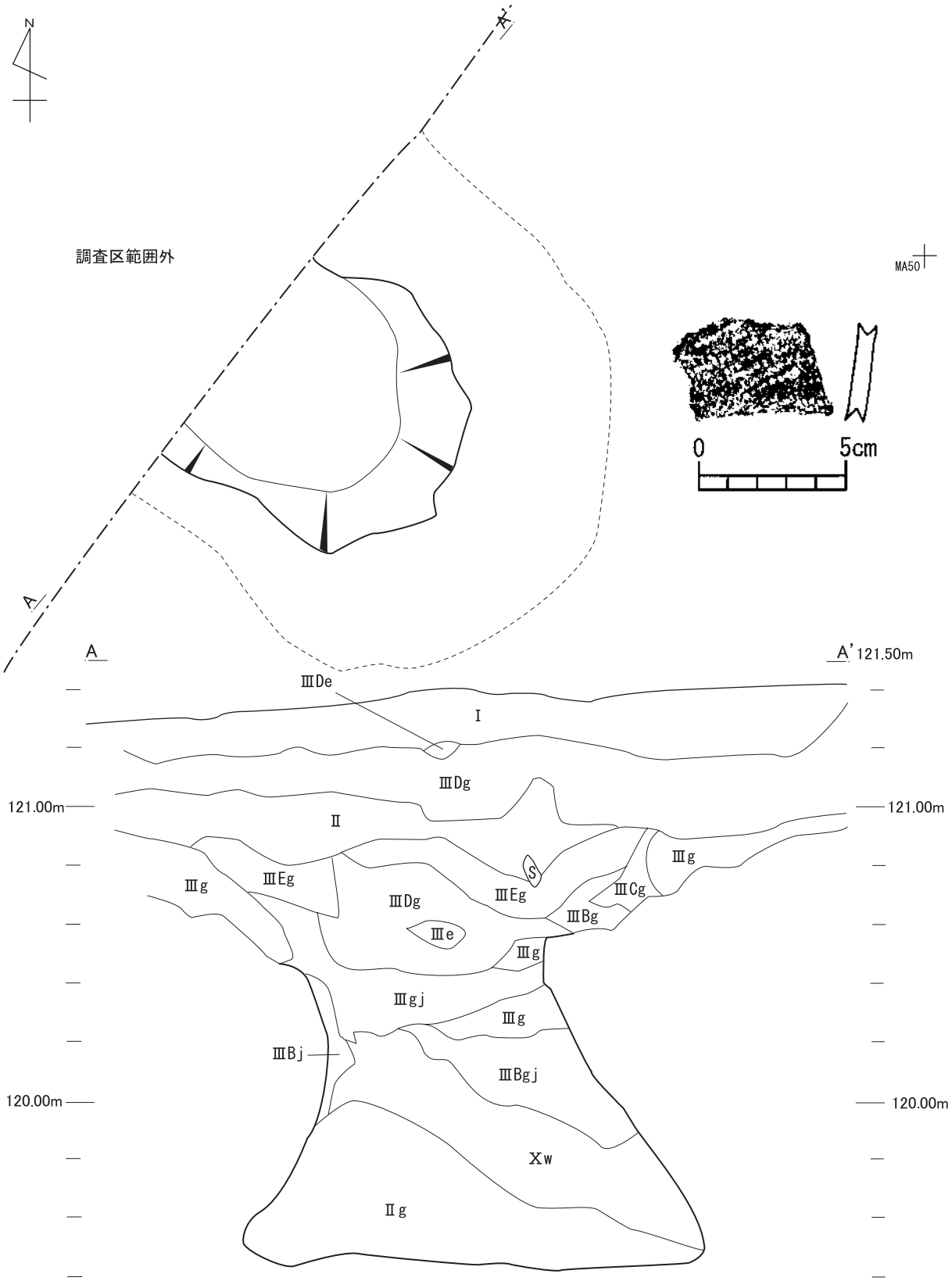
ＬＲ５４・５５区に検出。北西側は調査区範囲外で、本体の南東側半分を調査した。開口部径０．９５ｍ、頸部径０．５５ｍ前後、底径１．８ｍ前後、深さ１．０ｍ前後を測る。頸部から体部へ急激に広がるインクビン形とでもいうべき特異な形態で、そのためか北東壁下に埋積土が充填されていない空洞がある。

土坑内から遺物は出土しなかった。

⑳ＳＫＦ０１１（第７１図）

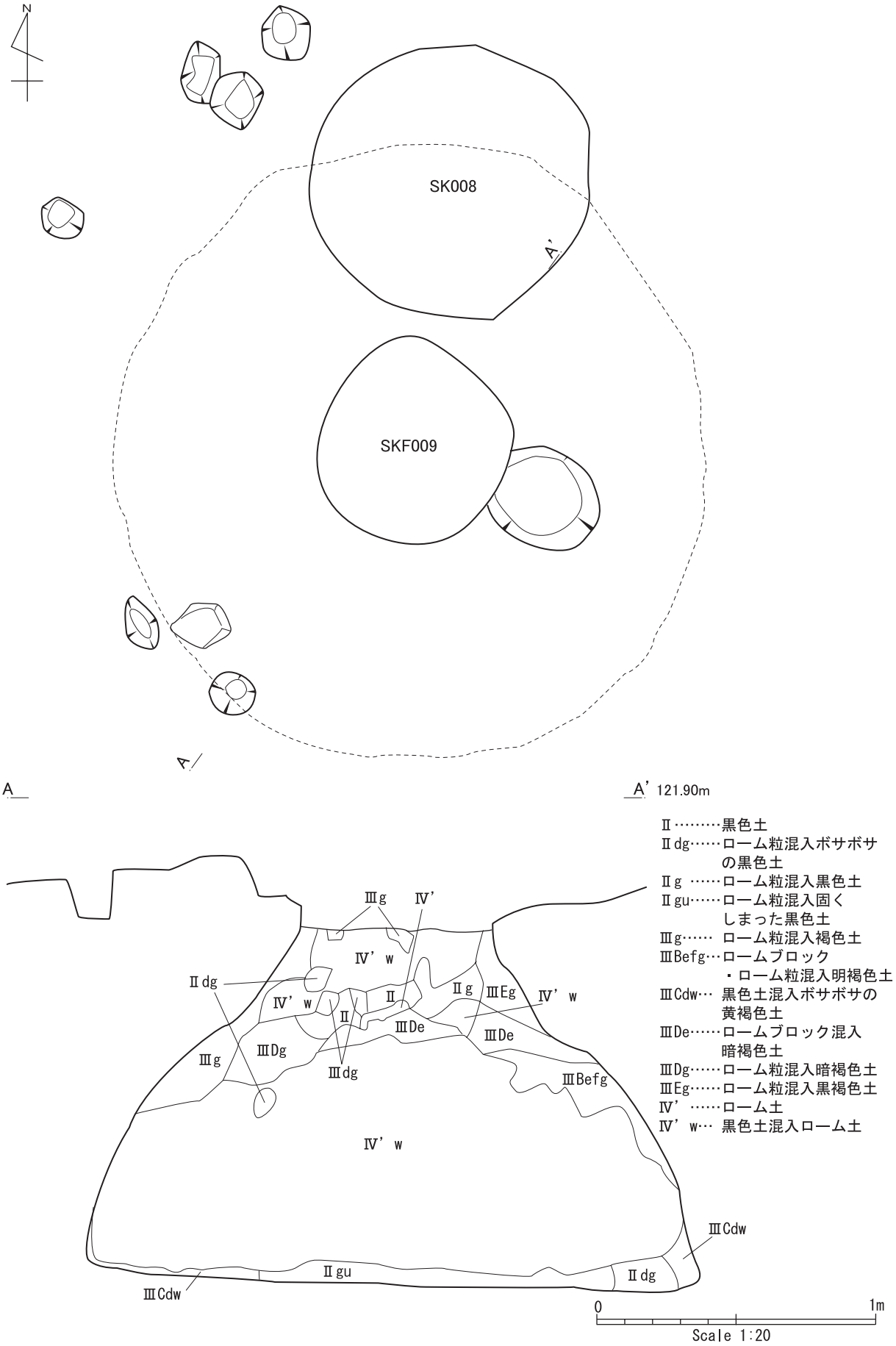
ＬＰ５２・５３、ＬＱ５２・５３区に検出。開口部径１．４ｍ～１．６ｍ、頸部径０．９ｍ前後、底径１．７ｍ～１．８ｍ、深さ１．１ｍを測る。

土坑内頸部の埋積土であるローム粒混入黒褐色土（ⅢＥｇ）中、１２２．１３７ｍより図中の土器片が出土、胎土に植物繊維を多量に含む円筒下層式土器である。

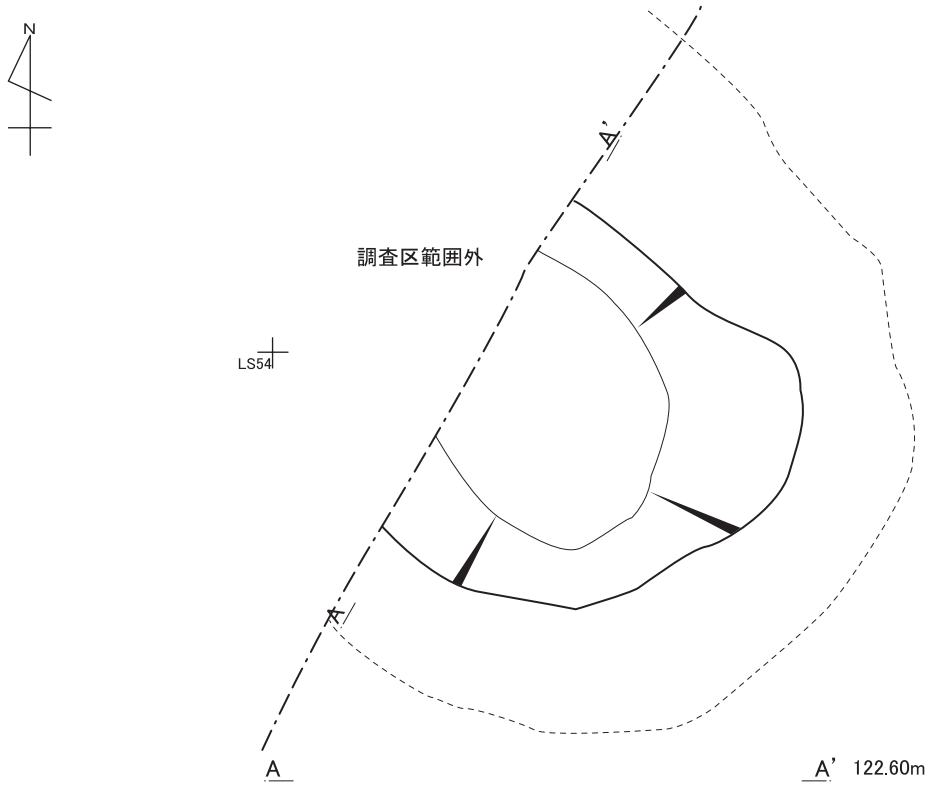


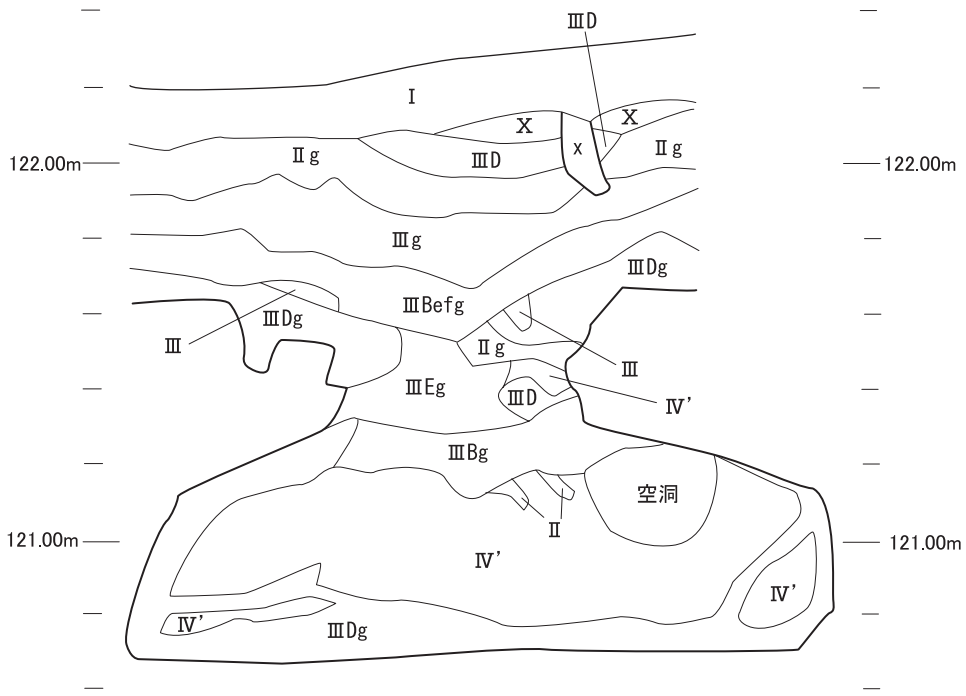
Ⅰ ……表土
Ⅱ ……黒色土
Ⅱg……ローム粒混入黒色土
Ⅲe……ロームブロック混入褐色土
Ⅲg……ローム粒混入褐色土
Ⅲgj …ローム粒・軽石粒混入褐色土
ⅢBg …ローム粒混入明褐色土
ⅢBgj…ローム粒・軽石粒混入明褐色土
ⅢBj …軽石粒混入明褐色土
ⅢCg …ローム粒混入黄褐色土
ⅢDg …ローム粒混入暗褐色土
ⅢDe …ロームブロック混入暗褐色土
ⅢEg …ローム粒混入黒褐色土
Xw……黒色土混入軽石礫（シラス）

第68図　SKF008と出土遺物


N
SK008
SKF009
A
A'
A'
121.90m
Ⅱ……黒色土
Ⅱdg……ローム粒混入ボサボサの黒色土
Ⅱg ……ローム粒混入黒色土
Ⅱgu……ローム粒混入固くしまった黒色土
Ⅲg…… ローム粒混入褐色土
ⅢBefg…ロームブロック・ローム粒混入明褐色土
ⅢCdw… 黒色土混入ボサボサの黄褐色土
ⅢDe……ロームブロック混入暗褐色土
ⅢDg……ローム粒混入暗褐色土
ⅢEg……ローム粒混入黒褐色土
Ⅳ' ……ローム土
Ⅳ' w… 黒色土混入ローム土
Ⅲg
Ⅳ'
Ⅳ' w
Ⅱdg
Ⅱ
Ⅱg
ⅢEg
ⅢDe
ⅢDg
Ⅲdg
ⅢBefg
ⅢCdw
Ⅱgu
0
1m
Scale 1:20

第69図　SKF009

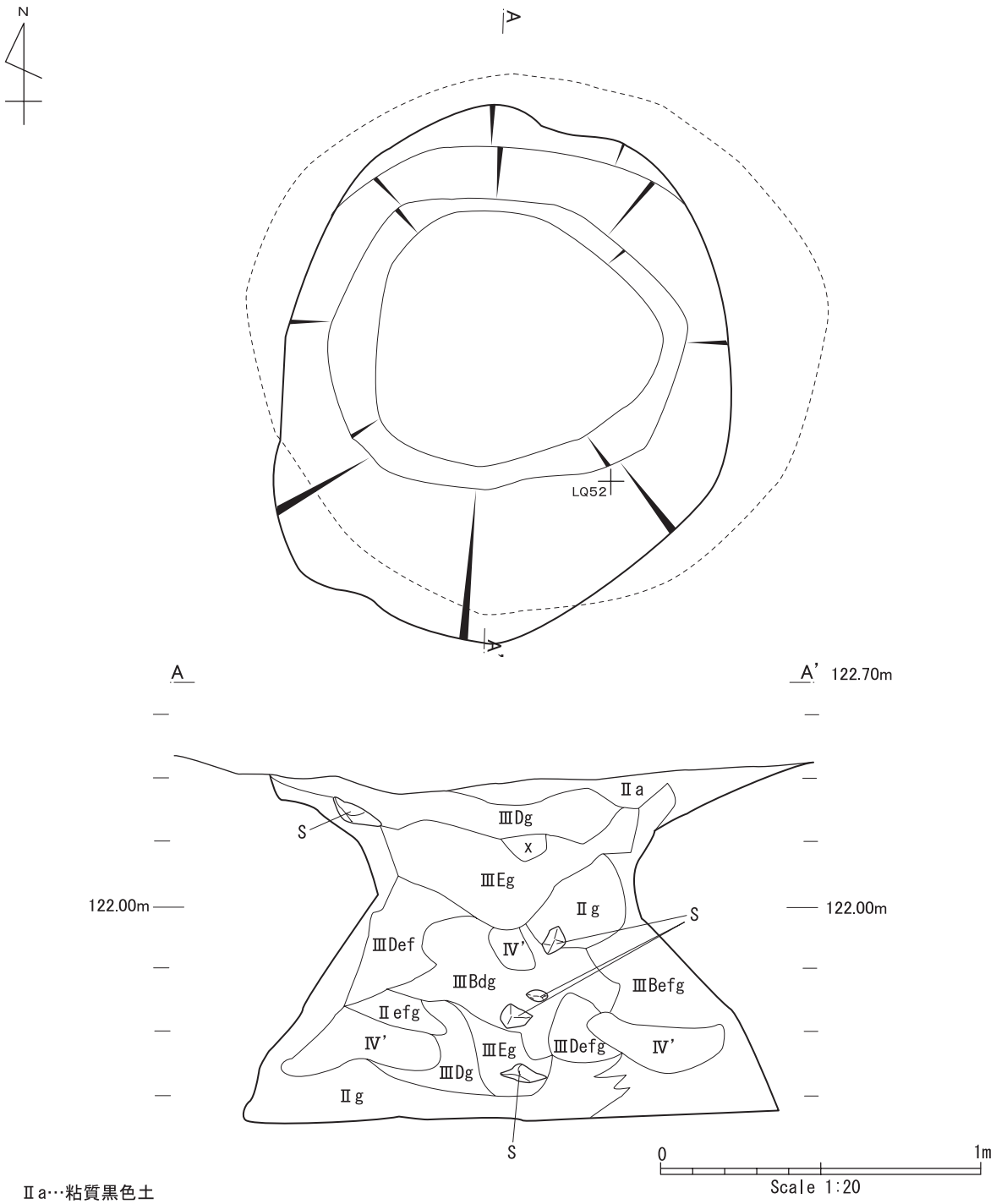




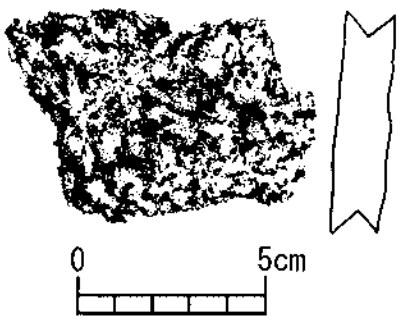
Ⅰ……表土
Ⅱ……黒色土
Ⅱg…… ローム粒混入黒色土
Ⅲ……褐色土
Ⅲg…… ローム粒混入褐色土
ⅢBefg…ロームブロック・ローム粒混入明褐色土
ⅢBg……ローム粒混入明褐色土
ⅢD…… 暗褐色土
ⅢDg……ローム粒混入暗褐色土
ⅢEg……ローム粒混入黒褐色土
Ⅳ' ……ローム土
X……軽石火山礫（十和田a降下火山灰二次堆積）
x…… 木根

0 1m
Scale 1:20

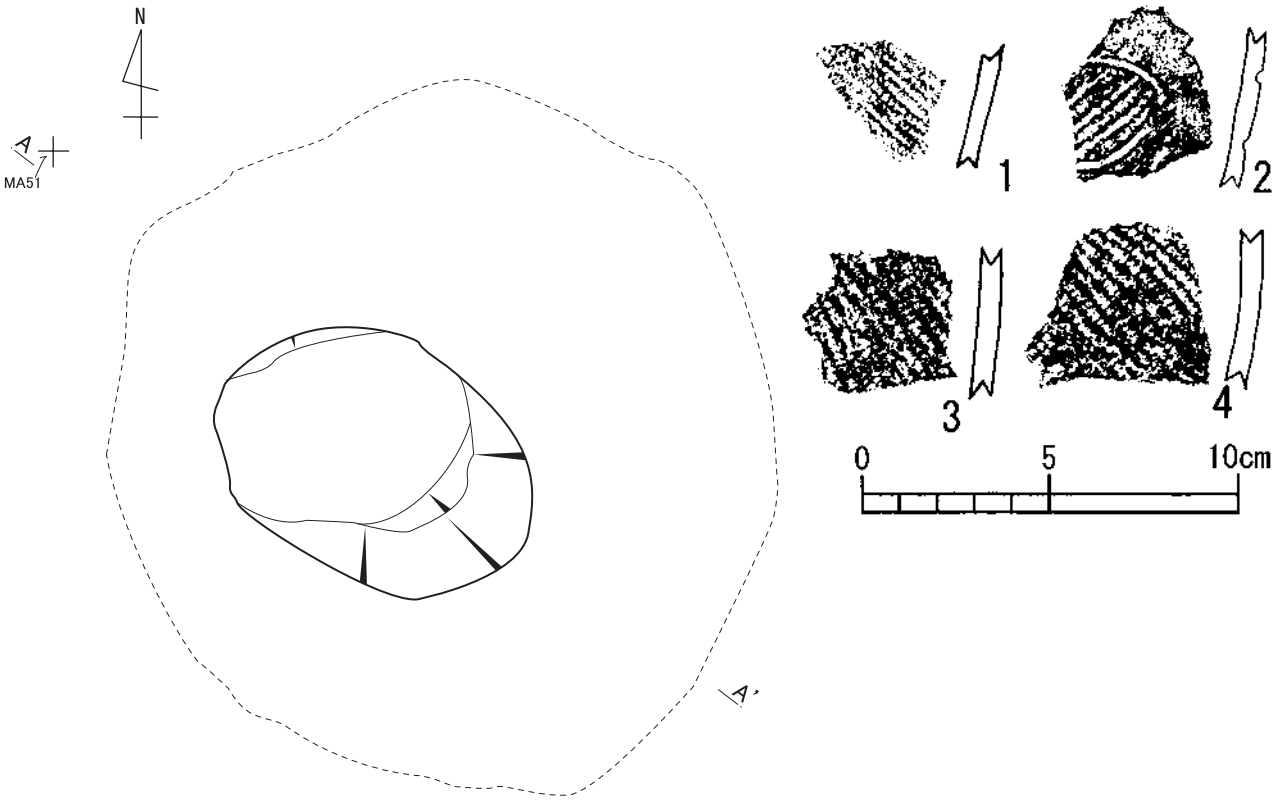
第70図　SKF010

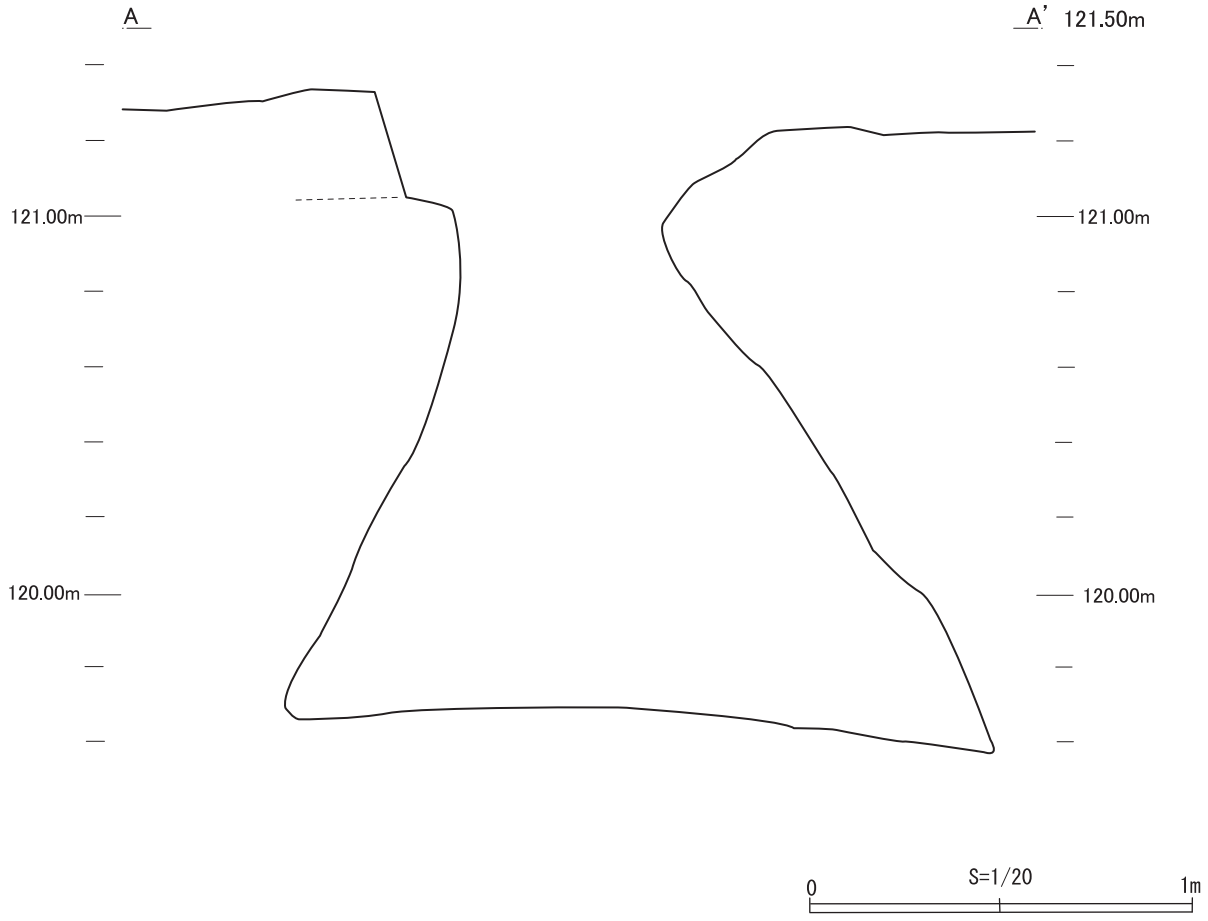


Ⅱa…粘質黒色土
Ⅱefg…ロームブロック・ローム粒混入黒色土
Ⅱg…ローム粒混入黒色土
ⅢBdg…ローム粒混入ボサボサの明褐色土
ⅢBefg…ロームブロック・ローム粒混入明褐色土
ⅢDef…ロームブロック・ローム粒混入暗褐色土
ⅢDefg…ロームブロック・ローム粒混入暗褐色土
ⅢDg…ローム粒混入暗褐色土
ⅢEg…ローム粒混入黒褐色土
Ⅳ'…ローム土
x…木根

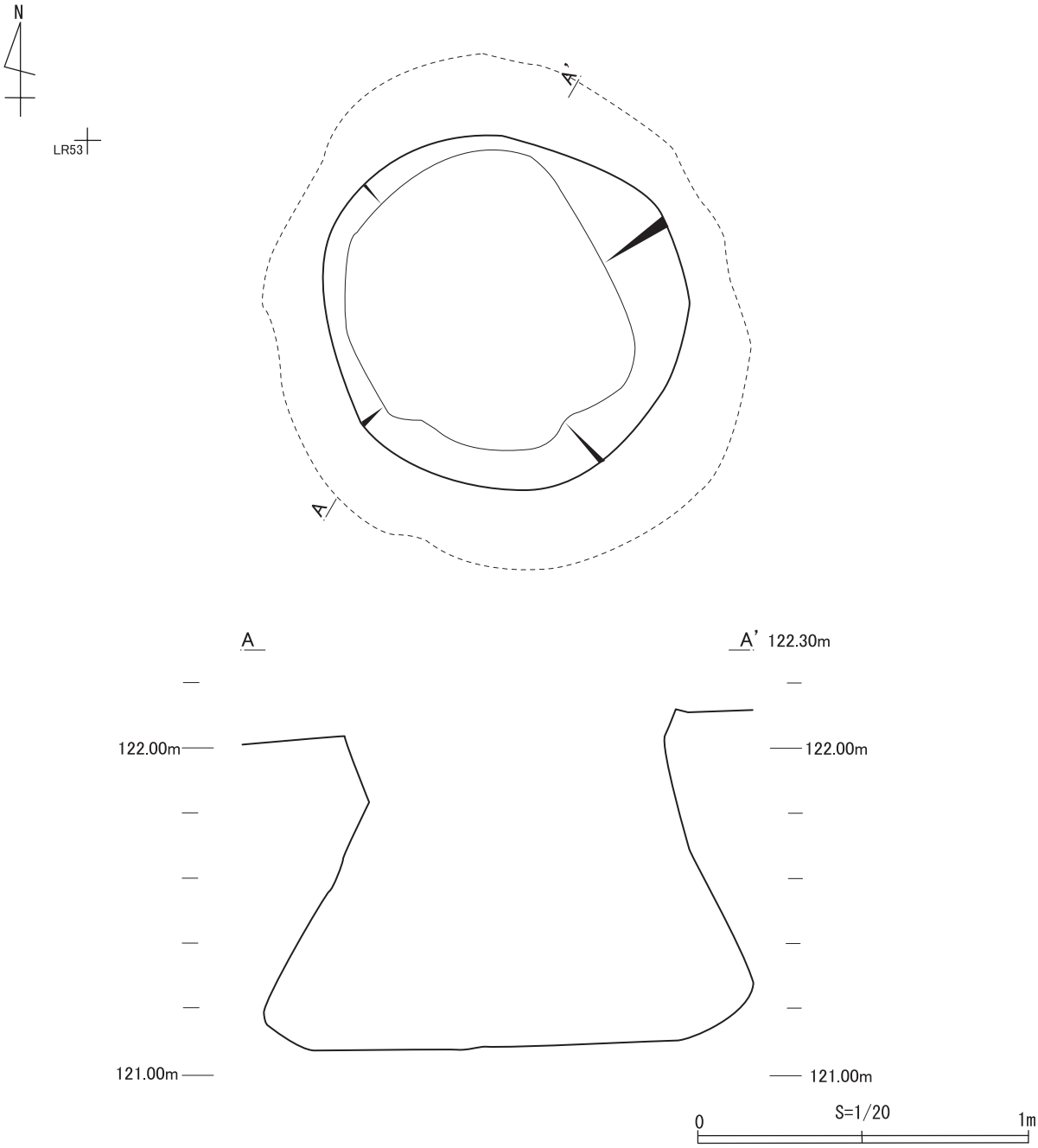


第71図　SKF011と出土遺物





第72図　SKF012と出土遺物



第73図　SKF014

㉑ＳＫＦ０１２（第７２図）

ＬＴ５１区に検出。北東側は調査区範囲外。開口部径０．６５ｍ～０．９ｍ、頸部径０．５ｍ～０．６５ｍ、底径１．８ｍ～１．９ｍ、深さ１．６ｍ前後を測る。開口部が狭く埋積土断ち割りが出来ず、半截する時間もなかったので埋積土断面図は取らなかった。

土坑内から図中の小土器片が出土した。

１・２は土坑内上位の１２０．６５４ｍから、３は底部の１１９．８０６ｍ、４は１１９．８１０ｍからの出土である。

㉒ＳＫＦ０１４（第７３図）

ＬＱ５３区に検出。開口部径１．１ｍ前後、頸部径０．８ｍ～０．９ｍ、底径１．４５ｍ～１．６ｍ、現深０．９５ｍを測る。ＳＫ０１８同様に調査時の連絡ミスから、埋積土断面図を取らないうちに掘り下げ作業に入ってしまった。

土坑内から遺物は出土しなかった。

（３）遺構外出土遺物

①土器（第７４～７８図）

第７４図はＬＴ４７区に単独で出土した円筒上層ｅ式土器。最上位出土破片が１１８．８９６ｍ、最下位出土破片が１１８．７３３ｍからの出土である。口縁は４つの山形突起になると推測され、口唇に大振りな撚糸圧痕を施す。推定口径２４㎝、底径９～９．５㎝、器高３０㎝を測り、器体全体に条節の細かな縄文を、体上部では斜位に、体下部では縦位に施す。

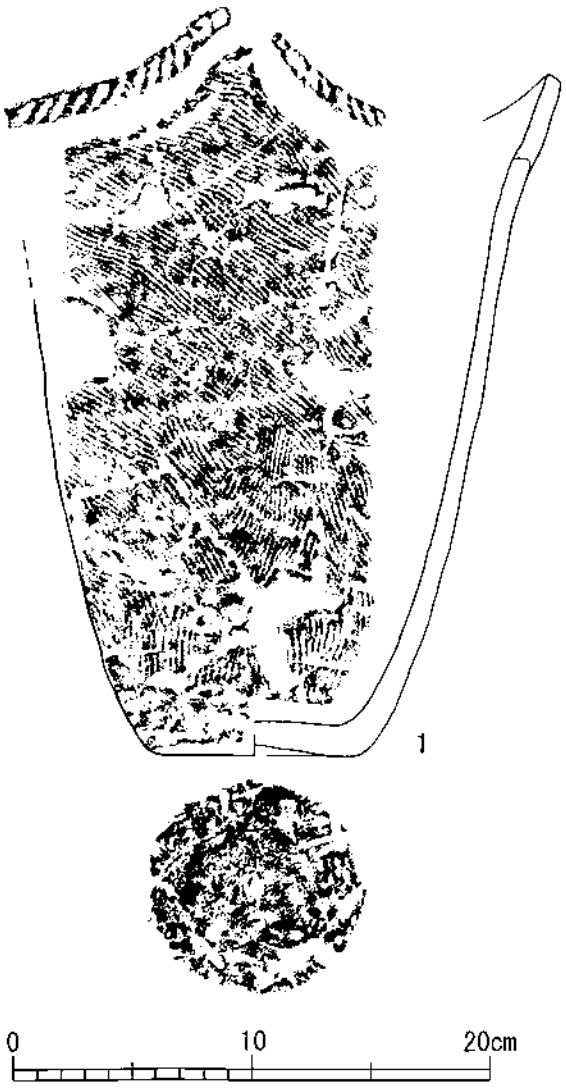
出土状況は土圧で押しつぶされ、斜面下方に押し下げられた状況で、土坑等の施設は伴わない。単独で廃棄されたものと考えられる。

第７５図の１・２・３はＬＱ５２区出土。４はＬＱ５２区とＬＲ５０区出土の土器片が接合、５・６・７はＬＲ５０区出土。

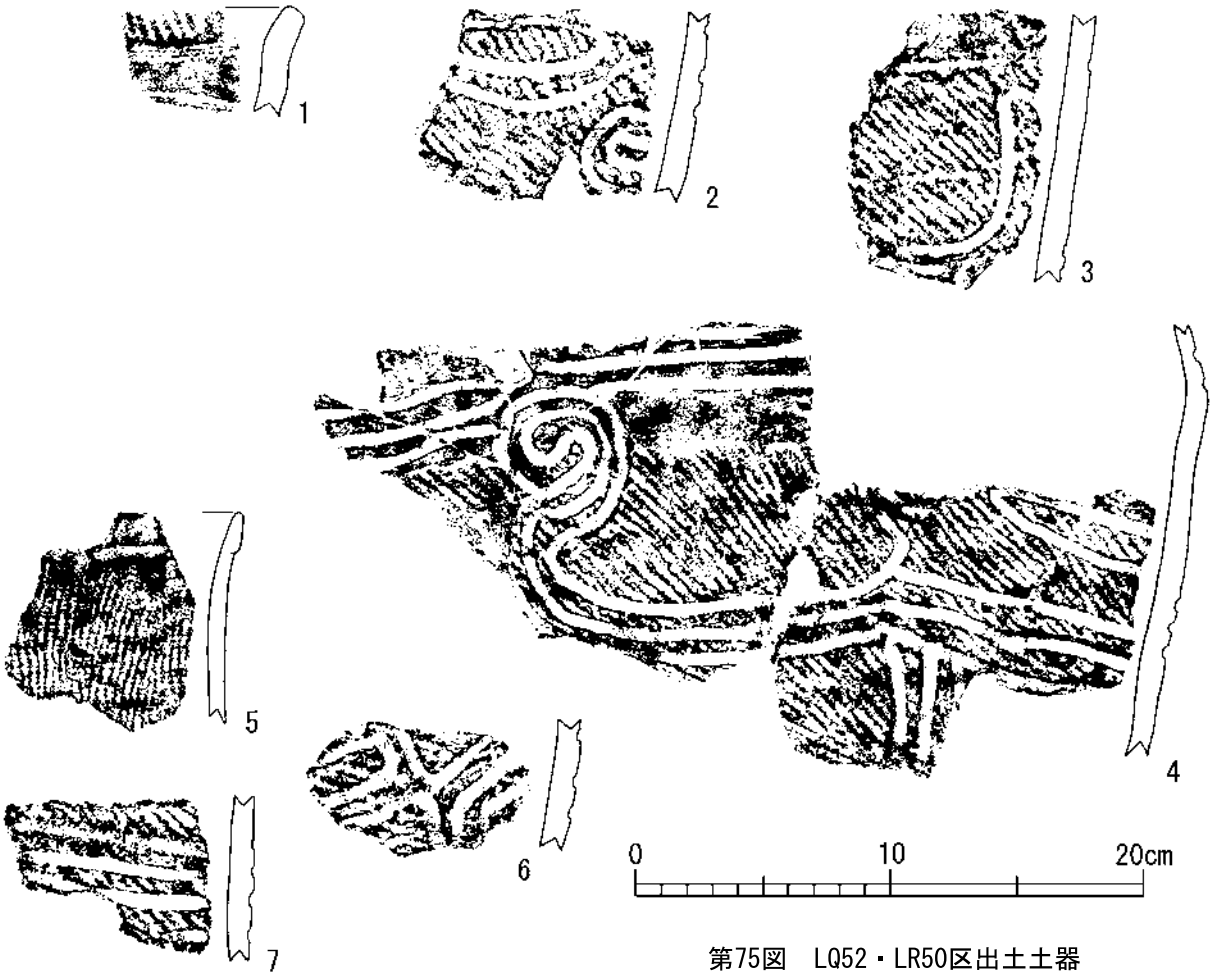
１は口唇部から地文を施し、のちに口縁部を磨り消し、３条の節の非常に細かな撚糸原体を押圧している。

２・３・４・６・７は地文の上から、３条単位で横位・縦位・蕨頭状沈線文を配す。３の上端は磨り消されていて口縁部であろうと推察される。４は体上部にあたり上端部が内湾していて、肩部を形成するものと推察される。４の断面図は上端が右に、下端が左に振れてもう少し横に広がる鉢形に近いスタイルになるかも知れない。

５は折り返し口縁で口縁部は磨り消していて、体部には条節の細かい地文が縦



第74図　LT47区出土土器



第75図　LQ52・LR50区出土土器

位に施文されている。

第７６図の１・２・３・４・５はＬＲ５５区出土。６・７・８はＬＲ５５区とＬＱ５５区出土の土器片が接合した。

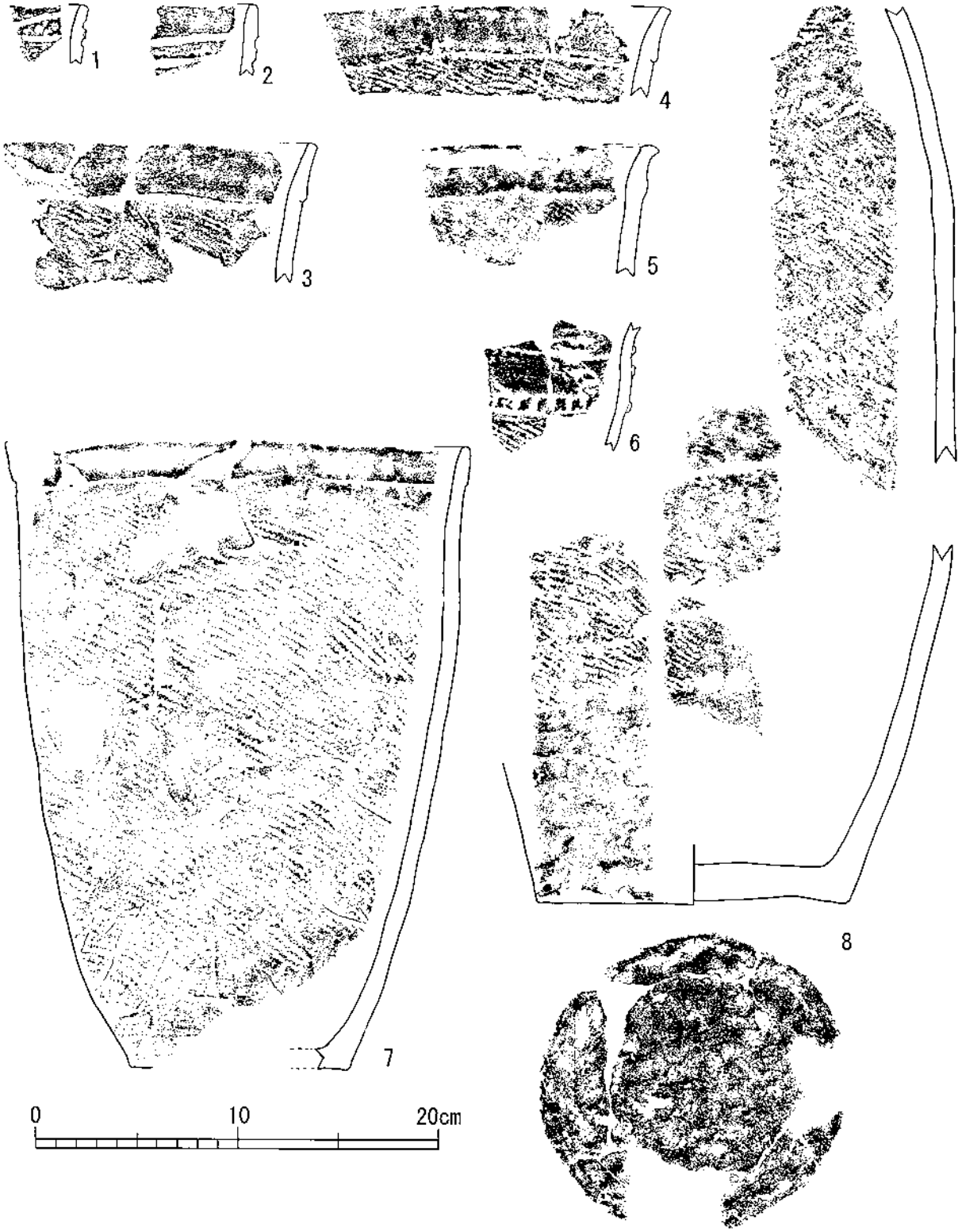
１は口縁部に太くて深い沈線を２条廻らし、沈線間に小さな竹管文を配す。

２は地文上に太くて深い沈線を２条廻らし、沈線間および体部に地文を残し、口縁部を磨り消している。

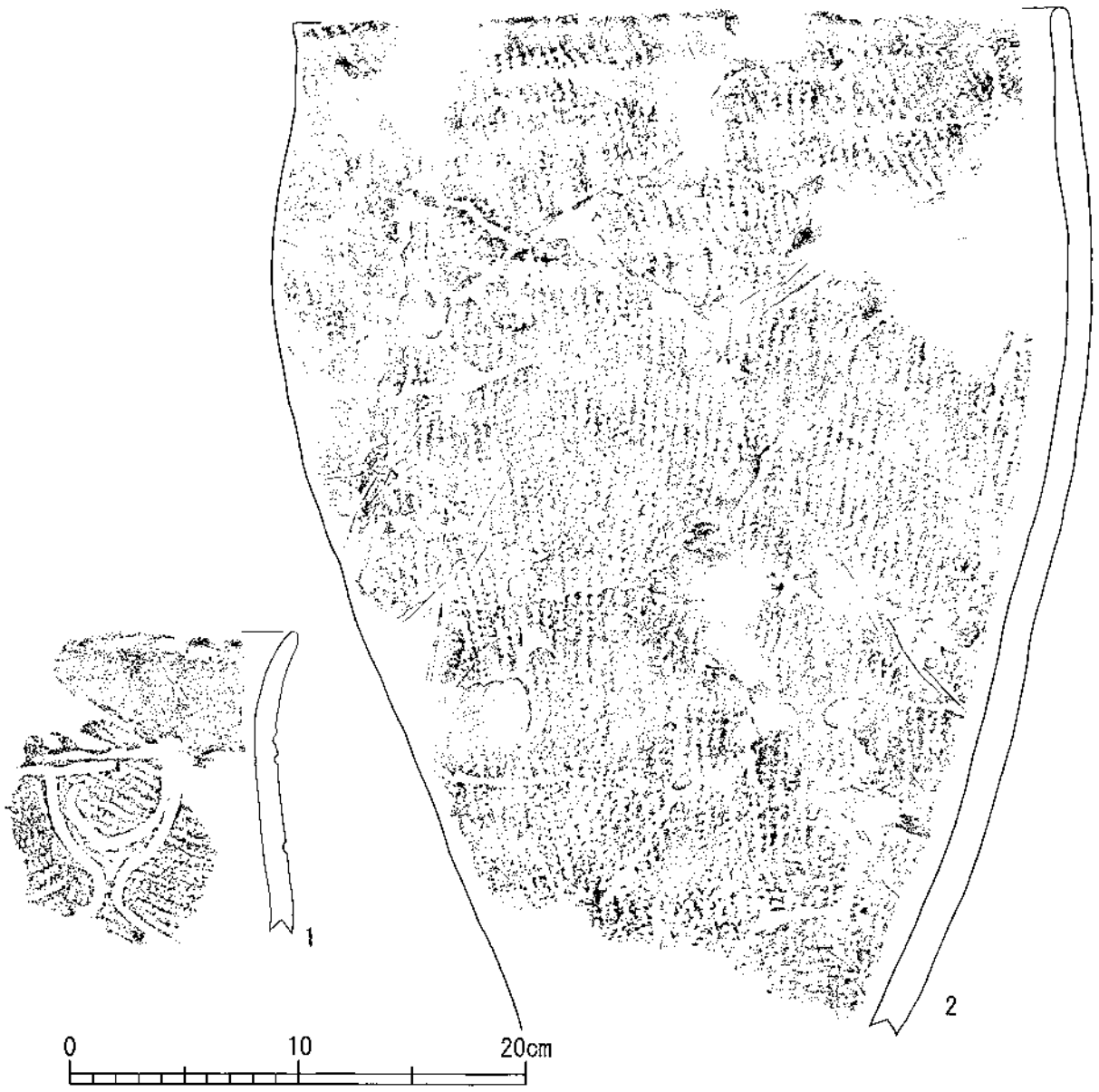
３・４・５・７は同類の土器であるが、細部にはそれぞれの個性が見られる。７は口径２３～２３．５㎝、底径１０．５～１１㎝、器高３０～３１㎝で底部は故意に壊されている。７の口唇は丸みをもつが他は平坦である。特に５は釘頭状を呈し頸部が内外に膨らんでいる。

６は体上部の破片で、下端に体部地文が認められる。その上位は磨り消されていて、そこに「Ｚ」字状の隆帯を貼り付け、隆帯上に棒状工具で刻み目を施し、さらに隆帯の中内ぎりぎりに撚糸原体を押圧している。きわめて特徴的な文様の土器片である。

８は現器高４４㎝、底径１３㎝、口縁部を欠くが現上端はきわめて口縁に近いと推察でき、体央部に最大径をもつ。上端部に横位、体部は斜位に条節の細かい地文が幾度も重ね



第76図　LR55・LQ55区出土土器



第77図　LQ56区出土土器

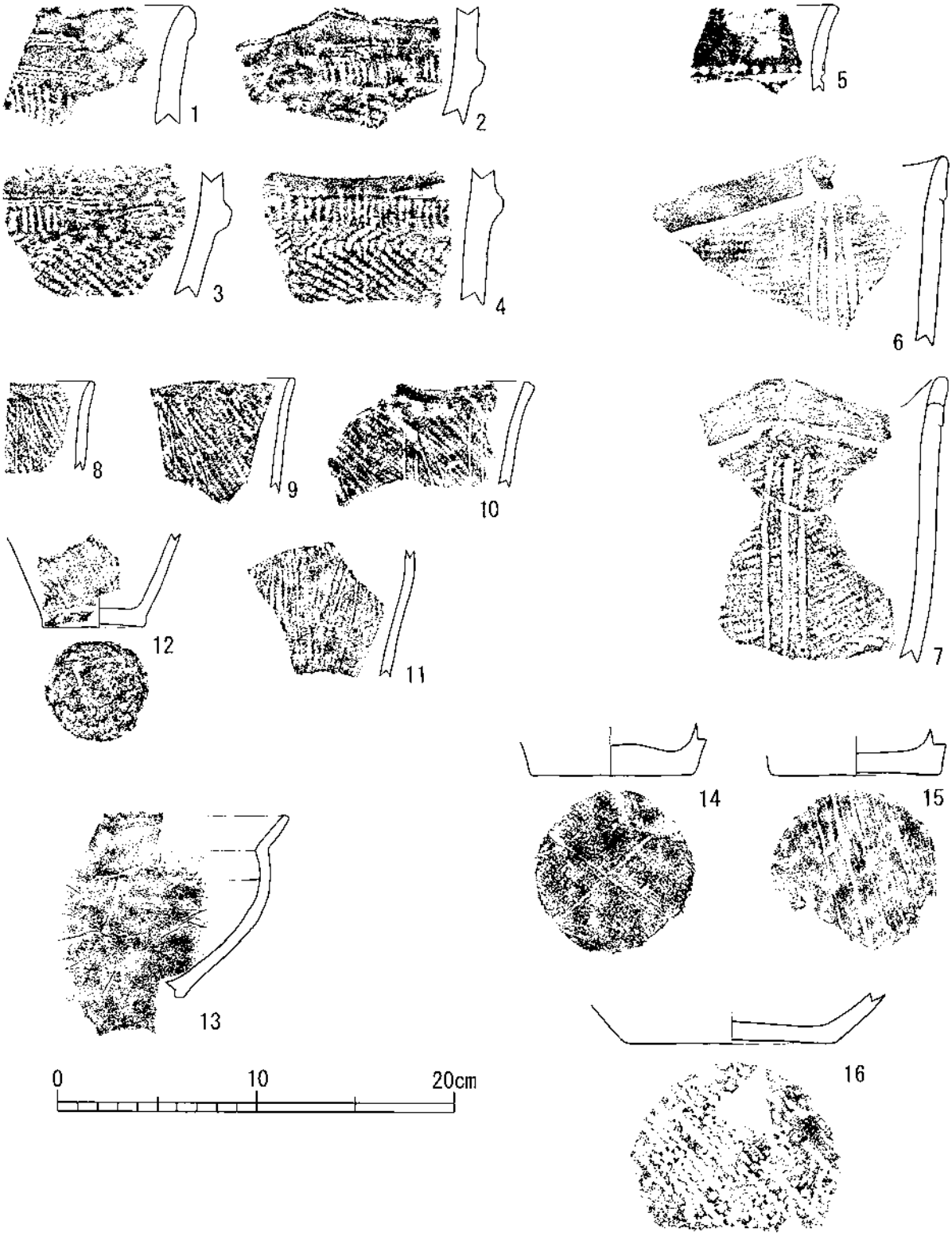
て施され、体下部１０㎝ほどは磨り消されている。

第７７図はＬＱ５６区出土。１・２ともに大型の土器である。

１は口縁が外反し磨り消し、体部に大振りな地文を施し、口縁部無文帯下に１条の沈線を廻らすが、沈線の引き始め部と引き終わり部は２条になっている。横位沈線下に砂時計形の曲線が沈線で描かれてあるが全体のモチーフは不明である。

２は口径３４～３５㎝、現高４５㎝で、最大径が体上部にあって３６㎝ほどである。口縁上端をわずかに磨り消し、以下は縦位の地文が数度にわたって重ねられている。

第７８図の１・２・３・４はＬＰ５２区出土。５はＬＰ５６区出土。６・７はＬＰ５７区出土。８・９・１０・１１・１２はＬＳ５１区出土。１３はＬＲ５４区土層観察用土手



第78図　LP52・LP56・LP57・
LS51・LR53・LS54・
LT51区出土土器

からの出土。１４はＬＳ５４区、１５はＬＴ５１区、１６はＬＲ５３区出土。

１・２・３・４ともに胎土に多量の石英粒を含み、他の土器とは明らかに異なる。１は口縁部が外へ膨らみ、口縁部無文帯に３条一組の撚糸原体押圧が膨らみ下位と口縁部無文帯下位に施される。２・３・４は１条の幅広の隆帯が廻らされ、隆帯上に撚糸原体の押圧が縦位にみられ、隆帯下体部は地文であるが、４は結束の羽状縄文が施される。

５は口縁部無文帯に横位の沈線が１条廻らし、沈線上位に棒状工具による列点文を施す。

６・７は山形口縁の山形部で折り返し口縁は無文、その下位に密に地文を施し、山形頂部下に３条の沈線による懸垂文が見られるが、全体のモチーフは不明である。

８・９・１０・１１は口縁上端を磨り消し、直下から条節の細かな地文を施し、その上から２条１対の沈線による鋭角な山形文を描く。１２は地文からそれらの底部であろう。

１３は全体が無文の小型の台付き鉢形土器である。

１４・１５・１６は底部文様を施した土器である。

②石器（第７９図、第５表、写真１５８）

Ⅱ区遺構外からは、石鏃、石小刀、スクレイパー、敲石、剥片が出土し、総数６９点である。定形石器の９点を第７９図に図示した。図示した石器はすべて頁岩製である。

１は、ＬＱ５５漸移層から出土した有茎石鏃であるが、調整が粗く未成品と思われる。先端部が欠損している。

２は、ＬＲ５２から出土した有茎石鏃である。比較的厚めの石鏃である。

３は、ＬＲ５３から出土した無茎円基石鏃である。石器全体を時計回りに調整を施している。先端部がわずかに欠損している。

４は、ＬＰ５６漸移層から出土した縦型で両側面に刃部を持つスクレイパーである。その形状から尖頭器の可能性もあるが、両側面の刃部が意識的に作り出されており、それにより先端が尖る形状になったと思われる。

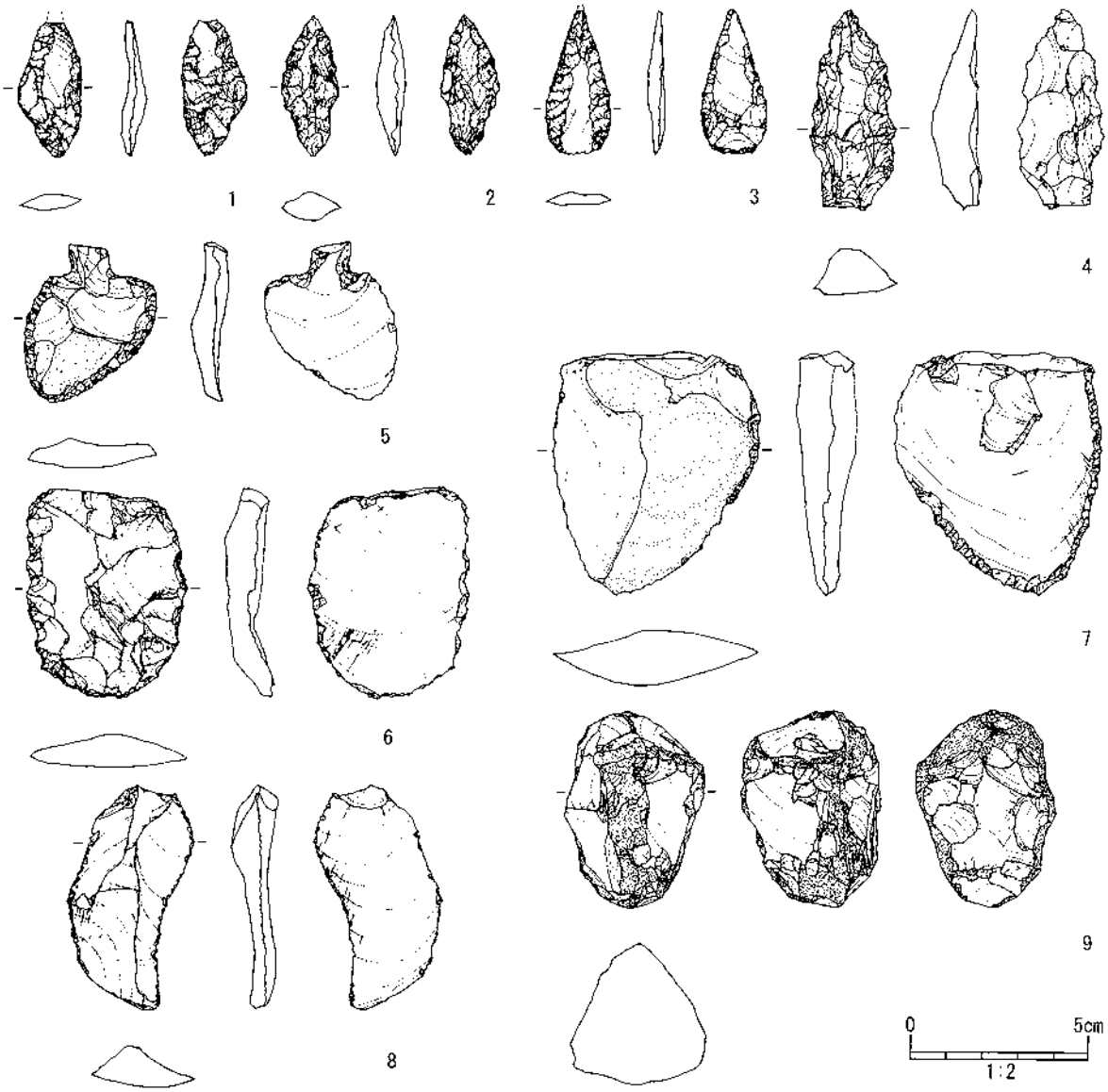
５は、石小刀である。表に自然面が残存している。刃部は急角度で作り出されており、刃部全体に使用による微細な剥離が確認できる。

６は、ＬＱ５１から出土したスクレイパーである。くの字状に折れ曲がる剥片素材の上部以外に時計回りに刃部を作り出した掻器である。

７は、ＬＲ５５から出土したスクレイパーである。表面に自然面が残存し、裏には打面が残る厚手の剥片素材に刃部のみを二次加工により、石器の上部以外を時計回りに調整して作り出されている。

８は、ＬＳ５３黒色土層から出土した縦型の使用痕のある剥片である。両側面に使用による剥離があるが、主に剥片素材の凹部を使用している。

９は、ＬＴ５１北東部、黒色土層から出土した敲石である。石核を敲石として使用したもので、敲打痕が石器側縁全周にわたり、石核の稜が潰されている。　　（滝内）



第79図　Ⅱ区遺構外出土石器

挿図番号	写真番号	グリッド	取り上げ番号	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	層位	標高(m)	備考
79－ 1	158	LQ55		石鏃	(36.9)	17.4	5.9	3.2	頁岩	Ⅲ		未成品、先端部欠損
2	158	LR52	石1	石鏃	38.6	16.1	7.9	3.8	頁岩	包含層	120.727	
3	158	LR53	石1	石鏃	(40.0)	18.1	3.7	2.7	頁岩	包含層	121.615	先端部欠損
4	158	LP56		サイドスクレイパー	55.6	23.6	12.4	15.7	頁岩	Ⅲ		尖頭器の可能性あり
5	158	不明		石小刀（石匙）	44.0	35.5	8.3	11.9	頁岩	Ⅰ		調査区中央部出土
6	158	LQ51	石1	エンドスクレイパー	57.3	44.7	10.4	28.5	頁岩	包含層	122.521	
7	158	LR55	石1	スクレイパー	67.1	58.0	16.5	61.3	頁岩	包含層	122.074	
8	158	LR53･LS53		使用痕のある剥片	62.5	29.4	10.3	16.3	頁岩	Ⅱ		
9	158	LT51		敲石	54.7	39.8	38.1	88.3	頁岩	Ⅱ		石核の転用品

第５表　掲載石器一覧（Ⅱ区遺構外）

Ⅴ　考　　察

【Ⅰ区】

Ⅰ区においては、おそらく生活の場であったと考えられる台地平場の、北西側の斜面が調査区となった。平場から斜面に降る傾斜変換線沿いに、５基の袋状土坑と３基のフラスコ状土坑を検出した。それらは土坑内からの出土土器によって、縄文時代中期末葉から後期初頭に構築されたと推察できる。

斜面には三筋の隠れ谷が刻まれていて、そこに土器、石器、石製品が廃棄されていた（捨て場Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）。丁寧に安置もしくは埋納した状況を示す例は確認できなかった。土器は一個体に復原できたものもあったが、大小の破片が４ｍ四方のグリッドの内外に散在していた。中には底部を意識的に破砕した土器もある。

出土した土器を、口縁部および体上部文様帯から９類（Ⅰ類～Ⅸ類）と、底部を２類（Ⅹ・Ⅺ類）に分類したが、捨て場Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとも廃棄遺物の量に大きな違いは認められるものの、遺物の内容には顕著な相違は無く、三つの捨て場はほぼ同時期に形成されたと考えてよい。

土器Ⅰ類は表裏面に撚糸文を施文した土器で、外側に切れた形状の小波状を呈する口縁部の破片のみで器体の全容は知り得ないが、円筒下層ａ式第一類土器（村越潔『円筒土器文化』１９７４、以下、村越編年と呼ぶ）に比定されよう。

土器Ⅱ類は、Ⅱ－ｄ類を除き、円筒下層ａ式第二類土器（村越編年）に比定されよう。ただし、村越編年では円筒下層ａ式土器において、口唇部に撚糸原体押圧や指頭押圧の施文特徴は皆無である。山内編年（山内清男「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』１巻２号　１９２９）には口端（口唇部）点列が半数近くあって、円筒下層ａ式土器のひとつの特徴とされている。土器Ⅱ－ｂ・ｃ類がそれにあたる。Ⅱ－ｄ類は口縁が内湾する薄手の小型深鉢形土器で、縄文時代後期の粗製土器である。

土器Ⅲ類は、Ⅱ類同様に円筒下層ａ式第二類（村越編年）に比定されよう。口唇部文様のみられるⅢ－ｂ・ｃ類も同様である。

土器Ⅳ類の、Ⅳ－ａ・ｂ類は発達した隆帯上に撚糸・指頭押圧文がみられ、村越編年で言う「隆帯の顕著な発達を見るのはむしろａ式であって、ｂ式になるとすでに退化し、そして大方は余韻的なものに姿を変え、ただ形骸的に次のｃ式まで残存する。」「隆帯上には地文の施されたものと、指頭押圧文をもつものとあり、前者が多い。」ことからすると、円筒下層ａ式第一・二類（村越編年）に比定されよう。

Ⅳ－ｃ・ｄ・ｅ・ｆ類は、口唇部に撚糸押圧文、指頭押圧文を施し、隆帯上にも同様の施文が見られる。中でⅣ－ｄ類には「隆帯の上下位両側にも、隆帯上と同様の文様が施される」際立った特徴がある。これまでの円筒下層式土器の研究において、このような文様の施し方は茂屋下岱土器群にのみ知られている（Ⅴ類の項で後述。）もので、茂屋下岱土器群のメルクマールといっていいだろう。

土器Ｖ類のＶ－ａ・ｂ類は円筒下層ａ式第一・二類土器（村越編年）に比定され、Ｖ－ｃ・ｄ・ｅは、奥山潤が茂屋下岱土器群の設定（奥山潤『茂屋下岱土器群』秋田県立大館鳳鳴高等学校社会部考古班　１９７１）において「口縁部文様帯の下限に二条の貼付隆帯を廻らす。この隆帯は器面に一条の撚糸を巻き、その上に貼付したものである。隆帯上と隆帯上下両側及び隆帯間を指頭押圧による円凹文で飾り、口唇上端と上部外側に同様の指頭押圧文が施文されている。」とした特徴そのものの土器である。今次の土器に内面条痕は認められないが、村越編年と考え合わせると、円筒下層ａ式土器と並行する米代川流域の地方色豊な土器と見ていいだろう。挿図番号６８・７０・７７も同類である。

土器Ⅵ類は、地文の上から２条の撚糸押圧を廻らし、口唇部に棒状工具による刺突文が施されていて、円筒下層ａ式第二類土器（村越編年）に比定されよう。

土器Ⅶ・Ⅷ類の１００・１０１・１０２・１３９・１４０は榎林式土器であり、１３２・１３３・１４２の横位連続刺突文は最花式土器であり、他の土器も縄文時代中期末葉～後期前葉の土器であろう。

土器Ⅸ類は縄文時代後期初頭に相当する。蛍沢式土器（本間宏「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」『よねしろ考古』１　１９８５ほか)、弥栄平（２）式土器（成田滋彦「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観』４　１９８９）などに比定されよう。

底部は、底面が平滑に磨かれているⅩ類と、底面に文様を施すⅪ類に分類したが、復原できた土器の底部と比較しても、Ⅰ類～Ⅸ類土器と底部分類の有様に特別な関連を見出す事はできない。

村越編年によれば、円筒下層ａ式土器の底部特徴として、「第二類まではいずれも底が上底風で、底面文様を有する土器である。ところが器形・文様・隆帯などに相違はなく、底に若干の異なりをもつものを分類した。これを第三類土器とする。この土器は平底をなし、底面文様を有するものである。」という。男神遺跡ではそれに加えて茂屋下岱土器群の底部についても考慮しなければならないが、その関連を把握する事はできなかった。

斜面の捨て場上端を形成する標高１１８ｍラインより上位で、土坑群周囲から縄文時代中期末葉～後期前葉の土器が散在して出土した。これらは捨て場を形成する事はなかったが、捨て場に廃棄された土器と同様、台地上平場で生活を営んだ当該時期の縄文人によって廃棄されたものであろう。１４４の壷はほぼ完全に復原できたが、出土状況は比較的まとまっていたものの、土坑等は伴わず、土器そのものも埋め込まれた状況ではなかった。

【沢部】

沢部においては、人為的な切り口の状態を示す一本を含む三本の丸太材が、沢流路に直交して沢基底に埋め込まれて出土したが、その時代、時期を特定する事は出来なかった。ただし、丸太材の上には、両岸からの崩落土が厚く堆積していて、丸太材が相当古い時期に構築されたことをうかがい知ることはできる。

調査区内の中流部（ＭＥ４４区）と下流部（ＭＧ４３・４４区）に堆積した粘質黒色土上位に枝木が寄り集った箇所がみられたが、枝木そのものには人工的な工作痕跡は認められない。枝木を利用した水辺（場）遺構の可能性は考えられる。

出土した土器片や剥片石器は、南側にあたるⅠ区の斜面から崩落した、流れ込み土である暗褐色土層中からの出土で、Ⅰ区斜面や沢に廃棄された遺物と考えられる。

【Ⅱ区】

Ⅱ区においては、東側の山体裾部傾斜面から、西側の平坦面が調査区となったが、平坦面は調査区外の西側から北西側へ広がり延びていて、平坦面のおよそ１／３ほどの面積を調査したことになる。

ＳＩ０１は炉体と柱穴、北側の竪穴壁のわずかな立ち上りと、そこにみられた柱穴と床の堅緻面から想定したもので、その上位面は過去に削平されていて、明瞭な竪穴痕跡は確認できなかった。また、一片の遺物も出土しなかったことから、竪穴存在時期の特定はできなかったが、おそらく縄文期の竪穴住居跡とみていいだろう。

ＳＩ０２は平坦部西側に検出された縄文時代中期末葉から後期初頭の竪穴住居跡であるが、おそらく同期の竪穴群（集落）は、より西側から北西側に広がる調査区外の平坦面に構築されていると思われる。

ＳＩ０３は竪穴状を呈するが、柱穴配置や、火気使用痕が明瞭でないことなどから、竪穴住居跡と呼ぶことができるか躊躇されるが、出土した土器が弥生時代前期の砂沢～二枚橋期の土器であり、この時期の竪穴住居跡が市内大茂内地区の諏訪台Ｃ地区（遺跡）だけという状況にあって、ＳＩ０３が竪穴住居跡ではないと言い切るほどの資料の蓄積もない状況である。今後、当該時期の調査研究が進むことによって解明される時が訪れることであろう。ここでは竪穴住居跡とみて報告しておく。

Ⅱ区平坦面から、１７基の袋状土坑と１１基のフラスコ状土坑が検出された。土坑内から出土した土器は縄文時代中期末葉から後期初頭のものが主で、これらの土坑群はＳＩ０２とほぼ同時期の構築物と考えていいだろう。ただし、ＳＩ０２が廃棄されて小時間の自然堆積が見られたのちに竪穴の北側半分が、ＳＫＦ００９の掘り上げ土で埋め戻されていることから、ほぼ同時期とはいってもＳＩ０２とＳＫＦ００９との間には断絶期の存在をうかがうことができる。

それは、ＳＫ００３・００４・００５の切り合い関係、ＳＫ００８とＳＫＦ００９の切り合い関係、ＳＫ００７・００７’・ＳＫＦ０１３の切り合い関係、ＳＫＦ００１とＳＫＦ００２の切り合い関係、ＳＫＦ００４とＳＫＦ００５の切り合い関係からも時間・時期差を読み取ることができる。

また、これらの多くの土坑がわずかな時間・時期差をもちながらも、ある袋状土坑とあるフラスコ状土坑はほぼ同時期に存在したと考えられることから、袋状とフラスコ状の形状の差異が何に起因しているのかということも大きな問題であろう。中でＳＫ０１０から

埋納されたと考えられる剥片石器の出土、ＳＫ０１６とＳＫ０１６’およびＳＫ０１６’内の埋納土器と焼土塊は、袋状土坑が埋納行為あるいは意識と密接なかかわりを示唆しているのではないだろうか。

Ⅱ区からは、竪穴・土坑といった顕著な遺構を伴わず、土器が単独で出土した例もあった。遺構外出土遺物としてまとめた（Ｐ９４～）ものがそれで、直立、斜立、倒立、横位といった特異な出土状況ではないし、埋設といったことも行われていた例はない。土器片がある程度同一箇所にまとまって出土したというものである。

第７４図の土器は、ＬＴ４７区のⅡ区南端部斜面の暗褐色土層中から、土圧で押しつぶされて押し流された状況で出土したもので、体下部は器体に割れ目は入っていたものの、円筒状の旧態を維持していた。目に見える土坑・埋め穴等の施設は確認できなかったが、あるいは暗褐色土中に直立ないしは斜立の状態で埋められていたものかもしれない。

ＬＲ５０区とＬＱ５２区の標高１２２ｍラインの無遺構地区、ＬＱ５５・５６とＬＲ５５の無遺構地区からも、復原できる比較的大型の深鉢形土器が単独で出土したが、出土状況はＬＴ４７区と同様である。

Ⅵ　ま　と　め

男神遺跡Ⅰ区では三筋の捨て場遺構を調査、生活跡（集落跡）は捨て場上の台地平場と想定され、今次の林道工事からは免れた。

捨て場は縄文時代前期中葉の円筒下層ａ式土器期の捨て場（後期も若干）で、茂屋下岱土器群が円筒下層ａ式土器期と並行する、米代川中・上流域の地方色豊な土器群であることが判明した。茂屋下岱土器群を広義に理解すれば、口唇部と隆帯上に撚糸押圧または指頭押圧を施した一連の土器ということになり、狭義に理解すれば１～２条の隆帯の上下位両側、もしくは上下位両側と隆帯間に、口唇部と隆帯上に施された押圧文（指頭・棒状工具などによる）と同様の押圧文が施された土器ということになるだろう。今後、同時期の調査が進められることにより、その研究が推し進められ実態が明らかになると思う。

Ⅱ区では縄文時代中期末葉から後期初頭の竪穴住居跡と、袋状土坑・フラスコ状土坑からなる集落跡を検出したが、その主体部は西側及び北西側の調査区外の台地平場にあると想定され、今次の林道工事からはⅠ区同様免れた。また、弥生時代前期、砂沢～二枚橋期の竪穴住居跡を検出したが、これは大館市内において大茂内諏訪台Ｃ地区（遺跡）に次いで二例目である。

調査にご協力いただいた関係機関と諸氏、炎天下のもと発掘作業に従事された地元矢立地区の皆様に感謝申し上げ、報文の締めくくりとする。

写真１　Ⅰ区　捨て場（左側：捨て場Ⅲ　中央：捨て場Ⅱ　右側：捨て場Ⅰ）

写真２　Ⅰ区　捨て場Ⅱの状況

写真 3　沢部調査状況

写真 4　Ⅱ区　SI02完掘状況

写真５　Ⅱ区　SKF010の状況

写真６　Ⅰ区　切り通し工事後の下部地層状況

写真 7
遺跡遠景
（中央がⅠ区、
左側杉林中がⅡ区、
右上が男神山）

写真 8
調査前の様子
（手前右側がⅠ区、
左奥がⅡ区、その間に沢部）

写真 9
杉枝片付けが終った現場
（手前がⅡ区、
奥がⅠ区、その奥に
清水川集落）

写真10
Ⅰ区　捨て場Ⅰの状況

写真11
Ⅰ区　捨て場Ⅱの状況

写真12
Ⅰ区　捨て場Ⅲの状況

写真13　Ⅰ区　SK001

写真14　Ⅰ区　SK002

写真15　Ⅰ区　SK002出土土器

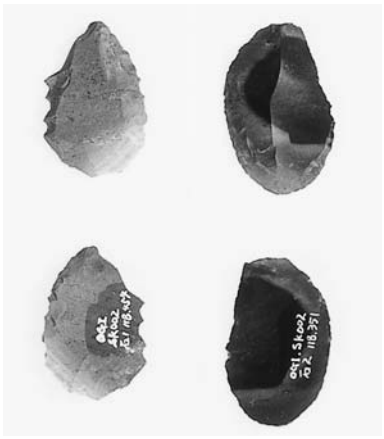


写真16　Ⅰ区
SK002出土石器

写真17　Ⅰ区　SK003

写真18　Ⅰ区　SK005

写真19　左：Ⅰ区　SK003出土土器　右３片：Ⅰ区　SK005出土土器

写真20　Ⅰ区　SKF001

写真21　Ⅰ区　SKF002

写真22
Ⅰ区　SKF002出土土器

写真23　捨て場Ⅰ　MK39

写真24　捨て場Ⅰ　MM37

写真25　捨て場Ⅰ　MM39

写真26　捨て場Ⅱ　ML38

写真27　捨て場Ⅱ　MK40

写真28　捨て場Ⅱ　ML38

写真29　捨て場Ⅱ　MK39

写真30　捨て場Ⅱ　MK37

写真31　捨て場Ⅱ　MK40

写真32　捨て場Ⅱ　MK39

写真33　捨て場Ⅱ　ML38

写真34　捨て場Ⅱ　MK39

写真35　捨て場Ⅱ　ML39

写真36　捨て場Ⅱ　MK39

写真37　捨て場Ⅱ　MK40

写真38　捨て場Ⅲ　MH40～41

写真39　捨て場Ⅲ　MI42

写真40　捨て場Ⅲ　MH41

写真41　捨て場Ⅲ　MI42

写真42　捨て場Ⅲ　MI41

写真43　捨て場Ⅲ　MI41

写真44　捨て場Ⅲ　MH40～41

写真45　捨て場Ⅲ　MH41

写真46　捨て場Ⅲ　MH・MI41

写真47
上段３片：捨て場Ⅱ
他：捨て場Ⅰ

写真48
右：捨Ⅰと捨Ⅱが接合
左：捨て場Ⅱ

写真49
左上：捨て場Ⅰ　他：捨て場Ⅱ

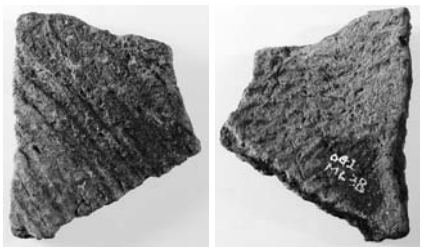


写真50　捨て場Ⅱ出土
表裏撚糸文土器

写真51　左：捨て場Ⅱ
ML40　中・右：捨て場Ⅰ　MH40～41

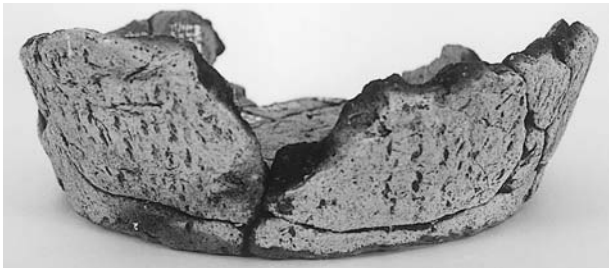


写真52　捨て場Ⅰ　ML38

写真53　捨て場Ⅱ

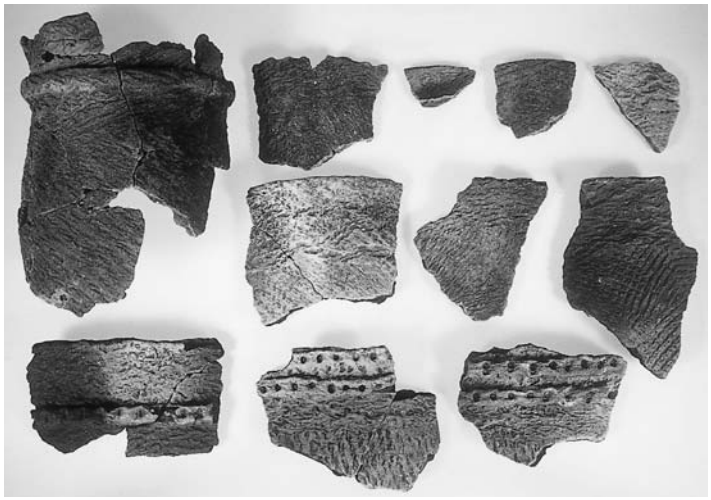


写真54　捨て場Ⅱ

写真55　捨て場Ⅱ

写真56　捨て場Ⅱ　MK37

写真58　捨て場Ⅱ　ML39

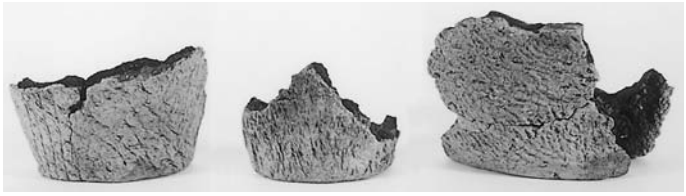


写真59　捨て場Ⅱ　ML38

写真57　捨て場Ⅱ　ML38

写真60　捨て場Ⅲ

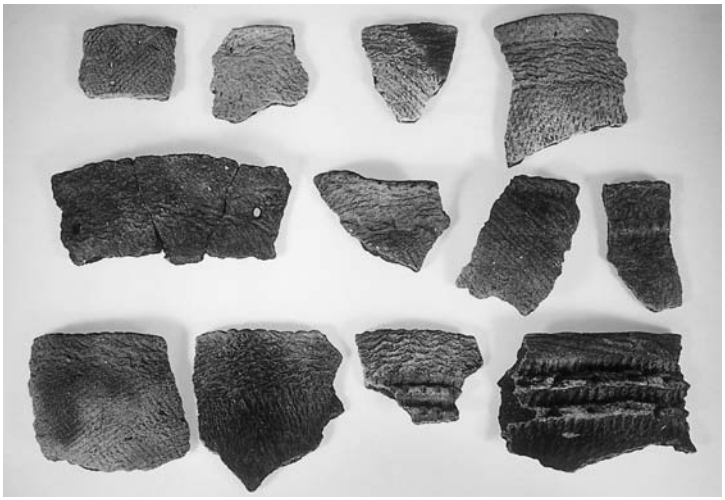


写真61　捨て場Ⅲ

写真62　捨て場Ⅲ　左：MI41　右：MH40～41

写真63　捨て場Ⅲ　底部文様

写真64
捨て場Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
出土土器

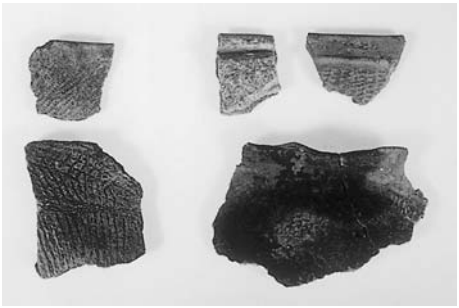


写真65　Ⅰ区遺構外・捨て場外出土土器片

写真66　1区遺構外・捨て場外
出土復原土器
ML37

写真67
Ⅰ区　捨て場出土
石鏃・石槍・石篦

写真68
Ⅰ区　捨て場出土
石槍・石核・縦型石小刀

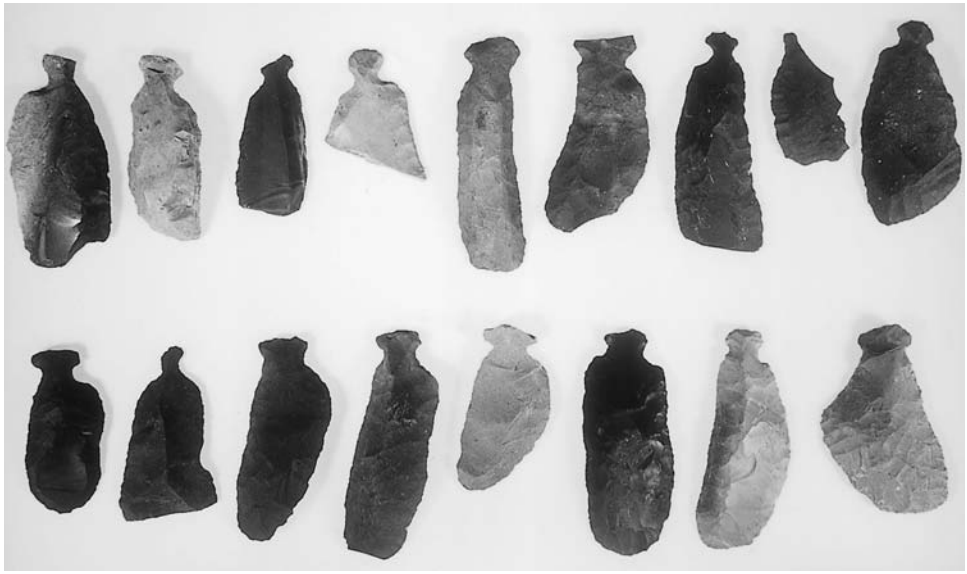


写真69
Ⅰ区　捨て場出土
縦型石小刀

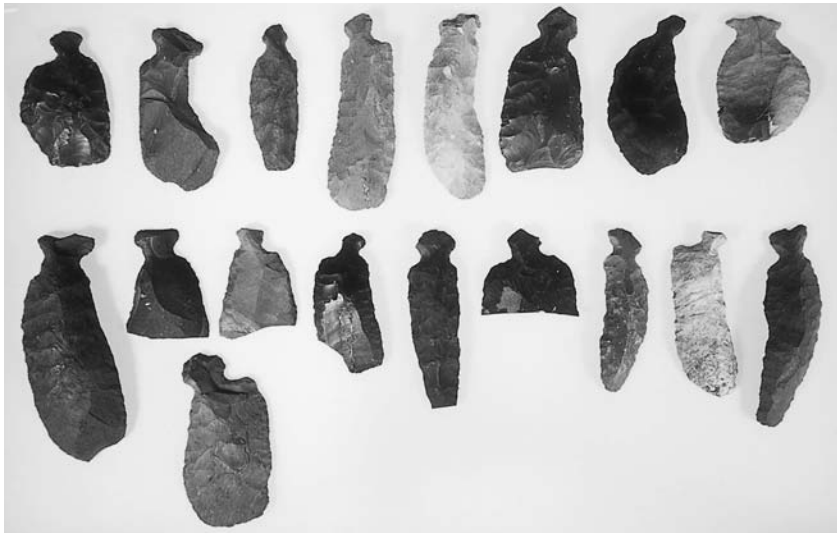


写真70
Ⅰ区　捨て場出土
縦型石小刀

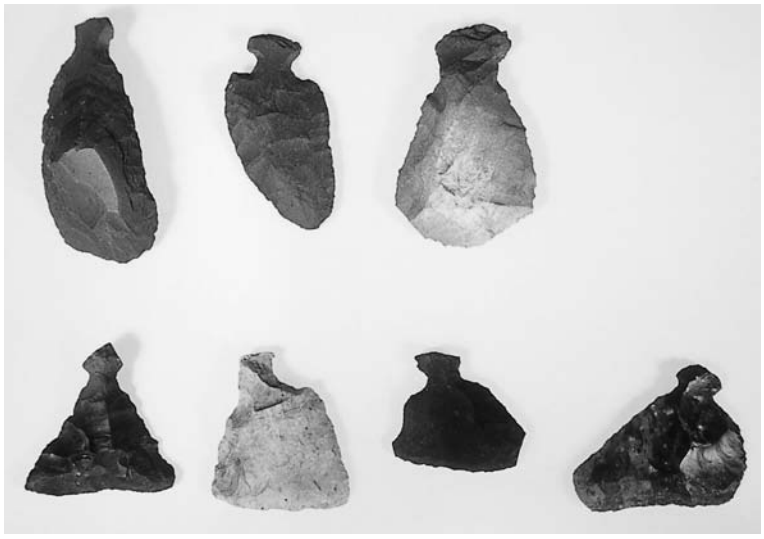


写真71
Ⅰ区　捨て場出土
縦型・横型石小刀

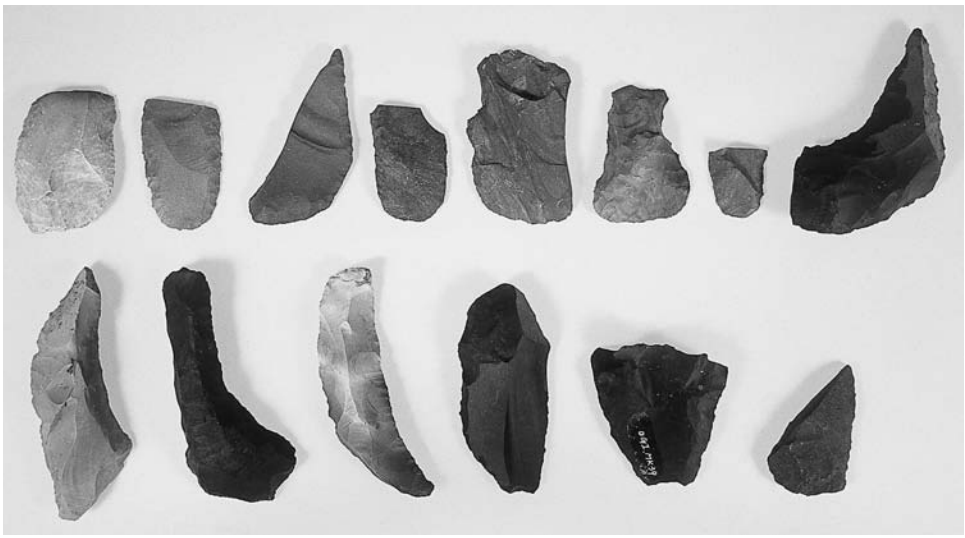


写真72
Ⅰ区　捨て場出土
石錐・石篦・
スクレイパー

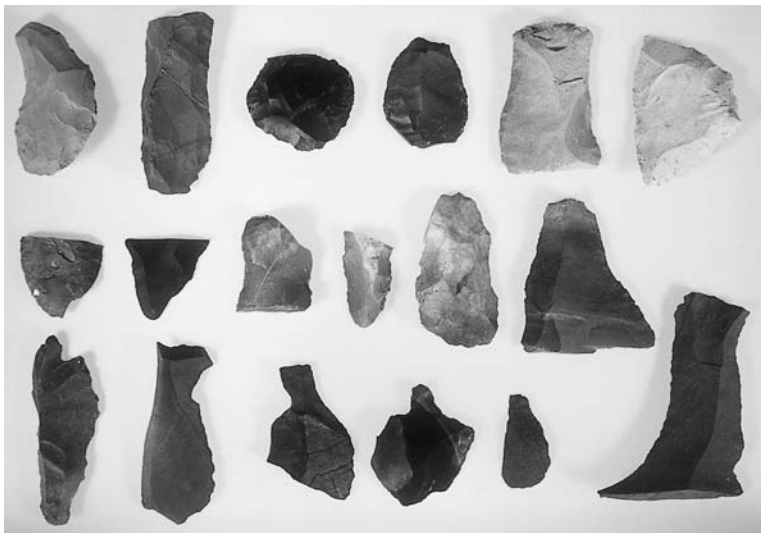


写真73
Ⅰ区　捨て場出土
スクレイパー

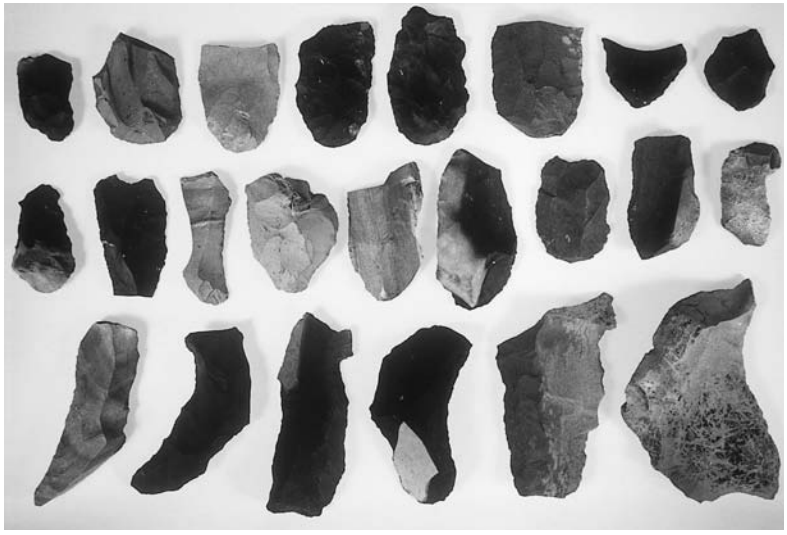


写真74
Ⅰ区　捨て場出土
スクレイパー

写真75
Ⅰ区　捨て場出土
スクレイパー

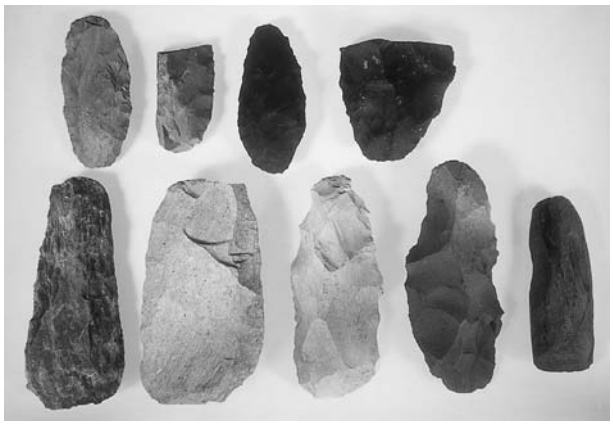


写真76
左：Ⅰ区　捨て場出土石篦・石斧・半円状扁平打製石器・石核

写真77
右：Ⅰ区
捨て場出土石核

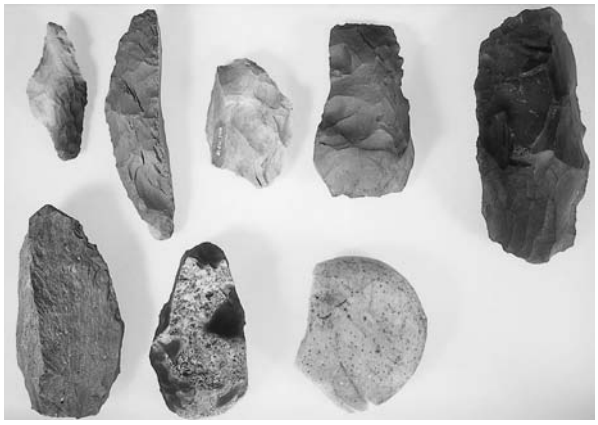


写真78　Ⅰ区　捨て場出土スクレイパー・石核・礫

写真79　Ⅰ区　捨て場出土半円状扁平打製石器

写真80　Ⅰ区　捨て場出土半円状扁平打製石器

写真81　Ⅰ区　捨て場出土礫石器・礫

写真82　Ⅰ区　捨て場出土石皿Ⅰ区

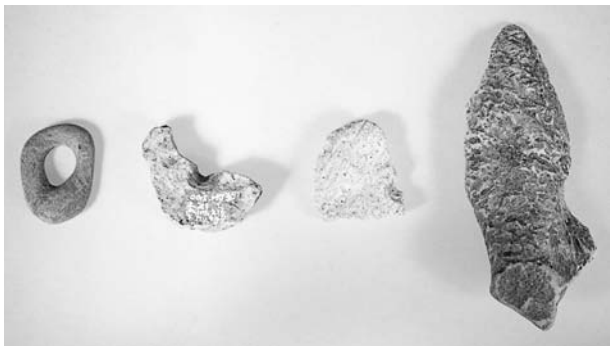


写真83　Ⅰ区　捨て場出土有孔石・石製品・礫

写真84　Ⅰ区　捨て場出土礫

写真85　Ⅰ区　捨て場出土礫

写真86
Ⅰ区　捨て場Ⅱ
MK38盗難前の
有孔円盤状石製品
出土状況

写真87
Ⅱ区　南側斜面と
沢部の調査

写真88
沢部調査状況

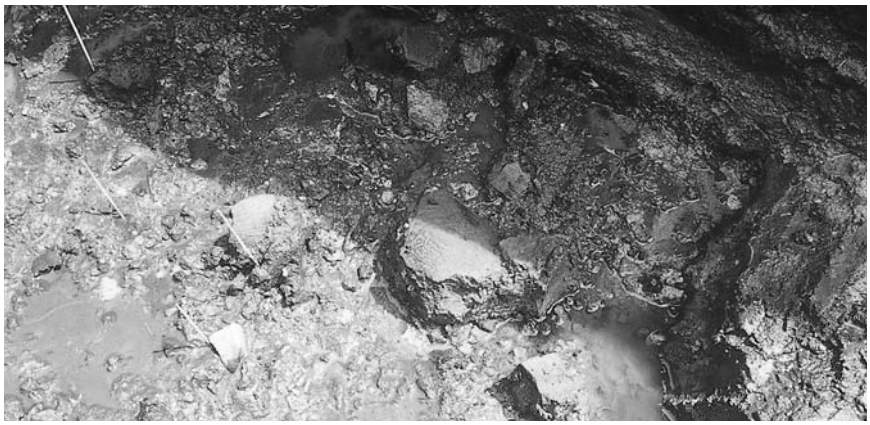


写真89
沢下流部基底上位
遺物出土状況

写真90
沢上流部基底
検出丸太材

写真91
沢部出土土器

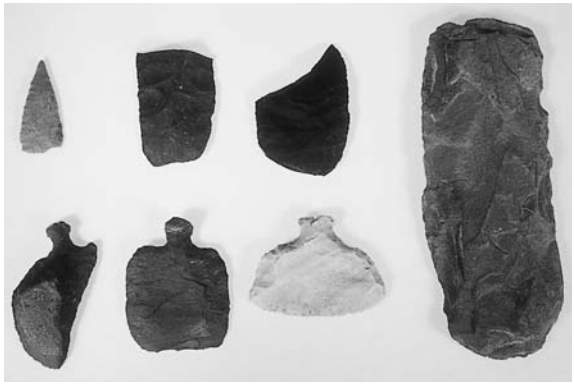


写真92
沢部出土石器

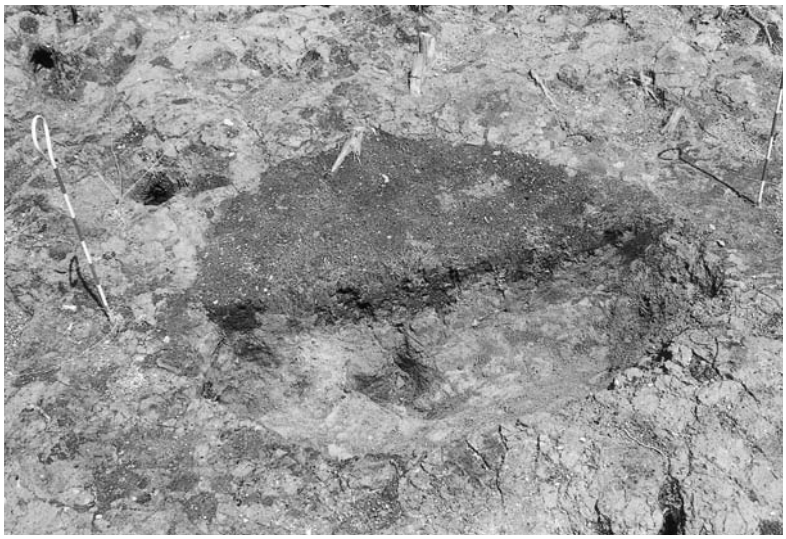


写真93
Ⅱ区　SI01　炉跡

写真94
Ⅱ区　調査中のSI02

写真95
Ⅱ区　調査中のSI02

写真96
Ⅱ区　SI02　完掘

写真97
Ⅱ区　SI02　完掘

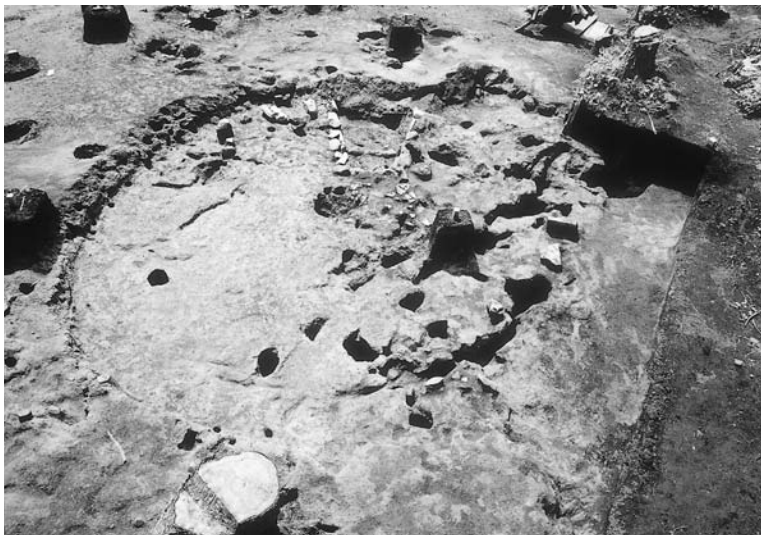


写真98
Ⅱ区　SI02　完掘

写真99
Ⅱ区　SI02　石囲炉

写真100
Ⅱ区　SI02　石囲炉

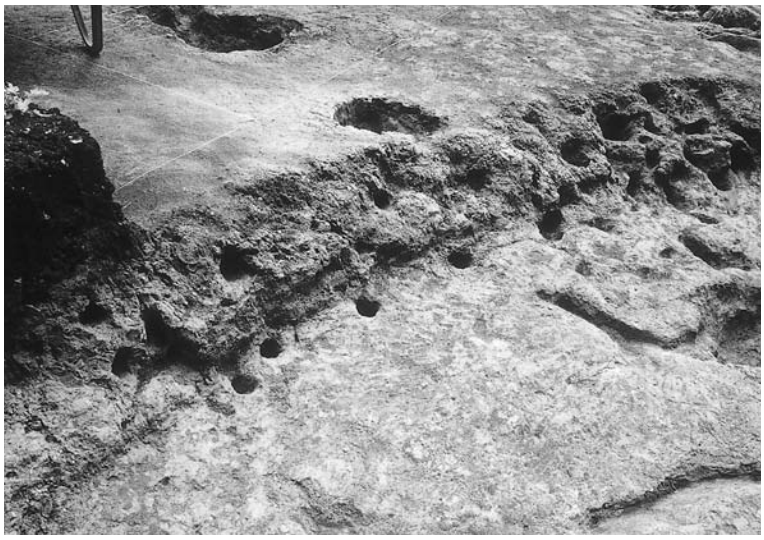


写真101
Ⅱ区　SI02　東壁部ピット

写真102
Ⅱ区　SI02
出土土器

写真103
Ⅱ区　SI02床面上　出土土器

写真104
Ⅱ区　SI02出土　スクレイパー

写真105
Ⅱ区　SI02
石囲炉南側
出土棒状自然礫

写真106
Ⅱ区　調査中のSI03

写真107
Ⅱ区　調査中のSI03

写真108
Ⅱ区　SI03　凝灰岩板の検出状況

写真109　Ⅱ区　SI03　完掘

写真110　Ⅱ区　SI03　完掘

写真111　Ⅱ区　SI03　完掘

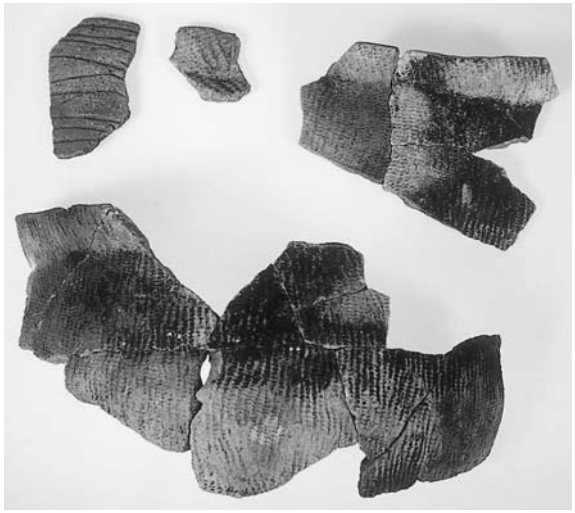


写真112　Ⅱ区　SI03　出土土器

写真113　Ⅱ区　SI03出土台付鉢形土器

写真114
Ⅱ区　SI03出土凝灰岩板

写真115　Ⅱ区　SK001

写真116　Ⅱ区　SK002

写真117
Ⅱ区　SK003・004・005

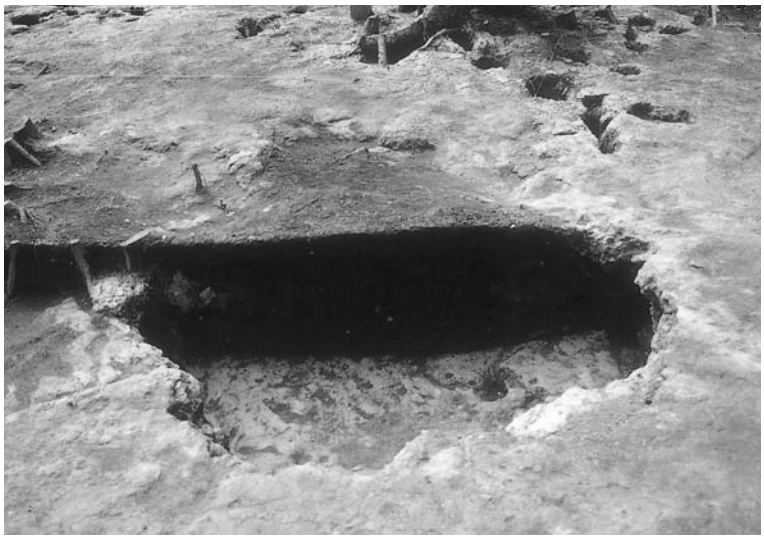


写真118　Ⅱ区　SK006

写真119　Ⅱ区　SK008

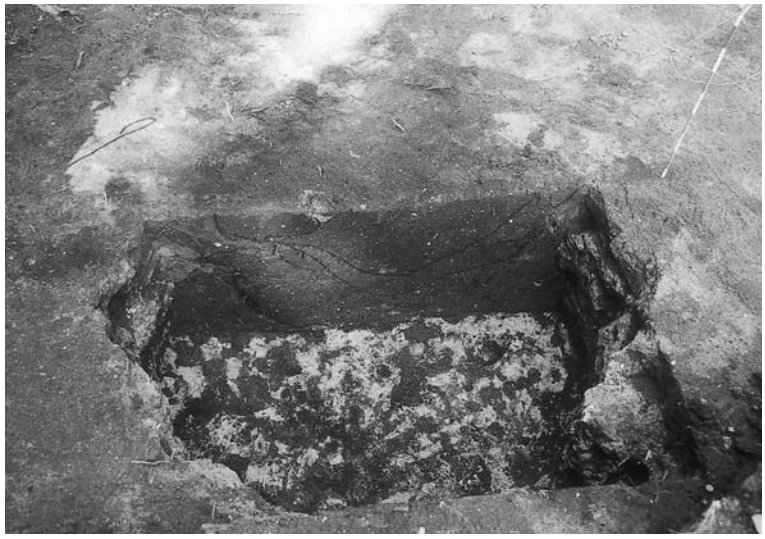


写真120　Ⅱ区　SK009

写真121　Ⅱ区　SK010

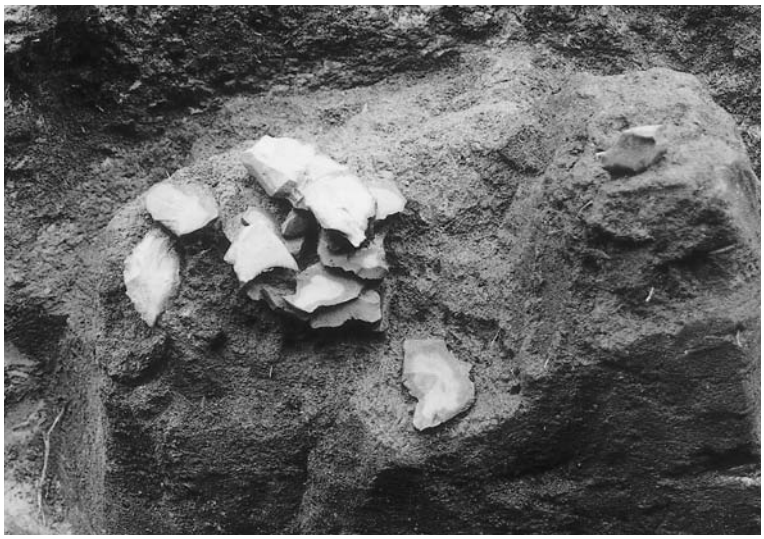


写真122
Ⅱ区　SK010
剥片石器出土状況

写真123
Ⅱ区　SK010出土
剥片石器

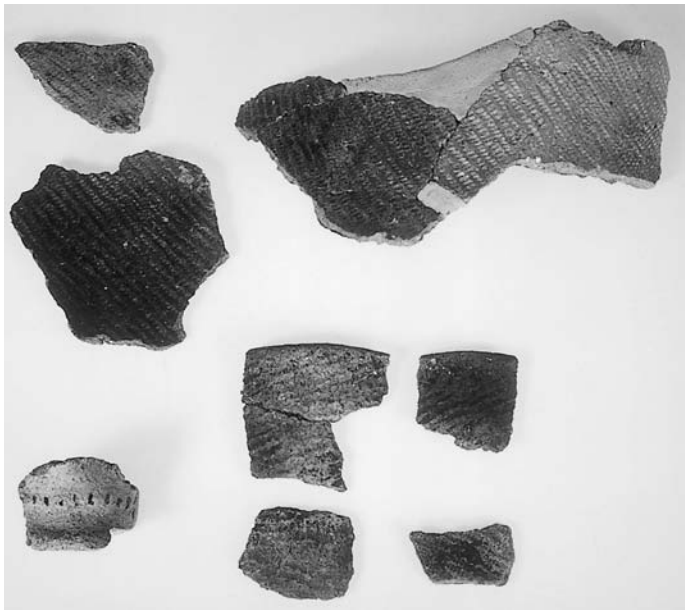


写真124
Ⅱ区　SK出土土器
上段3片：SK007’
右下：SK013
右残3片：SK011
左下：SK008

写真125
Ⅱ区　SK011

写真126　Ⅱ区　SK013

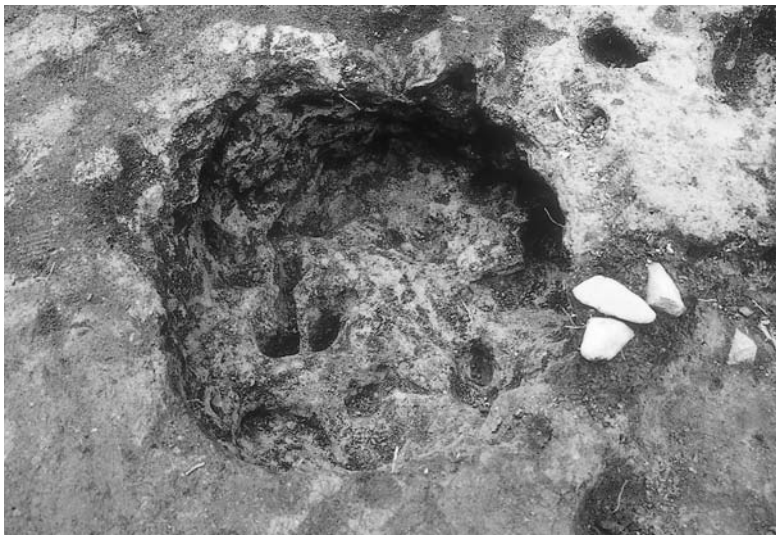


写真127　Ⅱ区　SK014

写真128　Ⅱ区　SK016

写真129
Ⅱ区　SK016出土土器

写真130　Ⅱ区　SK017

写真131
Ⅱ区　右：SK017　左：SK018

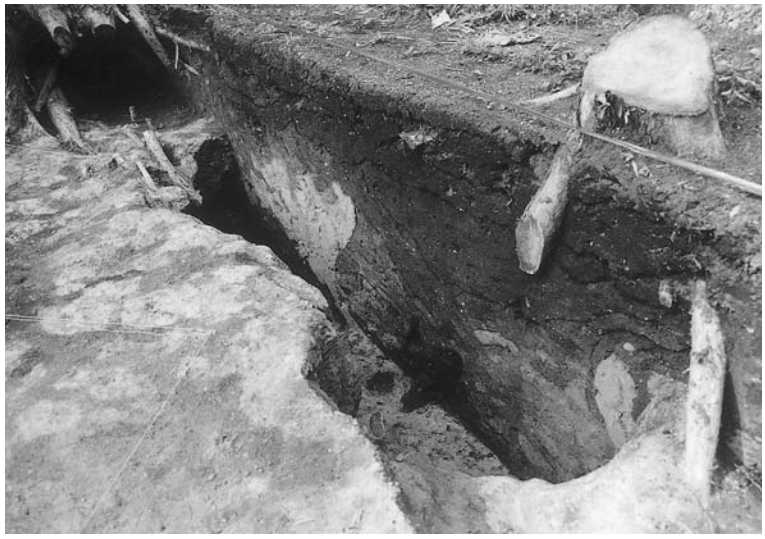


写真132
Ⅱ区　SKF001・SKF002

写真133
Ⅱ区　SKF003

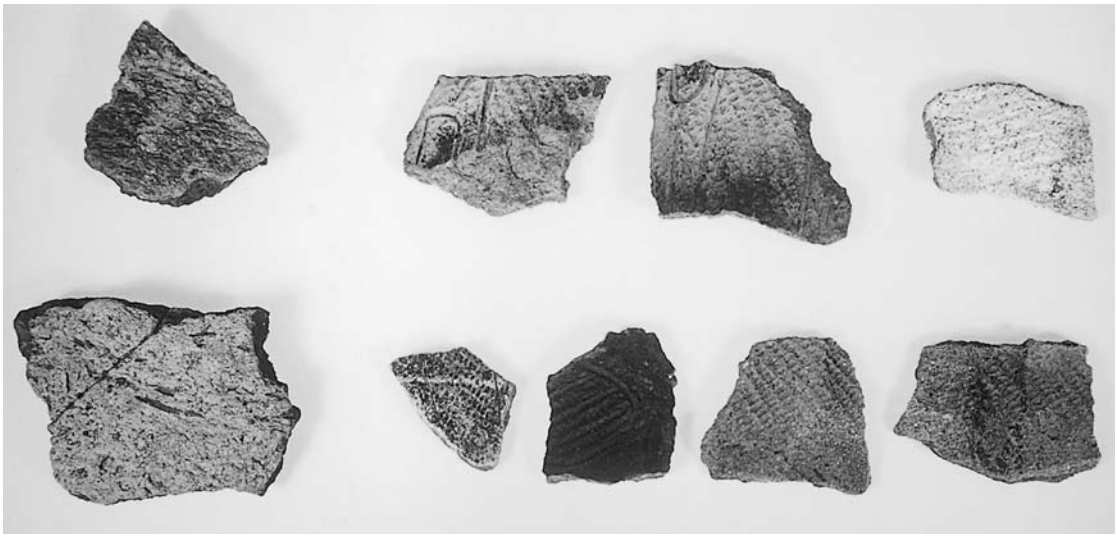
写真134
Ⅱ区　左側：SKF005
　　右側：SKF004

写真135
Ⅱ区　SKF006

写真136
Ⅱ区　SKF007

写真137
Ⅱ区　SKF008

写真138
Ⅱ区　SKF出土土器
左上：SKF002
上段中2片：SKF004



右上：SKF008
左下：SKF011
下段右側4片：SKF012

写真139
Ⅱ区　右側：SKF009
左側：SK008

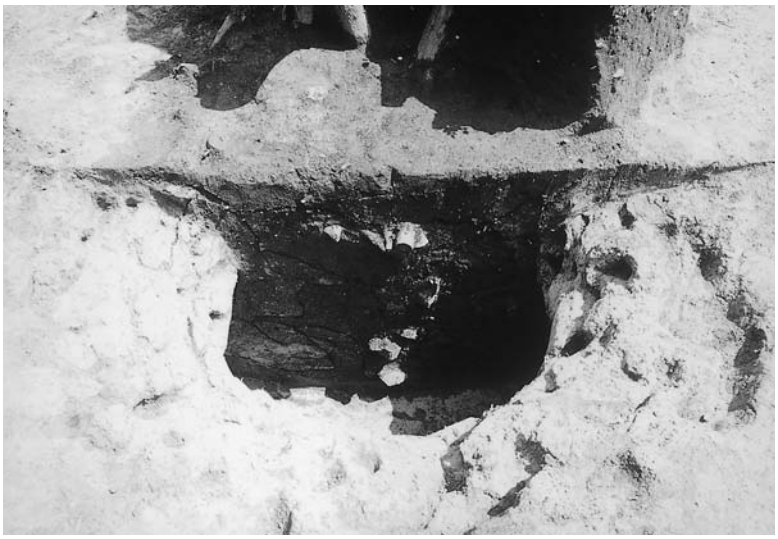


写真140
Ⅱ区　SKF011

写真141
Ⅱ区　SKF013

写真142
Ⅱ区　SKF014

写真143
Ⅱ区　LT47　土器出土状況

写真144
Ⅱ区　LT47
出土土器

写真145
Ⅱ区
LQ55・56
出土土器

写真146
Ⅱ区　LQ55・56
土器出土状況

写真147
Ⅱ区　LR55　土器出土状況

写真149
Ⅱ区　LR52
出土土器

写真148
Ⅱ区　LR55
出土土器

写真150
Ⅱ区　LR55出土土器

写真151
Ⅱ区　LP57　土器出土状況

写真152
Ⅱ区　遺構外出土土器
上段左側2片：LP57
上段左から3片目：LQ56
上段右：LQ55
右側二段目：LQ52
右下：LQ52＋LR50
左中段2片と左下：LR50
左下段2片目：LQ52

写真153
Ⅱ区　LP・LQ52　出土土器

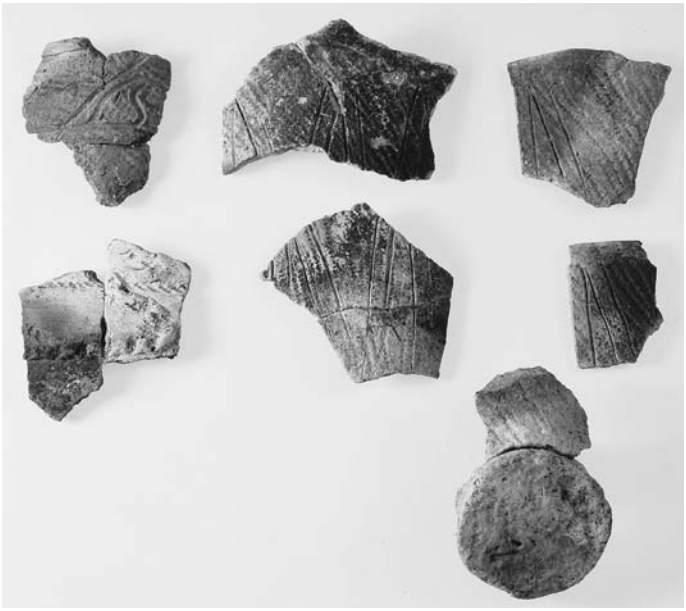


写真154　Ⅱ区　遺構外出土土器　左側2片：LR55
右側5片：LS51

写真155　Ⅱ区　遺構外出土土器
左上：LT51
右上：LR55
残り2片は
セクションベルト

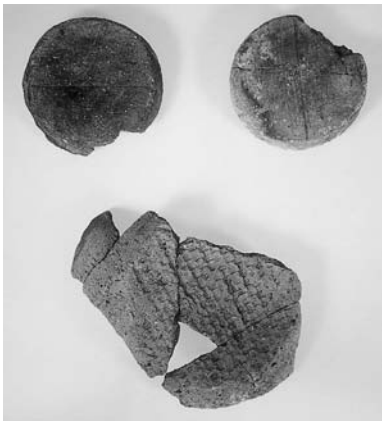


写真156
Ⅱ区　遺構外出土土器底部
左上：LS54
右上：LT51
下：LR53

写真157
Ⅱ区　LQ52
搬入礫出土状況

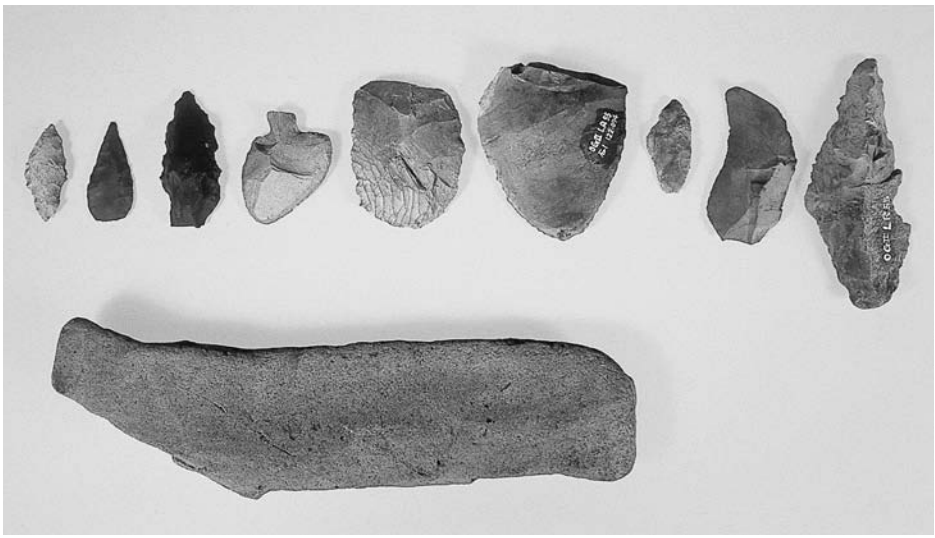


写真158
Ⅱ区　遺構外出土
石器・搬入礫

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	おがみいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	男神遺跡発掘調査報告書
副　書　名	
巻　　次	
シ　リ　ー　ズ　名	大館市文化財調査報告書
シ　リ　ー　ズ　番　号	第１集
編　著　者　名	板橋範芳・滝内　亨・嶋影壮憲
編　集　機　関	秋田県大館市教育委員会　大館郷土博物館
所　在　地	〒017-0012　秋田県大館市釈迦内字獅子ヶ森１番地　℡ 0186-48-2119
発　行　年　月　日	西暦2008年（平成20年）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おがみいせき 男神遺跡	おおだてしかすだあざおがみ 大館市粕田字男神	05204	4-155	40° 21’ 37”	140° 34’ 45”	20050426 ～ 20050902	1,306㎡	林道建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
男神遺跡	集落跡	縄　文 弥　生	竪穴住居跡・土坑	縄文式土器･弥生式土器･石器	

要　約	1.男神遺跡は、大館市北部、粕田川左岸台地上および斜面に立地する。標高は112～124mである。調査前の状況は山林であった。 2.調査範囲は林道建設予定地部分の幅約13～20m、長さ約110mのうち、3地点（Ⅰ区、沢部、Ⅱ区）を対象とした。遺跡の中心は、調査範囲外の台地上に広がるものと思われる。 3.調査の結果、縄文時代および弥生時代の遺構･遺物が確認された。主体は縄文前期中葉と中期末～後期初頭である。 4.遺構は、縄文時代縄文時代の竪穴住居跡･土坑、弥生時代の竪穴住居跡が検出された。 5.土器は、縄文時代前期中葉～弥生時代まで断続的にみられる。 6.捨て場からは、土器のほか、石器や石製品、自然礫も出土した。

大館市文化財調査報告書　1

男神遺跡発掘調査報告書

発行日　　平成20年3月31日
編　集　　大館郷土博物館
発　行　　大館市教育委員会
　　大館市早口字上野43番地１
印　刷　　株式会社　大館印刷